

# STEEL BALL HERO

ボンシュ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この『物語』は

ぼくが歩き出す物語だ

肉体が……………

……………という意味ではなく

青春から英雄へという意味で

# 目次

ジョニー・ジョースター	1
ジャイロ・ツエペリ	6
ジョニー・ジョースター オリジン	そ
の1	13
ジョニー・ジョースター オリジン	そ
の2	21
試験開始	29
LESSON 2	38
スロー・ダンサー	49
雄英高校ヒーロー科	59
爪と凍 ジョニーと焦凍	67
男の世界	87

落ち着かない一日	102
ヴィラン襲撃 その①	120
ヴィラン襲撃 その②	132
体育祭の巻 ①	150
体育祭の巻 ②	174
体育祭の巻 ③	195
体育祭の巻 ④	221
体育祭の巻 ⑤	241
体育祭の巻 ⑥	251
名は体を表す	267
私欲に塗れた職場体験	280
バンド組む？	289
サイレント・ウェイ	296

敬意を払え	306
黄金長方形を作れ!	327
タスク ACT2	335
決着、そして	344
右? 左? どっち?	368
① 約束の地 シュガー・マウンテン	391
その	
② 約束の地 シュガー・マウンテン	410
再起への条件 友情への条件	418
リベンジマッチ	438
リベンジマッチ 決着	449

## ジヨニー・ジョースター

僕の名はジヨニー・ジョースター。

これは、僕が歩き出す物語だ。

肉体的にはなく、青年から、ヒーローへと。

「ハッ！　ハッハッハッハッハッ！」

「すげえ、笑ってるよッ！」

撮影してる男の驚きが伝わってくる。画面の中央、燃え盛る倒壊したビルの向こうから、何人も担いでやってくるヒーローの姿が映り込んだ。

「もう大丈夫！　なぜって？　『私が来た！』」

ヒーローランキング1位。世界一のヒーローはそういつてのけた。その立ち姿はまさしくヒーローそのものだ。

「……………」

僕は自分の足を見下ろした。

椅子からだらんとぶらさがったそれを思い切り殴りつける。だが、何も感じない。痛

みも、殴った感触もない。あるのは拳にじんわりとある殴った痛みだけ。

「どうして……個性なんか………」

歯を食いしばり、何度も何度も殴りつけた。拳だけがじわじわと痛みを増していく虚無感に、思わず個性で爪を脚に向けた。

「……ハッ！」

だが、一步というところで理性が働き指先はさつきまで見ていたパソコンの液晶を向いた。

ズバンツ

液晶が割れた。そこに突き刺さっているのは爪だ。僕の個性で撃ち出した爪弾つめだんはパソコンを壊してしまった。

「新しいのを……いや、いいか……」

ジョニー・ジョースターの個性は爪を弾丸のように発射する個性である。

初めて発現したのは3歳の時。幼稚園で友達と遊んでいる時に鉄砲の真似事をしていたら、爪が発射された。幸い怪我人は居なかつたが、その瞬間からジョニージョースターにはある症状が現れた。

「せ、せんせえ〜、あしが…ぼくのあしは？」

下半身不随。最初は勘違いと思われた。個性が発現した驚きによって一時的なものだと。だが一週間しても、一ヶ月経つても、それは治らなかつた。

車椅子での生活に慣れた頃、ジョニイの家族は日本にいるヒーロー『リカバリーガール』のを知って日本へと移住する。

だが、リカバリーガールの口から出たのは何度も医者から聞いてきたセリフだった。「あたしの力じゃ、治せないね……」

またダメだったと、父と母が落胆した。何度も何度も同じ結果を言い渡されてきた僕の中には、もう諦めようと、受け入れて楽になろうという気持ちがあつた。湧いて来

ていた。

だが、リカバリーガールの発した言葉はぼくらの心に光を差し込ませた。

「だけど、あたしの予測が確かなら……『あの男』ならできるかもしれない」  
思考が止まった。動きも止まって、ひどく滑稽に見えただろう。だがそんなことどうだっ

だっ

「えっ……いま、なんて……できる……出来るんですか先生!!」  
父が立ち上がって、病院の中というのに声を荒げた。母は泣き崩れて息子のジョニイを抱きながらうわ言のように感謝の言葉を繰り返した。

「ああ……ジョニーい……ありがとう神様……ありがとう……」

そこへリカバリーガールが、父を椅子に押し込むようにして座らせながら言う。

「喜ぶのは早すぎるよ、あくまで仮説ですからね。可能性はゼロに近い」

ゼロに近いという台詞も、親子にとっては希望そのものだった。0%じゃないのなら、可能性はあるということだ。

だがそこへ水を差すように、リカバリーガールはジョニーの小さな肩を掴んで目を合わせた。

「ひよつとしたらこの方法は、あんたにこれまで以上の絶望を与えることになるかもしれない。いや、なるだろうね。それでもやるかい？ その覚悟があるかい？」

ジョニーは一度目を伏せて、これまでの人生を振り返った。歩けなくなったことで、他の子と同じように生活できなくなった。気を遣われ、どうしようもない気持ちに苛まれる日々の連続だった。

その中で見たあの映像だ。

No. 1 ヒーロー『オールマイト』の勇姿にどうしようもなく憧れた。

いつかこの下半身不随を克服して、あんな最高のヒーローになりたいと思った。

ジョニー・ジョースターの伏せていた目に力がこもった。まっすぐ目の前の医者之眼を見て、答えた。

「やりますッ……絶対にやってみせます!!」

これは僕が歩き出す物語だ。

肉体的にではなく、青年からヒーローへと。

## ジャイロ・ツエペリ

「ハイ、じゃあ次の方あ〜」

気怠げな受付の男の声に立ち上がり、カウンターへ向かっていく。まるでカウボーイのような奇妙な格好をした男だった。

「えつと本日はどんなご用件でしょうか？」

「郵便が届いてるか確認できる？ 絶対に届いてる筈なんだけど……」

「ではこちらに、お名前とご住所の記載をお願い致します」

スツ、と差し出された用紙を見る。名前と住所を書く欄がある。むつ、と顔をしかめた。

「出来たらすぐ受け取りたい。1秒でも早い方がいい。おたくの為に、俺のためにも……だからオネガイ」

ニヨホ、と笑顔を向ける。だが受付は一貫して、手元の書類を見ながらペンの刺してある方を指差して言う。

「ペンはそちらにございまアア〜す」

「……………」

そんなやりとりをしていた時だった。

「全員動くなアアあああ!!!」

大声で叫んだのはさつきまで隣にいた客だった。瞬く間に郵便局内は響めく。中の一人が警察に電話しようとする。

「そのやつ！ ちよつとでも動いてみるオ、俺のカミソリのような鋭い指がこいつの首を掻き切るぞッ！」

「ヒイ！ わ、わかった！ やめろ！ 落ち着け、落ち着け！」

受付の女を引きずり出して首を手で掴んでいる男の指は、ギラリと光っていた。五本の指が全部鋭い刃になっていたのだ。

押し当てられて、女の首から細く血が滴る。

「なあ、そのあんだ」

「えっ……？」

「さつき言つてた郵便物なんだけどよオ。今からすぐとつてきてくれねエかな、つて無理か」

犯人は鞆をカウンター内に放つて叫んだ。

「そのカバンの中にあるだけの金を詰め込め！ 急げッ 早くしねえとよオオオ、こいつの首が吹っ飛ぶぞッ！」

「わ、わかった!! 言う通りにする! だから命だけは取らないでやってくれー!」

「いいぜ、聞き分けの良いやつだ。お前らもボサツとしてんじやねえ! 窓をブラインドで全部塞げ! 男どもは妙な動きするんじやねえぞ、床に座ってじつとしてろ!」

「おまえ……自分がなにやってるかわかってんのか?」

「あつ?」

「おまえのやつてる行為は、やつちやいけねえことなんだぜ? それをわかって、やってんのか?」

「なんだあ! てめえもさつきと床に転がってるカウボーイ野郎がよ!」

郵便局の異変は、外にいた一般人によつてすぐさま警察へ通報された。警察が来るより早く、野次馬が我先にと郵便局の前にひきめきあう。

その中に、ジョニー・ジョースターの姿もあつた。

「なんだ? いったいなんの騒ぎだ?」

「くそつ! かなり人が多いな!」

「通せツ!!? ヒーローはまだかッ! 早く呼べツ!」

押し流されそうなその勢いの中、ヒーローという単語を聞き逃さなかったジョニイは人混みの中へ車椅子を進めた。

「おまえら！なんだよ！どけッ！ 見えねえぞオレの前に来るな！ どけッ！ くそっ見えねえぞ！この野郎！」

局内の様子は、外から丸見えだった。

人質を解放しようとしないういランに対して、男はゆっくりと上げていた手を下ろす。その手には先程まで持ってなかつた球があつた。

「イエエ〜〜〜イ、てめえ本気か？ 大人しくしてねえとこいつがどうなるかわかつて言つてるのか！」

「やってみろ、ただしちよつとでも力を込めた瞬間。それが『合図』になる……」

「オイオイオイオイオイオイなんの合図だつて？ おまえまさかその球で攻撃する気か？ そんなのがなんの」

瞬間、野次馬のカメラのフラッシュが照らした。

「うげっ！」

ういランが首を掻き切るより早く、男は球をういランの腕に命中させた。

ギャルギャルギャルギャルギャル

「あっー！」

「うあああ うごおおおおおおおお」

回転は止まるどころか更に増して肩へ登っていく。

ギャルギャルギャル

そしてひとときわ大きく肩へ沈んだ後、その球は意思があるように男の手へ戻っていった。

グルグルグルグル

だが、球が無くなったというのに止まらない回転。螺旋状に腕が絞られるように曲がっていく、男の指の刃は手の逆側に向けられていた。

「きやあああー！ー！ー！！」

「お、ごおおおおおー！」

すぐに人質は逃げ出し、ヴィランは捻じ曲がった肩を抑えて唸っていた。

「もう諦めな、そして警察病院で診てもらうんだ。ちよつとの入院で済むだろうぜ」

「ち、ちくしよおおおおおおおお！」

ヴィランは鬼のような形相で男へ飛びかかった！

だが！

グルン

「えっ」

肘が回転して、鋭い刃はヴィランの喉元へ吸い込まれるように沈んでいった。

ザクン

ヴィランが倒れ、男は何事も無かったかのように郵便局から外へ出てきた。

「見たか！ 何をしたんだ？」

「手に持つてる鉄球みたいなのを銃を持ったヴィランの腕にブチ込んだんだ」

違う。野次馬の中でジョニイだけが冷静にそう思っていた。いま起こったことは全く不自然なことは無かった。ヒーローがヴィランを倒す、よくある光景だ。

更にそのヒーローが自分のよく知る人物であるなら、尚更だった。

「どけっ！ てめーらどけっって言ってるんだッ！ オレを前へ行かせろ!!？」

それでも野次馬がボケっとしてる間に、ジョニイは男の元へと向かっていった。

「おいあんた！ もう一回見せてくれよっ！」

腰のホルスターへ収まった球へ手を伸ばす。すると、男は振り向いて声を荒げた。

「おい触るな！ まだ回転している！」

ズギユウウウウ

まるで球からエネルギーが伝わったように、車椅子からだらんとぶら下がっていた足

が地面を踏ん張って、本当に一瞬だが立ち上がった。

この『物語』は

ぼくが歩き出す物語だ

肉体が……

……という意味ではなく

青春から夢へという意味で……

僕の名前は

『ジョニー・ジョースター』

最初から最後まで

本当に謎が多い男『ジャイロ・ツェペリ』と出会ったことで……

## ジヨニー・ジョースター オリジン その1

あの日のことを忘れはしないだろう。

教えてもらった住所まで一人で向かわされた。

両親に聞いても何も答えてはくれなかった。

電車が止まり、降りる駅に差し掛かったところで駅員が人混みを分けて出てきた。

手に持っているのは電車のスロープだった。

乗る駅でも要らないと言ったのに。

「はい、道を開けてください。すみません、ご協力ありがとうございますウ」

「別にいらんよ」

「は？」

駅員が呆けた瞬間、グン、と車椅子に力を込めて車輪を跳ね上がらせた。車椅子は電車とホームの間を跳ねて飛び移る。

「なんだ　なんだ　なにがあつたんだ？」

何か聞かれる前に人混みをかき分けて先へ進む。

電車のホームを抜けたあと、ジョニイはとあるビルの前に来ていた。

よくある五階建てのコンクリートビル。入ろうと扉を探す。あった、隣にはインターホンがついていた。

ピンポン

鳴らしてからしばらくして、応答があった。

「誰だ？ 新聞ならとらねえぞ」

「電話させていただいたジョースターです。約束通りぼくだけ、ジョニイ・ジョースターだけです」

「……そうか。じゃあ横の階段で登ってきてくれ」

声の通り、扉の先には階段があった。

「えっ あのく、ぼくは車椅子なんですけど」

「わかってる。両親から話は聞いてるが、まずはその階段を登ってくるんだ」

ガチャリ、とロックが開いた。

扉を通りながら、ジョニイはわけがわからないと考えていた。

年端もいかなない子供を一人でここまで連れて来させ、更に車椅子だというのに階段を登ってこいと命令する。

「面白い……やっつてやろうじゃないか！」

僕は歩けるようにならなくてはならない。立派なヒーローになる為にも、こんなところで躓いてる時間はないんだ。

「おおおおおおお！」

ガシヤアアア

車椅子を投げ出して、階段の端についていた手すりにしがみ付いた。

「のぼり切つてやるッ　そして絶対に……歩けるようになってみせるっ！」

「……………」

それまでインターホンは繋がったまま、無言だった。だがその時

「そういえば言い忘れていたな。オレがいるのは最上階だ。頑張つて来いよ」

「えっ　ちきしよおおおおお!!?」

その声を聞きながらインターホンの向こうの男、ジャイロ・ツエペリはゆつたりと椅子に腰掛けていた。監視カメラの映像をテレビにモニターして、静かに待ち続けた。

「来れますかねあの小僧」

「無駄無駄　救急車呼んだ方がいいんじゃないですか」

事務所には一人だけじゃなかった。ジャイロ以外にもう二人ほど、スーツを着たセルスマンのような風貌の男たちがいた。

「それですすねエ、ジャイロ・ツエペリさん。本題に入らせていただきます」

「このビルを売っていただきたいのです。駐車場を作る為にも、ここへサインをしていただきたいのですよ」

男は真つ黒で薄いスーツケースの中から、数枚の書類を取り出す。それは土地の権利を譲るというものだった。

「何度言ったらわかるかな。来てもらっても無駄なんだ、譲るつもりはないぜ」

「そう言われましても、ツエペリさん。あなたここ最近、『ヒーロー活動』をしてないそうじゃないですか」

「そうですよ。市長も言っていました。税金を食らうだけのヒーローに居場所はいらないうって」

スーツ男たちの言う通り、ジャイロ・ツエペリはここ数ヶ月間ヒーロー活動を行なっていないかった。

理由を説明するのは簡単だった。だが、したくなかった。ここでその理由を説明して逃げるのは、自分が納得できなかつたからだ。

だからあの子を今日呼んだんだけどな。

「わかった、降参だ。そこまで言われちゃオレも何も言えないわ。ただ、ちよつとだけチャンスをくれないか？」

「ああ？」

ガタア

「チャンスも何もねえよ、さっさとその書類にサインしてくれりやそれでいいですよ」  
「おい落ち着けて。すいません、こいつ短気なもので」

「いーや、別に気にしてないぜ。ただそのチャンスってのはおたくらにとつてほとんど、  
ノーリスクハイリターンなものだ」

ゴクリ、とセールスマン二人は喉を鳴らす。それを見てジャイロは、ニョホツとこつ  
そり笑みを浮かべていた。

腕が痺れてきた。

それがどうした。まだ痛みを感じられる。まだ動く！

まだ二階の途中までしか来ていない。体力も限界だ。

逆だ。もうそこまで来ているんだ。力尽きたなら、ここで眠って体力を回復すればいい。

「必ず……ぼくはヒーローになるんだ。その為なら、こんなところで立ち止まってる場  
合じゃない！」

「お、おい きみ大丈夫か？ 手を貸そうか」

住人らしき男が手を貸そうと言ってくるが、その手を払い除けた。衝撃で手すりを持ってた手が滑って何段も転げ落ちる。

「大丈夫かおい！」

「触るな!!? ぼくに触るんじゃない。手助けもいらぬ！ 手を貸すなんてしてしろ、その瞬間に僕の爪があんたの手を切断するぞ」

ジョニーの爪が彼の指の上で回転を始める。

グルグルグルグルグル

「わ、わかったよ！ チェツ 親切で言っただけによお」

ブツクサ言いながら降りて行ったあと、ジョニーは滑った手すりに手を伸ばして捕まると、再度登り始めた。

だがその手は止まる。機械の雑音が突然聞こえてきた。見ると階段の上に、監視カメラとスピーカーが付いていた。それから発せられていたのだ。

「おい、お前。今のは個性か？」

「……………そうだけど？ なにか 別に見せただけで使ってないだろ。違反じゃないと思うけど」

「へそういうんじゃねえ。お前さんそれを使ったら、もつと早く登ってこれたんじゃねえ

か？」

「……………ツ！」

「凶星みたいだな　なんでだ？」

「別にいいだろ。あんたに説明する義理はない。階段を登ればいいんだろ。今日中には登ってやるからゆっくり待ってろ」

「またしても登り始めたジョニイの足を見たジャイロは、表情こそ変えなかったが驚いた。」

「あの足……………折れてるな。それも一箇所じゃねえ。突き出てるどこまであったな」

一瞬映ったジョニイの足を見たあと、ジャイロはある事に気付いた。

「なんでいままで気がつかなかったんだ。モニターはずつとしていた。なのに気がつかないか？　偶然……………なわけねえか。」

「ハア　ハア　ハア　うおっ！」

「やはりだ。ジョニイ・ジョースターはわざと怪我をした足を見られないようにしてやる。」

ジャイロは手元のボタンを押して階段のジョニイに声を繋げた。

「おい、ジョニイ・ジョースター。やつぱり時間制限付きだ。今から10分以内にここま  
で来い。来れなきゃ足を治す方法は教えられねえ」

へはっ 何を言ってるんだ！ 話が違うツ！

「関係ないね。治したけりやさつさと来な」

「まっ……………」

さあ、どうする。ジョニー・ジョースター。

## ジヨニー・ジョースター オリジン その2

個性が発現してからというもの、意外と生活に問題は無かった。

だが、ヒーローとしては終わっていたんだ。

ぼくのヒーロー像は、車椅子で戦うものとは違う。オールマイトのように立派な二本の脚で立ち、どんな災害時にもすぐ『駆け』つける。

それがぼくの目指すヒーローだった。

なのに、個性が発現してからぼくの足は動くことをやめた。どうしてなんだ。ぼくが何かしたっていいのか。

先生に相談したら別の道を勧められた。

家族に相談したら、戦闘用の車椅子とかわけのわからないものを勧められた。

違う、ぼくがなりたいのはこんなヒーローじゃない。

こんな個性があるから、ぼくは足を動かさなくなつたんだ。

ぼくは個性に足を奪われた。

だから、ぼくはこの個性が嫌いだ。

さっきの男に対する脅しだって、本当に使うつもりは毛頭無かった。もし手を貸されたら、暴れてやろうと思っていた。

〈治したけりやさつきと来な〉

「さて！ てめえこの野郎 まちやがれ！」

その音声を最後に、スピーカーからは全く声が聞こえなくなった。

「畜生！ ぼくが何をしたってんだよ！ 10分なんて不可能だ 行ける距離じゃない！」

上を見ると、まだ階段は続いていた。残り三階だというのに、いまはそれが永遠に続いているように見えた。

「くそおおおおおおお!!!」

グルグルグルグルグル

爪を回転させ、それを地面に当てた。

瞬間、さつきまでの苦労が嘘のようにロケットのような勢いで階段を登り切ったジョニーは、勢い余って階段の踊り場の壁に身体をぶつける。

口の中を切つて血を流しながら、それでも力強い眼差しでカメラに指を向けた。

「ガハッ　　10分以内に來いだつて？　ああ行つてやるとも！　だがな、もうあんたから教えてもらうつもりはないっ！」

次の階段へ手をかけジョニーは言う。

「その方法とやらを暴いてやるッ！　教えてもらうんじやあない。僕が：おれがあんたから奪うんだっ！　首を洗つて待つてろよ、今はまず、あんたを一発ブン殴つてやるッ！」

プツン、と映像が途切れる。

ジャイロ・ツエペリはニヨホツ、と笑みを浮かべて目の前の二人組を見る。

「さあ、約束だぜお二人さん。さっさと帰りな。そして二度とそのしみつたれた面を見せるな」

「お、おとおおい待て待て！　あいつがあんな事できるなんておれたちは知らなかつたんだぞっ！」

「そうだ！　よく考えればあいつはあんたの仲間じゃないのか？　だとしたらイカサマだ！　こんな取引は無効　無効だッ！」

声を荒げる二人組に対して、ジャイロは椅子から立ち上がつて机を叩く。

「イカサマだつてエ!?　おいおたくら、ちゃんと言葉を選べよ。この勝負はお互いに

フエアと判断して臨んだ勝負だ。自分たちが負けそうだからとイカサマ呼ばわりするってんなら……」

ジャイロはいましたが破壊されたカメラの映像を指差して笑う。

「あいつ自身に聞いてみな。お前はあの男の仲間か？ つてよ 絶賛怒り心頭のあいつなら親切に答えてくれるだろうぜ。あのカメラを破壊した個性のオマケ付きでな ニヨホホ」

五階まで来るのに、時間はかからなかった。一個だけある扉には、ジャイロ・ツエペリという名札が付けられていた。

「ジャイロ……ツエペリ！」

地面から這い上がってやつ部屋の戸を開けようと手をかけた瞬間、向こうから扉で吹っ飛ばされて転がされる。

「いつてええ なにしやがんだジャイロ・ツエペリ！」

「違う！ おれはジャイロじゃねえ中のやつだッ！ 関係ねえ 関係ねえからな！」

「チキショー！ 覚えてろよオオオオ！」

三流の悪役が放つような捨て台詞を発して、二人の男は転がり落ちるように階段を下っていった。

なんだったんだあの男たちは……。わけがわからないまま、呆然とするぼくの背後から、そいつは言った

「つたくよオ、人がせつかく優しくお帰りただこうとしたつてのに……。無駄に終わっちまったじゃねえか」

振り向くといた。背は僕より大きく、マカロニウエスタンみたいなカウボーイの格好をした男だ。

そいつは手に持った鉄球を奇妙な形のホルスターにしまい込むと、踵を返して部屋の中へ戻って行こうとした。

こいつだ！ こいつがジャイロ・ツエペリだ!!

「てめえジャイロ・ツエペリ！ よくもおれに個性なんかをオ！」

腕の力で思い切り跳ね上がり、ジャイロの腰のガンベルトを掴んだ。その拍子に、腰に収められていた鉄球に触れてしまう。

「待て！ バカ やめろ！」

ズギユウウウウウウウ

「おおおおおおおおおおお」

ドクン

ドクン

一瞬、ほんの一瞬だった。

ドクン

ドクン

ドクン

だが、その一瞬は僕がこれまで経験した何よりも衝撃だった。

ドクン

ドクン

ドクン

ドクン

ドクン

今……何が起こったんだ!?

……いや確かに……今……確かに

だが……もう動かない……（本当に動いたのか？）

オレの両脚……

「鉄球」……

今……鉄球に触れた……男の

扉が閉まっていく。だが、オレは咄嗟に個性を使って急速に接近した。

世間はオレにあきらめろと言った……………

言葉で、時には無言で

この男は、ジャイロ・ツエペリはいつたい何者なんだ!?

ボロボロの状態で部屋に滑り込んだオレを、ジャイロ・ツエペリは椅子にどかつと腰掛けながら言った。

「妙な期待をするなよ。お前の事情がどんなものか計り知れないが、その床から立ちあがったのは偶然にすぎない」

冷たく、言い聞かせるように。

「単なる肉体の反応で、それ以上のものは何もない」

だが、そんなことは知ったことじゃない!

オレはこいつから治療方法を奪ってやるんだ!

「その鉄球だな! それが原因か!?! 回転していたその鉄の球。たとえばこのオレにもそれが出来るのか……………!?!」

だが、ふんぞりかえったままジャイロ・ツエペリは椅子を回転させて背を向けた。い

いだろう、そっちがその気ならこっちにも考えがある！

「ならばもう一度触つてやるぜエエー……！」

もうやけくそだった。辺りの家具を発射台にして飛び上がり、ジャイロ・ツエペリの腰の鉄球に手を伸ばした。だが。

ズギユウウウウウウウ

「なっ」

ジャイロ・ツエペリが触れたところから、オレの指が、手が捻れて言うことを聞かなくなつた。そのままカーテンレールを掴んで、どんなに力んでもオレの指は捻れたまま掴んで離そうとしない。

「けなすこと言つて落ち込ませる前に誉めといてやる。なかなか鍛えられた上半身をしている……上半身はな。」

そしてはつきり言つておく。この鉄球の回転はたしかにオレの武器だ。

だが、おたくさんのような歩けないものを歩かせる事なんか出来はしない……」

## 試験開始

「おい触るな！ まだ回転している！」

鉄球の謎のパワー。それによつてオレはまたしても、一瞬だが立ち上がる事ができなかった。

ドジャアア

車椅子に倒れるように座る。やっぱりあの鉄球なんだ。あの鉄球の謎を解かない限りオレの脚は治らない。それは確固たる真実だ。

「お前かよ…… なんの用だ？ オレは忙しいんだよ。後にしてくれ」  
馬に跨つて、ジャイロはそう言う。

これにも、もう慣れた。ジャイロ・ツエペリはなぜかバイクとか車を持たない。代わりに馬で移動するのだ。駐車場に馬が止まっている光景は、最初はぶつたまげたものだ。

いや違う！ オレが聞きたいのはそこじゃない。

「いい加減にその鉄球の謎を教えろ！ もうオレは15だ。どんだけ待てばいいんだよっ！」

囃し立てるジョニーに、ジャイロはあくまで冷静にしかし力強く言った。

「Lesson1『妙な期待はするな』。おまえ忘れてんじやねえのか？」

「忘れるわけがないだろう。出会った時、最初に言われた言葉だ」

ジョニーは思い出す。かつての無理難題をクリアしたあと、ジャイロが言った言葉だ。

「じゃあ大丈夫だな。さつさと行ってこい。GO！ GO！ ジョニー！ GO！」

「GOじゃねえ！ 時間がねえから早く教えろって言ってるんだよッ！」

ジョニーが焦っている理由、それは試験だった。雄英高校の試験があと少しで始まるというのに、ジョニーはまだ車椅子のまま、更にジャイロからは奇妙なLessonとやらを与えられる始末。

「クソっ！ これで落ちたらためえの顔面に爪弾をぶち込んでやるからな!!」

時間ギリギリになったところで、ジョニーは悔しそうな顔をする。そして渋々、車椅子の車輪に回転する爪弾を当てた。爪弾の回転が車輪の回転に伝わり、車椅子は車椅子とは思えない速さで突き進む。

しかし、途中の車道は大混雑していた。

「なんでこんな時に!! これじゃあ進めねえじゃねえかよ!」

車道はもうダメだった。どうしようかと周囲を見回したジョニーの目に、歩道が写った。

「なんだ、歩道が広いじゃねえか!」

渋滞する中を、ジョニーは車椅子ごと大ジャンプした。辺りの通行人や後続車の運転手らが、口をあんぐりあけているが、ジョニーはそんなことを気にして居る場合ではない。

「急げええ!!!」

タイヤがすり減るほど高速で移動するジョニー。そして、ついに雄英の門が見えた。爪の回転を止めて、無事に雄英高校の正門を潜ったジョニーだったが、

「ハッ!」

あることに気がついた。

「車椅子が… タイヤが無<sup>ね</sup>え」

タイヤのゴム部分が擦り切れて無くなっていった。他の受験生たちは、ゴムの焼ける匂いに顔をしかめる。ジョニーも鼻を摘みながら、試験の受付人に話す。

「すみません、車椅子をお借りできませんか?」

雄英高校の歴史上初、車椅子でヒーロー試験に挑む者。他の受験生は冷やかしかと

笑っている。

「車椅子……マジかよ」

「変なやつ……あいつと一緒のとはやだなあ」

この視線にはもう慣れた。

何を言われようが、オレの目指すものは変えない。ヒーローになるんだ。立派なヒーローになってみせる。

その罵詈雑言の中から、一人の受験生が飛び出してきた。

「キミ！ 大丈夫か、肩をかそう」

「あ ああ、サンキュー」

受付の人が持ってきてくれた代わりに車椅子に乗せてもらう。珍しいヤツだ。こんなクソ真面目なやつは生まれて初めて見た。

「助かったよ。あんた、名前は？」

「ぼ、俺の名前は飯田天哉。受験生だ。そういうキミは？」

「ジョニー・ジョースター。オレも受験生だ」

オレが受験生であると伝えると、飯田天哉は一瞬ピクリと固まるも、すぐ頭を振り手を差し出してきた。

「よろしくな！ お互い悔いのないように頑張ろう！」

そう言つて、飯田天哉は駆け足で試験会場まで突つ走つていく。

ああ、やはりだ。

飯田天哉の目は同情のそれだった。

「必ず……必ず回転の秘密を暴いて脚を取り戻してやる……もうまっぴらごめんだ！」  
ジョニー・ジョースターも、決意を固めて試験会場へと向かつていく。

その頃、試験官たちが揃つたモニタールームでは。

「なあ相澤君……この生徒なんだけど」

「なんですか？」

「車椅子……だよな？」

「そうですね。別に車椅子は我々が支給したものですから、何か細工されてたりはありません。ご安心してください」

「いやそうじゃなくて!! ゴハッ」

血を吐いた巨漢の男が、煙を発して次の瞬間には骸骨のような痩せ細つた姿になる。

「この子、大丈夫なの？」

「……………正直、私もこの生徒の試験参加を許可するか迷いましたよ。でも……………」

ある書類を、相澤は骸骨男に手渡す。

「ジャイロ・ツェペリ…あのツェペリ一族が推薦ン!?」

「そう、あのツェペリ一族がなぜかあの少年を推薦したんです。理由を聞いたら、はぐらかされました。何かあるんでしょう…あの少年には……」

相澤が見るモニターでは、ジョニーが、支給された車椅子の調子を確認していた。

「さすが雄英……品質が段違いだぜ」

すでに生徒たちには説明がされたが、読者の方々の為にもう一度説明させていただく。

雄英高校ヒーロー科の実技試験はポイント制である。ポイントが一定基準まで達していれば合格、達してなければ不合格となる。

試験会場は市街地を模したフィールドである。そこにロボットが配置されるのだ。

ロボットの種類は計4種類

1ポイントロボット、2ポイントロボット、3ポイントロボット、そして0ポイントロボット。

0ポイントロボットは超巨大なお邪魔ロボット。倒さなくてもポイントに影響はない。

以上をふまえて、これから起こる壮絶なポイントの奪い合いをご覧ください。

準備運動が終えた頃、試験会場へ通じる大扉がゆっくり開かれた。全員が息を詰まらせて『その時』を待つ。

「ハイ、スタートオオオオオ！」

「はい？」

あまりにも唐突。

試験官にしてプロヒーローのプレゼント・マイクが個性を使って放った合図に、受験生は面食らった。動かない受験生らに、プレゼント・マイクは喝を入れる。

「もう始まってんだよ！ 急げ急げッ！ ……っているじゃねーか、粋のいいのがヨ！」  
誰よりも早く駆け出した、もとい飛び出したのはジョニー・ジョースターだ。

「Lesson1『妙な期待をするな』、そんな懇切丁寧に開始を宣言してくれることなにか期待してなかったさ。そしてっ！」

ジョニーは爪を回転させる。目の前には1ポイントロボットが佇んでいた。車椅子を直進させながら、ジョニーは右手をロボットに向ける。

ババババババババアッ

シヨットガンのように撃ち出されたジョニーの右手の爪弾は、1ポイントロボットを

粉々に爆裂させた。

『脆い』！ どんどん希望が湧いてくるぞッ！ 待つてろよジャイロ・ツエペリ……  
ヒーロー科に入つて、それも一位になつてやる!!?」

そして僕の成長を認めさせてやる……次の回転の Lesson を受ける為にも！」  
次々と、ジョニイは爪弾でロボットを破壊していく。

瓦礫があつても、車椅子の車輪に回転を加えて……

ドシユウウウウ

ズバンツ

ズバツ

車椅子ごと瓦礫を飛び越える荒技をやつてのけ、その先に居たロボットを爪の回転で切り裂く。

当初は車椅子で大丈夫かと思つていたモニタールームも、彼の動きには目を見張つた。

「すごいね、車椅子なのにもうあんなにポイント稼いでるよ」

「元々の個性を最大限に利用した戦い方……車椅子というハンデを逆に利用していると  
はな」

だが、その快進撃は長くは続かなかつた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

超巨大0°ポイントロボットが、姿を現した。

## LESSON 2

超巨大ロボットの出現は、受験生たちに恐怖を与えた。あまりにも巨大すぎる。その一撃だけで、戦闘不能まで追い込まれそうな圧がビリビリと伝わってきていた。

「逃げろおおお!!!」

一人、また一人と超巨大ロボットから逃げ始める。本能的な恐怖心が脚を動かしていた。そして理性的にも、ポイントを稼がなくてはという思いがあった。

「デケエ……お邪魔キャラとは聞いてたけど、邪魔どころじゃないだろこのデカさはよー!」

ジョニーもまた、その大きさに圧倒されていた。まずこの場を逃れて、ポイントを稼がなくてはならない。

そして車椅子を爪の回転で加速させようとした瞬間、ジョニーの視界にあるものが見えた。

「……………ッ!」

ジョニーの手が止まる。超巨大ロボットと逃げ道を交互に見た。

「ああ！　どうかしてるとしか思えない！」

ジョニイは爪の回転を加えて、車椅子を加速させた。

その方向は超巨大ロボットだった。

「うらあ！」

ジョニイは躊躇いなく、爪弾を発射した。だがそれは、ロボットの装甲に傷をつける程度に終わった。

「固い！　ぼくの爪弾が全く通用しないなんて!!?　どうする……どうすれば倒せるんだッ！」

全く通用しないことに愕然とするジョニイ。そこへ超巨大ロボットの腕が振り下ろされた。

「しまった！　うおあああああああ！」

ガシャアアアアアアア

車椅子から身を投げ出して間一髪逃れたジョニイだったが、移動手段である車椅子を破壊されたことよって更に状況は悪化していた。

周囲に他の生徒はいない。助けを借りることもできない。

「不味い……考えろっ！　弱点がある筈だ。観察するんだ！」

ジョニイは爪弾をいつでも発射できるよう構えながら、超巨大ロボットを見る。辺り

のロボットの残骸やビルを壊しながら進む様は、ゴジラのように絶望的な強さを感じさせた。

「そうだ……相手はロボットだ。超精密なマシンだ。だがそこなんだ、弱点はそこにあるッ！」

空を見上げた。ロボットより更に高い場所。辺りの高層ビルを見上げていた。

どんどん迫ってくる足音と揺れに、ジョニイの全身から汗が噴き出す。だが、それでも諦めずジョニイは探した。

ドガッアアア

目前まで迫ったところで、ジョニイは目を見開いて右手を上に向けた。

「うおおおおおおおおお!! 当たれエエエエエエ……」

ジョニイの爪弾はまっすぐ飛んだ。回転が込められた爪弾はその軌道を全くブレることなく目標にぶち当たった!

「ぼくの爪弾はたしかにお前の装甲を貫くことはできない。だが、関節部はどうだ?

破壊することができないとしても、傷がつけばいいんだ。小さな傷でもいい。それがいい!」

ジョニイが撃ったのは給水タンクだった!!

給水タンクの柱に命中していたのだ!

自重を支えきれなくなったタンクはビルから落下していき、ロボットの頭に直撃した。

中には大量の水が入っていた。それはロボットに付けられた傷から侵入し、回路をショートさせていく。

「ハアーーーーハアーーーー どうだジャイロ・ツエペリ！ このヤロー、やってやったぞチクショー！」

地面に倒れ、機能停止して静かになったロボットを見上げながら叫んだ。

ビィィィーーーー!!

同時に試験終了を伝えるブザーが鳴り響き、ジョニイは個性の多用による疲労で倒れた。

成長している……確実に僕は成長しているツ！ だが、まだだ。もつと強くならなくてはならない。今回は幸運だった。給水タンクが無ければ、僕は戦闘不能にまでなっていただろう。

回転の力をもつと知りたい……。

知らなくてはならない！

雄英の救護班が回収に来るまで、ジョニイは何度も強く決意していた。

ジャイロ・ツエペリの元へ戻ってきたジョニイは、事務所の戸をぶち破る勢いで入って言った。

「やってやったぞ、ジャイロ・ツエペリ！ さあ早く教えるんだ！ 次のLessonをッ！」

まだ疲労が残る中で絞り出した声を聞いたジャイロはゆつくりと椅子から立ち上がり、ジョニイの元へ歩いていく。

手に持っているのは鉄球だった。回転する鉄球を見たジョニイはやったぞと思った。これでようやく次のLessonを受けられる。成長することができる。

だがジャイロの目は静かに据わっていた。腰のホルスターから鉄球を出したジャイロは、ゆつくりとそれを放った。

なんだ、こういうことだ。理解する間もなく、ジョニイは鉄球を両手で掴んだ。次の瞬間。

ギチイイツ

「なっ！ これは どういうことだジャイロ・ツエペリ！ 僕の手が……ねじ曲

がって車椅子から離れないッ！」

鉄球が手に触れた瞬間、その回転はジョニイの両手から肩までをねじ曲げて車椅子に密着させた。動かしたいのに、まるで腕全体を抑えつけられるように動かない。

あたふたするジョニイに対してジャイロは言う。

「バーカ　まだ結果が出てねえだろうが。それを見てからだ　それを見てからお前さんに次のLessonを伝えるか考えてやる」

「結果なんて分かり切ってる。早くこの拘束を解いてくれ！」

「ダメだ。それと……結果を見るまでお前はしばらくそのままだ」

「はっ？　何を突然言ってるんだこいつは」

「冗談でもなんでもねえからな。嫌なら自力で抜け出してみろ」

ジャイロの言葉は本当だった。

用を足すときや食事の時、歯を磨く時とかは解除されたが、ずっとこの状態のままだったのだ。

「そういえばジャイロ……」

「なんだあ、小便か？」

「違うよ。ずっとこの事務所にいるけど、なんで他の人はいねえんだ？」

後ろを向いたまま答えないジャイロ。ジョニーは畳み掛けるように聞いた。

「ヒーローならサイドキックつてのがいるもんだろ？ または色々管理する事務係とか。なのにこの事務所にはあんた一人だけ……なんでなんだ？」

「1人が好きなんだよ、それによオー」

振り返ったジャイロの顔はひどくにやけていた。

「可愛い女の子を連れ込んだときに邪魔者が居なくていいだろう？ お前さんは別の階に放つとけばいいし」

「にしては、この数年間一度もそんなこと無かったと思うけどな」

事務所の中は整理整頓こそされているが、女つ気など微塵もない寂しさが漂っていた。

「うるせえ！ この野郎、口も塞いでやろうかこのっ！ このっ！」

「うわっ！ こっちにくんな馬鹿野郎！」

試験から数日後

くそつ、ちよつとこの状態に慣れてきてる自分が嫌になる。人間つてのは慣れる生き物だが、こんなことに慣れたくはないつての。

ジャイロの鉄球による拘束から逃れようと、ジョニイは四苦八苦していた。だが、この期間の中でわかったこともあった。

「この拘束……皮膚が捻れているが筋肉は動かせる。感触がある。筋肉にはなんの異常もない……皮膚だけなんだ。まるで皮膚が拘束具のような役割を果たしている……」

力任せにやろうとしてもダメだ。筋肉に異常がないとはいえ、自由に動かせるわけじゃない。

「なら、一か八か……」

ジョニイは車椅子に座った状態のまま、爪を回転させる。

だが、単に回すだけではなかった。

ジャイロが投げた鉄球の回転とは逆の回転であった。

「唯一……小指だけがちょうどいい位置に……ジャイロのやつ　わざとなのか？」

ジョニイの右手小指の回転した爪弾は、ジョニイの片手に浅く命中した。軽く血が吹き出すも、途端に左手の拘束が解けた。

「やつぱり！ 『皮膚だ』　回転は皮膚を巻き込んでいるが、筋肉には何も異常がないように感じられた……皮膚をコントロールするんだ！」

ジョニーは自由になった左手の爪の回転で拘束を解いて久々に自由を取り戻した。

「Lesson 2…『筋肉に悟られるな』ってところかな、ジャイロの驚く顔が目には浮かぶぜ」

これまでの仕返しに驚く顔を見てやろうと、自室をそつと出て奥のジャイロのオフィスへと向かっていく。

「……………」

ドアノブに手をかけようとした時、中から声が聞こえた。

珍しいこともあるもんだ。客が来るなんて滅多にないぞ。

僅かに開いている隙間から中を覗くとまず目に入ったのは、床に落ちた小包だった。

「手紙……？ でもどこから……あ、」

包みの端には、雄英高校の住所が書かれていた。宛先は……。

「僕じゃないか!!」

バダムツ

勢いよく扉を開けた音に、ジャイロが驚いて振り向く。だがジョニーはそれよりも重要なものを見ていた。

机の上に置かれた小さな機械から、オールライトが投影されているのだ。そしてオールライトはというと。

「おめでとうジョニー・ジョースター君！ 合格だ！」

辺りが静まり返った。

振り向いたジャイロは固まったまま動かない。

ジョニーはその投影されたオールマイトに釘付けになっていた。

誰も声を上げない空間に、録音されたオールマイトの声が流れる。

やつと声を発したのは、ジャイロ・ツエペリだった。

「ジョ、ジョニー……動けたのか。す、すげえじゃねえか！ うん！ すげえよお前ツ  
！」

その後も繰り返されるジャイロのお世辞は、ジョニーの耳には入ってきていなかった。

ただゆつくりと、ジョニーは自由になった両手をジャイロに向けた。その目には、やるといったら必ず殺る凄みが燃え上がっていた。

「なにやってんだジャイロ・ツエペリーーッ！ 拘束はともかく勝手に見た訳を言えエエエー！」

このあと、ジャイロがどうなったかは敢えて言うまい。ただ、生命に別状はなかったとだけ言っておこう。

ジョニー・ジョースター

首席合格 ヴイランポイント 74P

レスキューポイント 43P

雄英高校ヒーロー科 入学決定イ！

ジャイロ・ツエペリ

再起可能 3日間は絶対安静

## スロー・ダンサー

ジョニー・ジョースターは車椅子だ。

電車に乗る時も満員では乗れないから、予定の時間よりずっと早くに家を出なくてはならない。

爪の回転で高速で車椅子を動かすこともできるが、車体自体が保たないので一度限りの無茶苦茶な方法だ。

だから、ジョニーは考えた。もっと他の移動手段が必要だと。

「ジャイロ……たしかに僕は車椅子以外の移動手段を探してくれと頼んだ。下げたくもない頭を下げて、苦渋の決断で君に『お願い』したんだ」

「だから連れてきてやったんだろ？ この農場によろしく」

スウ〜　　はあああ〜

いい空気だ、と深呼吸するジャイロに、ジョニーは再度問いかけた。

「だから、僕は移動手段が欲しいんだよ。もっとあるだろ？ ホバリングする近未来的なヤツとか、もっと便利なやつがさあ」

「ダメだ」

正直、めんどくさいと思った。どうしてこんな田舎くさいところに来なくちやいけないんだと。臭いもなんだか糞尿のようなどてつもない臭いがしてきた気がする。

「どうしてそんなにこだわるんだよ……って、勝手に動かすなっ！」

「まあまあまあ、別にいいじゃねえかよ。これからその『移動手段』の元へ案内してやつからよ。ありがたく思いな」

そう言つてジャイロは、またいつものようにニヨホと笑う。こう笑つてる時は、大概僕が嫌な目に遭う時だ。

そしてその予想は的中した。

連れてこられたのは馬宿だった。

「おー！ ツエペリさん、こんちわ〜」

「こんちわ〜、元氣そうだな！」

農夫と話すジャイロ。だがジョニイの内心は穏やかじゃなかった。

「おい、まさかジャイロ・ツエペリ……」

「そのまさかよ、お前さんにはこれから馬を選んでもらう。それがお前さんの足となる相棒だ」

おいおいおい、ふざけんじゃ無いぞ。

「お前、ぼくをからかっているのか？　この身体でどうやって馬に乗るっていうんだよ。手伝ってもらうならともかくだぜ」

「安心しな……その技術ならもうお前さんは持つてる」

「は？　それはどういう……」

シルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシル

「気づかないか？　お前さんの右肩を見てみな」

「あっ!!　鉄球……そんなバカなっ、回転してる鉄球が……　どうして何も……」

パシッ

鉄球はジャイロの手に戻り、回転をしたまま留まっている。

「Lesson2……『筋肉に悟られるな』だ。手首をこう掴むと、それを振り払うために筋肉に自然と力が入る。皮膚までだ！　皮膚までなら筋肉は異常に気付くことはない。皮膚を支配するのだ」

ジャイロがジョニーに回転の止まった鉄球を投げ渡す。

「皮膚を……」

それをジョニーはしばらく見ると、顔を上げて今度は馬たちをじっくりと見ていく。

自分に観察眼などない。だけど、これからぼくの相棒になる馬を選ぶとなると集中せ

ざるを得なかった。

「この馬だ！　この馬に決めた」

ジョニーが決めたのは、馬たちの中でも特に勇猛そうな茶色い毛並みの馬だった。だが、そこへジャイロが待ったをかけた。

「あゝゝゝ、すまねえがそれはおれの馬だ」

ジョニーは、一気に恥ずかしさがこみ上げてくる感覚を味わった。

「だったら初めからそう言えっ！　紛れ込ませとくかフツー!?!」

「まあまあ落ち着けて。別に他意はない。だけどお前の観察眼は本物だけ、自信を持って」

そう言つて愛馬を撫でるジャイロは、単に自分の馬が可愛いのだろう。

気を取り直して、もう一度馬宿の中を見る。だが、あのジャイロの馬以外に良さそうな馬は無いと思つてしまう。

「なあジャイロ、ここの馬はこいつらだけなのか？　他には？」

そういうと、ジャイロは表情を曇らせた。なんだ？　他にもいるのか？　訳あり……なのか？

「んゝ、一応居るには居るんだけどなあ」

やっぱりそうだった。どうやら訳ありらしい。

「それも見せてくれないか？」

「……わかった。まあダメで元々だ。こっちに来い」

ジャイロに連れてこられたのは馬宿から少し離れた場所。木の柵に囲まれたそこには、一頭の馬が練り歩いていた。それをジャイロは顎でさす。

つられて見ると、納得した。

白の中に黒い豹のような斑点がある一般的なアパルーサだが、その目つきは鋭く、乗せてもらうことも出来ないだろうことがうかがえた。

だが逆にジョニイはその馬に見惚れた。その眼光の鋭さに見惚れていた。

それを横目で見るがあえてジャイロは気づかないフリをして、目の前の馬の説明をす  
る。

「こいつはいわゆる暴れ馬つてやつさ。おれが乗つても全然言うことを聞かない。更に年老いている馬だ。買ったところでそう長生きはしねえよ」

しばらくの沈黙を挟み、ジョニイは問いかけた。

「なあジャイロ、さつき言つてた……馬の乗り方を教えてくれないか」

とても静かに、和やかな雰囲気を漂わせていた。それにジャイロは、静かに答える。

「回転だぜ……回転が答えだ」

「そうか……」

それだけ言うと、ジョニイは車椅子から柵へ飛び移った。

「くっ……ハア　ハア　」

それを見た農夫は、仕事を忘れ大慌てで近寄る。

「おおおい　あんたそいつは危険だッ！　すぐ離れるんだよ！」

「近寄るなッ！」

意外、そう言ったのはジャイロだった。ジャイロはジョニイを止めようとする農夫に向かつて叫んだ。

「安心しろ、何かあれば俺が責任を取る……おたくは作物の収穫でもしてな」

「せ、責任って……一応ここはわたしの農場なんですよオ？　もし何かあれば私にだって責任は」

「いいから黙ってろ！　ヒーロー『ボール・ブレイカー』が全責任を取るって言うってんだッ！」

「はっ、はいイイ！」

再び視点はジョニイの方へ戻る。すでに柵を超えて向こう側へ降りたジョニイは、爪による移動を使わず這いつくばって馬の元へ進んでいく。

ジョニイに気がついた馬は、ブルブルと頭を振ってじっと見て、ゆつくりと歩み寄っ

ていく。

「ハアーツ　ハア　ハア……」

息も切らした状態で、ジョニーは近づいてきた馬の手綱へ手を伸ばした！

ガシイイ

握った！　だが次の瞬間

「うおおおおお!!!」

急に馬は走り出した！　当然、ジョニーは引き摺られる。

服は破け、皮膚が裂けて血が吹き出る。

だが、そんな状態になっても馬は止まらない。

そしてジャイロもまた、静観を続けていた。

日も暮れてきたころ、ジョニーは酷い有様になっていた。足に木片が刺さり、傷だらけで意識も朦朧としていた。

ぼくは、何をしているんだろうか。

そうだ、馬に乗るんだ。

でも、どうしてこんな暴れ馬を……他にあつたじゃないか。いいやダメだ。他の馬じゃダメなんだ。

この馬じゃないと、いけないんだ。

こいつじゃないと、僕は成長することができない。

こいつに乗ってこそ、僕は『生長』することができるんだ！

再び、ジョニイの目に光が灯る。

ずっと握っていた手綱を離し、地面に横たわる。

ジャイロは言っていた。すでに僕は乗る技術を持っていると……回転……皮膚……筋肉には悟られずに…………ッ！

ジョニイは手を伸ばし、馬へ語りかける。言葉なぞわかるはずもない。それでも、言わずにはいられなかった。

「頼む……顔を……ぼくの顔を舐めにきてくれ」

馬はゆつくりと近づき、泥だらけのジョニイの顔へ自分の顔を近づけた。

「ここだ！」

ジョニーは自分の身体を回転させることで、馬の頭から首へ、首から背中へと移動する。

ジャイロはニヤリと笑みを浮かべた。

「よし!!?」それが馬の乗り方だ。そしてお前の判断は正しい……たしかにこの馬は老馬だが、若い馬のように下手に突っ込んで行ったりしない知能がある。信号だつて守れるだろうぜ　ニヨホ」

腰のホルスターから鉄球を出したジャイロは、それを馬の前脚部分に投げる。

察したジョニーはそちらへ転がると、ジョニーの身体は見事に馬の前脚で受け止められた。鉄球が馬の脚を動かしたのだ。

「よし、それが馬の降り方だ。覚えときな。これからはそいつがお前の『足』だ。仲良くしろよ」

やはり：鉄球の回転には可能性がある。僕の脚を元に戻す可能性があるツ！　ジョニーは馬の前脚で回転を続ける鉄球に手を伸ばすが、それはジャイロの手元へ帰っていつてしまう。

「いでっー」

馬の足が元に戻り、地面に投げ出されたジョニーは頭から落ちてしまう。

「いってえなクソ！ いきなり元に戻すなよ、コブになつたらどうしてくれんだ！」

「コブだあ？ 足に木片突き刺さってるやつがよく言うぜ」

「こんなの痛くねえよ……ただ、病院には行かないとかも。ちよつとこの馬借りていいか？」

ジョニイは器用に先程と同じく馬に乗る。だが、ジャイロはそれに待ったをかけた。「バクカ、よく考えて行動しろ。今のお前さんの見た目は百パー敵ツライだぜ。雄英生徒が入学前に問題起こしてどうするよ」

そのあと、ジャイロが救急車を呼んでジョニイは病院へと搬送された。足の怪我などについて質問された時、ジャイロは一貫して俺のせいじゃねえと関与を否定していた。

確かに事実だが、自業自得の怪我とはいえそこまで否定するか？と思うジョニイであつた。

## 雄英高校ヒーロー科

馬を手に入れてからというものの、移動が格段に早く快適になった。ちよつと周りの目が気になるが、将来のことを考えたら我慢するしかないだろう。

ジャイロに障害物コースを用意してもらった。いけると確信があったからだ。馬を操つてみせると、最初こそ強がっていたジャイロが、完走し終わったら顎が外れるほど口をあめぐりしていた。なんでも難易度をわざと上げたコースだったらしい。道理でニヤニヤして見てたわけだ。ざまあみろ！

街中を馬で移動することは、別に違反ではなかった。車道を走らないといけないが、車に轢かれたりすることはなかった。いや、一度危なかったのだが。ちゃんと信号も守れる賢い馬だとは思っていたが、認識が甘かったかもしれない。

一度危なかったというのは、信号待ちしている時に逆走してきた車と出くわしたのだ。その時、情けないことだがとつきにぼくは指示を出せなかった。目の前に迫ってくる車を見ることしかできなかった。

だが、この馬は違った。なんと車に向かってまっすぐ走ったのだ、一貫の終わりと思つたよ。でも馬はその車を思い切り踏みつけて飛び越えた！

その車はぶつ壊れて止まり、周りに被害が出ずに済んだ。運転席からジジイが出てきて怒鳴り散らしてきたので、ぼくは馬の前足を大きく上げてクソジジイの目の前に振り下ろした。そいつは意気消沈して声も出なくなつた、ざまあみやがれ！

その日、ぼくはこの馬に『スロー・ダンサー』という名前を付けた。

事故のことはジャイロ・ツエペリが、逆走してきた車が悪かつたこと、車を壊したのは被害を未然に防いだ最良の方法だつたなどと言いくるめてぼくをおとがめなしにしてくれた。警察の前でしこたま怒られたが、事務所から警察が去ると。

「おめえもその馬もなかなかやるじゃねえか！」

ヒーローとしてその発言はどうなんだと思つた。ジャイロ・ツエペリには借りができてしまった。

あのクソジジイがどうなつたか？ 今頃寝込んでいるだろうぜ。免許も剥奪され、デカデカとTVデビューしちまつたんだからな。

そうだ、ぼくもTVデビューしたことになるのか。いつそのことなら、もつとカツコ良くデビューしたかつたんだけどな。

まあ、これからぼくはヒーローになるんだ。ヒーローになつて一番になれば、テレビ

に出るなんて日常茶飯事になるだろう。そう考えると、馬に乗って人目につくというのも、いざって時に緊張しない訓練になるのかもな。

「そう考えてるとは思えないんだよなあ」

だらけた雰囲気ของ ジャイロ・ツェペリを思い出しながら、ぼくは雄英高校の門をくぐった。

校内は馬に乗っていても充分なくらいデカかった。階段も何もかも、これは嬉しかった。ついでに教室の入り口までデカかった。中に入ると、何やら騒がしい。刺々頭の男が机に足を乗せていた。それを眼鏡をかけたいかにもつてやつが注意している。

「なんだあてめえは。お馬さんで登校たあ、將軍が何かか？ 調子乗ってんじゃねえ！」  
「悪いが、ぼくは足が不自由なんだ。この馬が僕の足の代わりだ」

さあ出るぞ。同情の視線だ。悪かったと顔を背けるぞ。

「つるせえ！ なら車椅子使えばいいじゃねえか、なんで馬なんだよクソが！」

「……………!?!」

驚いた。こんな返しをされるとは思ってもなかった。ちよつと新鮮な反応に少し笑ってしまう。

「なに笑ってんだこの野郎！」

「違うって、別にあんたを笑ったわけじゃない。ちよつと新鮮な反応だったから……」

僕はジヨニイ・ジョースターだ」

「知るか！」

手を差し出したのに拒否された。しかし、こんな悪人面のやつが合格してたなんて驚いた。僕も人のことを言えないが、この男は特にじゃないかな。ヒーローというよりヴィランみたいだ。

そういうえば、この男の顔どこかで見たことあるような。

あと少しで思い出せそうというところで、教室の扉が開かれた。ああ！喉まで出かかってたのに！

「ウマツ!？」

入ってきたのは、ボサボサの緑色髪的男だった。

「そうだよ、馬だよ。あとで事情を言うからさ。取り敢えず今はその疑問引つ込めといてくれ」

「気になるなあ……ひよつとして君の個性が関係してるの？」

「……いいや、ぼくの個性とは関係ない。ぼくの個性はこれだよ」

詰め寄ってくるそいつの前で、爪を回転させてみせる。途端に、そいつは口に手を当ててブツブツと呟き出した。気味が悪いやつだ。

引つ込めようと思った時、入口からぬるりと寝袋に包まった芋虫のようなヤツが入ってきた。その異常性に教室内がしんと静まり返った。

「はい、静かになるまでに8秒かかりました。君たちは合理性に欠けるね。俺の名は相澤翔太……これから君たちの担任になる。早速だが体操着を着てグラウンドに集まってくれ」

なんなんだこいつ。そう思ってるのはぼくだけじゃなかった。呆氣にとられた皆の中から耳がイヤホンジャックのようになってる子が手を上げた。

「あの……入学式とか、ガイダンスとかは？」

「……そんなもの、ウチには無いよ」

「それで個性ありの測定をしたつーことか。大変だね、雄英生徒サンはよ」

「大変どころじゃない。相澤って先公はどうかしてると思えない……除籍されるところだったんだからな」

「ほオオ………つまり？」

椅子にふんぞりかえってたジャイロが、相澤という名前に興味を示した。

「あいつ、『最下位は除籍処分する』とか抜かしやがった！ 自由が校風だからって限度があるだろ……」

「おつ、てことは除籍された奴がいるんだな？ ベツに他人の不幸を喜ぶタイプじゃねえけど、誰が除籍されたんだ？」

ジャイロが笑顔で聞いてきた。

「思い切り面白がつてるじゃねーか。でも残念、誰も除籍されなかつたよ」

「おいおいジョニイ、最下位は除籍処分じゃねーのか？ 言ってることが矛盾してるぞ」

絶対にこう言われると思つてたよ。くそつ、思い出すだけでイラつとくる顔だ。

「あの先公、君たちの……ええつと、『君たちの全力を出すための合理的虚偽』つて言つたんだよ」

それも嫌らしい笑顔でな！ ジャイロといい勝負だ、あのしてやつたり顔は。

雄英高校入学1日目にして、僕は担任教師とは上手くやっついていけないだろうと確信した。

唐突だけれども、ぼく（ジョニイ・ジョースター）が読んだヨーロッパのある国の新聞記事を紹介したい

∴日付は三年前の4月23日

その国に「マルコ」という無個性の少年がいた

年齢は9歳

少年の家は代々、貴族に仕える「召し使い」の家系であったため、マルコもリツピという男爵の屋敷に帽子と靴をみがくだけの仕事のため 住み込みの奉公について

ひとり親もとをはなれる時9歳のマルコに彼の父は言った…

『この仕事は謙虚に…そしてまじめにやり続けければ幸福になれる仕事なのだ』………と  
マルコは毎朝、誰よりも早起きをして男爵とそのお客たちのために靴をみがき、そして帽子にブラシをかけた。

だが、奉公について数週間たったとき突然………国の憲兵隊が屋敷に押し入ってきてマルコは逮捕されてしまった。

男爵はこの国の「王」に叛乱の計画を立てていたのだ。

『国王』の暗殺は未然に防がれたが「叛逆」は最重罪！

計画にたずさわった男爵の仲間と男爵の家族も全員処刑と裁判で決定された。

証拠により暗殺計画はこの屋敷で立てられたとされ、マルコも男爵の家族の一員とみなされたのだ。

毎朝、男爵とその仲間の靴をみがいていたのだから……

「知らないはずはない」………と

処刑方法は『斬首刑』

国家の決定は絶対だった

そして一年後……刑は執行された。

後に判明した事実で少年は「計画」と無関係だったことが発覚したが、別の理由で「国家叛逆罪」であったと報じられた。

その数ヶ月後、ジャイロ・ツエペリは日本にやってきた。

## 爪と凍 ジョニーと焦凍

個性測定の日翌日。プレゼントマイクの担当する英語の授業が行われた。

またとんでもない内容かと身構えていたらその内容は至って普通の、ちゃんとした授業だった。

時折、プレゼントマイクのテンションが高くなるとスローダンサーが驚いてしまった。宥めながら授業を受けるのは大変だったよ。

「おい、ジョースター。職員室に來い」

案の定だ。休憩時間に相澤から呼び出しを受けた。

職員室で言われたのはやはり、馬の管理についてだった。

スローダンサーは賢い馬だが、生理現象にだけは勝てない。もし授業中にされでもしたら、衛生的に悪いだろうと。

最もだった。正直今日の授業中もそのことを心配してたんだ。

だが流石は天下の雄英高校だな。簡易的とはいえ、あつという間に厩舎きゆうしゃ（馬を飼う小屋）を作ってくれたよ。

じゃあ移動はどうすんだって、そしたら車椅子を借りることができた。実技試験の時

に使ったのと同じやつかと思ったら、どうやらタイヤのゴムを強化したやつらしい。

これで問題なく授業を受けられると思ったら、相澤から、次の授業はヒーロー基礎学で、その時必要になると言い渡された。

車椅子の出番はもう少し先みたいだな。

休憩時間は終わり、次の授業が始まる。

みんな席に着くが、僕は馬に乗って待機していた。飯田が奇妙な動きで注意してくる。

「おいジョースター君！ もう予鈴は終わっているぞ、早く席につかないか！」

「僕の場合はこれでいいんだよ……一応言っとくが、別に悪意がある訳じゃないからな。次の授業はヒーロー基礎学だろ？ 僕はスロージョーダンサーに乗って参加するらしい」

「そ、そうか。そういうことならすまない！」

飯田はそれだけ言うとかたッ、と着席する。なんだ、ただの真面目なやつか。

「わくわくたわくわくがアー」

あの声でした。映像越しじゃない！ 生の声だ！

抑えきれない興奮をスロージョーダンサーが感じ取って、今にも飛び出しそうさ。どうどう

と落ち着けながら、でも僕の目は教室の扉に釘付けになっていた。

「普通にドアから来たツ!!」

「「おおおおおおおお!!」」

歓声だ。学校ということで抑えられてはいるが、それでも教室中に響くクラスメイトと僕の大歓声だ。

本物だ。シルバーエイジのコスチュームだ。などなど、飛び交うコメントの中で僕の頭は目の前のオールマイト英雄一色に染め上げられた。

だがすぐに、その熱は冷まされた。皆んなの歓声を受けて立派に立つその姿は、僕の憧れだ。

馬を宥めていた手は気がつけば脚に添えられていた。

「Lesson2、『筋肉に悟られるな』……か」

ジャイロの顔がよぎった。

「私の担当はヒーロー基礎学。ヒーローの基礎を作るため、様々な訓練を行う科目だ。単位数も、最も多いぞ」

早速だが、今日は戦闘訓練だツ!

戦闘訓練! だからスロウダンサーが必要だと言ったのか。

「そしてそれに伴ってこれ! 入学前に送ってくれた個性届けと、要望に合わせて作ら

れたコスチューム！」

壁からコスチュームの入ったケースが出てきた。金かけてるな。

戦闘訓練が行われる市街地を模したステージ、入試で使われたのと同じようなステージに、コスチュームへ着替えて向かう。

そこに居たのは、僕よりヒーローらしいカッコいいコスチュームを着たクラスメイト達だった。

しかし、すげえ格好だよな。特にあのポニーテールの女なんて、ほとんど裸同然じゃないか。

「ヒーロー科最高……！」

ブドウ頭の小さいやつが、嬉しそうに言っていた。

わかるぜ、その気持ち……。

これから行われるのは市街地のビルを利用した戦闘訓練だ。

実技試験のような破壊して『ハイ、終了』って簡単なやつじゃなく、今回は2人1チー

ムになってチーム戦を行うらしい。

ヴィランチームはビルの中にある核兵器を模したハリボテを制限時間まで守り通すか、ヒーローチームを捕獲テープで巻いて戦闘不能にすれば勝ち。

ヒーローチームは外から攻め込んで、制限時間内に核兵器に触れれば勝ち。

そしてチームを分けるくじ引きをしようとなったところで、鎧のようなコスチュームを着た飯田がビシツと手を挙げた。

「先生！」

「はい、飯田少年！ 何かな？」

「くじ引きとありますが、クラスメイトは21名です。これでは余りが出てしまうのでありませんか？」

「HHHHHHHH!! それなら心配無用さ！ なぜならここにッ」

オールマイトが用意したカートの上には、ヒーローと書かれた白い箱とヴィランと書かれた黒い箱。そして白く何も書かれていない箱だった。

その何も書かれていない箱が誰の為にあるものなのか、僕にはなんとなく理解できなかった。

「ジョースター少年は特別枠だ。この箱からくじを引いてもらい、どこかのチームと組んでもらう！」

「特別枠!?!」

クラスメイトの視線が一斉にジョニーに向けられた。

「特べ……いや、まあなんとなく察しがつくけどさ」

正直いうと、あまりいい気分ではなかった。だけどこれまでと比べたらマシだった。中学三年まで、足が動かないからという理由で学校では様々なことが禁止されていた。壊れ物のように扱われてきたジョニーにとって、戦闘訓練に参加できるだけでも御の字だった。

「やっぱ、舐められてるよな……」

ジョニーはクラスメイトの言葉に耳を傾ける。

「万が一馬から落ちたら、なんとかフォロワーしてやんねーと……」

「怪我させたら、俺が悪者みてえになんねえよな?」

「正直やりづらいよなああ」

しょうがない。誰だって障害を持った人を見たらそう思う。

目が見えない代わりに他の感覚が鋭くなつて普通の人間と同じ動きができるなんてのは、そういう個性を持つてるやつ以外じゃありえない。

だから、いい人つてのはそういう人に配慮せずにはいられない。だからしょうがない  
「そう、『しょうがない』よなア」

ドツバアアアアア

トンツ……トンツ      トン      トン

爪弾が白い箱のど真ん中を貫いた。中に入っていたくじのボールが転がり落ちて散らばる。

「なっ、何をするだァー!!」

飯田が声を荒げた。クラスメイトの暴走にいてもたってもいられず、

右手の人差し指を向けたままのジョニーに注意するためひきづり下ろそうとするが、今度はその飯田に、左手の回転する爪弾が向けられた。

「なっ!」

「ほお〜? やる気マンマンって訳か? 上等だゴラァ! ここで作るか!」

爆豪が両手を小さく爆破させながら挑発する。

爆豪は本気だった。戦闘訓練と聞いてからうずうずしてしようがなかった。早く戦いたいという欲が爆発しそうだった。

しかし、授業以外で暴れでもしたら成績に傷がついてしまう。

だからジョニイが撃った瞬間、爆豪は大義名分ができたと思った。

それに爆豪は、馬に乗って上から見下ろしているジョニイが気に食わなかった。だから、落馬させてやろうかとも考えていた。

どつかの骨が折れたとしても、攻撃したのは暴走したクラスメイトを止めるためで少し力が入ってしまったとでも言えば大丈夫だ。

両掌を後ろに向けて爆破、その勢いで急接近しようとした爆豪だが、途端に目の前が暗くなる。

「ああ!?! なんっ……オールマイト!?!」

目の前に現れたのは壁じゃなかった。オールマイトの頼もしい背中があった。全く目で追えなかった。だがどうして……

「オイオイオイオイ……冗談にしても度が過ぎてないか? ジョースター少年」

「……ッ！」

オールマイトが現れた理由がわかった。

その手はジョニイの右手首をがっしりと掴んで、上へと向けていた。

その指先には爪弾が三発だけ残っていた。

まさかと思い振り返って見上げると、後ろのビルに弾痕がついていた。

「……………謝る気はないからな」

「全く困った生徒だ……なぜこんなことをしたのか、聞かせてもらえるんだろうね？」

ギリギリと、ジョニイの腕を掴む力が強まる。

「……………僕のことをあまり舐めないでもらおうか。たとえ脚が動かなくても僕にはこの馬がある。個性だつて攻撃力に関しちや自信があるんだぜ」

「だからといって、友達を撃つ理由にはなり得ないだろう。君の個性、爪弾が当たったらかすり傷ですまないんだぞ」

「リカバリーガールなら多少の怪我はすぐ治る。それに……………当てる気なんて、無かったですよ」

爪弾の回転が止まる。オールマイトの手に強く握られた手をさすりながら、大袈裟だ

と言うジョニーの言葉に何人かは安堵するが、轟は安心できなかった。

あの目……やると思ったら必ずやる目だった

あのクソ野郎の顔が重なって見えた……

当てる気が無かった、だと？嘘つけ！

どんな思考回路してんだ……プツツンしてやがる

オールマイトは気付いてんのか？

轟が心配するまでもなく、オールマイトはジョニーの嘘に気がついていた。ジョニーの目を見たとき、そこに灯る黒いものに気がついていた。

かつて戦ったオールフォーワンも、似たような黒いものを持っていた。どす黒く、目的のためならどんな手段もいとわらない意思。

唯一の救いは、まだそれが小さなものだと言うくらいか……

爆豪を含むクラスメイトたちの静かになった空気を切り替えるように、オールマイトは手を叩いて自分に注目させた。

コンクリートで簡易的に作られた建物は、音を簡単に反響させる。自分の居場所を悟らせない為にも足音を出来るだけ抑えて動かなくてはならない。逆に言えば相手の居場所も音でわかるということ。

障子目蔵は個性の複製腕で、肩から生えた二対の触手の片方に耳を作り、壁に押し当てる。

完全に居場所がわかるわけじゃない。それでも相手の動きを察することはできる。

「動いた様子は無い。今のうちだ」

片方の触手に複製した口が相棒へ指示を出す。

「わかった。巻き込まれるといけない、外に出てくれ」

「……………」

呆気にとられる。障子が組んだ轟焦凍の言った言葉がいまいち理解できなかった。巻き込まれるとは、『何に』なんだ。

まさか個性なのか

その考えに至った障子は入ってきたビルの入り口から外へ出る。

……寒気が、なんだ？

障子は僅かに感じた寒さの答えをすぐ目の当たりにすることになった。

「こっつ、凍っている!!」

さつきまで入っていた五階建てのビルが、一瞬で氷漬けになっていた。寒気どころではない、いきなり冷凍庫に入れられたような寒さが身を包んでいた。

だが轟はそんなのお構いなしに、ゆっくりとビルの奥へと歩いていった。

「寒くはないのか？ いや、それよりも中の2人は大丈夫なのか？」

障子の心配はもはや轟ではなくヴィランチームへ向けられていた。核爆弾と一緒に建物の中にいる2人は大丈夫なのだろうか。

さつきのジョースターのように、リカバリーガールがいるとはいえ無茶すぎじゃないのか。

「ん？ この音は……………」

敵を心配する余裕ができたからか。複製腕に作っていた耳がある音を捉えた。足音じゃない、だがつい最近聞いた音だ。どこで聞いた音だったか……

「まさかッ!!」

障子はビル上階を仰ぎ見た。音がどんどん近づいてきている。轟に知らせなくては、援護に行こうにも氷漬けの床は歩けそうにない。

ならばと、複製腕の耳を口へと変えて叫んだ。

「轟！ ジョニイ・ジョースターだッ！ まだ動いているぞオオー……!!」

障子の声はビルの中へ響き、優然と歩いていた轟まで届いた。

「知ってるさ」

だが、それでも轟は動じない。ジョニイがなんらかの方法で馬ごと凍結から身をかわすことを予見していたわけじゃない。

「どちらにしろ……………すぐ終わらせる」

過剰なまでの自信。それを裏付ける強い個性。轟にとってはどんな敵だろうと通過点でしかない。全く眼中にないのだ。

例えその相手が憎い男のような目をしていたとしても。

馬の蹄の音が、勢いを増して近づいて来た。

轟は軽い分析をする。いま自分の現在位置は一階、奥に広間があり窓がいくつかある通常の通路だ。分かれ道はあるが、階段はここだけ。

単純に突っ込んでくるとしても、策があるとしても、来るなら階段しかない。

降りてくるだろう階段へ、右手を向ける。

馬の鼻先が見えた。

「悪りいな、レベルが違いすぎた」

ガシヤアアアアアアアアア

轟の背後にあつた窓ガラスが割れた。窓ガラスを破った爪弾は勢いを落とさず、轟に一直線に進んでいった。

「なこっ!?!」

氷壁を作ろうとするが、一手遅れた。

爪弾は轟の体に撃ち込まれ、浅くないダメージを負わせた。

「ぐっ、おおおおお!!」

バキバキバキバキバキバキバキバキバキバキ

推薦組に選ばれただけのことはあつた。痛みを耐えて目の前に氷の壁を形成。追撃から身を守った。

「くそっ、手応えがなかった。ビルの外からッ!」

馬は困だった。おそらく凍らされた直前に馬の足元を爪弾で抉り、氷を破壊したのだ。

「だとしたら、仲間もすでにか」

このままでは挟み撃ちにされるとふんだ轟は、すぐに左の力でビル全体の氷を溶かした。

だがすぐに全ての窓ガラスを氷で固めた。もう追撃されないようにと。

「轟! 大丈夫か」

さほど奥へ進んでいなかったお陰で、障子とすぐに合流できた。

「その傷は！　すぐにリカバリーガールのところへ」

「いい！　それよりやつがどこにいるのか教える！」

傷口を凍らせて簡易的な止血をした轟は、すぐに立ち上がって状況を把握しようとする。

推薦組といってもここまで痛みに耐えることができているのは、やはり鍛えられたお陰だろう。

「最悪だ……」

「確かにな、どうにか位置を探っているんだがはつきりしない。地面を削る音があちこちに反響している」

「そうじゃない、と言おうとしてやめる。今は授業だ。こつちに集中しなくてはと、気を引き締め直す。」

「相手チームはたしかジョースターと、葉隠だったな」

「透明か……だが透明だろうと足音はする。ジョースターは歩けないから、足音がしたらそれは十中八九、葉隠だろう」

「よし、じゃあゆつくり核爆弾のある階まで行くぞ。足音に注意してくれ」

わかった、と返して二人は慎重に進んでいく。階段を登っていけば、先ほどからいる

馬が二人を出迎えた。

「ウマ？　こいつはジョースターの馬じゃないのか？　なんでこんなところに……」

「してやられたんだ。そいつを囷に窓ガラスから一気に襲われた」

あまりいい気はしない轟は、馬と目を合わせずにさつきと通り抜ける。

「どうりで窓ガラスが全部……上の階も窓ガラスを凍らせるのか？」

「念には念をな……早く行くぞ」

今回の戦闘訓練は時間制限がある。だから慎重に行くとしても無駄な時間をとれない。足を止めている障子を急かすのも無理はなかった。

「ああ……にしてももうるさいな。さつきからずつと地面を削る音が止まらない……」

「俺にも聞こえる。おそらく回転させた爪で床を抉りながら進んでるんだろ。とんでもない鋭さってことだな、あの爪は」

階段を登り切るところで、轟は足を止めた。ジョニイを警戒してのことじゃない。侵入されるだろう窓ガラスはすぐに凍結できる。

違和感を感じていた。それも大きな何かを見逃しているとしてつもない違和感を。

「なんでわざわざ、ジョースターは移動してるんだ」

「？　それは位置を悟らせないためだろう、反響で全くわからないんだからな」

「それだったらどこかに潜んでいればいい。大きな音を立てる意味がないし、葉隠の足

音を誤魔化すためだとしてもリスキーすぎる」

「お前探偵みたいだな……じゃあなんでわざわざ移動してるんだ？」

「それは……」

轟は考える。相手がどんな方法で攻めてくるのかを。

窓ガラスは氷で封じる

まさか床をくり抜いて襲いかかってくる？ だとしても完全に上階の床が落ちるまでに氷漬けにできる。

一番あり得るのは待ち伏せだ

核のある部屋まで来て油断したところを捕まえる。

だが、どれもしつくりこない

この違和感はなんなんだろうか

「にしても、賢い馬だ。飼い主がいなくてのに……」

「馬だツ!!! 早く離れる障子! 葉隠は『もう来ている!』『馬に乗って来ているぞ!!』」

「まさかツ!」

馬の影から捕縛用テープが浮いて迫ってくる。

「あちやー、バレちゃったか。でも大人しく捕まって頂戴ね！」

葉隠の呑気な声があった。障子は避けようとするが一手遅かった。捕縛用テープが腕に巻きつけられようとしていた。

「くそっ！」

すぐに馬ごと葉隠を凍らせる。ギリギリ間に合うかもしれないと、右手を振りかぶった。その時だった。

バリイイイイイイイ

後ろの窓ガラスが割れた。

「まさかッ！」

飛び込んできたのは爪弾ではなかった。

「二手」……遅れたな！」

ガラスで傷だらけになったジョニー・ジョースターが、捕縛テープを持って飛びかかってきた。

正面からジョニイ、後ろからは葉隠、完全に包囲されていた。

《ヴィランチーム、ウイ<sup>W</sup>イイ<sup>I</sup>イイ<sup>I</sup>イイ<sup>N</sup>ン！》

## 男の世界

轟&障子チームとジョースター&葉隠チームの戦闘訓練終了後、モニタールームに戻ってきたのは障子と葉隠だけだった。轟はジョニーに撃たれた傷を治す為、ジョニーはガラスを突破する時についた傷を治す為、保健室にいた。

「それでは、今回のMVPを発表させてもらおう！ 誰かわかるかな？！」

オールマイトが生徒たちを試すように聞くと、八百万やおよろずの手が挙がる。ここまでの戦闘訓練でもそうだったように、八百万はオールマイトが言おうとしていたことを含めて自身の見解を話していた。

MVPはジョニーだった。だが、その当事者はというと保健室でリカバリーガールの治療を受けていた。

「まったく……あんたら無茶すぎだよ」

治療を終えたりカバリーガールが愚痴を零した。その目の先には、ベッドで点滴を受ける三人の生徒。緑谷出久、轟焦凍、ジョニー・ジョースター。

緑谷は意識を失っているが、轟は点滴を打たれながら天井を見ていた。

「治癒っていつても、体力を使うんだから限度があるんだよ。なのに入学してから一週間もしないうちにこれかい？ 若いからってなんでも出来るわけじゃないんだから、自分の体は大切にしな」

リカバリーガールの説教が続く。轟は話半分に聞き流しながら、別のことを考えていた。ジョニイのことだ。圧倒的なハンデがあるというのに、そのジョニイに敗北した自分にあの男を超えることは出来るのだろうか。

やはり「左の力」を使わないと……。

「……………クソっ」

余計なことを考えてしまったと、右へ視線を逸らした。

ビシッ      ビシッ

ビシッ

「……………なにしてんだジョースター」

「別に」

ビシッ      ビシッ      ビシッ

「気になる。なにしてんだそれ」

ビシッ

ビー玉を弾いていた手を止めて、ジョニイは面倒そうに轟の方を見た。

「お前に言う必要ないだろ。ぼくの勝手だ、気になるなら氷で耳栓でもしてなよ」

「そうか……」

パキッ　　パキッ

本当に耳を氷で塞いだ轟は、そのまま目を閉じてしまった。まさか本当にやるとは思わなかったジョニイは、口を開けて啞然とする。

「天然かよ……まつ、静かになっていいけどな」

ジョニイは手の中のビー玉に意識を戻す。手の中のビー玉は窓からの夕日を反射するだけで、回転する気配は全くない。

「イメージはあるんだよなあ……こう、舞う感じなんだけどなあ」

ビシッ　　ビシッ　　ビシッ

ビシッ

グルグルグルグルグル

「おっ!!」

グルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグル

ビー玉が回転してジョニイの手を登っていく。

「おおおおおおおおおつ、まつ、回っ……………轟ッ！」

轟に呼びかけるが、当人は耳栓をして目を閉じていた。しかし耳栓といえど、完全に音が遮断されるわけじゃない。隣の鬱陶しさに轟が耳栓を溶かして目を開けた。

シユンツ

「あつ！　なんで、今つ！　回ってたんだぞ轟、なんで見てなかったんだよ！」

「……………なんでお前をずっと見てないといけないんだ？　そんなことよりホレ！」

「ええ？　あつ……………」

だ。  
ジョニイの目の前には、リカバリーガールが立っていた。顔を真っ赤にして怒り心頭

「保健室で騒ぐんじゃないよ!!!」

「ギャハハハハハハッ!!! ヒィー! ヒヒヒヒヒ」

「笑い事じゃねーって!! そのあと大変だったんだからな!」

話を聞いていたジャイロ・ツエペリは堪えきれず吹き出した。ソファから転げ落ちそうな勢いで笑うもんだから、ジョニイは心中穏やかじゃない。

膨れっ面でソファに腰掛けるジョニイと、とうとう床に転げ落ちて笑うジャイロ。膝の高さより少し低い机の上には、食べかけ料理が並んでいる。いま2人は食事中だった。

「笑いすぎだジャイロ!! 早く食わねーとあんたのも食っちゃまうぞ!」

「いやーヒヒ、悪りい悪りい………とここで、なんでこの話になったんだっけか」「あつ、そうだ! 忘れるところだった。『回転』の話だよ、ビー玉を回転させることが出来たんだ。それもあんたの鉄球みたいにだぜ」

そういうと、笑っていたジャイロは料理を口に運びながら訝しげにこちらを見た。疑われていると察したジョニイは、ポケットからビー玉を取り出して見せた。

「これだよ。やってやるからな、見てろよジャイロ」

ビシッ      ビシッ

「あ、あれ？」

ビシッ      ビシッ      ビシッ

「くそつ、一度出来たんだ。待ってろよ、すぐに回転させるからな！」

ビシッ      ビシッ      ビシッ

「くそおお〜〜」

ビー玉に集中するジョニイを、ジャイロはじつと見ていた。

しかし、視線を感じながら早く見せようと焦るが焦れば焦るほど手元は狂っていく。

「ああ〜〜〜〜」

ジャイロの間の抜けた声がした。大口を開けて肉を口に運んでいた。

パクッ

「……………えっ」

まさかと自分の皿を見ると、そこにあった肉はきれいになくなっていた。今頃それはジャイロの口の中だ。

「お前さんがあんまり熱中してるもんだから。冷めるといけねーし、ニヨホ」

「てめえなにやってんだジャイロオオオ！ 回転させてる時に、見てたのはそういうことかよチクショー」

爪楊枝で歯の隙間についた料理をとる姿がムカついて見えた、きつとわざとだ。ご丁寧に自分の肉はとくに食べ終わっていやがった。

最後の一切れを食べられたジョニイは、回転できない苛つきも加わって落ち込みムードだった。

ジャイロはジョニイの隣に腰掛ける。

「まあまあそう落ち込むなって。回転の技術はツェペリ一族の秘伝なんだ。そう簡単にホイホイ出来るようになられちゃ、こっちが困る」

「わかってるよ。だけど絶対に回転の技術をものにしてやるからな」

「ニヨホホ、その意気だぜジョニイ！」

肩を組んでこれから頑張ろうと意気込む2人であった。

この翌日、ジョニイがクラスメイトとジャンクフード店に行った時にジャイロのクレジットカードを使って全員分を奢るとは、この時のジャイロは夢にも思わなかった。

(食べ物の恨みは怖いんだぜ、ジャイロ・ツェペリ)

肩を組みながら、ジョニイは明日の仕返しのことを考えて笑っていた。

翌朝。ジョニイは愛馬と共に登校していたのだが、雄英高校の校門付近に大量の人だかりができていた。遠目にそれを見たジョニイは、マスコミだろうと当たりを付けた。

「マスコミねえ……でもあれぐらいなら行けそうだな、驚かしてやろうぜ、スロージダンサー」

ブルル!!

返事ととれる鼻息を聞いて、ジョニイは手綱を持つ手に力を入れた。手綱から乗り手の意図を汲んだ老馬は、指示されるままにトップスピードでまっすぐ走った。

ドカラッ　　ドカラッ　　ドカラッ　　ドカラッ

「あつ! 君! オールマイトの授業を……あれ?」

「うわあああああ迫ってくるぞ! 止まれっ! 止まれー!!」

まっすぐ走っていたので、その延長線上にいたマスコミは大慌てだった。機材と自分を守ろうと身を屈んだところを見つけたジョニイは、ニヤリと笑ってそこへ方向を修正

する。

「跳ぶぞで、スローダンサー!!」

ドガッ

地面を蹴って、馬の巨体が座り込んだTVスタッフの真上を通過した。その勢いのまま、ジョニイは校門をくぐって見事登校してみせた。

「♪~~~~」

ちよつとゴキゲンな気分で厩舎に馬を止めたジョニイは、車椅子に乗り換えてA組の教室へと向かった。

後にこの行動を注意されるのだが、それはまた別の話。

いつかのどこか。木製の小さな一軒家に彼らはいた。

小汚い椅子に腰掛けてテーブルに足を放り出している男は、身体中に手の模型を付けた不気味な男だ。その後ろには執事のような服装と出で立ちの男が立っていたが、その身体は黒い『もや』でできていた。

「おい、『黒霧』……もう帰ってもいいか？」

指の隙間から覗く瞳は暗く濁っていた。黒霧と呼ばれた執事風の男は、身をかがめて耳元で囁く。

「もう少々の我慢です。あの方が会っておけとおっしゃっていた人物です。決して損はないかと」

宥める様子は手慣れていた。いつも振り回されているのが窺えた。

「先生が会つとけつて言うから、どんな相手かと思つてたら。ハア……なんで、こんなボ口屋に」

周囲を見回して呟く。その家はお世辞にも綺麗とは言えなかった。どこも埃っぽい空気、傷んだ家具、ヒビの入った食器の数々。

当の住人も、このボロ椅子に案内してからは飲み物を淹れてくると言つて奥から戻つてきてない。

「お待ちせして、申し訳ございません……………」

カチャカチャカチャカチャ

震える手で、カップを死柄木の前に置いた。そして自身も向かい合うように椅子に座

り、自分の分のティーカップを目の前に置いた。

「ようやくかよ……あと少しで帰るところだったぞ」

「まあまあ死柄木弔しがらきとむら。まずは紅茶でも飲んで落ち着きましょう」

黒霧は宥めながら、机の上に置かれたティーカップを指さした。

正直、死柄木は早く帰りたい。この目の前の男からはなにも感じられない。自信の感じられない目つきと、常に震えている身体。どこを見ても、自分より優っていると考えると、思えるところがないのだ。

「チツ……」

死柄木は舌打ちをしてティーカップの中に入っている紅茶を勢いよく飲み干した。

「う、うめえ……って、こちららわざわざ、こんなボロ家に茶を飲みに来たんじゃねえ！ 先生が会つとけつていうから、わざわざ出向いてやったんだ」

「死柄木！」

流石に言い過ぎな死柄木に黒霧は慌てて訂正を求めた。だが、家主は静かに紅茶を飲んでい。怒っている様子は微塵も感じられなかった。

「本日はあのお方の命めいでここまで来しました。貴方が、こちらの死柄木弔の成長に一役かっただけだと………」

「あのお方が……」

男は口元に運んでいたカップを戻し、値踏みするように死柄木と黒霧を見た。

「お前たちの成長を俺が助けろと？ それは違う……成長とは公正な戦いの末に自分自身で掴み取るものだ。『公正さは力』だ。それは掴み取るものであって、与えられるものではない……」

ゆつくりと立ち上がり、男は続ける。

「目的はあくまで『修行』であり、人としてこの世の糧となる為………そして人としてオレを認めてくれ、そしてオレを頼れと言ってくれたあのお方には『恩義』がある」「それは、我々に協力していただけるということですか？」

「お前たちの目的に興味はない。だが協力しよう。そこに戦いがあるのなら、それはオレをまた人間的に高めてくれるだろうからだ」

ガタン！

座っていた椅子を吹っ飛ばして、死柄木弔は目の前の男の首に掴みかかった。

「ダメだ、死柄木弔ッ！」

黒霧が止めようとするが、遅かった。

「さつきから訳わかんねーこと言いやがって……興味がねーだのなんだのと、てめえみたいな上から目線のやつがどうしても気に入らねえんだ！」

「ガッ………アガッ」

死柄木の触れた箇所が、崩壊を始めていた。皮膚を崩壊させて、その下部組織までもどんどん破壊させていく。

意識も吹っ飛びそうな中、男は抵抗するでもなく、自分の右手首についた腕時計のつまみに手を伸ばした。

ドゴオオオオオオオオ

「それは、我々に協力を………えっ!？」

黒霧は我が目を疑った。たしかに苛ついた死柄木がこの男を殺すところを見た。

こんなことになって、あのお方になって言ったらいいかと考えていたのを覚えている。

だが、この状況はなんだ。

確かに死柄木がこの男を殺した瞬間を見た。絶対に間違いない！

しかし、首が崩壊した男は目の前で椅子に座っている。

なんだ・・・？ なんなのだこの違和感は・・・!?

「死柄木ツ!!」

「うるさいよ黒霧。わかってる！ てめえ……何しやがった……」

死柄木の中には苛立ちはもう無かった。それ以上に、目の前でコーヒーを飲む男の得体の知れなさに本能的に恐怖していた。

理解が追い付かず静止してしまつた二人を一瞥して、男は元からそうするつもりだつたようにゆつくりと立ち上がつて口を開いた。

「遅れましたが、自己紹介させていたきたく……名は、『リングゴオ・ロードアゲイン』。ヴィラン名は『マンドム』。そう認識していただきたい」

ほんの「6秒」

「それ以上長くもなく短くもなく、キツカリ「6秒」だけ「時」を戻す事が出来る。それが個性」

その自己紹介によつて、二人の中にあつた違和感が消えた。しかし同時に、それ以上の戦慄を味わつた。

「と……」

「なんだよそれ……チートじゃねえか。どこが公正フェアだよ」

もはや「個性」などと呼称していいレベルではない。

冷や汗を流す2人を前に、リンゴオ・ロードアゲインは深々と頭を下げた。

「どうか、よろしくお願い申し上げます」

## 落ち着かない一日

委員長を決めることになった。

相澤が教室に来て言った言葉を発端に、誰がA組の学級委員長をするかの騒ぎになった。上に立ちたいから、権力を使ってスカート丈を短くしたいから、目立ちたいから。様々なアピールをしていく生徒たちの中で、飯田は声を張り上げた。

「ここは投票で決めようじゃないか。その案に、蛙吹梅雨あすいづゆが物申した。

「まだ知り合つて短いのに、信頼もクソもないと思うわ」

辛辣！ しかし事実だった。

入学して日が浅いのに信頼して誰かに投票するなど、結果は見えていた。

「ぐっ……やはりダメだったか……」

ジョニイを含めたクラスの殆どが自分に票を入れていた。言い出しつぺの飯田は、真面目に他の人物に投票した結果、0票という悲惨な結果となった。その中で緑谷に3票、八百万に2票が入った。

委員長決めは緑谷が委員長で、八百万が副委員長という結果に落ち着いた。

昼休憩。ジョニー・ジョースターは食堂でサンドイッチを食べていた。オニオンと卵も入ったローストビーフサンドイッチだ。

車椅子の見た目のせいでジョニーのテーブルには彼一人だったが、もう慣れっこだったので特に気にせずサンドイッチに舌鼓を打っていた。

もちろん、その間にもジョニーは回転の練習を止めない。ビー玉を転がしながら、ジョニーは広い食堂を見渡していた。

「流石は雄英だよなあ食堂までBIGだ。おつ、ありゃ『ランチラッシュ』か！　けど僕はパン派なんだよなあ、声をかけ辛い……」

くだらないことを考えながらももうひと齧りした。その時だった。

ジリリリリリリリリリリリリリリ

「あー」

食堂に、雄英高校の学園全体に喧しい非常ベルの音が響いた。途端に食堂にいた生徒

は食事を止めて、我先にと非常口へ走った。

雄英高校は食堂も広い。更に今は食事時だった為、あふれんばかりの生徒が食堂からの出口に敷き詰まってパニックを引き起こした。

「おい！ どけよっ！ がっ、前を塞ぐんじゃねえ！」

車椅子に座ってるジョニイだろうと例外じゃない。移動が遅かった為に人混みの後ろになってしまったが、人混みに押し潰されることはなかった。不幸中の幸いだった。スロージョニイなら蹴散らして進めるのに。目の前の人の壁を見て歯噛みしていた。

「いっそ……」

非常時だから許されるだろうと、窓ガラスを撃って破ろうと考えた。だが、自分の爪弾で割れるほどやわな作りじゃないだろうと悟り、断念する。

「みなさんっ！ だいじょおおーぶ!!」

どうするか考えていたところへ聞き覚えのある声があった、飯田の声だ。

「ただのマスコミです！ 何もパニックになることはありません!! だいじょーぶっ  
！」

「前を塞ぐなよ！」

目の前の人混みを分けると、非常口の上に非常口のあのポーズで貼りつきながら叫ぶクラスメイトの姿が見えた。

「ここは雄英！ 最高峰の人間に相応しい行動をとりましょう!!」

このほんの少し前に遡り、雄英高校を不審者から守る壁、通称雄英バリアが突破された瞬間の出来事である。

「いまだ いまだ！」

「突っ込めエエー！」

「一言おねがいしますウー！」

マスコミが我先にと、雄英バリアを越えて敷地に入ってきた。もう誰も止めるものは

いないと、ズカズカと駆け込んだ。

ズテエエエエ

「おっ！ な、なんだあ？」

突然、先頭を走っていた女性記者が転んだ。

だが、そんなことおかまいなしに、他社のマスコミは倒れた記者を避けて進む。

「デッ!!」

ガシヤアン

「あだあー！」

今度は避けて進んだ記者が転んだ。転んだ拍子に担いでいたテレビカメラが壊れてしまう音がした。

明らかに普通じゃないとマスコミが気づき始めた時、扉の方から男が歩いてきた。

「よーし、そこで止まれッ！ それ以上こっちに近づくとは、怪我しても知らねーぞ」

男が、ジャイロが視線を促すように地面を指差した。そこでようやくマスコミたちは気がついた。

シルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシル

「なんだあれ……回って……」

地面には小さなガラス玉が回転しながら留まっていた。それも一つや二つじゃなくいくつも、まるでトラップのようにガラス玉が回転していた。

「お話を聞かせてください!! オールマイトがいるんですよねエ!」

進めないとわかると、マスコミは大声でジャイロに質問をした。だが本人はまるで聞く耳を持たずに小さな包みに手を突っ込んでいた。

「これは明らかに報道妨害です! いますぐ止めてくださいっ!」

報道陣の1人が回転するガラス玉を指差して抗議する。それに賛同してそうだろうだと、他のマスコミも騒ぎ出した。

「なに勘違いしてんだ? ここに勝手に入ってきたのはおたくらじゃねーか。それにここは元々俺の訓練所だったんだ、ホレ」

包みに突っ込んでいた手にはいくつものガラス玉が握られていた。それを地面に放ると、すでに回転していた玉が弾かれて他の玉を弾き、連鎖的に全ての玉が立ち止まるマスコミたちの方へ迫っていった。

「おおおっ!」

慌てて下がる者、プロ根性で逃げつつそれを撮る者。様々な反応があるものの、慌てて後ろに下がり出す光景にジャイロは笑う。

「ニヨホツ、そのまま尻向けて帰りな〜」

完全にコケにされている。

プロとしてのプライドを傷つけられた一人の女記者が、迫りくるガラス玉を見て気がついた。こつちに迫ってくる分、さつきより危険地帯が減っている。

これなら自分でも飛び越えられると確信した記者は、ジャイロの方へまっすぐ走って大きく跳んだ。

「やった！ 思った通り飛び越えられる!!」

「へえ〜、やっぱ日本の記者は根性あるねえ……でも、そこも『危険地帯』だぜ?」  
「えっ?」

ギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャル

ガラス玉の一つが有り得ない動きで戻ってきたのだ。それはちようど収まるように、記者の着地点で止まった。足をとられ、落下の勢いも加わって顔面から地面に倒れる。

「きやあああああ!」

「おっと! 流石に痛そうなのはごめんだぜ。勝手に巻き込まれたとはいえ、な?」

咄嗟にジャイロが抱き止めたのは、最初に転んだ女記者だった。涙目になり若干放心していた彼女だったが、ジャイロの顔を見て目の色を変えた。

「どうか一言おねがいます!!」

「……………その根性だけは、もう尊敬するしかねえな」

マイクを向けてきた記者に対してのジャイロの呟きは、やってきた警察のサイレンの音にかき消された。

壊された雄英バリアの前にジャイロと数名の教師が立っていた。その中のネズミか熊かわからない者がジャイロに話しかけた。

「いやあ助かったよツェペリ君。でも、もう少し穏便な方がよかったかな!」

「ケチ付けんたって……それよりこれは一つ『貸し』だかな。今度、分厚いステーキ肉でも奢ってくれたらチャラだぜ」

「ところであの壁、どう思う?」

「話を逸らすな！　いいか、ステーキ肉だからな。それも特上の！」

「ただのマスコミにこんなことができるとは思えない……そそのかした者がいる」

「……………ヴィランか？」

「まだわからないが、その可能性は高いだろうね」

「面倒なことになってきたなあ……俺はどうすりゃいい？」

「君は予定通りに動いてくればいいさ！」

激動の1日の夜。ジャイロの事務所に帰宅したジヨニイは目の前の光景に動きを止めていた。

「おう、やつと帰ってきたかジヨニイ。喜べ、今日はご馳走だ！」

ジャイロがいまかいまかと、ナイフとフォークを擦り合わせて座っていた。そこはいい。いつもの光景だ。

だが、そのいつもの光景に、いつもとは違うものがあつた。

「おいジャイロ、なんだその肉……いや、ステーキか？　そのステーキはどうした」

「別について買ってきたのよ。お前さんは何で食べる？ ソースもいいが、やっぱシンプルに塩と胡椒が良いよなああゝ」

「……………お前が何を言ってるのか理解できない。こんな高そうな肉…どこにこんな金があつたんだ」

「んゝゝゝ……………臨時収入つてやつだな。おつと！勘違いするなよ、別に悪事に手を染めたとかじゃあないぜ。正真正銘、オレが汗水流して得た報酬だ」

邪な方法で手に入れたものではないと聞いて、ジョニイの心配は若干だが薄れた。安心したそこへ、特上の肉が焼けた香りが入り込んできた。

ゴクリ…………

「おつ！ ジョニイイイゝゝゝ、いま唾を飲み込んだな？ 安心しろつて、ちゃんとお前の分もあるからよオオオゝゝ」

肉の香りとジャイロの甘い誘惑に、ジョニイは何も言わず、ソファに向かい合つて座つた。目の前には極上の肉、それも自分の分だけでも充分なほどあつた。

何も言葉は要らなかつた。

ジョニイの疑問も、頭から吹つ飛んだ。

ジャイロも同じだつた。

これまで味わったことのない味に、今日の騒動のことや、ジョニーへ伝えるべきことも頭から吹っ飛んだ。

「うちそうさま」

「うちそうさま」

そして夜は深まり、2人は満足感に溢れて眠りについた。  
ジョニーは日々の疲れを忘れて、ジャイロは伝達事項を忘れて。

翌朝、登校の準備を済ませたジョニーが事務所の一階に作られた厩舎に向かった。すると、愛馬のスローダンサーの隣にいるはずのジャイロの馬が居なくなっていた。

そういえば朝からジャイロの姿が見えなかった

こんな朝から用事か？

特に疑問が続くこともなく、ジョニーはいつも通り雄英高校へと向かった。

いつも通りの授業を終えて、次の教科はヒーロー基礎学だ。

今度は何が行われるのかと考えていたところへ、担任の相澤が教室に入ってくる。

「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト、そしてもう一人の三人体制で見ることになった」

「はい！　今回は何をやるんですか？」

「災害水難なんでもござれ、『レスキュー訓練』だ」

「レスキュー……今回も大変そうだな」

「ばっか！　これぞヒーローの本分だけ。なるぜエー腕がつー！」

「水難なら私の独壇場、ケロケロケロ」

「おいまだ途中……」

静かな苛立ちの込められた声に、沸き立ち出したクラスがしんと静まる。

「今回コスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな」

相澤がリモコンを操作すると、壁からコスチュームの棚が出てくる。もちろん僕は着用する

「訓練場は離れたところにあるからバスで移動する。以上、各自準備開始」

要点だけを伝えた相澤が出て行き各自が動き出した。

クラスメイトたちがバスで移動する横で、ぼくはスローダンサーに乗ってバスと併走していた。バスの中の爆豪がこちらを見て、バスの中はラクチンだとアピールしてきたので、

「アメリカ方式……フランス方式……日本方式……イタリアナポリ方式……世界のフィッガー『くたばりやがれ』だ」

途端に爆豪が顔を真っ赤にして、窓を開けようとしている。とてもヒーローとは思えない顔だな……おっと、相澤が目光らせてやがる。

「おっかないヤツだ……」

逃げるように加速して、ぼくは一足早く訓練所に着いた。中に入ることが出来なかったので待っていたら、バスが到着してクラスメイトが降りて来たのだが。

「あー、その………悪かったな爆豪」

「てめえいつかぶっ飛ばす……」

まるで鎖で繋がれた猛犬……いや、狂犬だ。相澤の拘束マフラーに巻かれた爆豪を見て、ちよつと悪いことしたなと思った。

手を焼かせるなど念押しされて爆豪が解放され、僕らは訓練所に入った。

出迎えてくれたのは、スペースヒーロー13号だ。

『スペースヒーロー13号』ツ！ 主に災害救助で活躍している紳士的なヒーローだよ！」

「わー！！ わたし好きなの13号！」

「では、早速中に入りましょう。でもその前に………」

13号は振り向いて後ろの木陰の方を見る。

「貴方も隠れてないで、自己紹介してください」

「えっ、もう一人いんの？」

「ケロツ、でも教師はオールマイト先生を含めて三人のはずよ？」

パカラツ　パカラツ

「馬だ！ ジョースターと被ってる」

「なあなあ、あいつ知り合いか？」

峰田に問われるが、ぼくは返答できずにいた。

出てきた男は馬に乗ったまま、自己紹介を始めた。

「オレは『ボール・ブレイカー』だ。今日は急遽、お前さんらの世話をすることになった。よろしくな」

「『よろしくおねがいます！』」

「では、早速中を案内しましょう。着いてきてください」

みんなが13号に着いて行き、残されたのは僕とそいつだけになった。

「……………何やってんだ『ジャイロ』」

ジャイロは無言のまま、目を合わせようとしない。だが、これで納得がいった。昨夜の豪華な飯はこういうことだったのだ。



「ジョースター君には、『ボール・ブレイカー』から今回の演習に向けての注意事項は伝えられたかな？」

「はい。ぼくらの個性は人を傷つけるためにあるのではなく助けるためにある、ということですよ」

「はい、その通りです。ちゃんと伝わって安心しました」

13号の表情が……表面上は特に変化はないが……嬉しそうになった。

「よおーし、そんじゃまず………ツ!!!」

相澤……抹消ヒーロー『イレイザー・ヘッド』は体全体でその気配を感じ取った。普通に生活していたらまず身につかない感覚。ヴィランと戦うヒーローだからこそ、その出現をいち早く察知した。

訓練場の電気が消え、大階段下にある噴水を中心に黒いもやが広がる。もやは濃さを増してどんどん広がり、その中心から人間が一人現れた。

「全員ひとかたまりになって動くな！ 13号、ボール・ブレイカー、生徒を守れ！」  
事態についていけない生徒たちがどよめく。

身体中に手のオブジェをくつつけたそれに追従して、広場を覆い尽くすほど広がった黒いもやから、一人、また一人と数えきれないほど現れる。

「なんだあれ？ 入試の時みたいなの、もう始まってんぞパターン？」  
「動くなっ！」

イレイザー・ヘッドの声には、呑気していた切島も驚いた。

「あれは……………『ヴィランだ』」

## ヴィラン襲撃 その①

一年A組のレスキュー訓練に現れたのは、ヴィランの大群だった。

その中の黒い霧状の男、黒霧はうろたえる生徒たちを見て無い眉をひそめた。

「おかしいですね……先日いただいた教師側のカリキュラムでは、オールマイトがここにいるはずなのですが」

「やっぱり先日のはクソ共の仕業だったか……」

嫌悪感を隠すことなくイレイザー・ヘッドは吐き捨てた。その手が首元の拘束マフラーにかかる。

「どこだよ……これだけ大衆引き連れて来たつてのに。平和の象徴オールマイト……ああ、子供を殺せば来るのかなあ」

まるでケツにツララを突っ込まれた気分がした。他のみんなもそうなのだろうか。

いや、そうに違いない。さつきから手が震えている。緊張がスローダンサーにも伝わっていく。

『ヴィラン』……？ バカだろツ、ヒーローの学校に入ってくるとかアホすぎるぞ！』

切島が緊張を拭うように言うのと頭の回る八百万が警報装置の有無はと13号に問う。

「奴らが現れたのがここだけか学校全体か、どちらにしるそうということができるのがあるってことだろうぜ、そしてここまでの用意周到さ……バカだが阿保じゃねえ」

轟の冷静な言葉で相手は狡猾な相手だと切島は認識を修正した。

「13号、ボール・ブレイカー。すぐに避難を開始、学校に電話で連絡できるか試せ。センサー対策をしてるやつらだ、電波系の個性を持ったヴィランが妨害してるかもしれない。上鳴、お前も個性で連絡を試せ」

危機的な現状を把握したイレイザー・ベッドが、戦闘ゴーグルを付けながら淡々と指示を出した。

「あつ、ウス!!」

「先生は!!? まさか一人で戦うつもりですか!!? イレイザー・ヘッドの戦闘スタイルは  
一対一の対人戦……あれだけの数だとツ」

焦る緑谷に、戦闘準備を完了させたイレイザー・ヘッドが振り返らず答えた。

「一芸だけじゃヒーローは務まらないツ」

そう言い残してイレイザー・ヘッドはヴィランの大群に突っ込んでいった。何人かがそのあとを追おうとするが、一歩踏み出すこともできず恐怖に立ち尽くしていた。

「よおーし、全員避難だ！ ほら、おめえさんもボケつとするなッ！」

ガツンと頭を殴られて喝を入れられたジョニイはようやく動き出すことができた。すでに入り口へ走り出しているクラスメイトの後ろ姿を見て、僕も急がねばと手綱を持つ手に力を込めた。

「おれたちは馬だから移動が早い！ すぐにこのことを学校側に伝えんぞー！」

「ああ、わかってる！」

馬の脚ならすぐに入り口まで行ける。イレイザー・ヘッドの時間稼ぎも長くはもたない。すぐに他の教師を呼ばなくては。

スローダンサーがクラスメイトに追いつきそうになる。だがいまは気にしてられない。スローダンサーのスピードを上げた。

「そうはさせません」

前方の地面から黒い霧が噴出した。馬が驚いて急に止まるもジョニイはなんとか耐える。立ち塞がったのは黒霧だった。

「はじめましてみなさん。本日雄英高校に入らせていただいたのは、平和の象徴オール

マイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです……ム!?」  
ガオオン!!

黒霧が言い切る前に鉄球が投擲された。ジャイロが投げた鉄球は霧状の身体を通り抜けてすつ飛んでいった。

「やっぱきかねえのか。丁寧な言葉遣いで、紳士ぶつてカッコつけてんじゃねーぞこの悪党が!」

「貴方もカリキュラムにありませんでしたね……やはり変更があつたようですが、それとは関係なく私の役目は……」

黒い霧状の身体が広がっていく。僕の個性で戦えるのか? 考えている暇はなかつた。両手の爪弾を回転させて構える。

13号がブラックホールを使おうとした。だがその時、爆豪と切島が先行して飛び出した。爆豪の手が爆発をおこし切島は硬化した手刀で突貫する。

爆煙が広がったが覆い尽くそうとしていた霧は消えていた。あつけない最後じゃねーか。爆豪と切島はまだ暴れ足りないようだった。

「その前に俺たちにやられることは考えなかつたのか!!」

だがジョニーは爪弾の回転を止めていなかった。まだ来る確信があった。瞳が黒く燃える。その爪弾の回転が警戒のものではないことをジャイロは気がついた。

「待てジョニー！ 爪弾は撃つな！」

ジャイロが叫んだのは爆煙の隙間に黒い霧の端が見えた瞬間だった。

ドバババババババツ！！

一切の躊躇をせずに煙の中へ爪弾を連続して撃ちまくった。その目はいつかのとき以上に、黒く燃えていた。

「ぐおおおああああ!!」

「手応えありだ」

ヴィランの悲鳴が響く。

どうして当たったのか、それはわからなかった。だがジョニーにとってそれはどうでもよかった。ヴィランを『殺す』ことができたのなら。

その時、13号とジャイロを含んだ全員がジョニーの躊躇のない攻撃を見ていた。ある者は絶句し、またある者は止めようと駆け出す直前で止まっていた。

「ジヨニイ……お前………ッ」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ

「その前に俺たちにやられ………えッ!!」

爆撃したヴィランの方へ構えたまま、切島と爆豪は固まった。

「何が起こったんだ、俺はさつき…」

混乱する切島と爆豪の後ろで、ジヨニイもまた射撃態勢のまま動いていなかった。

「何が起こったんだ………！ 僕は確かに爪弾であいつを仕留めた、手応えはあった！」

だが、その言葉を否定するようにヴィランは煙を払って現れた。どこも怪我すらしていない状態だった。

「どういふことだよ！ いまあいつ「ぐわー！」って言ってたよな!？」

「わからない。ひよつとしたら演技だったのかも……」

峰田が狼狽るも、緑谷は現状を必死に理解しようと考える。やっぱりあの霧状の身体には物理攻撃が効かなくて、さっきのは僕らを騙すために？ でもどうして騙す必要があるのか。

「いやあ……本当に危なかった。貴方が居てくれて助かりましたよ」

そう言うやいなや、黒霧は再度自身の身体を広げてA組を全員包み込んだ。

黒い奔流にみなぎ動きを止める中、飯田天哉は個性のエンジンで瞬間的に加速し近くにいた麗日うららかにと砂糖さとうを抱えて霧から飛び出した。

「みんなあああああ！」

黒い霧が晴れる。残っていたのは飯田、麗日、砂糖、障子、13号、そしてジヨニイ

とジャイロの7名だけだった。

「障子君、他のみんなはどうだ。無事か？」

すぐさま障子は複製腕で目と耳を作り、訓練場内の状況を把握する。

「みんな離れ離れになってるが、無事だ」

障子の言葉に残された全員が安堵の息をつく。だがすぐに身構えた。目の前には黒

霧が出口を塞ぐように立ち塞がっていた。

「物理攻撃無効でワープの個性とか……無敵だろ！」

「いいや、物理攻撃は効いた！」

砂糖の言葉に被せるように、ジョニーが否定する。

「僕の爪弾は確実にやつに命中した、そして倒したんだそれは間違いないんだ！」

「それじゃあなんでピンピンしてんだよ。当たってるなら少しはへばっててもいいん

じゃねーのか？」

「それは……」

今度は何も言い返せなかった。ジョニーも目の前の黒霧を見てダメージがあるようには見えなかったからだ。

自分の言葉に自信が持てなくなってきた。ひよつとしたら気のせいだったのでは。不安感を抱いていたところへジョニーは肩に重みを感じた。

「いいやお前さんは間違っつてねえ」

「ジャイロ、じゃあなんであいつは」

「やはり……………来てよかつた…」

黒霧から男が一人現れる。また新手のヴィランかと緊張が走った。

だがその男はそんなことはお構いなしに、口を動かし続けた。

「そのの、馬に乗っている左の彼だけだが……………まあいいだろう。俺が時を戻したからだ。

黒霧が攻撃された瞬間、俺が時間を6秒『だけ』戻した」

「時間を……………」

「戻したって……………そんなのハツタリに決まってる！ 第一だ、自分の個性を僕らにに教えてなんのつもりだ！」

理解の及ばないことに飯田が焦るも、『マンダム』は静かに言葉を紡いでいく。

「このオレを『殺し』にかかってほしいからだ。公正なる「果し合い」は自分自身を人間的に生長させてくれる。卑劣さはどこにもなく……………漆黒なる意志による殺人は、人として未熟なオレを聖なる領域へと高めてくれる」

マンダムは全くふざける様子もなく、それどころか穏やかに語っていた。

「乗り越えなくてはならないものがある。『神聖さ』は『修行』だ。だから君たちに全てを隠さずに話している……個性にも目的にもオレにはウソはない」

今度こそ、マンダムは敵意を剥き出しにして向かい合った。

「よろしくお願い申し上げます。どうする？ 決めるのは君たちだ……」

正直どうかしているのと同じか思えなかった。これまで出会った人間の中で一番頭がイカれているやつだと思った。

そう思っているのを読んだように、マンダムはジョニイの方へ視線を向ける。

「これが「男の世界」……反社会的と言いたいのか？ 今の時代……価値観が「甘ったれた方向」へ変わってきてはいるようだが……」

「みなさん耳を貸さないでください！ 所詮はヴィランの言うこと……まともに聞いても理解できようもない戯言です！」

「その通りだ。センセイの言う通り悪党の言うことにいちいち耳を貸していたら出来るもんも出来なくなっちゃう。ああ、例えば……」

ドギヤアアアアアア!!



マンダムは身体をずらして後ろからくる鉄球を回避した。外れた鉄球は、ジャイロの手の中へ戻っていった。馬で駆け出していったジヨニイも自分のすぐ隣にいた。

「なんだってこれは!?!」

『『6秒』だ………「6秒」だけ時を戻せる……『公正』にだ……すでに公正フェアにそれは話した。この腕時計の「秒針」をつまみそれだけ戻す。それで個性のスイッチが入る」

もはや言葉は不要だった。この場の全員が理解していた。マンダムというヴィランは時を戻せる。それを『実体験』として理解していた。

「たとえ突破されようと、『6秒も』あればこの男黒霧が追いつける。何度でも聞くぞ、どうする?」

オレを殺さなくてはここからは絶対に出て行けないッ!」

## ヴィラン襲撃 その②

「殺すですって……そんなことを僕らがさせると思ってるのかッ！ ブラックホオオール!!」

13号がもう一度ブラックホールで黒霧の動きを止めようとする。マンダムもたまたまず踏ん張って吸引に耐えようとするが、相手は星をも飲み込む力だ。マンダムの足が地面から離れそうになる。

「させません!」

初見ならまだしも二度目のブラックホールを相手に、黒霧はすでに攻略法を見つけていた。

「その引力は凄まじい…防御する方法なんて思いつきませんでした。ですがこれならどうですか!」

黒霧の個性はワープではない。ワープゲートを任意の場所に出現させることができる個性だ。そのうちの入り口を13号のブラックホールの目の前にして、出口を13号の後ろにすればどうなるか。

「まっ……まさか……こんなことが」

「先生——!!!」

「13号——!!!」

生徒たちの悲鳴が響いた。13号の背中がバリバリに裂けて後ろのワープゲートに吸い込まれていった。即座にブラックホールを止めるが損傷は激しいものだった。

「私の方も、手を出させていただけでも良かったのですよね?」

「是非もない。だが、彼だけはオレと「果し合い」をしてみよう」

「結構です。貴方の邪魔はしませんよ」

「おいッ!!」

黒霧とマンダムの二人に、ジャイロが待ったをかけた。

「さつきから聞いてるとよおー。ジョニーに随分とご執着してるようだが、オレもいるってことを忘れてんじゃねえのか? そんなに殺されたいならオレが望みを叶えてやるよ」

「やめろ、君はあくまで『対応者』だ。左の彼にはいぎと言う時オレを殺しにかかる『漆黒の意志』がある。

君はオレが攻撃をしたらそれに『対応』しようとしている。さつきのボール、才能では優れたものがあるのかもしれないが……受け身の『対応者』はここでは必要なし」

「へえ、そうかい………」

ゆつくりとジャイロは腰のガンベルトについた鉄球のホルスターの留め具を外す。だがマンダムはジャイロを見てもしいなかった。

カメラがピントを合わせるようにその目でジョニーだけ捉えていた。

だらりと下げた右手の爪弾を回転させる。回転する静かな音が耳の奥で反響している。相手もゆつくりと腰の拳銃に手をかざした。

誰も声ひとつ発せない緊迫した空気変わった瞬間だった。

ドバアアアアアアアアアア!!

片手の指から一斉に撃った爪弾は、3発がはるか後ろへ消えていき、1発が右肩を掠めて、残り2発は右腕を貫通していった。

ガアン！ガアン！ガアン！

ほぼ同時に銃声が鳴った。マンダムが持つ自動拳銃が火を噴いた。弾丸は正確にジョニーの身体を撃ち抜いた。血を噴き出して地面に崩れ落ちた。

「……ばっ……ばかなっ!!……」



「ぐっ……」

「やはり……おまえは……ジャイロ・ツエペリといったか……おまえは『対応者』にすぎないツ！それを放ったのは射程の外だ……？ 生徒を失ったからその「鉄球」を放りやがって……」

銃口をジャイロに向けながら、マンダムは心底軽蔑するような目で見下ろす。

「汚らわしいぞツ！ そんなのではオレを殺す事は出来ないツ！」

「だろうな……かわすと思ったぜ……本当なら命中するのが、一番だった……。だがこれでいい！ もう『6秒経った』!!」

ジャイロの目は覚悟に満ちていた。そして笑っていた。血を吐きながらも、してやったりと笑っていた。

「何を言っている……」

「わからないか？ もうオレの攻撃は……完了してるんだぜ……攻撃といえるかは、微妙だけどな」

「何を……」

言い切るより先にエンジン音がマンダムの言葉を途切れさせた。まさかと生徒がい

た場所に振り向くと、一人欠けていた。誰かはすぐにわかった。

飯田天哉が走っていた。出口に向かって個性のエンジンで走り出していた。一心不乱に逃げ出している飯田の姿を見たマンダムは、驚くことはなくあくまで冷静だった。

「無駄なことだ……施設の扉を開けるまでに何秒かかる。黒霧も追いかけている。この時間をマンダムで……あれはッ」

扉が破壊されていた。人が通れるほどの穴が空いていた。顔を歪ませるマンダムの後ろで、ジャイロはやはり笑っている。

「よくやく気づいたかよ……もう遅いぜ。言ったはずだ……「すでに6秒経った」つてよ。見えてきたぜ……勝利の感覚が見えてきた！」

グイン

ドオオオオオオーン

「……………戻ったッ!!?」

飯田は時が戻ったことを認識した瞬間に走り出した。扉はすでに破壊されていた。扉が破壊されてから6秒以上経過した時点で、それは変わりようのない事実となっている。

そしてあのヴィランは言っていた。時をもう一度戻すまでに6秒以上の感覚をあけなくてはならないと。

6秒以内に施設の外へ行く事は、自分の個性なら可能だった。

「無駄ですよ!!」

後ろからあの黒霧というヴィランの声がした。上から覆いかぶさろうとしているのだろうか。確認する余裕はなかった。みんなを守るために、今はこの場から逃げ出さなといいけない。

「ヌウ…これは…………」

飯田に追いつきそうだった黒霧は、その実体部分を麗日の個性で無重力にされて放り投げられたことで届くことはなかった。

声がどんどん遠ざかっていく。きつとみんなが足止めしてくれたんだ。もう自分を追ってくる者は居なかった。

それでもマンダムというヴィランの個性で時が戻されたら、この行動も無意味になる。今は何秒経過した？ 戻されたら今度は絶対に逃さないように対策される。

違う!! 信じるんだ!!!

自分にいまでできる事は走ること。後ろに気を取られるな。もしもを考えるな。前に進むことを考えろ。

すでに破壊された扉は目の前だった。そしてここを超えたとしても安心するな。時を戻されたらまた施設内かもしれない。

だから走れ。

とにかく走れ。

走ってこのことを伝えなくては!!

飯田は青空の下でただ走り続けた。仲間を助けるために。助けを呼ぶために。

飯田天哉が扉の先に出てもうすぐ6秒経つ。マンダムは悠然と右手の腕時計のつま

みに手を伸ばしていた。

だが、そんなことは決してさせねえ

オレの鉄球は確かにこの男にかわされて、そして扉を破壊した。だが、まだオレの攻撃は終わっちゃいねえ

投げた鉄球の回転は止まってない。そして戻ってきた鉄球はすぐ近くの茂みにあった。完全にマンダムの死角だ。人体を破壊することは出来なくても、攻撃するくらいの回転はまだ残っていた。

グンツ!!

マンダムはつまみに伸ばしていた左手を引っ込めて、茂みから離れるように跳んだ。

ギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルギヤル

「ぐツ……」

マンダムが鉄球と同じ方向へ跳んだことで、威力が少し殺された。今度こそ回転のパワーを失った鉄球は、地面に転がって止まる。

対してマンダムは左手でガードしたお陰で身体に直接のダメージはほとんどなかった

た。耳から出血はしているものの、腕はぎこちなく動かそうだった。

「衝撃を逃したな……だが、今の攻撃はてめーを倒すためにやったんじゃない。もちろん時間を戻させない為でもない……公正フェアに言つてやるぜ」

飯田がこのことを知らせてくれれば、オールマイトや他の教師も来るだろう。

立ち上がつてマンダムの目をまっすぐ捉える。

「オレの個性は『スキャン』。能力は物体に搭載した「眼」で、物体が当たったものを透過して見ることが出来る。それでいまお前の体内を調べた」

オレにできることは、この厄介な男を始末することだ。

ゆっくりと近づいていく。

「鉄球のスキャンはいま、おまえさんの左鎖骨の位置に『古傷』があるのを見つけた。俺の次の投球はそこをねらう！ その古傷への攻撃はおまえさんの左半身を確実に麻痺させるだろう。右手首の腕時計のつまみなんてその指で動かせねえぜ」

こいつの個性は時を戻す。他にも脅威はまだ残っている。だがマンダム……ここから先はお前も俺も後には引けなくなる。いわば詰め将棋に追い込まれる。

『左腕』はおろか『左脚』……左まぶた瞼さえも落ちる……しゃべる事もできない。やろうと思つても『6秒』なんてやり直しはもうきかねえんだ！ そしてその麻痺は同時にお前

の左胸にある『心臓』をも停止させる」

『一手』ミスった方が負ける…オレやお前がどう決定しようともない！ どうあがこうともだッ！

マンダムとの距離は目と鼻の先どころか、一歩分ほどしかなかった。

「この距離ならよオオオー…：もうお互い絶対にはずしっこねえぜ。てめえのちいせえ銃でも確実に撃ち抜けるだろう。どうする？ もう後には引けなくなつたな。お前やオレがどう決めようとな」

マンダムの瞳に写つた自分の顔は、今まで見たこともない顔だった。鉄球に伸ばした手が震えた。マンダムも腰元の拳銃へ手を伸ばしていた。

砕けた入り口から風が吹き、草木が舞い上がった。

バツ！

バツ！

ドゴオオオオオオオ

ほぼ同時だった。

ジャイロの投げた鉄球は予告通りマンダムの左鎖骨を砕いた。  
マンダムの自動拳銃から放った弾丸はジャイロの喉元を貫いた。  
ジャイロは血を吹いて倒れ伏した。

ビタアアアア

こ……こいつ!!? 「心臓」が…「左腕」がツ……

マンダムも心臓が止まって倒れる。

「ガフツうぶつ」「左腕」……………うぐつ!!」

2秒たった

3秒……………4秒……………5秒

「うおおううううッ」

マンダムは右手に持った自動拳銃を回転させて銃口を腕時計のつまみに向けた。

ガアアアアン

つまみが回った。

ドオオオオーン

ジャイロとマンダムが睨み合う。互いに手元の武器に手を伸ばしたまま立っていた。

「やはりよオオオ 戻したな……………」 「6秒」……………で……………どうする? 「再び」か?

再びかアアアアアッ!!」

「おもしろいぞボール・ブレイカー、いやジャイロ・ツエペリ。少しいい「眼光」になっ

た!!? だが所詮まだおまえは「対応者」に過ぎない!」  
「決めるのはおまえじゃあねえーっツ お互い後には引けねえツ!!」

また風が吹いた。

バシユウウウウウ

再びジャイロが鉄球を投げ、マンダムが銃を撃った。

だが、今度はマンダムは左鎖骨にくる鉄球を左手でガードした。鉄球は鎖骨に当たらずに左手を破壊して威力を失った。

銃弾はジャイロの胸元を貫き、ジャイロは地面に倒れる。立っているのはマンダム。さつきと同じ構図だったが、マンダムの心臓は動いていた。とどめを刺すためにジャイロの頭へ銃口を向けた。

「2発目だッ! これで勝利ッ!!」

だが、銃は撃たれなかった。

「ガブウウツ!!」

マンダムが大量の血を吹いた。まさかと視線を移せば、左鎖骨をガードした左腕に深々と何かが突き刺さっていた。

木の枝……こ、これは……

左鎖骨に突き刺さった木の枝で、心臓が停止することはなかったものの左腕と左脚の動きが止まる。

倒れるマンダムとは逆に、壁伝いにジャイロはゆつくりと立ち上がった。

「左腕」で……マンダム……その左腕で鎖骨を防御したな……オレを『次の2発目』でとどめを刺そうと……その防御の為の動きのせい……「急所」には命中せずわずかにそれで肩に命中した! 決着は……次の『弾丸』の為に……

『木の枝』……空中に舞い上がっていた「木の小枝」を「最初の6秒」前の時に覚えていてそれを「鉄球」で打ち込んで来たのか……」

腕時計はすでに、6秒を超えていた。

「見事だ……ジャイロ・ツエペリ。「一手」オレはしくじったってわけか……」

「腕で防御しなければ正確に間違はなくオレの急所を貫いていたろう……あんななら」

「それじゃあまた相討ちになってしまふ。また「6秒」戻して繰り返し返して永遠に決着はつかないな。もっともその「6秒」は、すでに過ぎてしまったようだが」

マンダムはすでに瀕死だった。だが、その眼から光は失われていなかった。唯一動く右手が、取り落とした拳銃に伸びる。

「やめろよ。妙なことはやめろ……あんに次に次の2発目はもうない。その銃を床に置くんだ。既にオレは納得した。もうあんなを仕とめる意味はない！」

「だから対応者だと言うのだ！「光の道」を見ろ……進むべき「輝ける道」を……」  
マンダムの眼は、すでにジャイロを見下していた時のものではなかった。

『『社会的な価値観』がある。そして『男の価値』がある。昔は一致していたが、その2つは現代では必ずしも一致はしてない。男と社会はかなりズレた価値観になっている……だが「真の勝利への道」には『男の価値』が必要だ……おまえにもそれがもう見える筈だ』

拳銃を持った手をそつと身に寄せた。

「この先の人生を進んでそれを確認しろ……「光り輝く道」を……オレはそれを祈っているぞ。そして感謝する」

銃を構えた瞬間、ジャイロの鉄球が炸裂した。

銃弾は地面に命中した。

「ようこそ……『男の世界へ』……」

マンダムが倒れ、ジャイロは至るところから出血しながら立っていた。

ゆつくりとマンダムの亡骸を見て、そしてジョニイのそばで屈んだ。

シルシルシルシルシルシル

鉄球をジョニイの体に当ててスキャンしたジャイロは、ほつと息をついた。

「やはり……あの距離と防弾性コスチュームに救われてたな……銃弾は頭蓋骨で止まってる……脈はまだあるようだな……ジョニイ、どうやらお互いな」

リンゴオ・ロードアゲイン  
ヴィラン名『マンダム』  
死亡

ジョニー・ジョースター  
頭蓋骨損傷など重症だが、  
治癒は可能  
再起可能

ジャイロ・ツエペリ  
同じく重症だが、再起可能

## 体育祭の巻 ①

ジャイロとマンダムが戦いを繰り広げていた時、イレイザー・ヘッドこと相澤は広場で次々とヴィランを倒していつていた。

さつきから奇妙な現象が起こっている。これは何者かの個性か。深く考える余裕はなかった。ゴーグルで目線を隠して、マフラーでヴィランを投げ飛ばし続ける。

緑谷の言う通り、戦闘スタイルは本来は対一。長時間の戦闘で身体に疲労が溜まりつつあった。

「来たか!!」

最初に現れた手だらけの男が迫ってくる。だがその動きは単調だ。個性を消して肉弾戦に持ち込み一気に倒す。頭がやられれば土気も下がるだろう。

急接近して右肘が狙った胸への一撃は、相手に掴み取られた。

「やっぱり……動き回ってて分かりにくいけど、髪が下りる瞬間がある………そしてその間隔はだんだん短くなっている!」

観察されていた。この男はオレが個性を消している時間を計っていた。不味いと思つた時には遅かつた。個性の持続時間が切れてしまった。瞬間、掴まれた肘がポロポロに崩れた。

「くそっ！」

蹴飛ばして距離をとる。呆気なく飛ばされたヴィランは蹴られた腹をさすつてよろよろと立ち上がる。

咄嗟の判断で離れたのは正解だった。崩壊したのは皮膚だけで済んだ。手を握つて広げて、痛みがあるものの動いたことに安心する。

強力な個性だが触られなければ問題は無い。マフラーで拘束してもあの個性じゃ無駄だろう。なら重い一撃で一気に倒す。

周囲の雑魚どもは倒した。あとはこいつときつきから棒立ちの異形型のやつ、そして13号たちが戦っている黒いやつだ。

「流石はヒーローだあ……かつこいいなあ……かつこいいなあ……でも残念だ。本命はオレじゃない。やれ、脳無」

バゴオオオオオオオ

「がぐああああ!!」

意識が飛びそうになった。ダンプカーか何かで吹っ飛ばされたような衝撃とともに視界が回った。畳み掛けるように身体に至る所から壊れる音がした。

痛みで意識を失いそうになると、別の痛みが無理矢理に叩き起こされた。拷問のような痛みの連続が終わったと思ったら、ようやく地面に叩きつけられている事を自覚した。

ならばすぐ後ろだ。個性を消してこの超パワーから逃れようと個性を発動してすぐ後ろを見た。黒い脳みそ剥き出しのヤツがいた。

バキリ

「ぐうおああああ!!!」

まるで小枝でも折るかのように左手がへし折られた。個性を消しているのに一切落ちないということは、純粹なこいつの力ということだ。

オールマイト並みじゃねえか！

このままだと自分どころか生徒たちも危ない。そう思った矢先、霞んだ視界が少し離れた湖の岸近くに三人の生徒がいるのを見つけた。

あいつら……何やってんだ……!!

圧倒的に不味い状況だ。どうやって切り抜ければい「死柄木弔……」更に黒い霧のヴィランが現れた。まさかと最悪の想像をした。

「黒霧……13号とあと1人は始末したのか？」

「行動不能にはしましたが、代わりに『マンダム』がやられたのとその……生徒を1人取り逃しました」

「はあ……？ 黒霧イ……お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしてたよッ！」

1人逃げた。抑え付けられて視界は効かないが、これでしばらくすれば応援が来ることが確定した。だが、もう意識を保っていられない。

「あのクソジジイ……オレにお高い態度を取ってたくせにやられるとかマジでザマアだよ……ダメだ。ゲームオーバーだ……帰ろう」

ダメだ。意識を失うな。生徒を守り切ることが教師の務めだ。13号もボールブレイカーも務めを果たしたに違いない。だったらオレがここでその務めを放棄するわけにはいかないだろう。

「ああ……そうだ、帰る前に平和の象徴としての「矜持」を………へし折って帰ろう!!」  
男の手が湖にいた三人に伸びた。もはや目を開けるだけで目の奥が痛む。だがそんなこと知るか!

男が影になっててよく見えない。だが、最悪の事態は避けることが出来ただろう。  
「ほんと……かつこいいなあ………脳無!」

オレの意識は、ここで途切れた。

目が覚めると、僕は点滴に繋がれていた。ポタポタと水滴が落ちる様子が見える。ここで僕はぼんやりと、自分が助かったのだと理解した。ダメ元で足を動かそうとしても感覚すら無かった。そんな劇的に治るはずはないか。

「よお………目が覚めたかよ」

随分と聞き慣れた間の抜けた声だ。声の方を向くと、同じく点滴に繋がれたジャイロがベッドに腰かけてこちらを見ていた。ジャイロも無事だったことに、僕はひどく安心していた。

「おい、頭は大丈夫そうか？ 小口径つつつても頭に弾丸を食らったんだからな」

言われて思い出した。僕の意識は頭に衝撃が走った瞬間に無くなった。弾丸で撃たれたと聞いて、自由に動かせる右手を額に添えた。

「心配すんな、リカバリーガールがキレイさっぱり治してくれたぜ。それよりよジョニイ……今よオ……オレ、ギャグ考えたぜ。オリジナルギャグだ。考えたんだ。でもいいか……一度しかやらねーからな。よく見てろ」

ジャイロはそう言つて指を4本立ててみせた。

「一度つきりだ……指見てろよ 今何本に見える？」

「……………4本」

するとジャイロは突然真面目右上を向いて、指を立てた手を顔の横に持つてきた。

「そこちよつと失<sup>し・トウ・れい</sup>礼<sup>れい</sup> イイイイイ~~~~」

……………

「フーギャグ…どよ？」

「んんんんん!!? …なかなかオモシロかった。かなり大爆笑！」

「だろ？ あとでもつとジワつと来んだよ、気に入ったからつてパクんなよ」

ジャイロの知られざるセンスを目の当たりにしていた時、病室の扉が開けられた。中に入ってきたのはネズミみたいな熊みたいな謎の生物だった。いや、僕は知っているぞ。こいつは校長だ。

「ネズミちゃん、そこちよつと失<sup>し・トウ・れい</sup>礼<sup>れい</sup>イイイイ」

「元氣そうだねジャイロ・ツエペリ君。くだらないギャグをするほどには回復してるようだ」

「ケツ、おたくにはわかんねーだろうさ…このギャグの面白さがな」

悪いがジャイロ、僕にもわからない。

「それは置いといて、まずは君たちが無事で良かった。そして謝罪させてほしい。今回の事件は我々の管理不行届が原因で起こったものだ……本当に申し訳なかった」

「そんな……」

しょうがないことだった。それを聞いた校長は、下げた頭を上げることなく続けた。

「一歩間違えれば犠牲者が出ていたかもしれない。今回は本当に幸運だった」

よかった。みんな無事だったのか。ほっと安心して胸を撫で下ろすと、校長がじつとジャイロを見た。

「まだ話してなかったのかい？」

「い、いやあ……なんつーか。まずは安心させてからがいいと思って……もちろん話すつもりだけだよおお」

その様子に校長がため息をついた。

「いいさー！ 僕が話してあげよう！」

校長が意気揚々と語ってくれたのは、ヴィランが襲撃してきた際に起こった出来事だった。僕が意識を失ってから、ジャイロはあのヴィランを殺し、相澤先生も瀕死の重傷を負ったらしい。

だが、その後オールマイトが駆けつけてヴィランを撃退したという。正直、ちよつと見たかったと思った。なんでも『シヨック吸収』の個性と『超再生』の個性を持ったヴィランを、超パワーで上からねじ伏せたらしい。

「とんでもないな……No. 1ヒーローは」

「さて、ここからが本題だよ！」

「ヴィランを撃退して、みんな怪我したけど無事だった。これで終わりじゃないんですか？」

僕の想像より、物事は単純じゃなかったそうだ。

まずジャイロは僕のこちらでの保護者であり、教師だった。更に期間は短い、ヒーローとして登録もしていた。

それが今回、ヴィランといえ「殺し」をしてしまった。それが不味かった。

記者会見において、学園側は正当防衛であつたと主張したが、それを否定する声が出た。

「それが彼だったのさ。ジャイロ君が記者会見で自ら認めちゃつたのさ。あれは正当防衛なんかじゃ無かつたってね」

「おかしいか？ オレはヒーロー、やつはヴィランだ。生かしておくのが間違いなんだよ」

「……………お陰で彼は教員免許を剥奪。なんとかそれだけで抑えることが出来た」

自ら正当防衛を否定したジャイロ。今言つた理由は、僕にはなぜか飲み込めなかつ

た。でも、今は何も言わない方がいいのかもかもしれない。あの男との戦いで何かあったの  
だろう。僕には想像もできない何かが。

リカバリーガールのおかげで、すぐに僕とジャイロは退院することが出来た。

ただでさえ少なかつた依頼が来なくなることにに関してジャイロは「やつと静かになる  
なあ」なんて言っていた。

だがネットで微かに、身を挺してヴィランから生徒を守ったヒーローと言われている  
ことを伝えたら、サインの練習がどうこうなんて言い出して、僕は心配するのが馬鹿ら  
しくなった。

急遽設けられた休日が終わりに、僕は一年A組の教室に戻ってきた。ちよつと見慣れて  
きた巨大な扉を開けたら、もう来ていたクラスメイトたちの何人かが一斉にこちらを向  
いた。そして、気まずそうに目を逸らした。

予想してたとはいえ、実際にやられるとキツイな

僕はあのおとき、時が戻って無効になったとはいえヴィランを殺した。そんな相手に、  
前と同じように接するというのは無理があった。

車椅子で自分の席まで行くが、無言の空間が広がっていた。

「そ、そういえば梅雨ちゃん！ 今日のホームルームだれが来るんだろ？」

「ケロツ、たしかに気になるわね……相澤先生は怪我で入院中だろうから……」

芦戸が絞り出すように言った。気を遣うてのことだろうが、僕には不要だった。

教室の扉が開けられた。包帯だらけの男が入ってきた。いや、僕はこの男を知っている。このクラス全員が知っている。包帯を顔にまで巻いた相澤先生が入ってきたことで沈んでた空気など吹っ飛んだ。

「相澤先生!? もう怪我はいいのですか!」

飯田がいつもの調子で言った。ほんとに堅物だな。

「良くないが、そんなことよりだ。まだ戦いは終わってねえ

雄英体育祭が迫っている」

「クソ学校つばいのきたああああ!!!」

「まって!」

「ヴィランに襲撃されたばっかなのに、体育祭なんてやっていいんですか?」

耳郎の言う通りだ。ヴィランに襲撃されて被害が出たんだ。イベントの一つや二つを中止にしてもいいだろう。だが、他のイベントだったらの話だ。

「逆だ。例年通り行うことで、雄英の警備体制は盤石だと知らしめる目的らしい。なにより、雄英体育祭はビッグチャンスだ。ヴィラン如きで中止にするわけにはいかねえ」  
雄英体育祭は過去に行われていたオリンピックピックと同レベルのイベントだ。個性を持った人間の出現で、それまでのオリンピックピックは縮小し形骸化した。その代わりとして雄英体育祭がビッグイベントの一つになったのだ。

更に雄英体育祭にはプロのヒーローもやってくる。活躍を魅せれば将来に直接繋がってくるだろう。

「ホームルームは以上だ」

昼休憩になり、A組のクラスは体育祭の話題で持ちきりになった。意気揚々とする者、自信を曝け出す者、緊張に身を固める者など色々いる中で、ジョニイの頭にあったのはこの休日の出来事だった。

「なあジャイロ……僕の爪弾ではあの男に勝てなかった。これからもつとあんなヴィランと相手をしないとイケないのだろうか……」

いつもの事務所で、ジョニイはふと弱音を吐いた。自分でもらしくないと思った。やっぱり今のなしと取り消そうとする前に、ジャイロのいつもとは違う真面目な声に止められた。

「そうだろうな……身も凍るほどによ……だがジョニイ、お前が自分の爪弾の回転に疑問を持ったらいけねえ。Lesson3だ……『回転を信じろ』……お前が自分の回転を信じねえでだれが信じるんだ？」

新しいLessonを知ることが出来た。でも、ジョニイの心は晴れなかった。それは学校に通い始め、体育祭が近づいていることを知っても変わらなかった。

今日の授業の終了を告げるチャイムが鳴った。結局この日は一度も誰とも話すことなく終わった。

はずだった。

「なんだよこの人混み！」

「君たち！ A組に何か用か？」

「出られねえじゃねーか！ 何しにきたんだよ！」

教室の入り口に人の壁ができていた。

「敵情視察だろ。ヴィランの襲撃を耐え抜いた連中だもんな、体育祭の前に見ときえんだろ。そんなことしても意味ねえから、どけモブ共…ッ！」

「知らない人のこととりあえずモブっていうのやめなよ！」

爆豪がまた挑発的な態度をとっていた。呆気にとられる野次馬の中から、濃い隈の男が人混みを掻き分けて前に出てきた。

「噂のA組……どんなもんかと思ってきたが、ずいぶん偉そうだな。ヒーロー科に在籍するのはみんなこんななのかい？　こういうの見ちゃうと、幻滅するな………」

「普通科の人間ってさ、ヒーロー試験に落ちた奴らも結構いるんだわ。それで今回の体育祭のリザルト次第では、ヒーロー科への編入も検討されるらしい……その逆も然りだ」

油断していると足元をすくうぞぞという宣戦布告だった。

だが、そんな宣戦布告を受けたからといって劇的に何かが変わるわけでもない。

体育祭まであと2週間だった。その間に僕が出来ることは、馬に乗りながら正確に爪弾を撃つことや、いびつだが出来つつある回転の技術を磨くだけ。

これで大丈夫かという不安は拭うことが出来ず、あつという間に時間だけが過ぎて

いった。

体育祭当日。厳重な警備体制の中で開催されたにも関わらず観客は満員状態だった。

「雄英体育祭イイ！ ヒーローの卵たちが我こそはと凌ぎを削る年に一度の大バトル!! どうせあれだろこいつらだろ!? 敵の襲撃を受けたにも関わらず、鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星！ ヒーロー科1年A組だろオー!!」

入場が始まった。大歓声の中、一部には疑問の声もあった。

「なあ……あれ、車椅子だよな？」

「ヒーロー科で車椅子って……大丈夫なのか？」

ジョニイの車椅子姿にどよめきが僅かに起こるが、それも圧倒的な歓声にかき消されていく。そして続々と、他の一年の生徒が集まる。その中にはもちろん宣戦布告をしてきた普通科もいるわけで、A組に対しての敵意が剥き出しになっていた。

全一年生が集まったところで、今年の一年生の担当教師が壇上に上がった。

「18禁ヒーロー、ミッドナイト!?!」

まさかの人物の登場に、観客の男たちから喜びの声が出た。それは生徒も同じで、特に峰田は鼻息を荒くして打ち震えていた。

「静かにしなさい! 選手代表1ーA、爆豪勝己!」

呼ばれた爆豪が壇上に上がる。

「宣誓……………オレが一位になる」

ブーイングの嵐が巻き起こった。だが、爆豪はそれをそよ風程度にいなして元の位置まで帰ってくる。

だが、関係ない。爆豪が相手だろうと蹴落としても上に行つてやる。

「一悶着あつたけど気を取り直して、今年の第一種目はこれ! 障害物競走!!」

やった。その一言が頭の中を巡った。僕自身の機動力はほとんどないが、今回の体育祭においてスロージャンパーに乗ってもいいと許可を得ていた。

それぞれの生徒がウォーミングアップをする中、ジョニーは設けられた小さな厩舎でスロージャンパーにブラッシングをしていた。綺麗な藁が敷かれたそこでスロージャンパーは満足そうに鼻を鳴らす。

「きつと、無理なことをさせるかもしれないけど……頑張ろうな」

と、突然スローダンサーの様子が変わった。筋肉が強張っているのがわかった。警戒しているようだった。

「だれだ!!」

即座に爪弾を回転させて、もう片手で車椅子を半回転させて振り向いた。

「やめろ……もうそれはくらいたくねえ」

轟焦凍がいた。体操着に身を包んで厩舎の入り口に立つて、両手を上げていた。

「轟か……なんの用だ?」

「単刀直入に言う。今回の体育祭でオレはお前に負ける気はねえ」

「それだけか? ならそのまま出て行け……レースはもう始まるんだからな。準備運動でもしてるといういさ」

轟は少し考えるそぶりをしたあと、そうだなと言って去っていった。本当になんだっただんだ。ただ宣戦布告をしにきたのか。だれも居なくなつた厩舎の入り口から、回転させたままの爪弾に視線を移す。

やはりこの2週間かけても僕の爪弾は以前と変わらなかつた。乗馬しながらの狙撃も、ちよつと当たるようになってきたくらいだ。

「回転……信じろつて、何を信じればいいんだ。なんで教えてくれないんだ、ジャイロ

……」

爪弾を回転させる右手首を掴み、忌々しげに見つめる。

「……………これは……………」

その瞬間、集合のアナウンスがスピーカーから流れた。疑問が確信に至る前に、車椅子からスロージャンサーの背に乗り変えてスタート地点へ向かった。

すでに一年生はほとんど集合していた。その中を馬に乗って進んでいけば、思った通り周りから様々な反応があった。

「馬、いいのアレ?」

「あいつーAだよ。やっぱヒーロー科はとんでもねえのいんだな」

ほとんど聞き流してるが、賛否両論といった感じだ。

「気にするなスロージャンサー。レースが始まればお前に追いつけるヤツはいない……度肝を抜いてやろうぜ」

「あつれ〜、どうして馬なんかに乗っているのかなあ。これズルじゃないのオオオ? 違反つてやつじゃあないんですかア〜?」

宥めているところへ耳障りな声が出た。僕が振り向くより先に、そいつはスロージャン

サーの前に立つ。陰湿な野郎だ。

「あれ？ 無視？ 無視するの？ 陰険な人だなあ。そんなんじや立派なヒーローにならないですよお〜」

こういうのは無視するに限る。相手にしても意味はない。

「さあもうすぐスタートよ！ みんな準備はいいかしら!!」

「おっと、もうスタートですね。じゃあせいぜい、反則負けにならないように頑張ってくださいねエエ〜」

そう言い捨てて、そいつは前の方へと歩いていった。本当になんだったんだ。開始のランプが三つ点灯する。手綱を握り、意識をレースに切り替える。

ランプが全て消えた。

「スタアアアトオオ〜!!」

爆発するかのように一斉に全生徒が飛び出した。

スタート地点から、まずはこの会場から出なければならぬ。一番先に出ることが望ましかったが、最初からトップスピードを出してはすぐに馬の脚が潰れてしまう。それでも出来る限りの速さで飛び出したのだが。

「邪魔だよー!」「どけつての!」「足を踏むなあー!」「だれだ今殴ったのは!」「今触ったのだれよ!」「わざとじゃねえー!」「道を開けやがれ!」

先に進んでいた生徒が、会場の狭い出口ですし詰め状態になっていた。これでは外に出ることができない。

「ここが最初のふるいつてわけかッ! くそつ、退けよお前ら!!」

スローダンサーの脚にダメージがいかないよう配慮しているが、それも限界がある。更に暴れないように抑えなければならぬ。当然のように、流されるようにどンドン後退していつてしまう。

「くそつ、こんな序盤でつまづいてられないんだ!」

いっそのこと、爪弾で何人か足を傷つけてやろうかと思った。だが、それをしては

ルール違反になってしまおう。

「直接的な妨害行為は認められない、だったな……………クソツ……………どうすれば!」

手も足も出ないその時、足元が一瞬にして氷漬けになった。

「氷……………轟の仕業かッ!」

前方を見れば、轟が地面を氷漬けにしながら走っていつている。そしてそれを追うように、爆豪が両手を爆破させて空中を移動、切島は力技で突破、八百万が手から鉄の棒を出してその反動で、青山がレーザーの反動で飛び出していた。

「他にも何人かいるな。やっぱり一番の敵は身内だったか……………だが!」

ズバアアアアアアア

爪弾を大量に発射して、スロードンサーの足周りの氷を破壊した。

「いけっ! スロードンサー!!」

バカラッ バカラッ バカラッ バカラッ バカラッ

「そして、道を作るッ!」

ドバババババババ

爪弾を撃ち続けることで、前方の水が破壊されていく。その隙間をスローダンサーは器用に走った。元々、ジョニイの乗馬テクニクはジャイロが感心するほどのものがあった。それに磨きがかかり、今では多少無茶な賭けにも出られるほどに成長していた。

「だが、この方法は……」

ジョニイの苦い顔の理由はすぐにわかった。

「おおっと、ジョツキーが開けた道を我先にと後続の生徒が追いかけるッ！」

「効率的ではあるが、悪手でもあったな」

相澤の言葉に歯を食いしばる。だが、やったことを後悔してもしようがない。乗り手の力みは馬が敏感に感じ取ってしまう。別のことを考えなくてはと、記憶を巡らせる。

「そこちよつと失し・トウ・れい 礼れい イイイイイ〜〜〜」

「なんでよりもよって……」

なぜ今になって思い出したのか。ジャイロの腑抜け面が頭に浮かんだ。こちらまで力が抜けて、爪弾の連射が止まってしまう。

「しまった!!」

気付いても遅かった。凍りついた地面がすぐそこまで迫っている。今から発射しても間に合わない。転倒か落馬を覚悟して目を瞑った。

ザパラツ!!

スローダンサーが地面を勢いよく蹴った。その風圧に吹き飛ばされないよう、ジョ

ニイは手綱を力強く握る。

「うっ、うおおおおおっ!!!」

果たして、スロージャンサーとジョニイは落馬も転倒もせずに済んだ。着地したのは凍りついてない地面だった。残っていた数メートルの氷の絨毯を、スロージャンサーは華麗に飛び越えてみせたのだ。

現在、ジョニイの順位は3位。

障害物競走はまだ始まったばかりだった。

## 体育祭の巻 ②

雄英体育祭がついに開催された。

最初の種目の障害物競走は開幕早々に地面が氷漬けになるなど、壮絶なスタートとなつた。

氷の張っていない地面に着地したのは良かった。だが息をつく暇もなく、目の前を巨大な影が塞いだ。

「まずは手始め！ ロボインフェルノ！」

ジョニイの額を汗が伝った。目の前にいるのは入試の時に倒した0ポイント仮想ヴィランだ。それも、何体も壁になるように配置されている。

ジョニイは、なぜ突然氷が途切れたのかを理解した。この『壁』のせいで全員先へ進められなくなっている。

この数……：以前倒せたのはほとんど偶然だったというのに、数が多すぎる！ ここで『使う』か！

ジョニーは自身の爪を見て、そして周りの足踏みしている生徒たちを見て考えた。

ダメだ。まだ他の生徒の個性もわかってないこの状況で、無闇に使いすぎると対策を立てられてしまう。ここはなんとか自力で……

ダツ!!

「な、なにいいー!!」

思案するジョニーを嘲笑うように轟がロボットの前へ走り出した。標的を見つけた仮想ヴィランが手を伸ばし押し潰そうとする。

「せっかくなら、もつとすげえの用意してもらいてエもんだな。くそ親父が見てるんだからな……」

地面に添えられた右手から、誰も寄せ付けない冷気が発生する。まさか、とジョニーが思った時には終わっていた。腕を伸ばしたままの姿で巨大ロボットが凍り付いていた。驚愕する生徒たちを一瞥して、氷像の足元を轟が走り抜けた。

「足元が空いてるッ!」

「ラツキイイイ、感謝するぜA組さんよ!」

「行け！ 行け！ 足元も氷が張ってねえ！」

その抜け道を他の生徒が見逃すはずもない。ダム放流のように、足止めされていた者たちが一齐に流れ込んでいく。

「うわっ！ くそっ、近寄るんじやねえぞっ！」

その人混みの濁流の中で、ジョニーは愛馬と共に立ち止まって耐える。

「落ち着け。まだだ……まだ行く時じゃない。まだ待て、いいか？ その時になったら、だ」

首を撫でて必死に愛馬を落ち着かせるジョニーの目には、ロボットの凍りついた様はひどく不安定に見えた。回転を不完全とはいえ身に付けたからこそ、安定した状態と不安定な状態を見極めることができた。

だから、この後に起こる惨状も予想できた。

バラバララドガツララ

「——轟、攻略と妨害を同時に！ こいつはシヴィー！ ヤベエーな！ 一抜けだー！ あれだなッもうなんか、ずりーな！」

「戦略的、且つ合理的な選択だ」

「流石は推薦入学者！ 初めて見る仮想ヴィランに物怖じせず難なく突破！ 他の生徒を全く寄せ付けないエリートっぷりだ！」

やかましいアナウンスだ。そういうものだからしようがないとわかつてはいてもムカついてくる。ジョニイの苛立つ気持ちを察してか、彼の愛馬のやる気も増していく。

「ああ……そうだな。待つのはここまでだ。度肝を抜いてやろうぜ！」

爆発するようにジョニイを乗せたスロードンサーが飛び出した。早速、仮想ヴィランが反応して今度は通すまいと妨害してきた。その仮想ヴィランを見上げて、ジョニイは指を差すように右手の人差し指だけを向けた。

時間はジョニイが轟に宣戦布告された少し後に遡る。

轟が去ったあと、威嚇のために回転していた爪弾を見てジョニイはふと気がついた。

「僕の爪弾……いや、爪の『回転』……何か違和感がある」

残り4本の指も立てて、爪を回転させる。

シルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシル

「やっぱりだ……僅かだけど、乱れがある。たまに回転が遅くなるもの……ぐらつきがあるもの……バラバラだけど、どれも正常な回転じゃない……」  
ならば、とジョニーは考える。

「この回転を正常にしたのなら、どれほどの破壊力がでるんだ？」

これまでジョニーが撃っていた爪弾は、コンクリートビルの壁に小さくとも穴を開けるほどのパワーがあった。

そして今。ジョニーは人差し指だけの爪を回転させて、その回転に集中する。

「Lesson3……『回転を信じろ』。ジャイロ！これが僕の個性だ!!」

あともう少して押しつぶされるといところで、巨大な影がかかるほどになってジョニーは爪の回転が正常になったのを確信した。

ガシャアアアアアアア

ジョニーの目の前に迫っていたロボットの手の平に穴が空いた。その穴は手の平に

収まらず、はるか上にある仮想ヴィランの頭にも空いていた。

「これはもう「爪」を超えた………「牙」だ

これからは「牙」と呼ぶ！」

先行した轟を追いかける形で、崩れ始めた巨大仮想ヴィランの足元をスローダンサーで駆け抜けた。周りではクラスメイトが大きさの違いはあれど仮想ヴィランの壁を突破していつていた。

流石は自分と同じくヴィランの襲撃を乗り越えたクラスメイトたちだ。油断していたら馬に乗っているととしても簡単にその差を埋められてしまうだろう。

「このまま行くぞ！ スローダンサー!!」

ジョニイは勢いを殺すことなくそのまま爆走した。

「おいおいおい第一関門チヨロいつてよオオー！ だったらこれはどうだ？ 落ちたら即アウト！ 落ちたくなけりや這いつくばりな！ ザ・フォー！」

爆進するジョニイの前に、巨大な大穴とその所々に足場がある障害が現れた。だが、以前それでも愛馬の速度は落とさなかった。

「落ちたら即アウトか……だがこのままだ。このまま更にぶつ飛ばすぞ!!」

ザパラツザパラツザパラツザパラツザパラツザパラツザパラツ

ジョニーはその走りのスピードのまま第二関門の綱へと走り込んだ。

「A組ジョニー・ジョースター！ 馬に乗ったまま綱を渡って第二関門を突破していくぞオー！ てかあんなこと馬でできんだな！」

「あれだけの動きをするには、それ相当の技術がいるはずだ。まさかの才能だな」

先ほどまでやかましいと思っていたアナウンスが心地よく感じた。なんて単純なんだろうかと思いつながら、ジョニーは綱を渡ることに全神経を集中させた。アナウンスも耳に入らなくなっていた。

だが、それは彼の功績が大きかった。スローダンサーの長い経験による実力と冷静さと度胸がなければ、たとえジョニーがプロの騎手ジョッキだとしてもこんな無茶な走りを実現させることはできなかつただろう。

ポツポツポツポツポツ

だが、忘れてはならない。このレースでは妨害行為が認められていることを。後ろか

らの爆裂音に、ジョニイは振り向くことなく確信した。クラスメイトの1人が迫ってきている。

「なに曲芸してくれてんだクソがアアアア！」

「こんなタイミングでか！ 爆豪勝己ッ！」

振り向くことのできない状況で、せめて牽制にと爪弾をできるだけ拵散して撃った。

「危ねえっ！ だがやはり、よっぽど集中してるみたいだな。狙いが定まってねえそんな攻撃が当たるかよ！」

下手な鉄砲も数打ちや当たる。そんなことわざに望みをかけてジョニイは爪が回復次第どんどん撃ち続けた。だがそれら全てが避けられていくのが、後ろからの声でわかってしまう。

「あと少しなんだ！ 邪魔するな!!」

「障害物競走だぞ。邪魔してナンボだろうが!!」

いつ攻撃されて落とされるかと考えると、気が気じゃなかった。だが結論から言おうと思う。ジョニイとスロージョニイは突破することが出来たのだ。

それはジョニイのお陰でも、ましてやスロージョニイの実力でもなかった。

爆豪勝己のこの威嚇が、スロージョニイに強い命の危機を感じさせていた。ここから落ちたとしても、ネットで助かるだろう。だがそれ以上に、爆豪の相手を殺すという意

思が爆発音に乗って届いていた。

それがスローダンサーの火事場の馬鹿力を引き出させた。

ザパラッ！

「うわっ、うわああああああ!!!」

綱を渡ることなく、スローダンサーは足場から足場へ直接ジャンプして渡ったのだ。それも一度ならず何度も。

「ホワアアアアアイ!? なんつー馬だよ！ てか馬なのかよありやあよお！ 足場から足場へどんどん渡っていくぞ!!」

「理解できん……火事場の馬鹿力か？」

生物的本能で逃げるスローダンサーに、もはやジョニイの声は届いていなかった。ジョニイ自身も振り回され、振り落とされないように、気絶しないようにするのがやっとならした。攻撃をしかけた爆豪も、啞然としていた。

爆音が遠ざかっていたことに気づいたスローダンサーは、飛び跳ねるのをやめて興奮気味にその場をぐるぐると回る。その背中には酔いに耐えながらグロッキーになったジョニイがいた。

「ス……スローダンサー………無茶しすぎだこの野郎………だが、よくやった……」

いつの間にか轟も追い越して1位になっていたジョニイは、第三関門の手前で愛馬から降りた。

まだ気分が悪い。だがそんなことは言ってもらえない。爆豪のお陰でここまで来ることができたが、ジョニイにとっての問題はここからだつた。

目の前に広がるのは単なる平地などではない。関門の入り口や辺りにはドクロのマークや爆発のマークの看板がたてられていた。

「地雷原……だよな。もしかしなくても」

「生き物の不思議パワーに驚かされたが、ここはそんな力技じや通れねえぜ！ 一面地雷原！ 怒りのアフガンだア！ 非殺傷の地雷だが、爆音と爆風は失禁必至だぜ！」

「人によるだろうが」

ジョニイは馬の背に寄りかかりながら地雷原の所々にある、円形に土の色が変わっている部分を見ていた。きっとあそこに地雷がある。ここで止まってくれて良かったと、心の底から思った。

「なるほどな……よく観ればわかるようになってる。だが、流石にここをスロージャンサーで進むのは難しいか……」

地雷を見ながら、ジョニイはスロージャンサーの息づかいと体温を感じる為に密着した。人間より力強い心臓の鼓動と、ここまで無理をしたツケが急激な体温の上昇と発汗

で伝わってきた。

「ここまで無理をさせたな………ありがとう………お前が居なかったら僕はこのレースでここまで来るとは出来なかっただろう」

ジョニイはそつと疲れ切った愛馬をレースの端まで誘導した。その手綱を手放し、馬から降りた。

「おおおつとどうしたジョニイ・ジョースター！ 馬から降りたぞオ！ まさかりタイアカー!」

そのアナウンスの言葉を理解してはいないだろう。しかしレース途中で降りた騎手ジョニイにスローダンサーは鼻を近づける。その鼻をジョニイは手で押し戻す。

「いや、もう充分だ。お前は充分にやってくれた………それ以上走れば疲労で骨折するかもしれないんだ。ここからは、僕だけで行く！」

ギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルギヤル

爪を限界まで速く回転させたジョニイは、その爪を地面に突き立てて地面を切り裂きながら前へ飛び出した。もうすでに轟や爆豪をはじめとした先頭集団に追い抜かされている。

「勝利は僕のものだ。もう躊躇しない……個性のフルパワーだ！」

若干遅れながら、ジョニイも第三関門の入り口に到達した。その後ろから、聞き覚えのあるエンジン音がした。

「大丈夫かジョースター君！」

入り口前で座り込むように居るジョニイを心配して、飯田天哉が立ち止まった。

「余計な心配だ。今はレース中なんだから、自分のことだけに集中しなよ」

今は他人のことに意識を向けてる余裕なんてない。なんとしても勝たなくてはならない時だ。なのに飯田は。

「怪我をした人を見過ごすつてのは、僕にとつてのヒーローじゃない……たとえそれで勝利が遠くなったとしてもだ！」

真つ直ぐ目を合わせられて言つたその言葉は、本当に心の底から思つてることなんだなど、僕はなんとなく思つた

「……………別に怪我はしてない。僕の心配をしてるのはいいが、どんどん追いつけなくなるぜ」

先頭集団へ指を差す。その先では、轟がすでに地雷原の半分まで到達していた。それを見た飯田はさすがに焦つた。

「うおおっ！ そ、そうだな。本当に大丈夫だな！ ならば僕も遠慮なく行かせてもらうぞ!!」

ドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツ!!

ふくらはぎからエンジン音を響かせ、飯田は地雷原の中へ猛スピードで突っ込んでいった。地雷が起爆するよりも速く、ここの地雷原を突破するようだ。

ありがとうな、飯田。感謝するよ。お前の理念は立派だ、僕なんかより人間ができてると思うよ。

「だから、本当に助かった……お前のおかげで『道』が開けた!」

地雷原の中を僕の爪による移動で進むのは正直厳しかった。だが爆発した後の道は地雷も何もない道だ。後続が来る前に、行けるところまで進んでやる!

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ

爆発で抉れた地面を切り裂きながら進む。

よし、いい調子だ。このまま飯田が先まで進んでくれればいいが。そんな希望を抱くが、そう簡単には運ばなかった。

ドゴゴオオオオオオオ

「うおおおおお!! やっぱダメかあー!!」

一際巨大な爆発と共に、飯田が飛んでいく。その勇姿に僕は敬意を表する。だが、心の中でだけだがな。

飯田が吹っ飛ばされたであろう地点まで来たジョニイは、まだその場所が地雷原の半分ほどまで来てないことに歯噛みした。

あと数十メートルだというのに、ゴールは目の前だというのに。周囲の生徒たちは不思議そうに、這いつくばるジョニイの姿を見ていた。だが、彼らも自分のことで手一杯だ。地雷を踏み抜かないよう、慎重に、だが着実に先へと「歩んで」行っていた。

「こんな……こんな序盤で負けてたまるかよッ! タスク!!」

先へ進む轟目掛けて撃たれたタスクの弾丸は、果たして距離があつたために威力が落ちて、簡単に氷の壁でガードされた。それも後ろ手で容易く。

「クソッ！ 妨害しても無意味かよッ」

シルシルシルシルシルシルシル

ザクツ　　ザクツ　　ザクツ

妨害すら不可能となり、ジヨニイは渋々、目の前の地雷を掘り出した。金属の冷たい感触を味わいながら、掘り出した地雷を起動させないようそつと後ろに置く。

この動きを繰り返して行くしかない。先に地雷を爪弾で処理するのもいいが、そうすると道を用意してやることになる。抜け駆けされるのは目に見えていた。

幸いにも前半でリードした分がある。それに賭ける。もう残された道はそれしかなかった。

「おつとここで、遅れていた後続の生徒も追いついてきたぞー！」

後ろからの足音がどんどん多くなっている。追い抜いていく人数が増えている。1人に追い抜かされるたびに焦りが積もっていく。

手元を狂わすな。爆発して気絶でもしたらそれこそアウトだ。慎重に慎重を重ねて、しかし素早く作業を行うのだ。

ゴオン！　ゴオン！　ゴオン！

地雷を掘るジョニイの後ろで規則的な爆発が起こった。だが、それは地雷の爆発ではなかった。爆豪が手を爆発させて空中を飛んでくる音だった。

「どけどけどけモブ共！ てめえらはヨタヨタと後ろを歩いてろッ！」

爆破によって空中を移動できる爆豪にとつて、この地雷原はあまりにも簡単すぎた。余裕が生まれた。『ムカつくやつをブツ飛ばす』という考えを行動に移せるほど、今の爆豪には余裕だった。

「おい半分野郎ッ！ 宣戦布告する相手を間違えてんじゃねえぞ！」

爆豪は先頭の轟の前に出ると、爆破を思い切り浴びせた。

「ここで先頭が変わったアアア！ 喜ベマスメディアア！ お前ら好みの展開だッ!!」

その爆豪に触発されてか、後続の勢いが増していく。

「とここで、後続もスパートかけてきたー！ だが、ひつぱりながらも先頭2人がリードかあー！」

焦りが積もる。その焦りはついに抑えきれないものになり、地雷を掘るのさえ手をこまねいてしまう。

ドツゴオオオオオオオオオオオ

その時、後方でとてつもない大爆発が起こった。

「後方で大爆発ウウウウ!!? なんだあの威力!!」

地雷を一個どころではない数を爆発させたそれは、先へ進む生徒たちの視線を一身に集めた。先頭の2人も漏れなくその爆発を見ていた。

爆発の煙から小さな物体が飛び出る。それは板のようだった。仮想ヴィランの装甲だ。だが、その装甲だけじゃない。それにしがみついている者もいた。カメラロボットがその姿をハッキリと捉えていた。

煙から颯爽と現れたのは、緑谷出久だった。

「偶然か故意か! A組緑谷! 爆風で爆進ツ! つーか抜いたアア!」

その爆風にのって、凄まじいスピードで飛んで行った緑谷はその勢いのまま先頭の2人を追い抜いた。

「元先頭の2人も足の引つ張り合いをやめ、緑谷を追う!」

憤怒の表情で緑谷を追いかけ出した爆豪と、後続のことは仕方なしと水で走りやすい道を作る轟。元々の速度がある2人と、一時的な加速に過ぎない緑谷ではあまりにも差があった。あつという間に追いつかれてしまう。

だが、緑谷は装甲を手放すことなく2人が横一列になった瞬間を逃さなかった。両者の身体を足場に、装甲を地雷原へ思い切りたたきつけた。

ガアアアアアン!!

「緑谷ー！ 間髪入れず後続妨害!! なんと地雷原即クリアアア！ イレイザーヘッド お前のクラスすげえなあどういう教育してんだあ！」

「オレは何もしねえよ。奴らが勝手に火イ付け合ってるだけなんだろう」

先頭がもう見えなくなったところで、ジョニイの闘志が無くなることはなかった。爪の回転で地雷を掘り進めながら、先へ先へと急ぐ。だが、その緊張はとうとう重大なミスを起こしてしまう。

カチリ

「しまった……」

ドゴゴオオオオオオオオオオオオオオ

空中に身を投げ出され、地面に叩きつけられる。緑谷ほどではないにしろ、複数の地雷の同時爆破を生身で食らったジョニーは辛うじて意識があるような状態に陥った。

「ああ……そんな、ウソだ………」

更に、その落下地点は緑谷が飛んだのとは逆方向。地雷原のスタート地点近くまで飛ばされてしまった。絶望感が一気にやってくる。

もはや後ろには生徒はいない。何人かの生徒は轟の作った道を走って関門を突破している。

「誰が予想できたか！ 体育場に一番に帰ってきた、この緑谷出久の存在をおおお!!」  
緑谷がすでにゴールした。轟と爆豪もゴールしたに違いない。

目の前が霞む。もはや拭う気すら起きなかった。

ここまで上手くできたというのに……まるで嘲笑うかのように運命はまた僕のチャンスを奪っていく。

最初は足……

今度はこれか……

「くそおおおおおおおおお  
!!!!!!」

ペロツ

顔に、冷たく柔らかい感触が走った。

「……………ツ!! そんな……お前が……………スロ―ダンサー……………」

バフーツ バフーツ バフーツ

僕の眼前には、未だに息を荒げている僕の愛馬が立っていた。この老馬は、別れたさつきよりもしつこく鼻を僕の腕に押し付ける。暖かい鼻息がかかる。糸の切れた人形のように、力の抜けた僕の腕の下へ頭を突っ込んでくる。

「ああ………バカだ………本当に、僕の方が…お前が行くというなら………ツ！」

流れた涙を拭い切ったジョニイの瞳に、力強い闘志が灯った。

鼻から頭へ、頭から首へ、そして背中へ。もう一度鞍へまたがったジョニイの目に、焦りや絶望感は無かった。闘志だけを剥き出しにして、思い切り笑みを浮かべた。

「奴等の「度肝」を抜いてやろうぜツ!!」

## 体育祭の巻 ③

愛馬と共に走り出したジョニーだったが、走り始めてすぐ景色が大きくブレた。違う、ブレたのは景色じゃない。度肝を抜かせるなどと言っておきながら自分の肝が小さいなんてのはひどいジョークだ。冷静に状況を把握しなくては。

自分の愛馬の身体が、大きくブレて走っていた。呼吸も荒くなっている。玉のような汗がでている。素人目にわかるほど限界の状態だ。

ドカラツ　ドカラツ　ドカラツ

ドカラツ　ドカラツ

それでも、行きたいとあそこまでやられて止めるほどジョニーは賢くなかった。ファインタジーなことだったが、心が通ったような気がした。だからいまジョニーができるのは愛馬の熱意を殺すことではなく、生かしてゴールまで走り抜けることだ。

（荒い地面だ……緑谷の大爆破のせいだ。だけどそのおかげで、この辺りの地雷も吹っ飛んでくれた。飯田の通ったルートと、その先の僕が自爆した場所。そこまでは地雷も少ないだろう。それでも、その先はどうする……他にも生徒はいる。もうすぐこのエリアを走り抜けられてしまうかもしれない）

抉られたようになっていいる地面の上を走りながら、その先のルートを見た。残った生徒が恐る恐る地雷を踏まないように進んでいるのが見えた。

ジョニイの瞳に黒い意思が灯った。

シルシルシルシルシルシル

右手の全ての爪を回転させたジョニイは、それら全てを前方の、やや下方向へ向けた。

「威力は必要なかった……僕の回転する爪が当たっただけで地雷は作動したんだ。先に言つとく、悪く思うなよ」

バアアアアアアアアアア

一斉に爪弾が発射される。若干放射状に撃たれたそれは、地面に着弾するとそこにあつた地雷を爆破させる。

ドガアアアアーン

「ぎゃあああああーーーーーッ!!」

それを見た他のクラスの生徒は、自分はああならないようにと足元へ視線を戻した。

「……………」

だがそこに、ついさつきまで無かったものが生えていた。違う、刺さっているんだ。小さな何かが、地面に突き刺さっている。だが、それは地雷に近かつたものの届いていない。危うく爆破するところだった。

「ふう……………危なかつ」ピスツ「たあああああ!!」

ドガアアア!!!

二発目の爪弾によって爆破したその場を、ジョニイはスロードンサーで駆け抜ける。煙に纏わり付かれながら、まっすぐ前方に何度も何度も『一斉射撃』を繰り返す。

その度に前方で悲鳴が上がって生徒がどこかへ吹っ飛んでいく。その地雷の無くなった道を、スロードンサーはただまっすぐ走り続けた。

「第一種目で脱落なんてするもんか……必ずゴールしてやるぞッ!」

「これはなんてことだー!! A組ジョニイ・ジョースタがものすごい勢いで上がっていくウー! てかあの妨害いいのかわよ!」

「走者を直接狙ったものじゃないからな……効率的な道を行ってる。あまり褒めていいものかわからんが」

(緑谷は走者を足場にして、更に目の前の地雷を使って妨害していた。僕の行動に異議を唱えられるものなら唱えてみるってんだ!)

ガグン!

「うおっ!!」

またスローダンサーの身体が大きくブレた。正直、この作戦は賭けだった。離れた前方を爆破させるといっても、馬の脚ならすぐそこまで行ける。だから爆風と衝撃をモロに受ける時もあるかもしれない。

この体力で受けたのなら、今度こそスローダンサーは動けなくなるだろう。

「アレだ……僕らが勝つにはアレを見つけるしかない。もう近くのはずなんだ!」

その時、ジョニイの視界にキラリと光るものが見えた。

「アレが見えた! 飛び移るぞスローダンサー!」

手綱でスローダンサーの方向を変えた。

ドカラッ!

馬の身体が大きく沈んだ。足を曲げて身をかがめたスローダンサーは、大きく跳ね飛んだ。

瞬間、地面に撃てるだけの爪弾をばら撒いて大爆発を起こす。

「突如として巻き起こった地雷の集中爆破！ 煙があがって何も見えねえぞー!!」

地雷の爆破によって何も見えなくなったコース上を写している巨大ディスプレイを見て、轟は静かに落胆していた。

自分を一度はくだした男……そしてヴィラン襲撃事件の時は、主犯格ヴィランから『漆黒の意思』なるものを唯一持っていると言われた男。オレには意思とかよくわからないが、一度負けた相手だ。

この大会で戦って勝ちたいと思っていた。

しかし、そううまくはいかなかった。足が動かないというハンデを馬で補おうとしても、綻びが出てくる。そしてその結果がこれだった。

ディスプレイから目を外して控え室に戻り始めたその瞬間。

「いや……見えた！ 見えたぞー！！ 煙の中をA組ジョニー・ジョースターがものすごいスピードで駆け抜けているッ！

「……………!!」

「しかし地雷原の中を、どうやって進んでいるのか！ もう爆破は起こっていない！ 地雷だらけの道で！ まさか地雷の隙間を走ってんのか!? ジョニー・ジョースター！」

（まさか……まさかあの野郎！）

「違うだろ……あいつの足元を見てみる」

「足元? ……なんか光って…あつ!」

「そうだ、氷の」「氷の道だあああああ! ジョニー・ジョースター、同じくA組轟が残した氷の道を進んでいたアア! 早く走れるようにと滑りにくくしてたお陰かスイスイ進んでいくぞオ! 『氷のカーペット』だあああ!」

「オレの作った道を利用しやがった……」

「そして難なく第三関門突破だあ! そのままぐんぐん登っていくツ! 他の走者を追い抜いていくぞオオ!!」

疲労しているとしても、根本が全く違っていた。人の足と馬の足とは速度に差があった。

あつという間に追い抜いていくスロウダンサーに、他の生徒も手が出せない。先頭集団は更に速度を増して、着々とゴールしていく。

そしていま……………

「ゴオオオーール!! A組ジョニイ・ジョースター! ギリギリで第二種目への切符を掴んだア!」

ゴールラインを超えて少しした瞬間、それまでの勢いや圧力が嘘のようになくなった。荒い息遣いと、異常なまでに上がった体温を感じていたジョニイは、最悪の事態を想定した。

スローダンサーの前足が曲がる。その仕草の意味を知っているジョニイは、転がるようにその足の上へと身体を降した。

「ツツ!!」

ジョニイはスローダンサーの側に黙って降りた。あれほど望んでいた歓声を浴びせられているというのに、その声が酷くどうでもよくなっていた。自分が降りたのを確認したかのように、スローダンサーは身体を傾けて地面に倒れた。

「まさか……………そんなツ!!」

横たわった愛馬の身体にしがみつく。その身体は熱くなっていた。やはり酷使しすぎたのだ。更にさつきジョニイを乗せた脚は折れていた。早急に治療しなくては助からなくなる。

馬の体重は約400キロから500キロ。つまりたった一本の足で100キロ近い体重を支えているのだ。その一本でも折れたのなら、残り3本で支え続けるのは無理だ。安楽死しかない。

しかし、今は個性という力がある。更にこの会場にはリカバリーガールがいる。早く見せて治療してもらわなくては。

「…………この身体をどうやって動かすというんだ…………500キロ近くある。僕には…………できない……………」

全部僕のせいだ。勝つために手段を選ばないなんて思わなければ、いや、別の手段を思いついていれば良かった。

第二関門を終えたとき、なんとなくわかっていた筈だ。スローダンサーの前足の骨にヒビが入っているのではと。あるとき無理やりにもリカバリーガールの元へ連れて行つていれば…………。

少しだけ「希望」で喜ばせておいて、そして最後にぼくから全てを奪い去って行く……………！

グラツ

「ハッ！ それ以上動くんじゃないッ！ もうお前は……………あ!!」

愛馬が起き上がろうとしているのではと思ったジョニーだったが、眼前には砂糖力動さとつりきどうが顔を真っ赤にして馬の身体を持ち上げようとしていた。

「お前はッ！ 砂糖力動さとつりきどう！ 離せっ！ これ以上僕の相棒に何をするつもりだ!!」

爪弾を向けるジョニーに、しかし砂糖は一切力を緩めることなく答えた。

「何って人助けだよ！ いや、『馬』助かかア!? わかったらそこどいてろ！ 重くてもしょうがねえ！」

「おまえ……………」

「そこを退いてろジョースター」

「わ！ 何をすんだ！ 障子か!？」

「オレも加勢するぞ砂糖」

「おう助かるぜ！ じゃあお前はそっち持て！」

その光景を離れて見ていた切島が奮い立った。

「熱いじゃねえかおい!! オレも手伝うぞッ！」

「お、おれも!!」

「わたしも！」

「僕もッ!!」

切島を筆頭に、次から次へ他の生徒がスローダンサーの元へ駆けつけて行く。外へ外へと押しやられたジョニイは、その光景を見てただ呆然としていた。

「これはなんてことだアア!! 倒れた馬を救うため、走り終えた生徒が続々と集まって行くぞオオオ!! 泣かせるじゃねえかオイ!」

「言ってる場合か。救護チームなにボサツとしてる! 急げ!」

「大地を駆ける者よ! 暴れずに力を抜くのですツ! 落ち着いて息を整えるのですツ

!」

口田こうだが個性で必死にスローダンサーへ話しかけている。

スローダンサーの身体が見えなくなるほど人が集まっても、身体が持ち上がる気配は全くなかった。

「おまえらもつと気合入れろオ! リカバリーガールんどこへ運ぶぞ!」

切島の掛け声に合わせて持ち上げようとするが、ダメだった。全く持ち上がらずにいるところへ、ようやく救護チームが駆けつける。搬送用ロボットを連れてきた人たちが生徒たちの間を抜けてもつと離れるよう指示を出す。

「君たちよくやった、ここから任せなさい！ おい担架急げ！」

「ジョニイ・ジョースター君だね。車椅子を持つてきた。これに乗せるよ」

搬送用ロボットの持つ担架に乗せられるスロージョニイを、車椅子に乗せられるジョニイはやはり心配そうに見ていた。そして、その心配は当たることになる。

バギイ！

担架が折れて、スロージョニイの身体が地面に投げ出される。救護スタッフは慌てた。

「お、折れた!? 担架が折れたぞおい！」

「でもどうするんだよ！ 早くしないと馬がッ！」

慌ただしく動く救護スタッフたちを見て、解散しそうになっていた生徒たちがやはり自分たちがと動こうとする。

「HAAッ！ HAA HAA HAA HAA HAA HAA HAA!!」

混乱する場の空気をぶち壊すように、笑い声が聞こえて来る。その声を聞いた途端、会場にいた全員が湧き立つ。誰もが知る声だ。その人がいるだけで大丈夫と安心できる声だ。

「もう大丈夫！ なぜって？」

「私が来たツ!!」

グラウンドにどこからともなく飛んできたオールマイトが降り立ち、いつもの笑顔と共にお決まりの台詞を言う。

会場が爆発するかのような大歓声が起こった。劇的な障害物競争のあとにオールマイトという特大の衝撃を見せられて、観客のボルテージが一気に上がった。

観客席に手を振りながら、オールマイトは車椅子のジヨニーに近寄る。

これまでは馬に乗っていたからか実感が湧かなかったが、本当にデカイ。凄すぎて画風が違う。首が痛くなるほど見上げなくてはならなかった巨大な影は、一気に屈んで目の高さほどになる。

「君の相棒は、私が責任を持ってリカバリーガールの元へ運ぶ。だから安心したまえ」  
その大きな手が肩に置かれた。ズシリとくる重さは頼り甲斐のあるまさにヒーロー英雄の手だった。

「あつ……お、お願いします。オールマイト」



生徒たちが幾人か立ち寄っていた。

そこへ車椅子に乗ったジョニーがやってきた。

「リカバリーガール！ スローダンサーの容体はどうなんだ!？」

扉を開け放った先には第一競技でジョニーに吹っ飛ばされた生徒がいた。受診中だった生徒は驚くものすごくジョニーと気づくと睨みつける。だが、ジョニーの視界には全く入っていないかった。

「焦りなさんな。「順番だ」呼ぶまで大人しく待つてなさい」

しかしリカバリーガールは、小さな身体に似合わぬ迫力を出す。思わずジョニーの動きも止まり、受診していた生徒も止まった。

「いまはこの子を治療中だ。わかったね？」

「あ、ああ……………」

迫力負けしたジョニーが静かに診察室から出て戸を閉める。

(なんつー迫力を出せばあさんだ……………)

結局他の患者はおらず、さつき診察していた生徒が治療を終えて出てきた。リカバリーガールの圧力を前にしたせいも、もうジョニーに対する恨みだとかはなくなっていた。

生徒が出たところで、リカバリーガールは戸を開けてジョニイを呼ぶ。入ってすぐ、ジョニイはスローダンサーの容態を聞いた。

「あの子のことなら、心配はいらないよ。ただ体力を使い果たしていたからねえ、体力を使うあたしの『治癒』の治療は出来ないんだ。今は特製のベッドでおやすみ中さ」

見るかい。そう促されて、僕はうなづいた。

案内されたのは部屋の奥だった。

ベッドを繋げてできたようなものの上で愛馬は眠っていた。熱くなった身体を冷やす為にか、水枕のようなものの上に乗せられていた。

馬の肌は弱い。骨折して地面になり続けるだけで肌が腐っていくほどに。

「これなら……………」

愛馬の寝るベッドに触れると、触ったことのない感触が返ってきた。これなら大丈夫そうだ。

「ありがとうございます。リカバリーガール、なんとお礼を言ったらいいか」

「礼はいいさね。でもね、もうこんな無理をさせるんじゃないよ」

その言葉は、重く僕の中へと落ちていった。

「それと体育祭はこの子は出られないからね。絶対安静だ」

「わかっています……………どうも、ありがとうございます」

悶々とした気持ちのまま、僕はA組の控え室に戻った。

「おおジョースター！ お前の馬はどうだった？」

入って早々に砂糖が駆け寄ってきた。

「……………大丈夫そうだ」

そう言うのと、他のクラスメイトの幾人かがほっとしていた。

「そうかあゝゝゝ、そいつは良かった」

「なんかヤバそうだったからなあ。でも、安心した」

「オールマイト凄かったよなあー！ 馬を軽々とヒョイだぜー！」

「驚愕であった……………」

「馬って何キロあるんやろ？ 1000キロとかかな」

「たしか……………500とかじゃないっけ」

「500キロオオ!? はあゝゝゝ、やっぱとんでもねえなオールマイト」

A組の面々が盛り上がり出す。これから対決が待つてると言うのによくもまあ呑気してられるな。

ここに居ても意味がない、と車椅子を動かして立ち去ろうとした。

「まっ……………待って！」

引き止める声に手を止めて振り向くと、口田が必死そうにしていた。そういえばこの男が他のクラスメイトと話してるところを見たことがない。

そんな男が自分を止めたことに、ジョニーは興味を示した。

「……………なに？」

「あの……………君の、馬のことなんだけど……………」

スローダンサーのことと聞いて、そういえばと思いついた。うろたえるスローダンサーに、必死に声をかけて大人しくしてくれていた。礼でも言おうかと口を開いたジョニーだったが。

「ありがとうって!!!」

「……………えっ?」

「あ、いや…………。僕の個性は動物の言っていることがある程度わかるんだけど…………。君の馬が、その、君に言っていたんだ。ありがとうって…………。それだけ…………。伝えとかなきゃと思っただけ」

「ありがとうって…………。どういう意味だ? なあジョースター、おまえわかいっでえ!!」

「バカかよ上鳴…………。んなこと野暮ってもんでしょ」

「バカとはなんだよ！」

上鳴と耳郎の喧騒をあとに、僕は部屋から静かに出ていった。来るまでの悶々とした気分は幾分か晴れて、笑みが溢れた。

これから次の競技が始まるが、もう少しこの気分を味わってもいいだろう。

「……………な〜〜に感傷に浸ってんだよ」

「うわあつ！ つてなんだ、ジャイロか」

「オイオイ…せっかく応援しに来てやったんだ。もう少し喜んだっていいんだぜ？

そ・れ・と・も、いまは一人になりたい気分なのか？」

「……………何しにきたんだよ」

驚いて振り向いたらジャイロがいた。いつものカウボーイ風の衣装を来たジャイロだ。

部屋を出てからの一部始終を見られていたらしい。茶化すジャイロに返す言葉が思いつかず、僕は話を逸らそうとした。

「だから言ってるんだろ？ 応援だよ。お前さんの馬は今日は出られねえんだろ。だから

俺の馬にちよつとだけ乗せてやる」

「いいのか？」

「今回だけだ。まあ……Lesson3を突破したお前さんへの一度きりのサービスってことだ」

後ろにいたジャイロが前にやってきて、手を前に出した。

「……………助かるよ」

手と手がぶつかり音が響いた。ハイタッチだ。

「いってえええ……………手加減しろよ」

しかし思い切りやりすぎたせいで、手のひらに予想外の痺れと痛みがやってきた。ジョニイは手を振りながら文句を垂れるが、それはジャイロも同じだった。痛そうに手を握ったり開いたりしていた。

「そりゃこっちのセリフだつての…やっぱ貸すのやめようかな」

「なんだよそれエ!? 先に手を差し出してきたのはそっちじゃねえか!」

「うるせえ! それ以上文句言うなら、ホントに貸してやんねーからなッ!」

ジャイロのその言葉に、ジョニイは言いかけていた言葉をしぶしぶ飲み込んだ。

オールマイトが荒らしたグラウンドの整備が終わった。熱狂していた観客席も落ち着きを取り戻している。しかし、これからまた盛り上がることだろう。第二競技が始まるのだから。

ヴァルキリーにやらせてもらった僕を含めて、すでに競技場の真ん中へ集まった生徒の数は42名。あれだけいた生徒の中から、第一競技の上位42名のみが出場できる。壇上にミッドナイトが上がった。

鞭を振るい、選手の視線を自分とそのバックにあるモニターへ注目させる。

「それでは、選手が集まったところで次の第二競技を発表するわよ！ 第二種目はこれ！！」

騎馬戦だ。

制限時間は15分。通常の騎馬戦と同様に、数名からなる騎馬の上に騎手が乗ってハチマキを付ける。

ハチマキの点数はチームメンバーのそれぞれの持ち点の合計になる。首から上にならいくつでも巻いてよし。

制限時間終了後に残っている持ち点の上位4チームのみが、決勝戦に進むことができ

る。

だが、ここからが通常の騎馬戦と大きく違うところだ。

ハチマキをとられたとしても、制限時間内であれば失格にはならない。騎馬が崩れても失格にならない。

そしてハチマキのポイントはそれぞれ、第一種目の順位によって振り分けられる。

第一位の緑谷に振り分けられたポイントは、100万ポイントだ。

「競技中は個性発動ありの残虐ファイト。でもあくまで騎馬戦……悪質な崩し目的の攻撃はレッドカード。一発退場とします」

ダメか……。手っ取り早く足に撃ち込んだら楽だと思っただが。

「それじゃあ15分間、チーム勧誘の時間よ！」

ミッドナイトの声に合わせて、モニターにカウントダウンが表示された。

僕は騎馬戦と聞いた時から1人だけ組む相手を決めていた。その人物の元へ出来る限り急いで向かう。

ヴァルキリーはスロウダンサーほど老馬ではないが、その分脚の強さがある。だが、その力を十分に活かすためにはやはりジャイロが乗ってこそだ。

なんとかヴァルキリーを誘導して、その人の元へやってきた。誰と組もうかとオロオ

口している様子を見て、まだ誰とも組んでなかったことに安心した。

「僕と組んでくれないか……口田君。君の力が必要なんだ」

「……………!?!」

全く予想してなかった勧誘に驚いている。そうだろうな。少し前までなら僕も君と組むなんて選択肢は無かった。

ジョニーがなぜ口田を選んだのか。それは彼の愛馬が倒れた時に口田が個性を使っているのを見たからだ。

口田こうた甲こうし司。個性は生き物ボイス。直接声に出して指示することで、人以外の生き物を操ることができる。

ジョニーが彼を選んだのは、彼の個性ならヴァルキリーを指示通りに動かして操ることが出来ると考えたからだ。

しかしそれ以上に、彼を選んだのは彼が敵に回ると最悪の相性だったからでもある。

「あ、ありがとう……」

「ほら、僕は手伝ってやれないからこの馬に個性を使つてしゃがませるんだ」

「あ……うん。『大地を駆ける者よ、私を背に乗せる為にしゃがむのです』」

その声を聞いたヴァルキリーが、素直に身を屈めて口田が乗りやすいようにした。慣

れない手つきで後ろに乗ろうとする口田を見ながら、ジョニーは内心で恐怖を感じていた。

もし彼が敵に回って、ヴァルキリーの動きを逆に利用されでもしたら終わっていた。この男の個性は僕にとって最悪の相性だが、敵にならなくて良かった……

「それで……他には？」

他のメンバーは、という意味だろう。そんなのは決まっている。

「これだけだ」

「……………え」

口田が硬直したのがわかった。そんなに意外だったのか？

「流石に二人乗りが限界だよ……いまさら降りるなんて言わないでくれよ。ちゃんと作戦があるんだ」

「作戦って……」

「それを今から伝える」

時間はあつという間に過ぎ、騎馬戦の勧誘時間15分が終わった。

その頃にはすでに作戦の全てを伝え終わっていた。

「いいかい？ 時間との勝負だ。いきなりで勇気がいるかもしれないが、この作戦は君にかかっている。頼んだぞ！」

口田は力強く頷いた。

「それじゃあ第二種目騎馬戦！」

スタア——トオオオ——！！！」

## 体育祭の巻 ④

騎馬戦が始まった直後、ほぼ全ての騎馬が一斉に緑<sup>1000万ポイント</sup>谷のいるチームに殺到する。

それは最初から緑谷もわかり切っていたことだった。

「発目<sup>はっめ</sup>さんー！」

「了解です。いきますよ皆さんっ！」

緑谷が組んだのは、サポート科に属する少女の発目<sup>はっめい</sup>明だった。発目が手元のスイッチを押すと同時に、同じくチームになった麗日が個性で皆の重量を軽くする。

「よっしやとつたアアー！」

B組の鉄哲<sup>てつてつ</sup>が手を伸ばすも、空振りに終わった。

見上げた鉄哲チームは目を見開いた。

「な、なんだありやあー！ と、飛んでやがるー！」

騎馬の足に取り付けられた靴と、発目の背負うバッグにはジェットエンジンが搭載されていた。ジェット噴射であつという間に上空へ逃げる緑谷チームを、他の騎馬たちは指を加えて見るこゝろしかできなかつた。

バガガガガガガガガ!!

「逃げてんじやねえクソデクウ!!」

「かつちゃん!?!」

例外がいた。

爆豪が両手を爆破させながら迫ってきたのだ。これは緑谷も予想外だった。まさか騎馬を離れて追ってくるとは。

ジェットで飛んではいえ、空中では小回りの効く向こうが有利だ。滞空する緑谷の頭に巻かれたハハチマキに、爆豪がロックオンした。

「常闇君!」

騎馬の1人の名を呼んだ。待つてましたと、常闇踏陰とこやみふみかげの鳥の目が光った。

「迎撃しろ、ダークシヤドウツ!」

「近付イテンジヤネエエ!! オラオラオラオラオラア!」

常闇の身体から、影が形を成した存在が現れた。彼の個性の『黒影ダークシヤドウ』だ。

身動きの取れない本体に代わり、爆豪を押し戻すようにラツシユを叩き込んだ。

だが、流石は入試首席といったところか。持ち前の反射神経と戦闘センスで、ラツシユを最低限までかわした上で不利と判断した爆豪は、緑谷たちから離れる。

「爆豪ー！ 無茶しすぎだバカ！」

爆豪の背にテープがくつつき巻き戻していく。瀬呂せろ範太はんたの個性『テープ』だ。

ギリギリで自分のチームの元へ戻った爆豪の行動は、テクニカルとして処理される。危なかった……まさか上空まで追ってくるとは

「デク君！ 次はどうするの!?!」

「このまま上空にいたいけど……発目さん、滞空時間は？」

「私のベイビーでも、この人数ではずつとは無理です！ おそらくもうすぐつて、きましたよお！」

発目が言うのが先か、ジェット噴射が弱まって4人がだんだんと地面に迫っていく。その着地の瞬間を狙って、他のチームが殺到する。

バカラツ バカラツ バカラツ バカラツ

その中には、ジョニイ&口田チームもいた。

「口田君、頼んだぞ！」

「だつ、大地を駆ける者よ！ 前の騎馬に向かつて落ち着いて走るのです！」

ヴァルキリーの操作を口田に任せ、ジョニイは右手を左手で支えるように持ち、緑谷たちに向けて人差し指を向けた。

「正しく……正しく回転をッ」

爪が回転を始める。一度撃った感覚を覚えているからか、先ほどよりも早く正しい回転に安定させられた。

「くそつ……ここぞジョースター君が！」

馬の速度に緑谷が焦る。このままでは爪弾の射程距離に入ってしまう。一刻も早くこの場からジェット噴射で逃げなくては。

爪弾の射程距離までまだある。まだ逃げられる！

「そういうのはさせない。牙タスクッ！」

ガシヤアアアアア

「そつ、そんな！ ジェットパックが！」

空に逃げるよりも早く、射程距離と破壊力を増したジョニイの爪弾が緑谷の背中 of 機械を破壊した。

「もらうぞッ！ 1000万ポイント！」

この隙を逃すまいと、ヴァルキリーが更に速度を上げた。

「させぬ！ ダークシャドウ！」

動けなくなった代わりに常闇のダークシャドウがヴァルキリーの前に立ち塞がる。突然現れた巨大な影に驚いて、ヴァルキリーの足が止まる。

「くそっ……………面倒な個性だ」

足止めを食らったジョニイたちは、走って逃げる緑谷チームの背中を見る。そこに目掛けて今度は轟のチームが迫っていた。

不幸中の幸いか、ポイントの少ない自分たちが狙われることは今のところないだろう。後ろの口田にジョニイは問いかけた。

「口田君……………いまどんな感じだ？」

「ま、まだぜんぜん……………けど……………もう見つけたよ」

ジョニイはモニターの制限時間を見る。

「ダメ元で行ってみるか……緑谷たちを追いかけられるぞ口田君！ しっかり掴まってるんだ！」

手綱を握って、追いかけられる緑谷チームの元へと走り出した。

バリバリバリバリバリバリバリッツツ

同じく緑谷を追っていた轟チームから、眩い光と空気を焼くような音が発生する。ジョニイも口田も、そしてヴァルキリーも目を閉じて足も止めてしまった。

「くそっ！ 次から次へと………今のは上鳴の放電か!？」

目を擦りながら、ジョニイは右手の爪弾を全て回転させてがむしやらに撃とうとする。

「いや……崩し目的での騎馬に対する攻撃は禁止されているんだっただ………」

狙いが定かじやない状態で撃った爪弾が、他の騎馬に当たってレッドカード。なんてことは避けたい。

爪弾を撃つのをためらったその一瞬が命取りだった。

緑谷チームを追いかけける轟チームから、恐ろしいスピードで氷が地面を覆っていく。



連続で射出した爪弾が氷を幾分か破壊して、破片が宙を舞う。

「今は待っていてやる……どちらにしろ勝負を決めるのはラスト十数秒って決めていたんだ」

振り向くと口田が寒さに身を震わせていた。

「口田君……そろそろ時間がヤバイ！ 今の数は？」

「そろそろ……もう充分だと思おう！」

無口なりに力強く返した口田の言葉に、ジョニイはよしと拳を握って更に爪弾で氷を破壊する。

残り時間が残りわずかとなった時。

爆豪チームは『コピー』の個性を巧みに使うB組の物間チームものまから点数をもぎ取っていた。

轟チームは、飯田の隠し技である『レシプロバースト』によって急加速。緑谷から1000万ポイントを奪い取った。

その激闘の外側で、峰田、蛙井、障子の三人チームは少しでもハチマキを奪おうと攻勢に出ていた。

「チキシヨオオ！ もう失うもんは何もねえ！ 障子ッ！ 全攻勢モードだ！」  
「わかつている！」

つい先ほどまでは体格差を利用して2人が障子の背中に乗り、複製腕で盾のようにして籠もっていたのを、今度は逆に複製腕を表に出して突撃しようとしていた。

ピチャッ

「ピチャ？」

音のした方。自身の頭へ目を向けた峰田は、水滴かと手で拭う。そして、拭った手に白い何かが付着しているのを目にした。

「ばっちいわ、峰田ちゃん」

「とっ、ととととととと鳥の糞ンー!? なんでよりによつてオイラの頭なんだよ！  
こんな広い会場でッ！ 何でッ！ オイラだけッ！」

「日頃の行いじゃないのか？」

障子の言葉が突き刺さった。思い当たる節が多すぎて何も言えなくなつて、先ほどまでのやる気も失せてしまった。

「ケロツ……でもたしかに、不思議よね。なんで………ツ!？」

「ん? どうした蛙吹?」

突然背中で蹲った蛙吹の異常に気付いて声をかける。震えているのが背中越しに伝わってきた。

「ケロツ……ちよつと…無理………ごめんなさい」

「何があつたんだ!？」

障子は複製腕の一つを目にして周囲の様子を見ようとした。

「なっ………なんだあれは………」

見上げた瞬間に目に入ったのは、雲ひとつない青空ではなかった。

黒い塊が空を蠢いている。

「あれは鳥……いやつ、カラスか!!」

カーー カーー      カーー

カーー      カーー      カーー

カーー      カーー      カーー

空を覆いつくさんほどの数のカラスがいた。それだけじゃない。会場の中の骨組みなどにも、カラスが止まってじっとこちらを見ていた。

「そろそろ………気付き始めたやつも何人かいるな」

ドバア！

最後の氷を破壊して身動きの取れるようになったヴァルキリーが、首を振って、足をうずうずと動かす。

「口田君……君のお陰だ。君には本当に助けられてばかりだ……」

そんなことはない、口田は手と首を思い切り振る。

「いいや、君のお陰だ。そしてもう少し力を貸してくれ！ 合図を出したら頼む。そしてヴァルキリー……この短い時間の中でお前の意思をうまく汲み取る時間は無かったが……今ならわかるぜ」

遠くにある巨大な氷の壁。そこへヴァルキリーを向けさせた。

「思い切り走りたいたいよな！ 止まるなんてことは考えるな。ただまっすぐ走るんだッ！ 行くぞ!!」

前足を大きく上げてヴァルキリーはいななき、着地と共に爆発するように走り出した。

「いまだ口田君!!」

ジョニイの合図に、口田は思い切り息を吸って腹に力を入れた。本来は無口な彼だが、ジョニイの何がなんでも勝つと言う意思に触発されて、いつも以上の声を出すことができた。

「黒き翼で空を羽ばたく者よ!! 我らの敵が身に付けるバンダナを奪い取ってくるのですツ!!」

本人も驚くほどの声を聞いたカラスたちは待つてましたと一斉に飛び立ち、飛んでいたカラスたちは会場の上空から急降下してきた。

「なんだありやあ!! 会場に黒いもんが突撃してきたア！ マジでなんだありやあ！」  
「カラスだな。おそらく試合開始と同時にどつかにいたカラスに口田が個性で指示を出

して集めたんだろう」

その通りだ。相澤のアナウンス通り、試合が始まった瞬間に口田には近くにいたカラスに仲間を集めて待機するよう指示を出してもらっていた。

ここは街のど真ん中だ。カラスなんて腐るほどいる。15分なんて時間があれば、遠いところからでも来ることができるだろう。

「だとしてもとんでもない数だッ………本当に恐ろしい個性だよ口田君……」

突然のカラスの急襲に、会場内は混乱状態になっていた。

「カッ、カラス!! とにかく防御しきってくれ常闇君!!」

「その点なら安心しろ緑谷! これだけの数………日の光もある程度遮られて……」

カーー カーー カーー

カーー カーー カーー

カーー カーー カーー

「ダークシャドウの防御は今まで以上だ!」

「クソ鳥ガ、ワイテキテンジャネー！」

「すごいよ常闇君！」

「カラス避けのベイビーも製作してみたいですねこれは!!」

防御が成功している緑谷チーム。

直前まで対決していた轟チームはというと。

「あ、危なかった……………」

自分たちを覆い隠すように氷のドームを形成。動けなくなったかわりに、カラスも手出しができなくなった。

一方爆豪チームは。

カーカーカーカー

ドガアアアアン!

カーカーカーカー

ドッグオオオオオン!

カーカーカーカーカー

「カーカー喧しいんだよポケット!! 道を開けやがれクソつたれ鳥公どもオオ!!」

激昂した爆豪の連続爆破にカラスたちもなかなかハチマキを取ることが出来ずにした。

「いぞ爆豪!! そのまま追い払い続けろッ!」

「てめえが指図してんじゃねえ! おい黒目! こいつら全部てめえの酸で溶かせねえのか!」

「だからあ、し、ど、み、な! そんなグロテスクなことできるわけないでしょ!!」

氷のドームに守られている轟チームは、外からカラスたちが氷の壁を突いている音に囲まれていた。

「轟君。このドームは大丈夫なのか?」

「ああ、少なくとも鳥の嘴や爪なんかで崩れるような柔な作りじゃねえ……安心しろ」

「そ、そうか……」

見ることができないから残り時間は不明。

しかしカラスが襲ってくるより前に、すでに残り1分を切っていた筈だ。  
(このままここで時間いっぱいまで待てば……)

バキヤアアアアアアア

「引き籠もらせるわけがないだろう……タスク牙だ!!」

氷の壁が壊れて、ジョニー・ジョースターがすぐそばまで接近する。

「またか、ジョニー・ジョースター!」

氷を出して防御……間に合わない!

更にそこへ、カラスの大群に群がられながら、しかしダークシャドウで守りを固めた  
緑谷チームが突貫してくる。

「緑谷もかッ!」

しかし次の瞬間、守りに徹していた緑谷チームが突然守りを解いた。

唯一身につけていた70ポイントのバンダナはカラスに奪われた。

(しまった……！ あいつが持っているのは70ポイントのハチマキだけだ。それが無くなればカラスは寄って来なくなる。つまり！)

「攻撃に集中できる！ 常闇君!!」

「ダークシャドウツ！」

「ソノバンダナヨコセエエエエエ！」

正面から緑谷チームのダークシャドウ

「ウオオオオオオオオオオ!!」

横からはジョニー・ジョースター

そして今にもカラスの爪がバンダナを搔っさらいそうだ。

「こんなところで……負けてたまるかッ!!」

ブオオオオオオオオオオオ

轟の左手からとてつもない量の火炎が放出される。

「なにつ!?! クソツ、くらえ轟!!」

ドバン! ドバン! ドバン!

それは迫っていたカラスを一掃させただけに留まらず、ヴァルキリーを驚かせて足を止めさせた。

苦し紛れに撃った爪弾も、あらぬ方向へ飛んでいつてしまう。

「まだ……だッ!」

緑谷は諦めていなかった。

その目に黄金のような輝きを宿し、右手を仰ぐようにして炎を消し去った。

(俺は………何を……!?!)

今し方自分のした行為に目を見開いて左手を凝視する。

その隙を逃すわけにはいかないと、緑谷は手を伸ばした。

「タイムああああアップ!!」

その瞬間、会場を歓声が包んだ。

最後の最後まで結果のわからない接戦だっただけに、その盛り上がりも凄まじかった。

「それじゃあ上位4チーム発表して行くこうかあ!! 1位、轟チーム! 2位、爆豪チーム! 3位、鉄哲……ってあれ!? いつ挽回したんだあ!? 3位、ジョースターチーム!」

順位がモニターに表示されるのを見て、ジョニイは口田に向き直った。

「口田君……君には本当に借りができたな」

それに対して口田はまたしても手と首をちぎれそうなほど振って否定する。

「まだ謙遜してるのか……いい加減に認めろよ。このポイントは君のクラスたちが取ってくれたものなんだぜ」

「……………そ、そうかな……」

「その通りさ。だけど…決勝では容赦しないからな」

それだけ言つて、ジョニイは口田の元を離れた。

「それじゃあ1時間ほど昼休憩を挟んでから、決勝戦だ!! SEE YOU AGAIN

N!!」

## 体育祭の巻 ⑤

「昼休憩が終わり、最終種目の時間だあ！　だがその前に失格者の皆に朗報だ。あくまでも体育祭！　全員参加のレクリエーションがあるぞ！　そして会場を盛り上げるために、本場アメリカからチアリーディングのみんなが……おや？　A組女子もチアの格好々？　どんなサプライズだこりゃ」

プレゼントマイクの疑問も最もだろう。僕も何が起こってるのか全然理解できてないんだからな。

ありのまま起こったことを話すと、『A組女子がチアの格好をしていた』。何が起こったのかわからなかったし、理解もしたくなかった。

まあどうせ、鼻の下を伸ばしてサムズアップしあってる峰田と上鳴が何かしたんだろう。

「騙しましたわね峰田さん上鳴さん！」

八百万が怒って2人の名前を呼んでいる。やっぱりそうか。

正直言ってその姿は眼福だった。表には絶対に出さないけど感謝しているよ。こんな光景滅多に見られるものじゃないんだからな。

「気を取り直してレクリエーションの後には最終種目！ 決勝進出者4チームからなる14名によるトーナメント方式の対一のガチンコバトルが待っているッ！」

「それじゃあまずは、トーナメントの組をくじで決めちゃうわよ！ 組が決まったらレクリエーションを挟んで最終種目に移ります。進出する14名は、レクに参加するもしないも個人の自由です。体力を温存したいって人もいるだろうからね」

なるほどな…参加しなくてもよさそうだ。

スローダンサーが出られない以上、僕の最終種目での相棒はジャイロのヴァルキリーになる。少しでも連携をスムーズに行えるようにしておきたいからな。

「ではくじ引きの結果、こうなりました!!」

第一試合

緑谷VS口田

第二試合

轟VS瀬呂

第三試合

発目VS飯田

第四試合

上鳴VS芦戸

第五試合

常闇VS八百万

第六試合

ジョースターVS切島

第七試合

麗日VS爆豪

最初の相手は切島か。たしか個性は硬化だったはず。爪弾は弾かれるだろうけど、強化した牙なら攻撃が通るだろう。近寄せせないようにしなければ。

ジョニーが切島に対して作戦を練っている時、切島もまた作戦を考えていた。

自分でできるのは硬化すること。だったら下手に考えて小細工をするよりも、弾を撃たれる前に懐に入るのが良さそうだ。

「それじゃあ最終種目のことは一旦置いて！ 全員楽しみまくれエエ！ レクリエーションの時間だあー！」

花火が上がりに、レクリエーションの時間がやってきた。借り物競走や玉転がしなど、規模は大きいが一般的な競技が問題なく進行されていく。

盛り上がる競技場とは裏腹に、レクリエーションに参加せず体力を温存する道を選んだ上位14名たちは各々の時間を過ごしていた。

ある者は対策を立てる。集中する。備える。緊張を誤魔化す。自分の世界に入る。いつもなら十分にあると思える時間が、この時の彼ら彼女らにとっては刹那に等しかった。そしてあまりにも短すぎる休息は終わりを迎えた。

レクリエーションは終わり、競技場の真ん中には教師のセメントスの個性によって舞台が形成される。

生徒たちは専用の客席に座り、今か今かとその時を待っていた。その中には車椅子に乗ったジョニー・ジョースターの姿もあった。

第一試合は緑谷出久VS口田甲司。しかしジョニーはこの試合に興味はなかった。プレゼントマイクの選手入場&紹介により会場は大盛り上がりだ。

(生き物を自在に操る男VS超パワーの持ち主の対決……そこだけを考えるのなら口田

に勝機がある。さっきの準備時間に大量の生き物を操っておいて、それを一気に食らわせる。緑谷といえどひとたまりもないだろう」

「それでは第一試合！ STARRRRRTオオオ！」

試合開始と同時に緑谷が走り出した。個性も何もない真っ直ぐな走りだ。対して口田は狼狽るだけ。

（彼の性格はあまりにも優しすぎる……さっきのクラスの突撃だって、僕が何度も発破をかけてようやく了承してくれたくらいだ）

そんな優しい男が、そう何度も動物たちを危険に晒すような行為に及べるわけがない。

がむしやらに緑谷と戦おうとする口田だが、爆豪を相手取るほど分析能力に秀でた緑谷に敵うはずもない。

一本背負いで地面に叩きつけられ気を失ってしまった。

「勝者！ 緑谷出久君!!」

その後の試合も対戦相手になるかもしれない生徒の戦力分析をしようと見ていたが、満足にできなかった。

第二試合。動き回る瀬呂に対して轟が大氷山を形成。開始1分程度で瀬呂は行動不能に陥る。

第三試合。発目のサポートアイテムをつけられた飯田が彼女の宣伝に散々利用された拳句、発目の辞退で決着。

第四試合。上鳴の大放電で芦戸は気絶。

第五試合。一番懸念していた八百万は、武器生成前にダークシャドウの押し出しで場外。

全く分析も何もできずに、あつという間にジョニイの出演が来てしまった。

「硬化はどこまで硬くなれるのか!! 1年A組! 切島鋭児郎!」  
とにかく今は目の前の敵に集中しなくては。

「爪だと思って侮るな! 1年A組 ジョニイ・ジョースター!!」

歓声を浴びながら舞台上上がった。目の前にはやる気満々の切島がいる。ヴァルキリーも釣られて鼻息を荒げるのを、どうどうと落ち着かせる。

「それでは両者、準備はいいわね!! スターアード!!」

ミッドナイトの鞭が地面を叩き、それを合図に切島が全身を硬化して、更にクロスさせた手で顔を守りながら突っ込んできた。

単純だ。しかし、『単純だからこそ強い』

硬くなるということは刃物や銃弾が効きづらくなるという利点だけじゃない。常人ならただの手刀でも、切島がすればそれは立派な『武器』になる。攻防一体の個性だ。

それに対してジョニイの爪弾は切島の硬化した身体に当たっても、せいぜいが痛痒い程度のものだらう。だからジョニイに対して距離を詰めるというのは効果的な戦法だった。

「くそっ!」

鉄壁の壁が迫った。たまらず後方へ大きく回り込んだ。その間にも爪弾を発射するが硬い皮膚に弾かれる。牽制程度にはなるだろうが、決定打が無かった。

いいや決定打はある! 回転を正確にしたタスクならあの装甲も貫けるだろう。

それは回転に集中する時間があればの話だ。

難しいことは考えず突っ込む切島の戦法は、図らずもタスクの使用を阻止していた。

「痛くも痒くもないぜッ!!」

「――A切島！ 弾幕の中を無理やり突っ切っていくツ！ 全く歯がたつてねエエ！」  
ジョニイの逃げが切島の勢いに拍車をかける。ヴァルキリーが避けてから、その場へ切島が到達するまでの時間が短くなっていた。

まだ一回戦だ。下手な体力の消耗があつてはこの先の敵に勝つのも難しくなつていく。  
なにより馬を傷つけさせるわけにはいかない

「やるしかない！」

切島がまた突撃して来たとき、その瞬間に勝負を決めるしかない。

馬から降りたジョニイを見て切島の動きが止まり硬化も解けた。ジョニイが機動力を手放したことに驚いているんだろう。

「……で――Aジョースターが馬から降りた――！ まさか降参するのかア!!」  
プレゼントマイクの声は盛り上がり欠ける決着を想像して不安そうだ。  
シルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシル

爪を回転させる。右手は前に突き出し、左手は引いて構える。会場が湧く。次の攻撃が決着だと誰の目からも理解できた。

切島が硬化して突っ込んでくる。もっと引き寄せるんだ。互いの位置は舞台の端と端。距離がありすぎる。

「ハッ！だッ!!」

手を伸ばされたら届きそうな距離で、ジョニイは両手を思い切り水平に振り払った。

スパアアン！

手の動きの軌跡に合わせて切島の脚と腹部が裂けた。遅れて血が吹き出し、膝をついて切島は舞台に倒れた。

会場が騒然となる中でジョニイは人差し指の爪弾を回転させてタスクを撃てる状態になっていた。

「切島君戦闘不能、ジョースター君の勝利！早く！担架持つてきてッ！」

壇上のミッドナイトが大慌てで救急隊を呼ぶ。次いでセメントスが倒れた切島を舞台のセメントで覆い隠した。

しかし今更隠しても無駄だった。ジョニイが切った瞬間は生中継され、全国に広がっ

てしまった。メディア陣も慌てて画面を変えるが、観客を含めて見ていた人数は少ない。

「ヴァルキリー、こっちにきてくれ」

しかし当人は、馬を呼んでその背に乗り悠々とステージを後にした。

後悔は無かった。罪悪感も無かった。どんな手段だろうと、勝利することが重要だった。切島に向いていたジョニイの意識は、すでに次の対戦相手のことを考えていた。

（僕の爪の回転……やっぱり出来た。これなら接近戦もある程度は……）

馬を休める為に厩舎へと向かう。

次の対戦は爆豪と麗日だ。爆豪の能力を分析する為にも、麗日には頑張ってもらいたいな。

## 体育祭の巻 ⑥

第七試合。爆豪VS麗日の対決でジョニーが得られたものは無かった。厳密にいえば麗日の個性で瓦礫を上空に溜めて一気に降らすという技以外は、爆豪の奥の手などを垣間見ることは出来なかった。

選手待機室でジョニーは車椅子の背にもたれかかって目を閉じる。まぶたの裏に微かに蘇るのは第七試合で見せた麗日の顔だった。

彼女は何がなんでも勝つという「執念」を持っていた。それでも爆豪には勝てなかった。その理由を考えたととき、真っ先に思い浮かぶ理由は純粹な強さの違いだ。

しかし、本当にそうなのだろうか。何か根本的なところで違う気がする。「個性」だとか「センス」だとかじゃない。もっと別の理由があるのでは。

思考の渦の中にいたジョニーを引き戻したのは、第二回戦の開始を知らせるアナウンスだった。

次はたしか緑谷と轟の対決だったか。釈然としないままだが、轟の攻略法を少しでも知っておきたかった。通路の中まで響く歓声を聞きながらジョニーは静かに車椅子の

車輪を回した。

第二回戦、緑谷VS轟の展開はまさに衝撃的であった。

開幕一撃で仕留めようとした轟の氷を、真正面からいわゆるデコピンの風圧で吹き飛ばす。その繰り返しだったが、轟は氷を出しているだけなのに対して緑谷は一撃ごとに指を一本ずつ犠牲にしていた。

限界の見えない氷に対して10回しか使えない手。無謀としか思えない策だ。

「スマアーツシュユ！」

また一本犠牲にした。使用済みの指は内出血どころか内部はめちゃくちゃだろう。赤黒く変色した指と緑谷の表情が見るものに鮮烈な痛みを伝える。対して轟は未だに無傷なうえ、クールな立ち振る舞いを崩さない。実力差は歴然だった。

「ス……ツマアアアツシュユ!!」

それでも緑谷は諦めていなかった。変わらず迫る氷を指をまた一本犠牲にして崩す。「いい加減に……倒れてくれッ!!」

このままでは埒が明かないと判断した轟は先程までの何倍もの氷を形成する。デコピンではこの氷の津波を破壊できない。そう察した緑谷は唯一無事だった左手を握り込んだ。

「スマアアー……ツシュー……！」

さつきまでとは比べ物にならない衝撃波が、大氷山をいともたやすく吹き飛ばした。残っていた左腕を代償にした攻撃は氷の破壊で相殺され、轟の体を軽く後退させるほどしか出来なかった。

「うおっ！ スゲー風だな……さむっ！」

その風圧は、今し方たどり着いたジョニイの元まで届いた。通路の中まで届いていた冷気が、外に出ると一層増して身体を震わせる。

まさか決着がついたのか？ 目を凝らして会場の中心にある舞台を見た。緑谷と轟が立っていた。まだミッドナイトの審判は出ていない。間に合ったようだ。

「なんだありや、緑谷出久……ネジがぶっ飛んでるんじやねーのか」

とても無事とな思えない腕の破壊状況だった。右手は指が全て赤黒く変色している。左に至っては腕ごと赤黒くなっていた。脳内麻薬などもう機能してないだろう。

轟の方も明確な負傷はなさそうだが、右半身に霜がおりている。それがどんな意味を持つのか、轟が攻撃したことでジョニイはすぐに理解することになった。

「轟の氷が、遅くなっている……そうか！ どんな個性だろうと弱点がある。あいつの個性は使えば使うほど、身体を酷使していくものだ！ だからいつもすぐ決着をつけよ

うとしていた」

これで突破口が見えた。そう思ったジョニーだったが、ふと轟の個性名を思い出した。

「半冷半燃……思い返してみれば、たしか第二種目だ。あいつは左側から炎を出している……なんで使わないんだ……」

使いこなせていないのか。それとも何か制限があるのか。どちらにしろ使えないのならチャンスだった。

「しかし……さつきから全然動かねえな。何してんだあいつら」

さつきまで盛り上がっていた観客も突然の戦闘中断にどよめいていた。よく見ようと前の列に行こうとした途端に舞台が燃え上がった。

驚いて転がり落ちそうになるのを誰かが止めてくれた。だが礼を言ってる場合じゃない。

「使えないんじゃないのか!!」

騙されたわけではない。それでも叫ばずにはいられなかった。これで奴の弱点は無くなってしまった。

直後、とてつもない熱を含んだ衝撃波が会場を揺らした。

「この衝撃はッ!!」

車椅子など簡単に吹き飛ばされる衝撃に目を瞑った。風が痛いほど叩きつけられる感覚がするが浮遊感は無かった。

風が止み、目を開けられるようになった。

「まったく……ヒーローの卵つてのはどいつもこいつもあんななのか？ オレは相手したくないな」

小声だが聞き慣れた声だとわかった。振り向くと男が立っていた。縦に棒状の穴が放射状に空いた帽子とゴーグル。その下から覗く気怠げな眼がこちらを見た。ジャイロだ。

「どうしてここに？」

「どうしてって……ここは客席だけ。お前がここに来たんじゃないか」

ジャイロが指差す方を見ると、少し離れたところにA組のクラスメイトが座っていた。なんてこった。出るところを間違えていたのか。

「緑谷出久君 場外！ 勝者！ 轟焦凍君ッ！」

「えっ！」

歓声が上がる。凄まじい対決を魅せてくれた両者に対して惜しみなない拍手が送られ

る。

急いで舞台へ視線を戻したが、轟はすでに舞台を降りていた。緑谷は地面に大の字に伸びていた。

「ちよつと……待て！ おい！ いまどうなつてた？ 最後までなつてたんだよ！」

ジャイロに聞いても本人も歓声を上げているせいで全く届いていない。しかも車椅子を掴まれているから掴みかかることもできない。

「おいジャイロ！ おしえろオオオオ……!!」

必死の叫びは会場の拍手と大歓声という海の中に溶けて消えた。

第二回戦は飯田VS上鳴だ。芦戸を無差別放電で倒した舞台の全てが射程圏内の上鳴に対して、飯田の個性は『エンジン』だ。結果は見えていた。

エンジンがあろうと放電の速さには勝てない。そのはずだ。しかし舞台上の上鳴の表情は決して侮っているものではない。ここへ来て慎重になったのか、あるいは上鳴が知っている飯田の何かを警戒してるのか。

そうだ、飯田と上鳴は騎馬戦で同じ班だったではないか。上鳴が飯田の奥の手を知っているにしても不思議じゃない。

「では第2回戦！ スタートツッ!!」

勝負は一瞬だった。今度は見逃すまいと目を凝らしていたが、眩い光で目を閉じてしまった。次に目を開いた時には、決着がついていた。

「上鳴君、場外！ 勝者！ 飯田天哉君！」

舞台がしんと静まり返っていた。どよめきも起こらなかつた。皆が言葉を失っていた。ジョニイは何が起こつたのかと同じく困惑していた。

「ウエ、ウエ~~~~??」

場外に倒れた上鳴は一度に大量の放電を行った反動でアホになっているが、飯田は違つた。舞台上で未だに立てずにいる飯田は、刹那に等しい時間の、濃密な戦闘を思い返して冷や汗をどつとこいた。

上鳴が警戒して、そして飯田が使用したのは騎馬戦でも使用した奥の手だった。名前はレシプロバースト。エンジンの回転数を急速に上げて一気に最高速度に達することができる技だ。

それを飯田は試合開始と同時に発動した。上鳴の全方位放電に勝つには、それより早く突き飛ばすしかないと悟つたのだ。

上鳴もそれを理解して警戒していた。その結果、攻撃が届くのが早かつたのは上鳴の方だった。命中した電撃は飯田の意識を飛ばしかけていた。しかし飯田の超加速はす

でに始まっていた。

一度勢いがついたものは急停止できない。

歯を食い縛り意識を飛ばされることだけは耐えた飯田はまっすぐに飛んでいき、真正面にいた上鳴に命中。飯田のスピードがそのまま衝撃になり上鳴は吹き飛ばされてしまった。

しかし、もしも上鳴がその場から動いていたら結果は変わっていただろう。結局は個性発動の為に動けないが。

あまりにもギャングブルの要素が強すぎだ。遅れて上がった歓声をその身に受けながら、飯田はそのままを想像して反省した。

テレビの画面を切って待合室を出ると壁越しに聞こえていた歓声の音が増した。

第三回戦の用意はすぐに整った。スタッフに促されるまま選手の入場口に着く。まっすぐ伸びた通路の中は暗く、出口はひどく眩しく感じた。対照的なそれが緊張感を煽った。

見えないが、このずっと先にいる爆豪も同じ気持ちなんだろうか。浮かびそうになる悪いイメージを払拭するように頭を振った。自分で不安感を増してどうする！

バチーン！

両手で頬を強く打った。破裂音と痛みが無理やり気を引き締めた。

「……よしー」

準備はできた。あとは徹底的に爆豪勝己という一人の男を叩きのめすだけだ。ジョニーが覚悟を決めてから、時間を置かずにミッドナイトの号令が飛んだ。

「1—A、爆豪勝己君。同じく1—A、ジョニー・ジョースター君。舞台上へ」

暗い通路から明るい舞台へ出ると、眩しさに目を細めた。舞台上が上がって、その中心まで車椅子を進めた。もう慣れたのか、観客はそれほど困惑していなかった。

「おい、爪野郎」

向き合った爆豪が静かに言った。いつものキレているイメージとは違った。

「クソ赤髪にやったあの技、もしやらなかったらブツ殺すからな」

爆豪の手が爆破する。なんとなく、全力でこいと言われていることが理解できた。それにジョニーは爪を回転させることで返事した。

「心配いらぬ。その悪人面が悔し涙で見えなくなるほど味わわせてやるよ」

「ンだとゴラアア!!」

おお、キレた。ヒーロー志望とは思えないほどのいつもの悪人面になった。審判のミッドナイトも苦笑いしている。

「一応これ全国に流れてるから、あんまりシヨツキングすぎるのは勘弁してほしいわ……」

ミッドナイトの心配をよそに闘志全開のジョニーと爆豪だった。

「それでは第二試合！ スタート!!」

開始の宣言がされた直後、爆豪が後ろ手に爆破を起こした反動で飛んできた。爪弾で応戦するが、爆豪の人間離れた反射神経が右へ左へとかわす。

獰猛な笑みを浮かべて迫る姿に強さを再度確認させられる。出し惜しむことなく両手の爪を回転させる。

シルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシル

切島は硬化の個性を使っていた為に切り裂く程度で済んだ。空気を裂く音を出しながら回転する爪は、刃物とは比較にならない凶器だ。

「チツ……」

構えるより早く、爆豪の戦闘センスは撤退を選んだ。爆破を目眩しに使って後ろに下がったところへ、ジョニーは両手の爪弾を一斉に射出した。

ドバアアン

シヨツトガンのように打った爪弾が爆煙の中に消えてすぐ、一際大きな爆発が起こった。爪弾を吹っ飛ばした爆発は煙も吹き飛ばし、無傷の爆豪の笑みが見えた。

歓声が上がる。どちらに対してなのか分からないこれは、きつとこの戦いに対しての歓声だろう。

「くらえッ!!」

両手を向けられた爆豪はもう一度空中に飛び立った。マシンガンのように打ち続ける爪弾を、ジェット機以上の機動力でかわしていく。

全く当たらないどころか、爆豪との距離は縮まってきていた。

人間なのかこいつ?! 縦横無尽に飛び回り段々と近づいてくる姿は冷徹な殺戮マシーンを彷彿とさせた。

撃ち続けながら手を合わせた。もちろん祈る為じゃない。左手からは爪弾を発射し続け、右手の爪弾は回転したまま留めておく。

接近してきたところで切り落としてやる! 弾幕が薄くなったことで、目論見通り爆豪はすぐ近くまで迫ってきた。

「あと4メートル……3メートル……いまだ!!」

射程距離まで近づいた。どこでもいいから当たれば勝ちだ。勢いよく右手を振ろうとした瞬間、爆豪と目があつた。

凜猛な獣のような目だった。それに威圧され思わず切断に使っていた爪を発射してしまった。

「なに!!」

初めて爆豪が焦りを見せた。発射した爪弾を空中で無理な体制でかわそうとするが、至近距離だったことで全てをかわすことはできずに左上腕部に一発、腹部に二発が命中した。しかしそのまま倒れることなく、爆破で離脱する。

「やりやがったなクソ爪野郎オオー!!」

撃たれた箇所を抑えて吠えた。この隙を逃すものか。人差し指を向けてタスクの発射体制になった。短時間で歪んだ回転が正しいものになる。これなら行ける。

「タスクッ!!」

ドギユウウウウウ!!

威力も速度も増したタスクが発射された。かわそうと動いた爆豪だが、撃ち込まれた傷の痛みで一瞬動作が遅れた。決まった。そう思った。

ドッグオオオオオオン

「なん……………だつて!?!」

これまでと比にならない規模の大爆発が起こった。爆風が車椅子を揺らして、反射的に抑え込んだ。

「死ぬえええええええええ!!」

聞き慣れた爆声と共に爆豪勝己が真正面から飛んできた。爪弾で迎撃しようとするが抑えていた手を上げるには間に合わない。

テンションが最高潮に達した観客。

止めるべきか迷うミッドナイト。

手をこちらに向けてくる爆豪勝己。

まるで死ぬ間際のように、全てがゆっくりに感じられた。

「M<sup>モ</sup>o<sup>ヴェー</sup>v<sup>レ</sup>e<sup>レ</sup> c<sup>クル</sup>r<sup>ス</sup>u<sup>ス</sup>s」

ヒソヒソ

全てがスローに見える中、視界の片隅で何かが動いた。なんだ？ 何を言ってるんだ。

「M<sup>モ</sup>o<sup>ヴェー</sup>v<sup>レ</sup>e<sup>レ</sup> c<sup>クル</sup>r<sup>ス</sup>u<sup>ス</sup>s」

ヒソヒソ

それは小さな生き物のようで、しかし見たこともない姿をしていた。

「M<sup>モ</sup>o<sup>ウ</sup>v<sup>エ</sup>e<sup>レ</sup> c<sup>ク</sup>r<sup>ル</sup>u<sup>ス</sup>s」

ヒソヒソ

それは、僕の足に向かって囁いた。

ドバアツ

靴を突き破って足の爪が発射された。全く予想外の場所から撃たれたそれはまっすぐ爆豪の顔面に飛んでいった。

「うげっ!!」

爆豪がのけぞって吹っ飛び床に倒れた。だがそんなことはどうでもいい!! 爪を………発射した………この力は………!! 動かない僕の足から!!? こいつがぼくを危機から守ったって事なのか!?

「動かないぼくの足から爪が発射されたああああー………ツ!!」

叫ばずにはいられなかった。動いたのだ!! もう動かないが、爪を発射している時に足が動いたツ! こいつはなんなんだ!?

肩に寄るようになっているそいつは、よく見ると透けている。実体じゃない……こいつは何者なんだ……敵なのか!?

バゴオオオツ

「ぐええっ!!」

ガシヤアアアンツ

思い切り突き飛ばされ、車椅子ごと舞台の外に倒れた。痛みが加わり更に混乱する頭を抑えて見上げると、舞台の上から爆豪が見下ろしていた。

「ジョニイ・ジョースター君、場外! 勝者、爆豪勝己君!」

歓声と拍手が上がる中で状況についていけないジョニイは、自分のいる場所と爆豪とを何度も見比べた。

「なっ……マ……待て!! なんで……なんで無事なんだ!?!」

「さアな……勝手に混乱してろ」

混乱と敗北感が身体を重くしたジョニーを置いて、爆豪は静かに舞台を後にした。  
あと少しだった……………

あと少しだったというのに気を抜いてしまった……………!!  
敵を前に目を離してしまった……………!!

「くそおおおおおお—————ッ」

こうして、ぼくの雄英体育祭は幕を下ろした。

## 名は体を表す

波乱の体育祭から休日を含んで登校日になった。今日からまた普段通りの授業が行われる。そう思っていた。

「なあジョースター！ おまえは休日どうだったよ」

「……………そういう君はどうだったんだ？ 切島」

「オレか？ オレは大変だったな、他にも怪我大丈夫かって心配されたり……………あ！ 別に責めてる訳じゃないからな」

切島が急いで弁明した。

「別にいい……………それより傷は大丈夫なのか？」

自分のせいで後遺症が残ったなんてことは、勘弁してほしかった。「いいや」と大丈夫であることを表すように腕を回す切島。

「よかった」

本心からの言葉だった。

「ところで、君は爆豪と仲が良かったよな？」

「おう。というよりオレがついてって感じだけだな」

少し照れ臭そうに切島は言った。

「あいつにそれとなく聞いてほしいんだ。どうやって僕の爪弾をかわしたのか」

第二回戦の最後に放った爪弾は完全に不意打ちの形だった。頭に命中したと思ったのに、爆豪は無事だったのだ。

「おまえが聞けばいいんじゃないか?」

最もな言葉だった。しかし、それは相手が爆豪以外だったらの話だ。

「じゃあ聞いて教えてくれると思うか? あのクソをつけないと会話できない爆豪が」

「ひでえ……けどそれもそうだな。機会があれば聞いとくよ」

「ああ、頼んだ」

去っていく切島の背中から、自分の肩にいるそいつに視線を移した。

「見えてなかった……」

会話中にこっそりと爪を回転させて出現させていたが、切島はこいつのことを全く見ていなかった。肩でふわふわと浮いているこいつは一体なんなんだ。生き物のようであって、つぎはぎの人形のようにでもある。

「チユミ……」

あれからこの生き物（名前はタスクにした）は体育祭の時のように喋らなくなった。ジャイロに確認してもらおうと、モヴェーレ・クルースとは英語ではなくラテン語で意味

は『脚を動かせ』。

下半身付随の僕に対する嫌味なのか、それともこれは回転により僕の足が治ってきてる兆候なのか。

しかし、何もわからないままということでもなかった。これまでは意識しないと正しい回転にできなかった爪が、自然と回転できるようになっている。これだけでも大した進歩だ。

「全員席につけ……って、ついてるな」

相澤が入ってきた途端に、あれだけ騒がしかった教室が静まり返る。

「今日のヒーロー情報学、特別だぞ」

間髪入れずに相澤が言った特別という言葉に、自分を含めた何人かの生徒が苦々しく反応した。

小テストでもしようってことか？

「コードネーム……ヒーロー名を決めてもらう」

「胸膨らむやつきたああーッ!!」

すぐに相澤が睨みをきかせて静かにさせた。

「こないだの体育祭を見ていたプロヒーローから、ドラフト指名がきている。本来なら経験と訓練を積んだ2、3年が受けるものだが、まだ一年生である君たちの指名はその

ままこれからの成長への期待度を表している」

「指名の数がそのままハードルになるんですね！」

「その通りだ」

葉隠の言葉に肯定した相澤が、手元の装置を起動させると黒板にグラフが表示された。

「例年ならもつとバラけるんだが、特に注目を集めた二人に集中したな」

相澤の言う通り、轟と爆豪の横に表示された指名数は4桁。二人に次いで多い常闇は360票と圧倒的な差があった。

「たあー！ 白黒ついた！」

「見るめないよねプロ！」

「一位轟二位爆豪って……………」

「体育祭と順位逆転してんじゃん」

「表彰台で拘束されたやつとかビビって呼べないって」

「ビビってんじやねーよプロが！」

「……………流石ですわ轟さん」

「ほとんど親の話題ありきだろ」

「わああ〜！ 指名来てる〜！」

「緑谷、無いなあ〜……あんな無茶な戦い方すつから怖がられたんだ」

「お前も全然だな……あれだけ頑張ったのによ」

「しょうがないとジョニイは納得していた。これが将来への期待というなら、下半身不随の生徒に期待するものは無い。」

「これを踏まえて指名の有無に関係なく、いわゆる職場体験に行ってもらおう。お前らはU S Jの時に一足先にヴィランとの戦闘を経験してしまったが、プロの活動を実際に体験して、より実りある訓練をしようってことだ」

「それでヒーロー名か。」

「まあそのヒーロー名は仮ではあるが、適当なもんは………」

ガラッ

「付けたら地獄を見ちやうよ!」

教室の男子生徒が一気に反応を示した。

「学生時代に付けたヒーロー名がそのまま認知され、プロ名になる人多いからね!」

「傲慢の身体を見せびらかすように教室に入ってきたのはミッドナイトだった。男子生徒……特に峰田の視線が釘付けになっていると、後ろを見ずともわかった。」

「ま、そういうことだ。その辺のセンスの査定をミッドナイトにお願するってことだ。オレはそういうのできん。将来自分がどうなるのか、名をつけることでイメージが固ま

りそれに近づいていく。それが、名は体を表すってことだ」

自分のヒーロー名。考えたことのないものだった。前の席から配られてきたのは一本のペンと真っ白なボード。これの中に書いた名前が将来の自分が呼ばれる名前になる。

自分になりたいヒーロー像とは何か。

子供の頃に憧れたのはオールマイトのような力強く立ち向かう者だった。でも今は違う。僕はまだスタートラインにすら立っていない。だというのに、ここではるか先の名前を決めるなんて出来るのだろうか。

「じゃあそろそろ、できた人から発表してね」

答えが出ないまま、発表形式という事実を更に加えられて一層のこと決めにくくなる。

「じゃあ行くよ」

最初に前に出てきたのは青山だった。自信満々に出てきた彼が高々と掲げたボードには、短文が書かれていた。

「輝きヒーロー……I can not stop twinkling! 訳して、キラキラが止められないよ!」

「そこはIをとって、Can tに省略した方がいいね」

「そこね、マドマーゼル」

英語なのか、それともフランス語なのか。わけのわからない発表を終えた青山は満足そうに席に戻り、代わりに芦戸が意気揚々と出てきた。

「ヒーロー名、エイリアンクイーン!!」

「2! 血が強酸性のアレを直指してるの!? やめときなつて!」

ミッドナイトも慌てて訂正するように促す。ギャグだったんじゃないのかと思いきや、本気で残念そうに席に戻る芦戸を見て何も言えなくなつた。

「ケロツ、じゃああたし」

まるで大喜利をしているような空気の中で、蛙井が勇敢にも手を挙げた。ギャグで来るのか、それとも本気のやつか。もしギャグをかますのなら、かなり大爆笑フオローを入れてやろうと考える。

「小学生の頃から考えていたの……梅雨入りヒーローフFRロツOPYビー」

「可愛い! 親しみやすくいいわあー! みんなから愛されるお手本のようなネーミングね」

「フロツピー!フロツピー! フロツピー!」

「フロツピー! フロツピー! フロツピー!」

「フロツピー! フロツピー! フロツピー!」

その途端に湧き起こったフロツピーコールは、きつと彼女のネーミングセンスに対してというよりも、この大喜利のような空気を元に戻してくれたことへの喜びだろう。かくいう僕もそれに参加しているのだが。

「じゃあオレも！ 剛健ヒーロー 烈怒頼雄斗」  
レッドライオット

「これはあれね！ 漢気ヒーロー 紅頼雄斗のリスケットね！」  
クリムゾンライオット

「そつす！ だいぶ古いけど、オレの目指すヒーロー像はクリムゾンそのものつす！」  
 「憧れの名を背負うつてことは相応の重圧がついて回るわよ？」  
 「覚悟の上つす」

そこからはどんどんと決まっていた。

「ヒアヒーロー イヤホンⅡジャック」

「いいね、次！」

「触手ヒーロー テンタコル」

「触手のテンタクルとタコのもじりね！」

「テーピンヒーロー セロファン」

「わかりやすい、大切！」

「武闘ヒーロー テイルマン！」

「名が体を表している！」

「甘味ヒーロー シュガーマン！」

「あまああーいーい！」

「Pink<sup>ン</sup>ky<sup>キ</sup>!!」

「桃色！ 桃肌！」

「スタンガンヒーロー チャージズマ！」

「痺れるウ！」

「ステルスヒーロー インビジブルガール！」

「いいじゃん、いいね！ さあ、どんどんいきましよう！」

「この名に恥じぬ行いを……万物ヒーロー クリエテイ」

「クリエイティブ！」

「シヨート」

「名前？ いいの？」

「ああ……」

「漆黒ヒーロー ツクヨミ」

「夜の神様！」

「モギタテヒーロー GR<sup>ッ</sup>AP<sup>レ</sup>E<sup>ッ</sup>J<sup>ジュ</sup>UI<sup>ユ</sup>CE<sup>ス</sup>」

「ふ、ふれあいヒーロー……アニマ」

「爆殺王」

「そういうのはやめた方がいいわね」

「なんでだよ!」

「じゃあ私も……考えてありました。ウラビティ」

「洒落てるじゃない!」

順調に進んだ結果、残っているのは再考の爆豪、飯田、緑谷、そしてジョニイだけだった。

「天哉? 君も名前?」

「はい……」

飯田が終わった。残るは緑谷と爆豪だ。

「緑谷? いいのかそれで……生呼ばれ続けるかもしれないぞ?」

「うん、この呼び名、いままで好きじゃなかった。でもある人に意味を変えられて、僕には結構な衝撃で……嬉しかったんだ。これが、僕のヒーロー名です!」

何か吹っ切れたような顔で緑谷が出したヒーロー名は『デク』だった。

轟の発表の時、実はジョニイも同じように自分の名前をいこうと考えていた。しかし、先を越されてしまった。他に、自分を表した名前はあったらどうかと考えを巡らせ

ている間に残り三人となってしまった。

何か無かったか。昔呼ばれていた名前は……。

「……………そうだ、あつたじゃないか」

ペンを走らせる。もう迷いはなかった。逆にどうして思い出さなかったのかと不思議に思うほど、その名前がしつくりくる。

前に出て、教卓の上にボードを掲げた。

「ヒーロー名 ジョジョ」

「あだ名？ ジョニイとジョースターの頭文字をとって？」

「いま思いつくのは、これだけでした。むかし、僕の尊敬してた人が呼んでくれたんです。だから、僕はこれでいきます」

カチリと歯車が噛み合ったように、ジョジョという名前は僕の中に入った。

「さて、ヒーロー名が決まったところで職場体験に話を戻す。期間は1週間、肝心の職場だが、指名のあつたものは個別にリストを渡すからその中から自分で選択しろ。指名のなかったものは、あらかじめこちらから選んだ全国の受け入れ可の事務所40件、この中から選んでもらう」

話はそこで終わらず、相澤がこちらを見た。

「それと、ジョースターは強制的にボールブレイカーのとこだ」

「はあ!? なんでだよ!」

「お前だけならギリギリ大丈夫なところもあるだろう。だが馬の世話まであるとそこ以外ない。慣れたところだろうが、気を緩めず励めよ」

「いいなあ、ジョースターはもはや自分の家か」

「でも、新しいことを学ぶって面だと出来ることと少くない?」

周りの声突き刺さる。まさにその通りだ。僕はジャイロのところまで学べないことを学びたいんだ。でも相澤の目は反論を許さないと語っていた。

結局、職場体験先はジャイロのところになりそうだ。

「でも大丈夫なんですか……? ジャイロのところは最近依頼が来たのを見てないんですか……」

「その点なら心配するな。うちからボールブレイカーにいくつか仕事を斡旋する」

「そ、そうですか……」

そして、僕の職場体験は始まった。

始まったのだが……………

「あの根暗教師があああー!!」

僕らがたどり着いたのは、田舎なんて言葉が可愛く思えるような、西部劇のような町だった。

## 私欲に塗れた職場体験

トウモロコシ畑だ。どこまで続くのかと考えさせられるその中に、地元住民が作った通り道がある。さんさんと輝く太陽が容赦なく肌を焼き、時折吹く風が葉擦れの音と共に涼しさを運んできた。

その道を進むこと1時間と少し。小さな田舎町が見えてきた。

人口は100人にも満たないかもしれない。集落といった方がいい。まるで西部開拓時代に放り込まれたようだ。強い風が吹けば砂埃が立つ。そんなところだった。

「スゲツ！ おいジャイロ見ろつて！ あれ映画とかで見る扉だけ。本物かよ……初めて見たなああ」

「あまりキョロキョロするなよ……田舎モンって思われるじゃねーか（ここより田舎があるのか知らねーが）。遊びにきたんじやねーんだ、気を引き締めとけ」

大通りと思われる通りは閑散としていて誰も居なかった。ゴーストタウンのような寂しさがあつた。では自分たちを呼んだのは誰なのか。幽霊が招いたとでも言うのか。西部劇の次はホラー、支離滅裂なストーリーだ。映画なら駄作にも程がある。

そんな感想を頭の中で綴っていたジヨニイはどこからか自分を見る視線を感じた。

まさか本当に幽霊なのか。

考えを振り払うように勢いよく振り返ったジョニーは家の窓にいる人影を見た。覗いていた人影はジョニーに見られたことでカーテンを閉め切つてすぐに隠れた。

一度気づくとよくわかった。他の家も僅かな隙間からこちらを伺っている人がいた。人であることに少し安心するが、今度は別の疑問が浮かんだ。なんでここの住民は外に出ていないのだろうか。

様々な憶測が頭の中で飛び交うも答えは出ないまま、二人は町の奥にある一軒の家の前に来た。

「依頼を受けてきたジャイロ・ツエペリだツ!! 詳しく話を聞きたい!!」

ジャイロの大声が響いた。その声に驚いていくつも纏わりついていた視線が蜘蛛の子を散らすように霧散した。

ジャイロも少し爽快な顔をしたところを見ると、同じようにいくつもの視線にうんざりしてたんだらう。

「可愛い女の子に見つめられるならまだしもよおくく……こんな不気味な視線は気持ちが悪いわね」

「たしかにな……なんなんだこの町は……」

現代離れた風景と明らかに異質な住民たち。ここは異界だ。歴史の一部を切り出

して、現代の枠の中に無理矢理ねじ込んだ結果生み出された異世界だ。その中に僕たちは迷い込んだようなものだ。ジャイロの事務所が途端に居心地の良い場所に思えた。ギイイイ……………

なんてこった。ゆっくりと扉を開けて出てきたのはドワーフだった。逞しい腕と首もと。鍛えられた身体だとタンクトップがはちきれんばかりに主張していた。鼻の下と顎の髭は綺麗に手入れされている。

ギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャル

「おいコラ！ てめえなに回転させてんだ」

拳を振り下ろされた頭はじんじんと痛んだ。なんでだ。明らかに怪しいやつだろう。

「すみませんね、こいつまだ職場体験中で……………まだなんもわかってないど素人なんですわ」

「いやいや、別に気にしてませんよ。間違いは若いうちにやったほうがいい」

「そう言ってもらえてなによりですよ」

庇ってもらった事実を差し置いて、ジャイロと男の半笑いの顔がむかついた。また爪を回転させると面倒なのは目に見えていたので、この場はこらえた。

馬を置いて、荷物から銀色のアタッシュケースほどの塊を放った。地面に触れたそれは大きく広がって、骨組みが展開される。車輪が出来上がり、シートが広がって車椅子

が出来上がった。体育祭後にサポート科に作ってもらった持ち運びできる車椅子だ。

中に入ると、出迎えたのは豪華な内装。ここが避暑地にある別荘と言われても納得できる豪華さだ。

フロアリングに敷かれた絨毯。壁は手入れされた美しい丸太が積み重ねられたようになり、家具も小洒落たものがずらりと並んでいた。

「あの……外の様子は……これは一体……」

「ああ、やつぱり！ 気になりますよねえ……ヘッヘッフツへ」

彫りの深いシワをさらに寄せて笑い、じいさんは自慢げに語り出した。

「実はこの景観を是非とも映画の撮影で使いたいわって声が多くてですね……それで協力した「お礼」でこうなんですわ」

「は……はあ……」

つまり外装は西部劇のままで、内装だけはその協力で得た金でウハウハ状態ってことだ。ついさつきまで異界だのと思っていた自分が恥ずかしい。

小躍りしながら高級そうな絵画の前でこれはいくらしただのと村長は自慢し始めた。

「それで、そんな潤ってる村長がなんの依頼なんだ？ 電話じゃ詳細は教えてもらえなかったが……ある男の捕縛ってことは盗っ人か？」

ジャイロが問いかけた瞬間、ドワーフの村長はピタリと止まり、その場に蹲ってし

まった。

異常だ。ただ聞いたただけの反応じゃなかった。明らかに恐怖を味わった事のある人間の反応だ。

「おい！ 大丈夫かアンタ！」

ジャイロが駆け寄った。

「あ……ああ、大丈夫でさあ……」

顔は青ざめて、あれだけ筋骨隆々だった身体が萎縮してるように見えた。

近くにある椅子を引き寄せて座らされた村長は、ジャイロの介抱でだんだんと落ち着きを取り戻していった。

「すまないね……そう、依頼のことだったね」

そうだ。捕縛する男とはいったい何者なんだ。

「名前はサンドマン……少し前からこちら辺を根城にしましたヴィランさ」

「なるほどな……そいつを俺たちに捕縛してほしいってことか」

「なあ、何か他に情報はないのか？ サンドマンってくらいだから、個性は砂を操るとかか？」

堪らず聞いたジョニイの質問にびくりと肩を震わせるも、村長はぼつぼつと語り出した。

「いいや……わからない。サンドマンというのは、あいつがやってきて名乗ったからだ」  
名乗っただつて？ ヴイランが一般人の元に訪れて何を言ったのだろうか。

「あいつは突然現れてこう言った。『ここは元々、我が一族の土地だ。早急に出て行かぬなら一人ずつ殺していくぞ』……最初は単なる脅しだと思った。だがそれから一週間後、畑の中で町の男のバラバラ死体が見つかったのですッ!!」

そうだ。さっきの怯えの理由はこれだ。彼はそれを見てしまったのだ。そしてその実行犯と出会ったのも彼だったのだ。

「すぐに、ヒーローに助けを呼びました。しかしやってきたヒーローも返り討ちにされ、反撃の手段は失われたと思つたのです」

「そこで、雄英に頼んだと………オイオイオイオイ、そんなこと依頼内容に書いてなかつたぜ？ これつてよオオ〜『詐欺』つてやつじゃないのか？ ン？ そうだろ村長さんよ」

ギクリと、今度は別の意味で村長の肩が跳ね上がった。その肩に手を回して、ジャイロが詰め寄る。

「イケナイ事だよなあ〜……詐欺なんてよおお………それもこんな重大なことを隠して、雄英を騙すなんてことはよお〜」

「おいジャイロ……鏡を見てこいよ。ヴィランが写つてるぜ」



「うわあああああなにしゃがんだテメー!!!」

飛びかかってきた村長を、ジャイロは軽く動いてかわした。そしてどうやったのだろうか。飛び込んできただけの村長の体は急速な縦回転を始めて、そのまま向こう側の壁へ突っ込んでいった。

「ストライク、ニヨホツ」

「キミ……ちよつとやりすぎじゃないか?」

ジャイロの手元の携帯は電気がついていなかった。

「何言ってるんだジヨニイ……これは正当な報酬だぜ。相手は猟奇殺人犯なんだ……それにこれは依頼だ。これくらいの報酬じゃなきゃ命は張れねえって」

「うーん……一理あるな」

「だろ?」

そんな会話を繰り返している間に、パラパラと木片を降らせながら村長が戻ってきた。その足取りは、ここへ来たばかりの時とは比べものにならないほど遅く重いものになっていた。

「チ……チクシヨオオオオオオオ!!! 50%だからな!! たとえ1%だろうと追加は無しだッ! わかったらさっさと捕まえにいきやがれこの厄病神どもがアアアー!!!」

「ニヨホ、交渉成立だっ！」

走り出したジャイロを追って表に出た。待っていたスロウダンサーの背に折りたたんだ車椅子を乗せて、跨って走り出した。

「いくぜジヨニイ！ ゼータクな生活がオレたちを待ってるぜッ！」

「それでいいのか？ 本当にそれでいいのかジャイロ・ツエペリーー!!」

英雄なドクソくらえ。私欲に塗れた職場体験が始まった。

## バンド組む？

トウモロコシ畑の中には道ができていた。根元から倒れたトウモロコシの稲が、天然の絨毯を作っていた。その上でジャイロの鉄球が回転していた。

回転が波紋となって地面を伝わり、その反響が生み出した景色が、ジャイロの瞳に映し出された。常に罨を警戒しながら、鉄球と同じ速度で馬を歩かせる。

その後ろを、周囲を警戒しながら警戒しながら、ジョニイとスローダンサーも続いていた。

「おいジョニイ……こつちだ……。あつたぜ」

指差した先にくつきりとひとつだけ足跡が残っていた。

村に初めてやってきた時、ここは元々自分たちの土地だ、とサンドマンは言っていた。自分のものには、人によって違うが印をつける。それは名前だったり家紋だったりするが、サンドマンにとっての印はこの足跡だ。

不自然に、よく見えるように付けられた足跡は、オレはここだと主張していた。まるで熊が木に爪の跡を付けて縄張りを知らせるように、ここから先は自分のテリトリーだ

と言っている。

ジャイロが馬から降りてその足跡に触れた。温度や潰れ具合から、その時期を推察していた。

ジャイロ・ツエペリという男は、今まではただのぐうたらしてる怠け者というイメージが強かった。

だが、目の前にいるのは別人だった。これがプロのヒーローの凄みなのかと思うと、一緒にいる自分の心まで強くなるような気がした。

「そんなに経ってないな、ほんの一時間前だ」

1時間前はちよūdど2人で村にいた、決して偶然ではないだろう。この足跡は、明確に自分たちに向けられた警告だ。

「どうするんだジャイロ。まさか、すぐ近くにいるんじゃー！」

「落ち着けジョニイ。すでに調べてたが近くにはいねえ」

ジャイロが諭すように言った。それでも安心できないジョニイは、自分たちを取り囲む畑を見渡す。

「オレの個性は、回転と組み合わせることと物を透過してみたりできる、これは前に行つたよな。それにちよつとしたコツを加えてやれば、索敵範囲は一気に広がって半径二十メートルは探せるようになる」

いつのまにか、ジャイロの手には回転する鉄球が戻ってきていた。それを、腰のホルスターに投げ込むように収める。

「もう一度言うぜ、落ち着けジョニー。冷静さを失ったらやられんのはこつちだ」  
説教じみた言葉は、泳いでいた目をジャイロの顔に向けさせた。

「すまない」

ジョニーは、冷静ではなかったと反省した。いつもなら逆に食ってかかるジョニーが、嫌に大人しかった。だが、それを追求してる余裕はない。馬に飛び乗って先へ進んだ。

ジャイロが手を上げて拳を握り込んだ。止まれの合図だ。

今度はゆっくり進めと合図が出た。きつと何かある。その予感の中にした。

トウモロコシ畑が途切れていた。円形の広場のど真ん中に、二階建ての掘立小屋が建てられていた。そばには薪割りの台とそこに突き刺さった斧も見える。その広場の地面には、先程の足跡がいくつもあつた。間違いない。ここがサンドマンの根城だ。

行こうとする僕の肩を叩いた手は、すぐ目の前の地面をみる、と指し示した。何もな  
いと思つていたそこを目を凝らしてみると、ワイヤーが張つていた。そのワイヤーの片側は、地面に突き刺さつた棒に繋がれていて、もう片方は長方形の小さな箱に繋がつて  
いた。

「なっ………これって！」

シイイイイー！！

ジャイロに口を塞がれた。しまった、つい叫びそうになった。ワイヤーの先には、映画でしか見たことのない『クレイモア地雷』が仕掛けられていた。ワイヤーに引っかかったら最後、箱から大量の鉄球が飛び出して、人間をただの挽肉にする兵器だ。

シルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシル

耳元で聴き慣れた回転音がした。ジャイロは鉄球を迷いなくワイヤーに向かって投げた。

爆発する！！

身構えたが、地雷は爆発しなかった。ただワイヤーが切れるプツンという音だけが鳴った。

ドシューウウウー！！

次いで投げられた鉄球が、今度は小屋の壁に命中した。壁が壊される音はせず、鉄球は接着剤でもついているようにピタリとくつついた。

回転し続ける鉄球には眼が搭載されていた。ジャイロの個性の『スキヤン』だ。

「よし、誰もいないな……。いつまでそうしてる気だ？ さっさと捜査するぞ」

呆けたままのジョニイを見かねたジャイロが、頭を小突いた。

せめて何か言ってから投げて欲しかった。その文句を、今は捜査中だと押し留めて後に続いた。

小屋の中は殺風景だった。ほんの少しの調理器具と、それを使った跡くらいで、あとは割れた薪がいくつかがあった。それ以外は、とくに人が住んでいるような痕跡は何もない。

「なあジョニイ。今…歌思い付いた…考えたのよ。作詞作曲ジャイロ・ツエペリだぜ。聴きたいか？ 歌ってやってもいいけどよ」

罨に警戒しながらクリアリングしているジョニイを見ながら、ジャイロはほくそ笑んでいた。

「ずいぶん…君…暇そうじゃあないか……さつきはあれだけ警戒してたクセに」「聴きたいのかよ？ 聴きたくねーのか？ どうなんだ？ オレは二度と歌わねーからな」

よっぽど聞かせたいんだろう。その勢いに負けて、ジョニイは首を縦に振った。「そうか、いいだろう。タイトルは「チーズの歌」だ」

歌手がやるように喉の調子を整えたジャイロは目を閉じた。片手を胸に添えて、もう片手を掲げた姿は嫌に『さま』になっていた。

「ピザ・モッツアレラ」

ピザ・モッツアレラ

レラレラレラレラレラ

レラレラレラレラレラ

レラレラレラレラレラ

ピザ・モッツアレラ

「……………」

「つうー……歌よ。どオオ？ 歌詞の2番は「ゴルゴン・ゾーラ」でくり返しよ。ゾ

ラゾラゾラ ゾラゾラゾラゾラ……………」

「……………」

「どよ？ どうなのよ？」

黙ったままのジョニイに、焦り出したジャイロがしつこく確認した。

「いいよジャイロ！ 気に入った！」

「マジすかッ!？」

評論家のように顎に手を当てて褒めたことに、一番驚いたのはジャイロだった。

「あつ……ヤバイ！ スゴクいいッ！ 激ヤバかもしれないッ！ 耳にこびりつくんだ

よ！ レラレラのとこが……傑作っていうのかな……クセになるよ！ ヨーロッパな

ら大ヒット間違いないかも！」

「マジすか!! マジそう思う? 実はひそかにオレもそう思うのよ。だろオ~~~~!!  
譜面にできる?」

緩み切った空気の中で、馬から降りたジャイロは中であつたヤカンを持ち出した。焚火を起こして水を入れたヤカンを火にかけた。

「レラレラレラレラ」

「ゾラゾラゾラゾラ……………バンド組む?」

## サイレント・ウェイ

「くさいな……」

ジャイロが呟いた。火にかけてヤカンの様子を見ていたジヨニイは鼻をスンスンと鳴らして、自分の服の臭いを嗅いだ。

「たしかにここは暑いな……終わったら村で風呂を貸してもらおうか」

「誰がお前がくさいって言ったよ……たしかにちよつとおうが。オレが言ったのはこの依頼のことだ」

「依頼のことか……あれ、いま臭うって言ったか？」

「あの街は潤っていた、高級そうな家具を買い求めるほどな。だったら、なんでわざわざ詐欺まがいのことをする……それも雄英に対してよ」

「おい、無視すんなよ。いま臭いって言ったよな」

問い詰めてもジャイロは明後日の方向を向いて知らぬ存ぜぬを貫き通して、話を進める。

「猟奇殺人犯がいるって言えば、雄英はもつと沢山のヒーローを派遣する筈だ。なのに

どうして、その事実を隠そうとするんだ……」

「知らないね……ケチなだけなんじゃないのか？」

ジョニイは素っ気なく返した。だが、ジャイロが持ち出したものを見た瞬間、それに釘付けにならずにはいられなかった。

「じゃあ、これはどう説明するんだ？」

「うおおおッ!! 何してんだよ、危ねえだろうが!」

地面に降りている故に逃げ出せないジョニイは、ジャイロが取り出したクレイモア地雷を見て驚愕した。

「さっき仕掛けられてた地雷だ。どうやってやつはこんなものを手に入れたんだ? そもそも、どこで手に入れたのか……」

全く恐れることなくジャイロはペタペタと地雷を触っていた。信管を抜けば大丈夫だが、いつ暴発するかとジョニイは気が気でなかった。

携帯から雄英に連絡してくる、そうやってジャイロは馬の荷にある携帯を取りに行つた。

さつきから、らしくない行動を繰り返している。サンドマンを捕まえれば大金が入る、たったそれだけだというのにどうしたんだろうか。

「あづっ!!」

いきなり、手のひらに熱を感じた。それは瞬く間に皮膚を焼き、ジョニイは反射的にヤカンから手を離れた。手にはヤカンの取手の跡がくつきりつついていた。

変だ。さつきまでタオル越しに持っていたはずが、いつの間にかヤカンを直接持っていた。タオルはどこだと探すと、すぐ近くに落ちていた。

「なんだこれ……………」

拾ったのはタオルの切れっ端だった。タオルは切り刻まれたようにバラバラになって落ちていた。どこかに引っ掛けただろうか。だが、ちよつと目を離していた間にこんな風になるだろうか。

「おいジョニイ……………馬に乗れ、何人か走ってきている」

畑の中から向かってくる足音が聞こえた。サンドマンだろうか。足音が複数なのは、仲間がいるということだろうか。

ザクツ　　ザクツ

「ジャイロ……………小屋の中から音がする…!? ドアの背後でしている、誰かいるぞ!!」

「中はさつき調べたじゃねーか、絶対に誰もいねえ」

音は止んでいた。でも、しっかりとこの耳で聞いた。たしかにドアの向こう側で音がしたんだ。

薪割りの為に突き刺さっていた斧を取って、それでドアを殴りつけた。バラバラと崩

れる木片の向こう側には、さつき調べた時と変わらない様子が広がっていた。人の気配なんて微塵もなかった。

「いいや、たしかに音がした。なんの音だったんだ」

人がいないなら、何か音が出た原因がある筈だ。物が落ちてたり、何か変化が起こっているのは間違いない。

足を引きずって小屋の中を覗き込んだジョニーの後ろで、ジャイロは畑の方角を見ていた。足音の正体が依然としてわからない。すでに半径20メートル以内を索敵していたが、そのセンサーには誰もいなかった。

ダメだ。上から目視するしかない。近くにあったはしごに手をかけようとして、止まった。ジョニーがものすごい剣幕で止めたからだ。

「そのハシゴへ登るんじゃないッ！ 触るなッ！ 斧が……この斧……そのハシゴに触るんじゃない」

振り返ったジャイロは、その焦りのような意味を理解した。ジョニーが先ほどドアをぶち破った時に使った斧が、その鉄の部分が、ズタズタに切り裂かれていた。

ザクウツ！

持ち上げようと動かすと、何にも触れてないのに斧が更に切断された。斧をハシゴにぶつけると、斧が更に細かく切断されて砕け散った。

「……この小屋に触れるな……何にも……今の斧でドアを壊したんだ。タオルでポットの取っ手も握った。何かわからないが敵だ！触れると破壊される！何にも触れるなジャイロ、何かに触れさせようとしているみたいだッ！」

もし一瞬遅れていたら、切り刻まれていたのは自分の方だった。ハシゴに伸ばしていた手を引つ込めて、ジャイロは大きく後退した。足を引きずってジョニイも小屋から離れようとするが、それより早く畑の方に人影が見えた。

あれが誰であろうと、間違いなく敵だ。出てきた瞬間を撃ち抜いてやろうと、爪を回転させた。

ザクツ　　ザクツ　　ザクツ

またあの音がした。

今度はなんだ、と小屋の中を見ると向こう側の畑が見えた。壁が無くなって吹き抜けになっていた。それだけじゃない、見上げたところの壁がひとりでに壊れて落ちていく。

「なんだこれは……ジャイロ！この小屋はやばい！板が……小屋の屋根も無くなっていつている！壊れてこつちに崩れてきているぞ！」

さつきまでたしかにあつた小屋は見る影もなくバラバラになつていた。その一部が、下にいたジョニイの手に触れると足先が切り刻まれて靴の一部と共に吹つ飛んだ。

「ジャイロ！ この小屋は危険だツ！ この敵は僕らを罠で取り囲む気だアー！」

この時を見計らつたかのように、畑にいた人影が飛び出した。

馬に乗つたそいつはまっすぐこちらへ突つ込んできた。

「こいつがツ！ 『サンドマン』!!」

その後ろを見たこともない生き物が何体も追従している。凶鑑とかで見たことのある恐竜に似ているが全然違う。二足歩行の謎生物から、人間の足音が聞こえていた。

「ジャイロ！ 馬たちもこの小屋から離さないとマズイ　クソツ!!　同時にやること  
が多すぎるツ！　ぼくが歩けない事を攻撃に利用しやがってるツ!!　行けツ!!」

ヴァルキリーとスローダンサーの目の前を通るように、爪弾を撃ちまくつた。二頭とも驚いて逃げ出したが、状況は最悪のままだ。

「警告は一度だけだ！　そこで止まれ!!」

鉄球を構えてジャイロが言うが、男は全く速度を落とさない。即座に投げられた鉄球は、男の喉を直撃した。しかし鉄球はまるで風船のように破裂してバラバラになつてしまつた。

「助……けて、くれ。うああ……何がああ……？　　いつたいオレは何なんだああ、あああああ!」

それを見たジョニイは、爪弾を男の顔に目掛けて撃ちまくった。命中したかと思われた爪弾はその全てが、皮膚に当たった瞬間にボロボロに崩れ落ちた。

「助けてくれエエエエエー……」

男の頭から血が吹き出した。よく見るとその男は体を馬に縛り付けられていた。

「この男はサンドマンじゃあない!　こいつも「道具」だツ!　オレたちを追い詰めるための道具として使われたただの一般人だ!!」

「鉄球が芯ごと破壊されたツ!　触れたものはどんなものだろうと全て破壊される!

敵は追い詰めるつもりではなく、すでに僕らは囲まれてしまっていた!!　逃げられないようにツ……すでにハメられてしまっているツ!!」

狙いを男から、崩れ落ちてくる木の板に変えた。弾切れを起こさないことを利用して撃ちまくるが、そのどれもが破壊されていく。せいぜい落下を少し遅らせる程度が限界だった。

「オラアツ!!」

ジャイロの投げた鉄球は木の板のひとつに命中した。だがそれも破壊される。

「だめだツ!! 『鉄球』まで2発とも破壊されたツ!!　崩れるツ!!」

崩れ落ちる板の下で、ジョニイは視界の片隅に見た。畑の中に人影が見えた。

「ジョニイッ！ 地面に穴を掘れッ!! 「板」に体が触れる前に爪弾で穴を掘って中に逃れるんだッ！」

がむしやらに地面に向けて爪弾を撃ちまくった。だが、えぐれた穴は浅かった。

ぼくの「爪弾」なんていとも簡単に、消されてしまう。

まるで音が飛んで行くように……何なんだ!?! この敵は!?!

あそこに誰がいる。あれは……知っている気がする!

さらに何か来るのか……サンドマンか? まさかこれはそいつの能力か!?!

「浅いよ……ジャイロ、もうだめだ……間に合わないらしい。今素早く深く掘るだけのパワーはぼくの「タスク」にはない……逃げろ。男の後ろに人影がいた。多分サンドマンだ、走ってこの場所から離れろ」

「手をのばせジョニイッ! ひっぱってってやるッ!! オレの手につかまるんだッ!」

落ちてくる木の板は、当たるだけでぼくの足のようになってしまふ。それなのにジャイロは、手をのばしてくれた。だが、そのほんの少しの希望さえ絶つように、ひとつの板が、届きそうだった僕とジャイロの手の間に落ちた。

「逃げろジャイロ、もうだめだ……早くここから離れろ」

降り注ぐ木片の中で、ジョニイは目を閉じた。その姿を覆い尽くすほどの木の板が落

ちて、追撃するように馬と、それに縛りつけられた男が突っ込んでいった。切り刻む音を大量に鳴らして、男と馬は跡形もなく消え去った。

その惨状を前にして、ジャイロは迫りくる謎の生き物の方を向いた。

「サンドマン……切り刻んだり音を立てたり、果てにはあんな生物まで……個性が全く掴めないやつだッ！」

踵を返して、ジャイロは逃げていたヴァルキリーに飛び乗った。

「ズラかるゼッ！ ジョニーーッ とつと馬につかまれエーッーッ」

いまだ切断音がする残骸に向けて叫んだ。だが、決してそれは、仲間を喪ったことを受け止めてないということではなかった。

ギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルギヤル

木片の下で、バラバラになった鉄球がそれぞれ回転していた。それは地面を掘り、上へ土を巻き上げていた。その回転で掘った穴の中に、ジョニーが埋まっていた。土でガードされていた。

「おめーらしくねーなジョニー、いつになくあきらめるなんてよオ……バラバラに碎かれようとオレの「鉄球」の回転はその程度じゃあ止まりやあしねえ、穴を掘った！ 破

片でもひとり分の穴くれえ掘れるさ……だがもう一発も鉄球はねえ、頼りはオメーだけだ」

土から体を出したジョニーに、ジャイロが馬に乗って寄って来た。しかし、それを追いかけるように謎の生物も迫ってくる。

どうしても……どうしてもこの窮地を越えたい！

更に向こうへ……でも、ぼくの「爪弾」なんかで………行けるのか？

僕の「爪弾」ではぜんぜん勝てる気がしない

## 敬意を払え

少しぼくの話をしよう。ぼく……ジヨニイこと………本名ジヨナサン・ジョースターはアメリカ・ケンタッキー州ダンビルに生まれた。ジョースター家は没落した貴族の末裔だが、父は裕福な牧場主であり……三冠レース7連覇を誇る調教師。

父の仕事の関係でぼくはイギリス・イングランドで少年時代の数年をすごした事がある。

まだぼくが小さな子供だった時のことだ。夕食はいつも家族揃ってひとつのテーブルを囲んで食べていた。その日もいつも通り、父と母が向かい合って、ぼくと兄さんが向かい合って豪華な夕食に舌鼓を打っていた。

肉を切り分けるナイフとフォークの音が静かに鳴っていた。その中でジヨナサンは、小さく切り取った肉のかけらを口に運ぶと見せかけて、そっとテーブルの下に持っている。

「ジヨナサン、テーブルの下で何をやっている？ 左手を上になげなさい」

父はマナーを大切にしていた。イギリスに仕事で来てから特にテーブルマナーを矯

正させられた。だから食事中の妙な動きにも人一倍敏感だった。

「いいかジョナサン、食事中に限らず『マナー』というのは相手に対する『敬意』が含まれる。英国人は特に『テーブルマナー』を重んずる：お前は我が家がアメリカの田舎者と軽く扱われてもいいのか!？」

ほんの少し声に力がこもっただけに、ぼくは体が硬直して唇まで震えてきた。

「そのポケットに何を隠している？ 出しなさい！」

「ご……ごめんなさい父さん……その、気になって………つい……スゴくカワイくてホツとけなくて」

要領を得ない辿々しい言葉に、父は若干の怒気を収めて静かに、しかし厳格な父親としての威厳を纏って言った。

「わたしはおまえに謝れと言ったのではないぞジョナサン……『出しなさい』と言ったのだ」

食事をしていた母と兄さんも、手を止めて一部始終を見守っていた。兄さんに助けを求められるだろうか、母が助けしてくれるのを待つべきだろうか。テーブルの下にのぼした手を動かすことなく、じつとしていた。

「さあ、早く出しなさい」

だめだ。何を言ったところで無駄だ。観念してジョナサンは上着の裏に隠していた

一匹の白いネズミを取り出した。

しばらく外出禁止になるだろう。お小遣いも無しになるだろう。これから自分の身に降りかかる父の怒りを想像して身を震わせた。

そのネズミを見た父の顔から感情が失せた。次の瞬間には椅子から立ち上がり、窓の外を指差した。

「夕食はこれで終わりだ……ジョナサン、すぐに自分の部屋に行きなさい……その前に……おまえがそれを庭の池に沈めてくるんだ、いいな……！」

一瞬、父が何を言っているのかぼくは理解できなかった。それは、まだ小さな子供にさせるには余りにも酷なことだ。これが終わったら慰めてやろうと思っていた母も、父の苛烈な罰に言葉を失った。

そんなことは嫌だった。殺すなんて残酷なことをしたくなかった。名前だって付けたんだ。

「え………そ………んな………飼ってもいいって………約束してくれたのに………」

そうだ。父はこのネズミを、ダニーを飼ってもいいと許可してくれた。涙に濡れて、頭の中がぐちゃぐちゃになっているにしては良いことを言った。

なけなしの反論は父の手によって、テーブルに叩き落とされた。これまでマグマのように静かだった父の怒りが爆発した。

「話をすり替えるな！ 正しく籠の中で飼うという約束を一方的に破ったのはおまえ自身なのに、わたしをウソつき呼ばわりするのかわ！ 自分で始末するんだ……ジヨナサン………わかつたな………行け」

胸に指を突きつけて、一言一言をぼくに刻み込むように、怒りの形相を近づけられていた。この時の父の顔はよく覚えている。忘れたくても忘れられない記憶として、ぼくの深くまで刻み込まれていた。

ぼくは逃げ出すように家の庭に飛び出た。いや、実際は車椅子だったからそこまで早く移動は出来なかったのだが。

がむしやらに車輪を回して力尽きたとき、ぼくは池の前にいた。

父の言葉は全部正しかった。先に約束を破ったのはぼくの方だった。どうしてぼくは今日、一緒に食べたいだなんて思ったんだろう。小さいから見つからないとか、見つかっても謝ればいいとか考えていた少し前のぼくが憎らしかった。

どれだけ後悔しても、目の前の池にダニーを沈めなくてはいけない。これから殺されるなんて微塵も思わず、可愛らしく鼻をひくつかせているダニーをぼくの手で殺さなくてはいけない。

「どうする気だ？ ジヨニー、それを沈めるのか？」

振り向くと、兄のニコラスが静かに立っていた。

「全部……ぼくのせいだッ！ でも……出来ない！ ダニーを池に沈めるなんて……うう……出来るわけがない」

「だけでもう……そのネズミを家で飼うわけにはいかなくなったな……。なあ、兄さんに考えがある。ダニーを森に逃がすってのはどうだ？ それなら出来るか？ ダニーなら森でもきつとたくましく生きていけるよ」

兄さんの言葉に、ぼくは首を振った。

「だめだよ……父さんは絶対にダニーを池に沈めたって証拠を見せろって言うに決まっている。このダニーの「死骸」を見せろって言うよ！」

その途端、兄さんの顔がパツと明るくなった。泣き続けるぼくの背中をそつと撫でながら、兄さんは笑顔で言った。

「それなら簡単さ!! 学校の標本室にネズミの剥製があるんだが、明日オレが先生に言つて「白ネズミ」のやつを借りて来てやる。ダニーだってかわりに剥製をチラツと見せれば父さんはきつと納得するさ」

呆然とした。兄さんの作戦は完璧だった。涙も止まり、希望が見えた。気のせいかなの中のだニーも嬉しそうだった。

「まさか解剖とかして水死したかまでは調べないだろうからな。いや……父さんならするかもな……ブはっ、もし切ったら中からオガクスがごっそり出て来て、父さんたまげる

なッ!! はは!!」

たまらず、ぼくは兄さんに思い切り抱きついた。

「兄さんッ! ありがとう! 兄さんて頭いいな! 先生も兄さんならきつと剥製貸ししてくれるな!」

「それよりジヨニイ……森へ逃がす勇氣はあるか?」

ダニーと離れ離れになるのは悲しかった。でも、殺してしまふより断然マシだった。頑張つて生きてくれると信じて、ぼくはダニーを森へ逃した。

それから月日が経った。

レース場で馬に乗つて走る兄さんの姿をずっと捉えて、ゴール地点を超えた瞬間に手元のストップウォッチを止めた。

「スゲーエー! ツ兄さんッ! 自由自在だッ! 200メートルを17秒で走れと合図を送つたら、兄さんは17秒キツカリで走るッ! 次の200メートルは23秒!! 次は19秒! 全て合図どおり走るッ!! 0.000001秒の狂いもないッ!」

それは個性だった。兄さんの個性は「時計」。体感時間と実際の時間に全く差がない

という。だから兄さんは昔から早寝早起きで、一度だつて夜更かししたことがない。

その個性のことを知った父は兄さんに騎手ジョッキーの道を歩ませた。元々そちらの才能も持っていたのか、瞬く間に才能を開花させた兄さんは様々な大会で優勝をおさめていった。

「あれ……………誰だろう？」

見慣れない子供が引いている馬は、ブラックローズという名前で、多少神経質だが、デカくて力強い馬だ。今度、兄さんはあの馬に乗って大会に出るらしい。きつと兄さんなら優勝間違い無しだ。結局、その子供の名前はわからなかった。きつとバイトか何かだろう。

そんなことも、兄さんが走り出すと頭からぶつ飛んだ。デカくて、さらには神経質という馬をねじ伏せて、さつきと同じ馬のように扱っていた。その走りは見事という他なかった。

「兄さんは何をやっても上手だな、ぼく違う家の子かな？ 全然似てない」

「あのなジョニー……………おまえはまだ小さいだけなんだ、その足だつてデカくなれば治るだろうし、治らなくても乗れるような方法を一緒に考えてやるよ……………約束だ。そしてら2人で助け合つて、世界中色んな所で闘つていこう！」

とある日の思い出が呼び覚まされた。車椅子になつてしまつたぼくが卑屈になつた

時も、そうやって兄さんは励ましてくれた。

今はまだ見ている事しか出来ないけど、乗れるようになったら本当に兄さんと一緒に世界へ行ってやろうとすら考えていた。

ズドドドドドドオオ

その時、すごい音がした。コース場に視線を移すと、大きく土煙が上がっていた。煙の中でブラックローズが大きく前足を上げて見えた。

煙から出てきたブラックローズの背中には、兄さんの姿がなかった。その場にいた全員が、土煙の方へ一心不乱に走った。

「え?」

なんだ。何が起こったんだ?

「ニコラス! ニコラスウウウー!」

「医者だツ! 誰か医者を呼べエエエエー!」

みんなが駆け寄る先に、誰かが倒れている。兄さんだ。

「いったい何が!? 何が起こったんだー!」

「ネズミが足元を走ったのが見えました! 森へ消えたツ! ブラックローズが「白い

「ネズミ」に驚いたんだッ！」

バイトの少年が叫んでいた。

「白いネズミだつて？ まさか……………」

「呼吸をツ！ 神様……………ああああお願いだッ！ 息をしてくれエエエエ！ 医者を早く呼んでくれエエエ！ ニコラスウウウ……………」

父の叫びを聞きながら、ぼくはじつとそれを見ているだけしかできなかった。

「あれ？」

ブーツを履こうとしたが、底が抜けていた。安物だったんだろう。舌打ちをしてそれを放ると、ぼくは車椅子を動かして隣の部屋に行った。

扉を開けると、兄さんの優しい顔が出迎えた。机の上には兄さんがこれまで大会で優勝してきたトロフィーが綺麗に並べられている。こまめに手入れされているお陰で埃っぽさもない綺麗なままだ。

兄さんの顔写真を一瞥すると、ぼくは中に入って戸棚を開けた。中には兄さんの服や

ブーツが綺麗に並べられていた。その中からひとつを取って部屋に戻ろうとした時、後ろから声をかけられた。

「ここで何をしている？ ジョナサン」

「あつ、父さん！ ああ……家にいらしたんですか？ いや……その、ぼくの乗馬ブーツの底が抜けちゃって……安物だったみたいで……一足この古いヤツを借りようかなと思ひまして」

「なるほど、だがそのブーツを戸棚に戻しなさい……そこはニコラスの戸棚だし、ニコラスの乗馬ブーツだ」

この感覚は覚えがあった。あの時だ。ダニーが見つかった時のような感覚だ。でも、いまならちゃんと話せる。

「ええ……もちろん知ってます。でも代わりのブーツがないんです、これ一回だけです……それに兄さんの足のサイズとぼくの足はピッタリになっちゃったんですよ」

「普段の手入れが悪いから、底が抜けているのに気がつかなかつたのではないかね？ それは自分の責任だろう」

「ただ、ここで折れるな。」

「ええ、たしかに……でも今日これから大切な大会があるんです……きつと優勝してみせます」

「優勝？ それはおかしいな、優勝とはN.O. 1の事だぞ。今日のはD i oデイオの出場しないレースだ…そんなのが優勝と言えるのかな…？ のぼせあがるな、おまえはD i oに勝ったことさえ無いだろう」

ニコラスなら、あんなヤツよりずっと上だった。聞こえるか聞こえないか程度に呟かれたその言葉は、ぼくにも聞こえてしまった。

D i o…本名はたしかデイエゴ・ブランドーだったっけか。兄さんが居なくなつた途端に競馬会に出てきた男だ。

兄さんの後を継いで騎手になつたぼくは才能を開花させたが、下半身付随という重荷のせいでD i oに勝つたことはない。それどころか、調子の悪い日はもつとひどい成績になることもあつた。

「……………お願いです。代わりに探す時間がない。このブーツを貸してください」「だめだ！ ニコラスの「形見」をおまえが使う資格はない。戻しなさい」

とうとう、父はぼくの手から力づくでブーツを引き剥がしにきた。

父さんの目には、兄さんしか写っていない。ぼくの事なんかこれっぽっちも見えていない。ぼくのレースを見に来た事だつて、ただの一度もない。ぼくの溜めてきた感情が、溢れ出した。

「何なんだ………いったい何なんだ!! 父さん、いつまでもニコラスニコラスって………兄さんはもう何年も前に死んだんですよ。今日レースに出るのはこのジョナサンです。お願いです、これからぼくのレースを観に来てください……あなたのために勝ちます!!」

それでも、ぼくの思いは父に届かなかつた。

「いいからニコラスのブーツを棚に戻すのだジョナサン!」

そんなことどうでもいいと、わがままを言う子供をめんどくさがるように言った。

「い……いやだツ!!」

「なにツ!!」

もう我慢の限界だった。

「こんなのただの古いブーツだツ! ただの道具にすぎないツ! ぼくはこれをはいて

今日のレースに出るツ!」

「おまえは自分の兄を侮辱するの catt! よこせツ」

「や……やめろツ! 離せツ!」

「離すんだツ!」

「く……くそつ! うぜえぞツ! 離しやがれツ!!」

ぼくは、思い切り父を突き飛ばした。突き飛ばされた先には兄さんのトロフィーを

飾ったガラスケースがあった。

グワツシアアン

突っ込んだ父の首に、ガラスが突き刺さった。血が大量に出て倒れる父をみて、ぼくは顔を青ざめさせた。

「ああああああ、と……父さん」

「おお……神よ……あなたは連れて行く子供を間違えた……」

「……何だつて？……父さん……今……何て……言ったんだ？……」

「出て行け……もうおまえとは暮らせない……この家から……」

父は涙を流しながらそう言った。ぼくも涙を流して、その場を立ち去った。

涙は、その日のレース中も止まることはなかった。

このことを知った母は、父から逃げようように、僕と一緒に出て行つた。兄さんが死んでから、異常性が目に見えて出てきたと、怯えていた。その後、母はアメリカ人の男と

再婚した。

『ブラックローズの足元を白いネズミが横切った』

『白いネズミ』……あれはこの白いネズミだったんだ？ 本当にいたのか？ そう  
……きつと本当に兄さんの前を横切ったんだろう。

ぼくが池に沈めなかった……森に逃した白いネズミ。間違いない

あのダニーがやって来たんだ。神様は間違えたんだ……本当は兄さんの方じゃあ  
なかった……連れて行かれるのはぼくの方だったんだ。ぼくが死ぬべきだったんだ  
……

だからきつと、『借りは返せ』と、いつか『宿命』がかわりにぼくに追いついてくる。  
少しづつ少しづつ、「宿命」がぼくを気づかないうちにとり囲んで、ぐるぐると縛って  
すぐに逃げられないように

そして希望で一瞬だけ喜ばせておいて、

最後の最後でぼくを見捨てるんだ。誰も関心なんか払わない、みんな見捨てる。観に

さえもこない。

『ジョニイらしくない』だって？ ジャイロ………君はさつきそう言った。いいや………これがぼくさ。これがジョニイの進んでる『道』

今は「白ネズミ」の時と同じ感覚なんだ。

見えない何かが静かにぼくを取り囲んで追いついて来ている。こいつには「爪弾」なんかじゃあ勝てない。

ぼくの個性なんかじゃあ、こいつには手も足も出ない！

恐竜のようなそいつは、ジャイロの馬にしがみついたぼくへ飛びかかって来た。

ドバババババツ!!

ジョニイの爪弾は、今度は恐竜を穴だらけにしてやった。このまま後ろのやつも撃とうと構えたが、それは中断させられた。後ろのやつが仲間の死骸を蹴り飛ばしてきたのだ。

いきおいよく蹴られた死骸はバラバラになり、肉片の一部がヴァルキリーの足に当たった。そのダメージは馬の中を伝わって、ジャイロの片足とジョニイの脇腹の一部へ

やってきた。

「うおおおおおあつ！」

「うぐあ」

ダメージはジャイロの方が大きかった。左足が切り刻まれて大量に出血していた。それでもヴァルキリーを走らせる技術力は、まるで兄さんのように見えた。

たまらずしがみついた力が弱まり、ジョニイの体が地面に擦り付けられる。

その時、一瞬だがまた見えた。追ってくる生物のそばの畑の中に、人影が走っていた。「この生物が触れる部分ではなく、物を伝わらせて伝わり終わった最後の場所を衝撃で破壊する！　まるで音のように！　音が伝わるように生物が触れた馬の体ではなく……ぼくらの肉体の所で！」

「だろいな！　だが……いや！　ヴァルキリーごとやられるぜツ！　くそ！　ちくしょーヤバイツ！　少しでも手当てしねえと出血がヤバイツ!!」

走りながら、ジャイロの顔色はどんどん青くなっていた。このままだと追いつかれなくても、出血多量で死んでしまう。

だが敵はジョニイたちをまだ追い詰めるつもりだった。手当てするような暇を与えないよう、モンスターの数がどんどん増えていった。

羽ばたく音が聞こえた。今度は空を飛んでくるモンスターまで現れた。もう逃げき

れない。畑の中にはヴィランがいる。誘導されていた。川までの一本道を、そこが行き止まりだとわかっていても、愚直に進むしかなかった。

もうだめだ……追いつかれる……追いついてくる……ジャイロにはもう一発も鉄球はない……ぼくの爪弾はやつらには無力だ

囲まれて……とり囲まれて……

追いつかれる!!

「ジョニイツ! 馬を捨てるぞツ! 馬はひとりで川を泳げるツ!! ここはヴァルキリーを守るため離れるツ!」

「なに!?!」

「飛ベツ! 飛ベツ!! 飛び降りるんだジョニイツ!」

この状況でも、ジャイロは決して諦めなかった。このままでも殺されるだけだ。無我夢中でジョニイも馬から飛び降りた。落ちたのは川のそばの泥の上だった。

「潜れッ！ 潜れッ！ ジョニイッ！ 泥の中だッ!!」

そこでようやく、ジャイロの考えがわかった。

さつきぼくはジャイロの鉄球が掘った土の下で生き延びた。それと同じことだ。泥の中なら、衝撃はぼくらの所までこれない。幸いにも、爪弾など使わなくても簡単に泥の中に潜ることができた。

全身が潜り切った直後、ザクザクと切断音がした。間に合った。ギリギリだが助かった。

ガシツ      ガシ      ガシ

突然、体にかかる重さが増えた。泥の上に何か別の生き物が乗ったんだ。さつきの飛んでいたモンスターか？

メラメラ      メラメラメラメラ      メラ

「つああああああああああ!!!」

焦げ臭い臭いがしたと思った次の瞬間、ジョニイの舌に想像を絶する痛みが走った。

舌が燃えていた。

「何!? うあつっ……………火!」

ジャイロの手も燃えていた。泥で消せるが、消しても別の場所が内側から燃えていった。

「ジャイロ……………泥の中に潜って「衝撃」を散らすって考えはいいが…様子が違うぞ、こいつはさっきのと違う! 今ぼ……………ぼくの「口の中」に……………」

次の瞬間、ジャイロの全身が燃え上がった。泥も、何もかも燃え上がって赤く染められた。

「うおおおおあああああああ! 目ぐあ……………!! 脛の裏に火がついたッ!」

違った。燃えていたのは自分の方だった。ありえない現象だった。だが、これで理解した。舌や脛の裏に火がつくということは、体の内部から火をつけられているということだ。

これが……………これが…あいつのやり方だったんだ……………ぼくらが泥の中に逃げ込むのを計算していたみたいだ……………他にも能力が更にあるに違いない……………まるで音が……………いろいろなものの音がすでにぼくらを追いつめている……………

ぼくが……………ぼくが「職場体験」なんてしなければ……………せめて別の事務所にしてい

ばこんなことにはならなかった……………

「いや…………「宿命」はどこへ行くこうとぼくを取り囲んできただろう…逃げられない…………助からない…………」

「すでに…………もう「すでに」だったんだッ！」

「おい、ジヨニイよオ…………さつきからよオ…………てめーウザってエゾ…………口に出してナメた事をほざいてんじやあねえぞ！」

身体が燃えているというのに、内側から燃え上がって、指先など沸騰しかかっているというのに、そんな痛みよりジヨニイに対する怒りが上回っていた。

「オレの「鉄球」はもう一発もねえんだとか自分の「爪弾」じゃあこいつらに勝てねえとか、「回転」を甘く見てんのかッ！ てめーはオレらツェペリ一族250年の「鉄球」を見下してんのかッ！」

誇りだった。ジャイロにとって回転とは誇りであり、それが見下されたことがなによ

りも許せなかった。一族の誇りを見下されることに比べれば、いま感じている痛みなどへでもなかつた。

「おめーの今までやってた事はまだ『入門編』にすぎねえ!!」

「え……」

「敬意を払え……敬意を払って「回転」のさらなる段階へ進め……『LESSON 4』だ（たしか……たぶん）仕方ねえ……ケツに火がついたから今からそれを教える!!」

「何……さ……さらなる……段階」

## 黄金長方形を作れ！

「まず最初に言っておくジョニイ、おまえはこれから「できるわけがない」というセリフを……4回だけ言っていていい。いいな……4回だ。オレも子供の頃オヤジからそう言われた」

いつもなら何故と聞き返すところを、ジョニイは黙って聞いていた。聞き逃すまいと、自分が熱いと叫ぶのも我慢してじっと耳をそば立てていた。

「結論から言うと「鉄球」の秘密とは「無限」への追求だ……それがオレの一族ツェペリ家の目指したものの……「無限」という概念をオレの先祖は「鉄球」という技術に応用しようとしたんだ。「医術」と「処刑」のために」

そう言うと、小枝を拾って泥の上に何かを書き出した。シンプルな長方形だった。『黄金長方形』という形がある。それはおよそ9対16の比になっている「長方形」の事を指し……正確には1 : 1.618の黄金率の事をいう。

この長方形は古代からこの世で最も美しい形の基本の『比率』とされている。エジプト・ギザの『ピラミッド』『ネフェルティティ胸像』ギリシアの『パルテノン神殿』『ミ

口のピーナス』ダ・ヴィンチの『モナリザ』……………この世の建築・美術の傑作群には計算なのか?あるいは偶然なのか?この黄金長方形の比率が形の中に隠されている。

ツェペリ家の先祖たちは名芸術家たちの感性の結果だと考えている。それは完璧の比率……………これらの芸術家たちはその「長方形」を本能で知っている……………だから「美の遺産」となって万人の記憶に刻み込まれるのだ……………」

延々に語り続けられる話についていけなくなってきたジョニーが、話を途切れさせた。

「ジャイロ……………待ってくれ。君がこんな時にいったい何を!! 何を言い始めたのか?

ぼくにはさっぱり理解できないが……………」

「オレの「手のひら」も黄金長方形の比率になるようにオヤジから訓練された」

ぼくの疑問に答えることなく、坦々と話しは続けられた。

読者の方々には、ぜひとも紙とペン、そして定規を用意してほしい。横から16cm 縦9cmの長方形を描いていただきたい。

「黄金長方形」には次の特徴がある……………正方形をひとつこの中に作ってみる……………残った右のこの「小さい長方形」もまた……………およそ9対16の黄金長方形となる。これにまた正方形を作ってみる。この残りもまた黄金長方形……………さらにまた作る、さらにまた……………さらにまた……………そしてこの中心点を連続で結んでいくと」

無限に続く「うず巻き」が描かれる

これが『黄金の回転』だ

「ま……………まさかッ!!」

「おまえは「爪弾」をこの通りに回していない…だから限界を感じている…『黄金長方形の軌跡』で回転せよ！ そこには『無限に続く力』があるはずだ…我らツエペリ一族はそれを追求してきた」

「できるわけがないッ！」

「……………今 言ったか？ 「できるわけがない」と？」

ジャイロは余裕を感じさせる声で言った。こちらにはそんな余裕は無かった。初めて知ったばかりの黄金長方形の回転、それを今ここで習得しなくてはならない。悪い冗談だと笑い飛ばしてやりたかった。

例えば、ジャイロの投げる鉄球の回転は普通のものとは違った。あれこそが黄金長方形の回転によるパワーだったに違いない。

「か…いや、仮にその黄金長方形の回転の力なんてのがあるとして……………そ…そんな事が

こ……このぼくに……」

首筋に違和感を感じた。小さかったそれはぐつぐつと大きくなっていき、静脈の一部が燃えているのがわかった。血管の耐久値を超えた沸騰した血液が、皮膚を突き破って外に出ると同時に耐えがたい痛みが走った。

それでもジャイロは落ち着いていた。その余裕はどこから来るんだと言ってやりたかったが、首の痛みでそれどころではなかった。

「ジョニー……あと3回だけ「できない」……と言つていいぜ。おまえが3回目と言つた時、これをおまえにやる……オレの「ベルトのバックル」だ。これも「黄金長方形」の比率で正確にデザインされている」

ベルトを外したジャイロはそれを泥の上に置き、バックルの上で回すような動作をした。

「このバックルの形の軌跡上で正確に回転させれば、おまえの「爪弾」もまた！ 無限の回転となる！」

話が、一気に現実味を帯びた。ジャイロのベルトのバックルの上で回転させればいいだけの話だったのだ。

「そつ そんなのがあるのかッ?! 何言ってるんだッ!! 黄金長方形の「スケール」なんてのがッ! 最初からなぜその「バックル」を見せないッ! やつてみるよッ! ジャ

イロ！ 見せてくれッ！」

「だめだ、「できない」と3度目に言った時といたろう」

ジャイロは何を言ってるんだ。死にかけているというのに、なんで「バツクル」を見せようとしてないんだ。

近くから大きめの石を拾ったジャイロが、それをバツクルの上に乗せて回転させ始めた。

「ごっごっした石くれだから回転がまったく不完全だ……だが、そしてジョニイ……この泥の中はもうだめだ……川の中に逃げるッ！」

ドパアアアン

ぼくらを包んでいた泥が勢いよく破裂した。衝撃で上に乗っていたモンスターが飛び立った。

「撃てッ！ 撃てッ！ ジョニイそいつを全部撃てッ！ この間に川に逃れるぞッ！」

いきなりすぎる展開に頭がついていかなかった。でも、やるしかない。飛び上がった。また襲いかかってきたモンスターに目掛けて、大量の爪弾を浴びせた。今度は切り刻まれることはなく、当たった全てがモンスターの体を蜂の巣にした。

でも……さつきとまったく同じ威力だった。

「降り注ぐぞオオoooooooooooo」

ジャイロが叫んだ。撃ち落とすとしても、音は生きている。死骸が地面に触れて火の海になる前に、川の中へ転がり込んだ。

死骸が地面に落ちて、泥の上が火の海になった。いきおいよく燃えたために火傷を負ったが、無事に川の中へ逃れる事ができた。

熱と泥まみれになった体に、冷たい水が突き刺さった。

「できるわけがないッ！ ジャイロッ！ そんなのすぐにできるわけがないッ！ こんな状況で何なんだッ！！ できるわけがないッ！！ さあジャイロッ！！ 3回以上言ったぞッ！ さつきとそのスケールを見せてくれッ！」

もう限界だった。

「君は鉄球の訓練を子供の頃からされて来たんだろう!? それをたつた今！ぼくがやってみると言われてもいきなりできるわけがないッ！！ さあまた言ったぞッ！ 無限の回転があるならバツクルを見せてくれなきや何も始まらないだろう!!」

「今のは一回にしか勘定しねえからな。あと2回だ、あと2回言った時やる」

「何だとオオoooooooooooo それは何かの「試練」なのか？ ゲームなんかしてる時じゃないんだぞ!! 受難がどうか、プルス・ウルトラなんて言ったらブン殴るぞ！」

この敵は、何かを考えている。川に飛び込むこともきつと計算のうちだ。

「少しずつ少しずつ……この敵はぼくらを完璧な何かでとり囲もうとしているんだぞッ！」

「ジョニイ、落ち着け……あと2回だけ できるわけがないと言え」

「何イイ~~~~~ッ……………!!?」

ジョニイたちがさつきまでいたところに、またモンスターがやってきた。小さく丸いボールのようなそいつらは、二本の足で移動して、川の手前に整列していた。

「何だ…!? 今度のヤツは……何をやる気だ!? 規則正しく並び始めているぞッ、何やってるツ!?!」

「ジョニイ、何かされるにしても……この間だぜ! この間に「本体」を探すんだ……敵は今このオレらをどこからか見ているツ! 急いで本体を見つけ出して、ここからそいつをやるしかねえツ!! おまえの『爪弾』をなんとしてもそいつにブチ込むんだツ!!」

慌てるジョニイと対照的に、ジャイロは落ち着いていた。

爪弾を回転させて畑の中へ向けるが、どこにも人影はない。それよりも、整列していたモンスターの様子がおかしかった。

「ジャイロ……モンスターどもをよく見ろ……さつきから何か様子がおかしいぞ……」

ヤツらの体から

何かが水面に出て来ているッ!

## タスク ACT 2

「氷山の一角」という言葉は、「表に現れているのは物事の一部にすぎない」という意味を持っている。海の上に出ている氷山はごく一部にすぎず、その海面下には想像できないほどの大きさの氷の塊が存在している。

モンスタ―たちが流して来た音の下には、予想を大きく上回る数の様々な「音」があった。当たったら何が起るかわからないが、十中八九：自分たちが殺される事だけが理解できた。

その光景はまさに「氷山の一角」だった。

水からいきおいよく顔を出したジョニーが、ジャイロの首につかみかかった。

「ジャイロ『バックル』をすぐによこせー！ー！ー！ー！」

叫ぶジョニーの口元に、拳が入った。鼻と口から血が吹き出る。

「だめだッ！」「できない」と「4度」言うまでやれないッ！ 絶対に！ それがツエペリ家の「掟」だッ！「掟」を破ったらオレたちは敗北するッ！ おまえに全ては説明したッ！ LESSON 4だッ！『敬意を払え』ッ！」

「なんだとおおとおおー！ー！ー！」

ジャイロは一向に教えようとしな。だが、もう水面の音は2人のすぐ目の前まで来ていた。

やるしかない。

思い出せ……ジャイロが泥に描いた黄金長方形を……黄金の回転の軌跡をツ！

ドン ドンドン ドンドン ドン

撃ち放った爪弾は、畑の一部をえぐるように吹っ飛ばしていった。多少の力が上がつたがこんなものではないと、理解できた。黄金長方形の無限のパワーとやらならば、もつと凄まじいもののはずだと。

「だめだツ！ こんな「力」<sup>パワー</sup>じゃないツ！ ぼくにできるわけがないツ！ 間に合わないッ！ 来るぞー……ッ！

「音」はもう目の前だった。

その時、ジャイロが水の中に潜った。両手の間に、黄金長方形の形を作ったジャイロはその長方形の中で「回転」を起こした。

シユウウウウウウウ

グルウン

信じられない光景だった。ジャイロが落ち着いていた理由がようやく理解できた。

ジャイロの手の中に球きゅうが出来上がった。その回転が起こした波紋が、迫りくる文字を全て弾き飛ばしてしまった。

「水を「球」きゅうにして回転させられるのは一瞬だ。一瞬だけなら防御出来るぜ……………だが……………こいつの個性は音の固まり……………くそ……………こういうことか……………こいつは何て「敵」だ……………なぜ、そう……………なぜあの岸にああやって一列に並んでいるのか……………その意味が分かったぜ」

ジャイロの様子がおかしい。さつきまでの余裕が消えていた。それほど消耗するのか？ さつきの技は。

「「音」は聞こえる音が全てではない…つまり…今みたいに見えたものが全てではない…その交差点は増幅する。水中に見えなかった「音」がある…防ぎ切れない」

ジャイロは朦朧としながら言っていた。防ぎ切れなかったというなら、なぜ自分に攻撃が来てないのか。

水面が赤くなっていた。それは血だった。ジャイロの体から夥しい量の血が出て、川の一部を染めていた。その血の川の中に何かが浮かび上がってくる。

「ジャイロ……………あああああつ……………あああつ……………あああつ……………」

「気をつける…向こう岸もだ…岸に……………今のが…反射して戻ってくるぞ…そしてあと一回だ…早く言え。言っていないぞ、バックルをやる……………『できない』と言え！」

「うつつうあつうおおああああ~~~~あああつ」

ジャイロの体は、血と手足を失って軽くなっていた。それなのに、今にも水の中へ消えてしまいそうな体を抱き寄せて、ジョニイは声にならない叫びを上げ続けた。

「頼む!! もうおまえを捕まえようなんて思わないツ!! だから医者をつ! 誰でもいい! 呼んできてくれエエ!!」

ヒーローだとかヴィランだとかは、ジョニイの頭からふっ飛んでいた。ただジャイロを助けて欲しい。自分たちを見逃して欲しい。その一心で叫んだ。

「はっ……………」

畑が揺れて止まっていた蝶が羽ばたく。その中から、ゆつくりと男が出てきた。

その見た目はまさしくインディアンだった。緑と黒の髪を編み込んで、肩には部族のものらしき刺青、腰回りと足元を覆っただけの格好は、まさしくインディアンそのもの

だった。

間違いなく、この男こそ「サンドマン」だ

「あの土地は、我が部族のものだ。それも目的だが……それよりもおまえらを殺した方がてっとり早い……全員を皆殺しにするより確実に……いい条件だ……」

どこまでも冷徹で、暗い声でそう言った。

「祖先からの土地を買う……我が部族がこの時代の変化に勝つには「金」がいるんだ……おまえらの事を気の毒とは思いますが悪いとは思わない。お前らが決めた価値の基本……「金」という概念だからな」

この男に、ぼくらを見逃すなんて選択肢はなかった。

この男は殺し屋だ。ぼくらを殺すために雇われた殺し屋だった。

この依頼は最初から、ぼくらを殺すために作られた「舞台」だった……その演劇に、まんまとぼくらは参加してしまったんだ。

そしてクライマックスになった今、ヤツが現れて僕らに死刑宣告をした。取り囲まれ

ていたんじゃない。自分たち自身の足で、処刑台へと進んでいたんだ。

うおおああああああああああああああああああああああああああああああ

サンドマンはまた畑の中へ消えていった。だが今度は、もう近くにいる必要はない。どこかへ去るつもりだ。

残されたジョニイとジャイロは、向こう岸に反射して迫ってくる音に対して、もう何もできない。

爪弾も効かない。ジャイロも倒れた。

当たり散らすように、ジョニイはジャイロに叫んだ。その手にはバックルがあった。しかし、もう遅い。

「うわあああー！ 最初からこのバックルを使わせてくれればこんな事にはならなかったんだ!! いきなり回転の説明されたってすぐにできるわけがないッ！」

できるわけがない。ジャイロが言っていた4度目だ。

『できるわけが』……うっ……うっ……うっ 『できない』と4回言ったら……』

『ツエペリ家の掟』……………

……………待てよ

『すでに全部説明はした……………』

『黄金長方形』で回せ……………

ま……………待て……………待つんだ……………いったいツエペリ家は何が言いたい？

そういえば芸術家たちやジャイロの先祖が「黄金長方形」を見つけたというなら

それはどこから学んだ？

「美しさの基本」とかをどこで？ 彼らは誰から学んだ？ 学者から聞いたか？ 定規で

計ったわけじゃあないはずだ……………

それはコピーってやつで……………「本物」じゃあない……………いったい最初に誰が発見した……………

？ 本物があるはずだ！ 「本物」に気づかなければ「黄金の回転」は…永遠に回せない

のでは……………？

「黄金長方形の「本物」がッ！ あるはずではッ！ ジャイロが泥に描いた図形やこの

バックルの形は『定規で計った』コピーだッ！」

「本物」を探せ……

自分の眼で……

「本物」を見なければ回転しないッ！

ツエペリ家の掟は！それが言いたいのでは……

「ジャイロ……ぼくが今！この目で見ているものでいいのか!? 今までにも！すでにさつきからも！ 見ているもので!?! 「本物」の長方形はこれでいいんだな？」

あれほど躍起になっていた黄金長方形のスケールが、あふれるほどあった。

ついさつき飛び立った蝶の羽

地面に生えた草の葉の形

美しく咲いた花の形

そびえたつ木の形

深い観察から……芸術家たちが学んだものとは……

「ジャイロはこれらを見て鉄球を回転させていたのかッ！」

そのとき、畑のすみから小さな影が出てきた。

白いネズミだった。その体もまた、黄金長方形の形となっていた。

「ダ……………ダニ……………!!」

ガンッ

「うおおお……………!? 何だ……………この回転は……………」

## 決着、そして

ギアアアアアアアアア

爪弾がドリルのように回っていた。これまで撃ってきたものとは比較にならない力が伝わってきた。黄金の回転は爪弾を更なる高みに到達させた。

音の不可視の攻撃や友の負傷で追いつめられた心に火が灯った。それは心臓を動かす、血管を伝って体の隅々まで行き届いた。いま回転しているのは爪弾だけじゃない。自分の体に黄金の回転が宿っている。

更ブルス・ウルトラに向こうへ……：：：ジョニイの肉体と精神は、限界の先へ進んだ。これまで妖精のようだった小さな像ツイジョンは、その成長を体現して、姿を変えていた。

「この回転はッ！」

ジョニイは迫りくる文字の波へ向けて、爪弾を撃ち込んだ。

ドゴオオオオオ

発射した爪弾は圧倒的なパワーで、水の中に穴を開けた。その穴が渦巻きのように、周りの音を巻き込んでいく様子をジョニイは驚愕して見ていた。

「水に「穴」が開いてあの「音」が吸い込まれているのか!! 何が起こっている………!!? この「爪」に何が起こっている!!?」

凡人の理解など到底及ばない力だ。

「何だ……!! 「爪」は一発しか撃てなくなっている!! 人差し指から次のが出ない………でもとなりの中指の爪は回り始めた………」

次の爪弾を撃とうとしたジョニイの人差し指には、爪が無かった。タスクAC T1は爪の回復が異常に早かった為にマシンガンのような連射が出来ていた。しかしタスクAC T2になったことで爪に黄金の回転が宿り、その代わりに連射が出来なくなっていた。

ドゴオー……

中指の爪を回転させたジョニイは、つい先ほどまでサンドマンがいた位置の、少し下の地面を撃った。これまでの爪弾ならば弾痕をつけて終わりだが、黄金の回転を得て成長した爪弾は、地面どころかその周辺も巻き込んでえぐり飛ばした。畑の一部を吹っ飛

ばしたことで、隠れていたサンドマンが姿を現した。残り9発だ。

えぐれた地面を見たジョニイの脳裏に、雄英の授業での一幕がよぎった。

この社会において、ヒーローがヴィランを倒す際には殺してはならないという縛りがある。しかしヴィランは躊躇なく人を殺す。その「ためらいの差」につけ込まれてヴィランを取り逃したり、時には始末される。

甘すぎる。授業中にジョニイが抱いた感想は奇しくも、その後に遭遇するリンゴオ・ロードアゲイン（ヴィラン名マンダム）と同じであった。相手をはるか格下なら、殺すまでもなくたやすく捕まえられるだろう。だが対等な力を持つ相手や格上だったらそんな余裕はなくなる。

「ジョニイ……………ジョースター……………」

姿を現したサンドマンが、明確な殺意を持って静かに自分の名を呼んだ。

「……………サンドマン……………」

この相手は「倒す」なんて甘い世界に生きてはいない。人を殺すことになんの躊躇いも持たないうえに、実力ははるか格上だ。だったら、自分もその世界に踏み入れなくてはならない。

「倒す」のではなく「殺す」。

「捕まえる」のではなく「確実に始末する」。

ためらいを捨て去った互いの眼が黒く燃え上がった。

ドゴオオoooooooooooo

短い睨み合いの果て、先に撃つたのはジョニイだった。殺意を乗せた爪弾がサンドマンの心臓をえぐり飛ばさそうと迫った。それを冷静に見たサンドマンは持ったナイフをその場で振った。

ヒュン　　ヒュン

空を切る軽い音が鳴り、サンドマンの個性が音を固めて具現化した。現れた「ヒュンヒュン」という漫画の擬音のような塊は、爪弾を衝撃ごと隣の木へと逸らした。音にぶつかつた爪弾は三つの欠片になって、木の幹に穴を残して消え去つた。

はじかれた……「黄金の回転」を……

更に、ジョニイを追い詰めるのはサンドマンだけではない。岸に整列したモンスターもまだ生きている。それらが流す文字は最初に撃つた爪弾の渦巻きに巻き込まれているが、増えれば限界が来るだろう。

「黄金長方形」の回転は確かにあるのかもしれない……その威力はぼくの「爪弾」で間違はなく「数倍」にも増している実感がある……

だが意味なんて何もないッ！

サンドマンとはレベルが違うツ!!

ヤツの「個性」にはぼくの「回転」なんて何の通用もしない!!

！  
少しだけ希望で喜ばせておいて、そして最後にぼくから全てを奪い去っていく……

ついに「宿命」が追いついてきた。兄さんの「借りを返せ」……と今、追いつかれたんだ

「だめだ、すまないジャイロ………ぼくには何もできなかった……」

意識を失った友に、最期の言葉として懺悔の声をかけた。しかし、ジョニーの意思とは別に、最初に川に撃った爪弾の穴がズルリと動いた。渦の中心にあった穴が、水面を動いて岸へ進んでいく。音を流していたモンスターの足元へ進んだ穴は、足から丸い体

へと昇り、止まった。

ドツバアアアムツ

「……………え……………」

モンスターが弾け、大量の血が飛び散った。同時に川へ溶け込んでいた音の一部が霧散していく。サンドマンもジョニーも、なにが起こったかわからなかった。だが、異常な出来事は立て続けに重なる。

「なにッ!?!」

畑ごと地面をえぐり飛ばした時に出来た爪弾による穴が、今度はサンドマンの長い脚を登って行った。訳がわからない状況に、サンドマンは判断が遅れた。登っていった爪弾の穴は、左足の大腿部で止まった。

ブシューウウウウ

穴から血が噴き出ると同時に、撃たれたかのような痛みが走った。そしてようやくサンドマンは、これがジョニーによる攻撃だと理解した。

「は………これはッ……!!」

まさかと、先ほど爪弾を逸らして当てた木を見た。弾痕はすでに無くなっていた。穴は生き物のように木の表面を滑り降りて、地面を進んでいた。

「はっー」

それはサンドマンの足からまた登ろうとする。しかし、その場で跳び上がったサンドマンは間一髪で木の枝にしがみついた。穴はサンドマンの体の下で滞留していた。まるで逃した獲物が落ちてくるのを待ち構えているようだ。

「ジョニイ・ジョースターの撃った……弾丸の「穴」が……」

獲物を逃した穴は、留まることをやめてサンドマンがぶら下がっている木へ登って行く。しかしサンドマンは、あくまでそれを目で追って、手に届く寸前で枝から手を離れた。

バグオオオオン

穴が枝の半ばで止まり、そこから先をへし折った。

「移動した！ サンドマンを追っているッ!! 穴が自動的に………!!」

そこからは早かった。岸へ並ぶモンスターに向けて、黄金の回転を加えた爪弾を撃つ

た。生物的な本能でそれが驚異と理解したモンスターは、小さな足で飛び上がり爪弾をかわした。

だが、地面に当たった爪弾は穴を残し、その穴が自動的に動き出す。飛び上がった落ちてきたモンスターの足元へ移動した穴は、その近くにいたもう一匹のモンスターも巻き込んで殺す。また音が消え去った。

「穴」が攻撃をする……自動的に標的の方向へ移動して……回転は「生きている」んだ。「穴」になっても「穴」の中で生きている……」

ドバ　ドバ　ドバ　ドバ

撃ち込んだ爪弾はモンスターの軽快な動きに全てかわされる。しかし、残った穴は逃げることを許さない。自動追尾した穴によって残りのモンスターも全て倒された。

「ジャイロツ!!」　回転は「穴」になっても死なないぞツ!!」

音が霧散して、川は本来の姿を取り戻した。残るは……サンドマンだけとなった。

『LESSON 4』……敬意を払え」

何も見えていなかった自分を塗り替えるように、ジャイロの言葉を繰り返した。今ならその言葉の意味が心で理解できた。

川の流れはジョニーとジャイロの体をゆっくりと川岸へ流していった。短刀を持ったサンドマンが距離を保ちつつそれを、追いかける。罨も、モンスターもない。純粹な一対一の戦いだっただけだ。

ジョニーたちの体が泥に乗り上げて止まった。サンドマンも一瞬足を止めるが、今度は保っていた距離をゆっくりと縮めていく。

罨が無くなったサンドマンに出来る攻撃は、近づいて直接音を叩き込むことだけだった。これまでの殺しの中には、川などの水場が使えない時もあった。罨を突破されたことも何度もある。そういう時は、自分で直接手を下していた。だから、今回も同じように始末する。

「サンドマン……………」

一步、一步と進んだところでジョニーが呟いた。どんな意味が込められたのかは知る由もない。ただ、その間違いを正さずに死なれては気分が悪い。ちよつとした理由だったが、サンドマンは足を止めた。

「『サウンドマン』？ それは村人が勝手に聞き間違えて呼んだ名前……直訳は『サウンドマン』。我が部族の言葉で「音」をかなでる者と呼ばれている」

サウンドマン秘男という名前ではない。ただ間違いを正しただけなのに、サウンドマンの心に何かが引つかかった。

その小さな違和感を払拭するように、短刀を振り払って構えた。

「ジョニイ・ジョースター……どうやらわたしがその位置まで行き……直接短刀かこの拳で「音」をおまえの体にたたき込むかなさそうだ」

サウンドマン 個性 「音」

「切った音」「破壊した音」「燃やす音」など、音を形にして相手に送り込むことができ。その音の形に触れると、その通りになって破壊される。

水の中に流し込むのが一番効果的らしい。

「その音の固まりは、一撃でおまえの全身を9つの部位に切り裂くだろう」

ゆつくりと迫ってくるサウンドマンを視界に捉えたまま、ジョニイは左手をチラリと

見た。親指から中指の爪は無くなって、残っている爪は薬指と小指の爪だけだ。慎重に使いどきを見極めなくてはならない。

「ハッ！」

ほんの一瞬、爪弾を確認した一瞬を見逃さず、地面を蹴って跳躍したサウンドマンが空から襲いかかってきた。考えている余裕はない。薬指の爪弾を発射した。

ブンツ　ブンツ

音で逸らされた爪弾がまた切り刻まれて、地面に命中する。開いた穴がすぐに自動追尾を開始して、音の固まりの下へ移動した。不安定な固まりでは、サウンドマンの鍛え抜かれた体を支えることができなかつた。形が崩れた音の固まりからサウンドマンが背中から落ちていく。そのすぐ下には穴がいまかと待ち構えていた。

しかし、サウンドマンはその体に似合わない身軽さで崩れた固まりを集めてその上へ逃げ延びた。穴が獲物を逃したことを悔しがるように泥を巻き上げる。サウンドマンの体重が固まりを下へとずらすも、地面に落ちる直前で留まる。

爪弾を標的にしつかりと向けたまま、ジョニーは撃とうとしなかった。ここで撃つたとしても、音に阻まれて同じ結果になることが見えていた。勝負は、穴の回転が止まったその時だ。

「はじかれた「穴」の追跡は……せいぜい数秒……長くて7、8秒程度しか追跡がもたないようだな」

それをサウンドマンも理解していた。ゆえに、ジョニーの心を揺さぶる。自分の優位性は覆らない。同時にその自信を再確認するように言葉を投げかけていく。

「穴が小さくなつて消えかかつて来てるぞ……しかもその「爪弾」、残りはあと1発しか発射できないようだな……合計全部で10発。もし何発も発射できるならすでに……もつと撃つて来てるはずだからな」

回転が止まって泥が弾けた。

「穴」が消えたぞ。そして次が最後の1発……」

短い睨み合いの果て、両者が同時に動いた。

ズバア

ジョニーは残った爪弾を撃ち、サウンドマンは短刀を振つて音の固まりを作った。早

かったのは音だった。ズバアという固まりが出来上がってサウンドマンを守るように立ち塞がり、それごとジョニイへ飛びかかった。

だが爪弾は盾に命中することなく、サウンドマンの後方へ消えていった。最後の一発をはずして撃った？ なぜ？

ビスウツ

爪弾はサウンドマンの後ろにいた蝶の羽を撃ち抜いた。穴の開いた羽で飛ぶことのできない蝶は落下していき、サウンドマンの背中へ落ちた。羽の穴は背中へ移動して、蝶がまた羽ばたく。

「うおっ!!」

穴は自動追尾を開始した。すでに獲物を捉えた穴は、確実に始末するというジョニイの意思が乗っているように心臓へと向かっていた。かわすことはできない。容易く心臓の位置までたどり着いた穴は、とどめを刺すために回転を止めた。

サウンドマンは絶叫した。しかしそれは諦めによるものではなかった。これから味わうことになる痛みに対しての叫びだった。

ボグオオオオ

穴へ右手を当てた。回転が止まる寸前に右手へ穴を移動させることに成功した。手首から先が吹っ飛び、流れ出た血が川へ流されていく。

「やはり「数秒」…その爪弾の穴は数秒だけ自動的に追跡して…そして消える……危なかつた…危なかつたが、今のが最後の一発」

ジョニイの爪には弾が残されていなかった。対して、サウンドマンはダメージを受けたものの、まだ攻撃することができている状態だ。勝った。このオレの勝ちだ。そう言おうとしたサウンドマンのセリフに被せて、ジョニイが否定した。

「いいや…サウンドマン……そこでやめろ。その位置から後ろに下がれ……勝ったのはぼくたちだ。君じゃあない…」

仕留めようとした動きを止めた。今更何を言っているのか、決着は明確だ。自分の勝利に変わらないと、爪弾を撃ち尽くしたジョニイの手を見た。

シルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシル

まさか。サウンドマンは目を疑った。ジョニイの手元で小さな鉄球が回転していた。持っていたのはジャイロのベルトのバックルだった。まだ爪が残っている時に、バックルを削って鉄球を作っていたのだ。それを気づかれないように、川の中に隠していた。「おまえのその残った方の手の指を、少しでも動かしたら発射する…この間合いだ、必ず致命傷になる」

それは警告だった。もうこれ以上戦うのはやめろ。諦めて降参しろという最後の警

告だ。

「下がるんだサンドマン！ 短刀を捨てて、後ろに下がるんだ……」

始末するとう意思で戦って、それでも殺すことなく決着がついたのなら、それ以上戦う意味はない。生きるか死ぬかという状況では甘ったれた考えだ。それでも、それはヒーローを目指す者として必要な甘さだった。

「試して」みる価値はある……わたしの音より……君の方が素早いと？」

しかし、サイラン敵であるサウンドマンにはその甘さは無かった。

ビシユアアアア

ジョニーが鉄球を投げ、サウンドマンの短刀が迫った。

ドゴオオオオオオ

早かったのはジョニーだった。ジョニーの投げた鉄球が喉元を貫いた。ビクリ、とサ

ウンドマンの体が震えて短刀が手からこぼれ落ちる。川へ十字架のように突き刺さった短刀を追うように、サウンドマンの体も沈んだ。

ドサツ

「う……う……ジャイロ………」

力尽きたジョニイの体が倒れた。最後の力を振り絞ってジャイロの体の近くに寄りかかる。張っていた気が緩んで、一気に疲労が重さになってのし掛かった。

このまま目を閉じたら、出血多量で死んでしまうかもしれない。片腕と片足を失ったジャイロは特に重症だ。

リカバリーガールなら治せるだろうか。腕と脚はまだ遠くへ流れていない。探してくっつければ治せるだろうか。

しかし、ジョニイの脛はどんどん落ちていく。

すまなかつたジャイロ……君を助けることはできなかつた……だが、敵を倒すことが……できたのは……君のお陰だ……

「すまなかつた……ジャイロ………」

ブワアアアアアアアア

目の前が黒く染まった。次いで、何者かの足音が聞こえてくる。地面や泥を踏んでいる音じゃない。固い床を歩いているような靴音が、次第に大きくなってきた。その暗闇の感覚に、ジョニイは覚えがあった。

そうだ……この暗闇は…USJ……で…まさかッ!!

「これはこれは……お久しぶりですね…」

閉じかけていた目を開いた。紳士ぶった言葉遣いと声を聞いて、ジョニイの記憶が掘り起こされた。首を動かして見上げた先には、USJ襲撃の際にいた黒霧という敵ライランがいた。

「そんな……お前は……！」

黒霧の後ろにはもう一人いた。絶対にありえない、これは幻覚だと思いたかった。

「どうやら……オレを倒したらしいな…だが、お前が？ 本当か？」

サウンドマンが、五体満足の状態でそこにいた。動けないジョニイの顔を覗き込んで、フム、と顎に右手を添えて首を傾げていた。

スパアアアアン

「ぐああああ!!」

サウンドマンは持っていた短刀でジョニイの両手首から先を切断した。遅れて嘔き出した血と痛みでジョニイは叫んだ。

「妙なことをするなよ……」

「サウンドマン……『ポールブレイカー』の方は瀕死です。手を下さずとも、じきにくだばるでしょう」

「じゃあ、残るはこいつだけか……」

サウンドマンの短刀が首に添えられた。鉄の冷たさが首に触れた箇所から伝わってきた。

まだ父を見返していない、母に勇姿を見せていない、兄さんに合わす顔が無い、ジャイロを助けたかった。様々な自責の念を抱いたジョニイは、気がついたら絶叫していた。目を閉じて、せめて殺される瞬間まで叫び続けてやろう。

その時ジョニイの足が若干だが、体に引き寄せられるように動いた。

「なんだ……動けるんじゃないか……それとも……今初めて……? 気付いてもいないのか?」

だからどうした、と切り替えてサウンドマンは短刀を構え直した。叫び続けるという何の意味もないヤケクソの行為に目を細めて、サウンドマンの短刀が振るわれて血が嘔

水のように噴き出した。

ドツツゴオオオオオオオオ

「サウンドマンッ!!」

とてつもない打撃音と共に、サウンドマンの体が真横に吹っ飛んだ。川を越えて飛んでいったサウンドマンを黒霧が追いかける。とてつもない振動と音、そして切られたはずの喉の痛みがない。

何事かと目を開けたジョニイの前には、オールマイトだった。背中に回された手は、体育祭で感じたままの大きな手だった。

「もう大丈夫! わたしがきたッ!!」

テレビでも体育祭でも聞いた台詞だった。もう安心という気持ちになり気を失いかった。だが、それでもジョニイは口を動かした。

「音」に……「音」に触れたら……触れると……なんだろうと切り刻まれる……ジャイロの「手足」が……流された……回収……して……く……」

「ああ……わかった!! 必ず君たち二人とも助けてみせるッ!!」

オールマイトの手の中で、すでにジヨニイは気を失っていた。力が抜けた小さな体とジャイロの体を抱き上げて、川から離れた木のそばに横たえさせた。

川向こうまで吹っ飛ばされたサウンドマンが起き上がった。地面と体の間に音の固まりだったものが挟まっていた。それが衝撃を和らげていた。

「大丈夫ですかサウンドマン！」

「大丈夫だ……だが、なんて破壊力だ。音の固まりが潰された」

ゆっくりとだが立ち上がったサウンドマンを見て黒霧は戦慄した。攻撃されてから地面に叩きつけられるまでの間に、音の固まりでガードするという荒技をやったのけたことに対して。そして、音すらも捻り潰してしまおうオールマイトのパワーに。

「この場は去りましょう。脳無もない今、圧倒的に我々が不利です……」

「待て、金は……依頼はどうなるんだ」

「今はそれどころでは……ハッ！」

押し潰されそうな敵意を感じて振り返った。オールマイトが川を挟んだ向こう側に立って見ていた。その顔は、いつかの如く笑みが消えていた。

右手を振り上げ、川に向かつて勢いよく薙ぎ払った。聖書に記されたモーセが海を割ったように、力技で川を割ったのだ。水しぶきと共にジャイロの手足が舞い上がる。

ゴオツツ

一瞬だった。目にも止まらない速さでそれを回収したオールマイトは、空いた左手を握りしめる。

「まだやるか？」

このままでは不味いと思っていた黒霧は、オールマイトの言葉を聞いて瞬時に逃げを選択した。

サウンドマンもビリビリと伝わってくる敵意に、気がつかないうちに手が震えていた。

黒霧のもやが広がり、2人を包み込む。

完全にそのもやが消え去り退却したとわかると、オールマイトは2人を横たわらせた木まで戻った。

「SHIT! もっと早く着いていれば……」

ジョニー・ジョースターとジャイロ・ツエペリは幸運だった。

ジャイロが雄英に電話した際、その電話に出たヒーローがオールマイトで更に活動時

間がまだ残っていたこと。

「凹んでてもしょうがないよ！ 最低限の止血まで治療はできたけど、この子の手とボールブレイカーの手足は時間の問題だ！」

そしてオールマイトがリカバリーガールを連れてきてくれたことだった。

止血を完了させた2人とリカバリーガールを持ったオールマイトは、全速力でその場を走り去った。間に合ってくれと繰り返し思いながら、1秒でも早く着こうと更にスピードを上げた。

ジョニー・ジョースター

両手首欠損の上、意識不明

再起不能……？

ジャイロ・ツエペリ

右腕部と左脚部欠損の上、意識不明

再起不能……？

オールマイト

このあと授業に遅刻したうえ、活動限界のため途中でエクトプラズムに引き継いでもらい、校長に注意されてしまう。

リカバリーガール

手足の欠損を治すため、ツテに連絡を入れる

サンドマン（サウンドマン）

トウワイスによって作られた分身だった為は無傷だったが、オールマイトの一撃で左腕が軽い打撲

1週間程度で再起可能

ヴァルキリーとスローダンサー

すっかり忘れ去られていた二頭。気がついたリカバリーガールによる連絡で、1日遅れて回収された。ゴメンネ

右? 左? どっち?

ジャイロ・ツエペリの一族、『ツエペリ家』は350年も昔から『国王からの命令』がある時以外はその本来の身分と役職を知るものは父親とその妻、そして第一子(長男)のみにとどまる。

日常、普段は一般市民に対する医師の仕事で社会的な信用と収入を得ていた。それは超常社会においても変化はなく、個性の有無に限らず受け入れていた。

ジャイロ・ツエペリもまた、もの心つく頃からその教育を受けて来ていた。

微かな靴音が、半分覚醒していたジャイロの意識を叩き起こした。脳内で警笛が鳴り、真っ白な布団を払い除けたジャイロはまさかと、扉の方を向いて靴音に耳を集中した。音はだんだんと近づいてきていた。

「おい、起きろ! あの「足音」は……」

「足音? そんなの聞こえないけどオ〜〜」

共に寝ていた女が、まどろんだ顔で聞き返した。服を脱ぎかけた半裸状態の姿は、そ

ここで何があつたかを物語つていた。そして、それを一番見られてはいけない人物がすぐ近くまで来ている。

「ヤバイ、父上だッ！　ここに近づいてくるッ！　何してる!?!　早く服を着ろよッ！

父の病院内で患者の君とここにいるなんて知られたら、殺されるッ！　マジヤバイッ」

飛び跳ねるようにベッドから出たジャイロは、脱ぎ捨ててあつた服をかき集めて急いで服を着る。ズボン、靴と履いていくジャイロに対して、女はまだベッドの上でまどろんでいた。

父は厳格なだけじゃない、国王からの命令に誇りを持つている。それは本来の仕事ではない医者としての仕事にも、強い誇りを持つている。そんな父に見つかったら、間違ひなく殺される。

「急げって！　今見つかったら君は他の男と結婚、あつという間にさせられるぞッ！」

ようやく靴下を手にとったとき、ジャイロは白衣を着替え始めていた。

「えエー……ッ！　そんなの間に合いつこないイイイイイッ！」

ジャイロは服を着替え終えたが、女はやつと靴下を片方履いていた。

「おいッ！　いまそこの廊下を曲がったぞッ！」

足音は女の耳にも聞こえるほど近づいてきていた。聞こえていた音が止み、病室の扉がゆっくり開けられた。ジャイロの言った通り、足音の正体は父親だった。

ガチャリ

「何の問題もないですね…ハイ! 単なる栄養不足でしょう…タマネギと一緒にレバー肉食べるといいですよ…関節痛の予防にもなりますからね…さっ、そっちで服着てください」

中を覗いたジャイロの父親が見たのは、息子がシワだらけでガリガリの『老婆』を診察している様子だった。骨と皮だけで、いまにも倒れそうな老人はジャイロの手に捕まっつてようやく座れている様子だ。

「あ、父上」

今気がついたように、振り向いたジャイロの視線の先では、父親が腕を組んで見ている。診察がちゃんと出来ているのか見ているのか、それとも違和感を感じて観察しているのか。焦りを出さないようにジャイロが自然に出来たのは、女の背中で静かに回っている鉄球があつたからだ。

シルシルシルシルシルシルシルシルシルシルシル

間に合わないと諦めたジャイロは、回転で皮膚を硬質化するように女を老婆のような姿に変えたのだ。

「ジャイロ、足を骨折した患者がきている…手伝ってくれ…」  
「はい、すぐ行きます」

バダム

父親が部屋を去り、足音が遠のいたことを確認したジャイロは大きく息を吐いた。その顔面に老婆、もとい寝ていた女は怒り狂って枕を何度も叩きつけた。

「なんて事するのよッ！ 早く元に戻しなさいよッ！ この皮膚のたるみをッ！ シワだらけにしてッ！ 戻してッ！ 今度こんな事したらあたしが殺してやるわッ」

「おい…慌てるなって…怒るなよ。この逆だつてできるんだぜ。『ジャイロ、ありがとう』ってきつと言うぜ……」

ググググググ　　ググググ

笑うジャイロの言う通り、鉄球の回転は全く逆の現象を彼女に引き起こした。全身のたるんでいた皮膚やシワが一切無くなり、きめ細かくハリのある肌を彼女に与えた。

ググググ　　グググ

だが、変化はそれだけに留まらない。

「いろんな場所のお肉が重力に逆らつて持ち上がるぜ。ま…！ 1週間は持続するね」

胸や尻の肉が持ち上がりモデルのような体型になった。スラツと細くなった足に鉄球を置けば、その周りの毛が痛みもなく抜けていく。

「しかもいらないうてんならそーゆートコの脱毛とかもできるぜ、やめろつて言うんならやめるけど」

「アハハハハハハハハ！ やめてキャー！ やめてエーツ」

自分のつるつるとなめらかになった脚を撫でて笑う。そんな彼女の反応を楽しんでいたジャイロは、脚を撫でていた手を見て違和感を覚えた。手をとつてよく見ると、薬指の付け根に跡がついていた。

「あれ? このクスリ指…シワが消えたら日焼けの跡がでてきてる…ゴクリ…指輪の跡……」

オレたちマジ殺されてたな……指輪してんのか? 普段……あんた人妻……

パチリ

病院のベッドの上で、ジャイロは目を覚ました。なんで病院のベッドにいるのか、まだ夢なのか。意識が混同したままゆるりと首を動かした。最新の電子機器がずらりと囲んで、極限まで抑え込まれた電子音が微かに聞こえてくる。

思い出した。サンドマンの攻撃で重傷を負ったオレは意識を失ったんだ。とうことは、ジョニーが黄金の回転を身につけて勝ったのか。

「……………チツ」

起き上がろうとして力の入らない体に舌を打ち、しびしびナースコースに手を伸ばそうとしたジャイロは、布団から出てきた自分の変わり果てた右腕を見た。機械に表示された心拍数が増えた。

わかつていた筈なのに、実際に目の当たりにするとシヨックを隠しきれない。上腕を半分残して消えた右腕は、意識を失う要因になったひとつだ。いまは布団の中にある片足も、同様に無くなっているんだろう。

ここまで冷静になれたのは、かつて医者として様々な患者を診てきたからだろうか。心拍音だけが早まるのを聞き流して、ジャイロは左手でナースコールを押した。

ジョニーより早く目覚められたのは良かった。そう考えでもしないと、何かに押し潰されそうになった。

「大丈夫かい？」

「大丈夫、とは言えねーな……………本当にジョニイはまだ目を覚ましてないんだな?」

「ああ……………一命は取り留めたもののまだ昏睡状態さ、しばらくは目を覚まさないだろうね」  
両手を失った。それがどれほど辛いものなのか自分にはわからないが、いまのジョニイが知れば取り乱すどころじゃないことはわかった。

「そこで、あいつの両親は?」

「2人とも来てたよ……………あんたへ伝言を頼まれた。『どうか自分を責めないでほしい』つてさ……………今どき珍しいよ、あんな強い心を持った親は……………」

「そうか……………」

ジョニイを預かる者として、一度ならず二度までもこんなミスを冒してしまった。訴えられてもなんら不思議は無かった。だがジャイ口の予想と反対に、ジョニイの両親は氣遣つてくれた。それがどうしようもなく情けなくて、同時に安心もしていた。

自分が罰されるべきなのに、何もないとわかると安心してしまった。どうしようもない自己嫌悪に苛まれて、ジョニイに合わす顔がないとさえ思っていた。

「なあばあさん……………いや、リカバリーガール。あんたに頼みたい事がある」

ベッド脇の椅子に立つて見下ろしているリカバリーガールに、改まって言った。

「……………想像はつくよ。あの子の手を治してやりたいってんだろ? 医療に詳しいあんななら、それがどれだけ無謀な頼みかわかつてるはずだ」

「確かにな……だがオレが詳しいのは通常の医療だけだ。治療系個性のあんたなら……知っている筈だ……ジョニイの腕を治せる個性の持ち主をな」

本来の仕事をしない時は、医療の知識を受け継いできたツエペリ一族にも、知らない治療法がある。それは個性による治療だ。リカバリーガールのような治療系の個性は、ヴィランに狙われやすい。彼女は雄英に所属しているが、他の治療系個性の人間はどこにいるのか情報が出にくいのだ。

長い沈黙のあと、彼女は大きくため息をついた。

「諦めろなんて言っても、無駄なんだろうね」

「話が早くて助かるぜ……」

「ちよつとちよつと、まだ安心するには早いさね……たしかにあんたたち2人とも助けられる個性の持ち主はいる。でも、その治療を受けるためには条件があるんだ」

「条件…… バカに金がかかるのか？ ブラックジャックみたいな医者だな」

ジャイロが茶化したのが、リカバリーガールの表情は変わらなかつた。

「ゴホン、すまねえ……続けてくれ」

「その条件については詳しくは知らないけどね、認められなければ死ぬってことはわかってるんだ……それでもやるのかい？」

死ぬかもしれないと言われて、ジャイロは黙った。

「……まあ、まだ時間はあるさ。ゆっくり考えな」

リカバリーガールが去って一人になった病室で、ジャイロは考えた。果たしてジョニイに、そんなハイリスクの治療を受けさせていいものかと。

「らしくない……」

サンドマンの罠から逃れる時に言った自分の言葉を、思い出して口にしていた。

「お前に言ったオレが、一番らしくないしみったれた事考えててもしょうがねえよな

……」

ジャイロは自分に繋がれた点滴の管を伝って残りを見た。まだ中身は半分ほど残っていた。点滴の滴が落ちるのが嫌に遅く感じた。それを見ないように目を閉じて、ジョニイにどう伝えようかと考え続けた。

目が覚めたジョニイは、薄暗い場所にいた。体を起こそうと試みるが、重いもので固

定されてるようにピクリとも動かない。

「お…………お……………」

足の感覚が無いのはいつも通りだったが、明らかに異常だった。周りには自分と同じように簡易ベッドに寝かされている患者がいた。

「おい、看護人…………なぜ来ない？ ……………く…………臭えぞ…………オレのだ…………」

自分が情けなくて、涙が出てきた。それなのに看護人は椅子から立ち上がろうとせず、新聞を読んで寛いでいる。

「ちくしよオオオ、聞こえねーのかあ…………臭ってるって言ってるんだ…………ク…………クソをもらしてる…………オレ…………」

どうしてこんな目に合っているのかわからなかった。とにかくこの臭いと不快感をなんとかしてほしかった。それでも一向に看護人は動こうとしない。

「おい！ おめーに言ってるんだッ！ 看護人ッ！ てめーの仕事だろッ！ さっさとオレのクソを始末しろッ！」

言つてて情けなかった。それを振り払うように腕を振るった勢いで、めくれた布団の下には目を疑う光景があった。

管が伸びていた。点滴のものでは無かった。足に付けられた管はそのままベッド側の容器に繋がれていた。中には赤い血が入っていた。それが自分の血だと理解したと

き、看護人がいつの間にか近くまで来ていた。

ドグオツ

新聞を顔に思い切り被せられた。そのまま口を塞ぐように新聞をねじ込まれた。

「でけえ声出してんじやあねーよ、この天才ジョッキーさんよオー。ちよつとおまえの血を足から頂いちゃつてるだけだ〜〜」

かまわねーだろ? どうせ何も感じない下半身なんだからよ。男は醜悪な顔を歪ませて笑っていた。爪弾で反撃しようとしても、全く回転は起こらなかった。

「て……てめえ………」

「誰かに言いつけるってかア〜〜? おめーはもう父親さえさつぱり見舞いにも来やしねえじやあねーか? お知り合いのジャイロとかクラスメイトたちもオ〜〜」

なんだって。

男の言葉に頭から雷が落ちたような衝撃が走った。クラスメイトはともかく、ジャイロまでも見舞いに来なかった。嘘だと信じたかった。だが現実には、ぼくは劣悪な環境で眠っていた。

「ヴィランを仕留めたのならともかく、マヌケにも偽物と遊んでいた上に仲間も守れず

手まで失った元天才ジョッキーなんかにはよオオ〜」

「や……やめろ」

「誰にとつてもおまえなんかの姿は見たくねーのさ！ 誰も同情なんかしねえッ！ ここに来るだけでうんざりしてくるッ！ 今ごろジャイロ・ツエペリもどつかでくたばつてらあああああ——！」

「やめろおおおおおおおおお！ うっ……うっ……おおおおおおおッ!!」

男は新聞を口の中に更にねじ込んできて、ついには言葉も話せなくなった。逃れようとしても男は抑えつけてきて、体が動かない。

なんとかかしようとして首を動かしたジョニーが見たのは隣の患者だった。だが、さっきまでと様子が違った。見覚えのあるテンガロンハットを被った顔が、そこにあった。眠ったジャイロの布団の中から、大量の血が出てくる。

「ああ……あああッ！」

起きたジョニーは息を切らしていた。目の焦点が合わずに、視界がぐちゃぐちゃになつていた。ひどく体が重く、大量にかいた汗が下着を肌を吸いつけていた。

「誰か……誰か来てくれッ！ 頼む……誰でもいいッ！ ジャイロはどこだ……いるのかッ!? なんでもいいから返事をくれッ！」

心拍の上昇を機械がうるさく知らせていた。それでも体は鉛のように重く、ただただ

孤独感だけが増していった。

シヤアアアア

カーテンが開いた。入ってきたのが誰かわからないうちに、布団を剥がされた。  
ドギユウウウウウウ

「落ち着け……ここだ……そうだ……大丈夫だ。落ち着け……」

ジョニイの胸の上で回転しているのは鉄球だった。そこから不思議な温もりが伝わって、心が落ち着いていく。それと同時に、入ってきた男の顔を見てジョニイは涙を流した。

「ジャイロ、ああ……ぼくは君を！ ……許してくれ、ジャイロ」

「さあ……もう大丈夫だ。ゆっくり息を吸うんだ。大きく、静かに……」

ジャイロは松葉杖を置いて、取り乱していたジョニイの背中を撫でた。

ジョニイが落ち着くまで30分ほどかかった。やっと落ち着いたジョニイはつい先ほどまでの醜態で顔を赤くしていた。きつといつかこのことでいじられるだろうと

思った。

「落ち着いたな……もうわかっているとと思うが、おまえの両手はもう……」

「ああ……やつに切られた。それより、君が気絶してから何があつたかは、もう聞いたのか？」

ジャイロは黙つてうなずいた。その動きに合わせて、空洞になつた右袖が揺れた。罪悪感が押し寄せてきて、すまなかつたと声を出す前にジャイロが話し出した。

「腕と脚を治したいか？ ジョニイ、命を懸けても……」「全て」を手に入れたいと今でも思つてるか？」

「……………」

「どうなんだ？」

「ああ……もちろんだ。雄英に入つてから、死にかけていたぼくの心は生き始めた……ここでヒーローを諦めたら、きっとぼくの心は再び死ぬ」

「じゃあ手に入れよう……罪悪感なんて感じてゐる時間はない。なるべき時に、自然となるはずだ」

その言葉を最後に、ジョニイとジャイロは退院まで言葉を交わすことはなかつた。

ジョニイは「その時」のために怪我を治して万全の状態にしたのち、一本の電話をかけた。短いコール音の後に聞こえた声は、彼が最も安心できる人間の声だった。

「……聞いたよ……来てくれてたんだって……でも、治りそうなんだ……ああ……うん……そうだね、心配かけた……でも、治りそうなんだ……大丈夫……大丈夫……大丈夫、食べてるよ……ん……じゃあまた」

わずか数分程度の電話を終えたジョニイは、少しだけ顔から険しさが消えていた。

数日後、二人は飛行機に乗っていた。両手首から先が無い状態で車椅子に乗っている青年と、右手がなく左足が義足になっているカウボーイのような男。明らかに異質な二人組だった。

「すみませんが、お話を聞かせてもらえますか?」

警備員が呼び止めた。だが、二人は笑ってそれぞれ一枚の紙を取り出して、見せつけるように前に掲げた。

「この紙が目に入らねーか……ッ? 『特別優待の航空チケット』だぜ」

「えッ……」

「しかも「あの」リカバリーガールの名前入りだ。超VIP待遇で頼むぞ……ウルトラスーパーファーストクラスだッ！ ニヨホホッ」

「ええええええええッ!!!」

もちろんそんなクラスはなく、通常のファーストクラスの席に案内された。

部屋に入るなり、二人は我を忘れて大騒ぎだ。

「スゲーぞジョニー!! キャビアとシャンペンがあるぞッ！ しかもタダだつてよ！

早速注文するぜ！」

「あつ、ズリイぞ！ ぼくの方もシャンパンとキャビアを注文しろよッ！」

メニユーに飛びついてきたジョニーをひらりとかわして、ジャイロはかつかつと笑った。

「おめくはまだガキだろオウウウオコチャマはジュースでも飲んでなッ」

「ちくしよオウウウじゃあぼくはこのマツサージだッ！」

「おつ、いいじゃねーの！ 到着までのひと時を楽しもうぜえ！」

到着までの間を豪勢な食事とサービスを堪能し尽くす二人だったが、なぜここまでのチケットをリカバリーガールが用意してくれたのか。気になったジョニーが聞くと。

「だつてよ。オレたちは死ぬかもしれないねえんだから、存分にいい思いをしておきたいじゃねーか！」

2本目のシャンパンを飲み干したジャイロがそう言つて、3本目に手をかけた。突然目の前の豪華な食事が恐ろしく思えてきたジヨニイの脳裏に、最後の晚餐という単語が浮かんだ。

「チクシヨーこうなつたらヤケだツ！ オレにもシャンパンを寄越せジャイロオオー！」

飛行機が目的地に到着する頃には、二人とも酔つ払つて酷い有様になっていた。

「だからよオオオ~~~~~ドリルみたいに回つてたのよこう、ドリリリーつて」

「ほ~~~~? それで?」

「それで思つたのよ。それ使つたら、スパゲッティもフォークなしで食べるって！ そのままドリルで歯を磨いたりして」

「ギヤハハハッハッハッハッハッ！ チーズも削れるんじゃねーか? レラレラレラレラレラ」

「ゾラゾラゾラ~~~~~……」

普段から質素な暮らしをしていた二人にとって、ファーストクラスはまさに雲の上の存在だった。天にも登る気持ちで羽目を外した結果、二人とも島に着く頃には完全に出来上がっていた。



「何ッ!?!」

「なんだお前はッ!」

倒れたまま睨みつける二人を見下ろして、女が指を鳴らした。

ついさつきまで空港のベンチに座っていた旅行者が立ち上がり、歩いていた一部の人間も一斉に立ち止まった。他の旅行者や売店の店員はその異様な光景に吞まれて啞然としていた。

バサアア

瞬く間にその者たちは身を翻して、着ていた服やバッグを取り払った。その下から現れたのは素肌ではなく、全員もれなく真っ黒に統一されたスーツだった。

「に、忍者だッ!・こいつはジャパニーズニンジャだぜジョニー!!」

一連の動きに大興奮するジャイロとは対照的に、ジョニーは自分の体に起こったことに気がついていていた。

淀んでいた意識がハッキリしているうえに視界も歪んでいない。女のあきれ返った表情がよく見えた。そしてその後ろに立つ小柄な女も見える。

「薬か……なにを飲ませたッ! 敵かッ!?!」

「二人を拘束しろ。手厚くもてなしてやるんだ」

「はっ! 了解しましたH・P様!」

スーツの男たちがジョニーとジャイロをそれぞれ取り囲んだ。数名の男たちがジョニーの体を持ち上げて、車椅子へ乗せた。

「待ってくれ！ ホット・パンツだつて……じゃあお前がツ!? モガツ」

「それ以上この場でその会話をすることは禁じられています。ご安心ください、我々はあなた方の味方でございます…ジョニー・ジョー・スター様」

スーツ男の一人がジョニーの口を塞いだ。

「おいジョニー！ ニンジャだツ！ 手裏剣持つてるかもしれねえぞー！」

そこへ、興奮気味のジャイロが突っ込んできた。なにを呑気なことを言ってるんだと思つた。

だが、周りの男たちはそのジャイロの奇行を止めなかった。理由はすぐに判明した。ジャイロは演技をしていた。二人を取り囲んでいた男たちが合流してひとつの壁になったところで、ジャイロは素の表情に戻り、ジョニーの口から手も退かされた。

「ジョニー、いまは静かにして従つておくんた……いいな」

無言でうなずいた。そのまま二人は連行されるように見せて真つ黒な高級車に乗せられた。中に入ってようやく、ジョニーは口を開いた。

「……なにがどうなつてんだジャイロ。空港についたと思つたらこの展開……それに

「ホット・パンツって名前は一！」

「ああ、その通りだ……オレも初めて目にするが……なるほど、ばあさんから聞いていた「通り」の女だ……「個性」は自分の身体をスプレーのように飛ばせる『肉スプレー』だ。だがそれは表向きの話だ……そいつの名はホット・パンツ。本来のあの女の個性は——」

「それは違うな、ジャイロ・ツエペリ」

運転席からホット・パンツが話しかけてきた。まさか運転してるとは思わず二人は肩を揺らした。

「私の「個性」は「肉スプレー」であって、それ以上でも以下でもない。あくまで君たちの手足を「治す」のは私の個性による副産物だ。それを誤解するな」

「まあまあ、落ち着いてホット・パンツ……ほら、ちゃんと前を見て」

助手席に座っていた小柄な少女がホット・パンツをなだめる。そのまま少女は振り向いてジョニーとジャイロを見た。

「はじめまして、ジョニー・ジョースターさん。ジャイロ・ツエペリさん。私はシユガー・マウンテン……<sup>ホット・パンツ</sup>彼 女の治療を受ける資格があるかどうか判別するのが、私の役目よ」

「資格だって……? 君が……どうやって?」

シユガーはクスクスと可愛らしく笑った。

「それを言ったら意味がないわ……でも安心して、ちゃんと公正フェアに判別するから」

「私の個性による治療を受けたいならある『条件』をのむことだ。そうじゃないと私は動かない」

「だからさつきからなんなんだ！ その条件つてのはッ！」

全く明かそうとしない二人に苛立ってきたジョニイの肩に手が置かれた。

「条件についてはこれ以上聞いても無駄だろう……それより、オレの鉄球しらねえか？」  
「はあ？ 知らねーよそんなこと。さつきの空港に落ちてんじやねーの？」

瞬間、シュガー・マウンテンの纏っていた空気が変わった。真横にいたホット・パンツが気付かないわけもなく、ハンドルを操作したまま彼女は冷や汗を流していた。

「ウソでしょ……ここでッ!? もう少し待ってシュガー! あと数分で着くから!!」

「あなたが落としたのは……」

明らかに焦っているホット・パンツにつられて二人も困惑する。

「あなたが落としたのは……」

「なんだ？ シュガー・マウンテンっていったけ……なんて言っただけ？」

ジャイロが聞き返した。その瞬間、さつきまでの凛々しい表情を崩してホット・パンツが叫んだ。

「クソッ！ おいジャイロ・ツエペリ！ 絶対に「間違えるな」よッ！ 「ちゃんと選ぶ」

んだ!! 違う方を選んだら終わりだからなッ!」

ホット・パンツはアクセルを更に踏み込んだ。車の速度が上がり、後部座席に体を押しつけられた。

「なんの事だ…おい説明しろ!」

「そんな時間はない! 今だッ! お前は落として、彼女は拾った! もう始まったんだッ!」

「だからなんの事だホット・パンツ!! スピードはともかく訳を言えーッ!」

混乱する車内で、シユガーは助手席と運転席の間から身を乗り出して両手を伸ばしてきた。

「あなたが落としたのは、こっちのですか? それとも——」

右手には光り輝く鉾石を持ち、左手には見事に研磨されたダイヤモンドがあった。

「この、ダイヤモンドですか?」

## 約束の地 シュガー・マウンテン その①

車の振動で揺られながら、しつかりとその手に握られた物を見てジャイロとジョニーは目を疑った。しかしそれ以上に車の速度が気がりだった。すでにメーターは100キロを切っていた。

「なんだ！ その手にツ……おいホット・パンツ、スピードを落とせツ！ 事故つて死に  
てえのかツ！」

ジャイロが叫んだ。

「だめだツ！ 今スピードを落とすわけにはいかない！ こんな街中でやるとは思わな  
かつた……いつもはこんなことしないのに！ 早く選べジャイロ・ツエペリ！ 誰かに  
見られたら終わりだツ！」

ホット・パンツは、何かに捲し立てられるようにスピードを上げていた。窓の外の景色  
がものすごいスピードで後ろへ消えていく。目の前を通過された車からのクラク  
ション音も運転手の怒号も、もはや聞こえない。

「目標地点まであと「数秒」で着くツ！ それまでに選べ！ 持つてる一個じゃダメだ

！ 鉄球で防御しない限り、衝突のダメージで全員死ぬぞッ！」

「なぜお前が「回転」を知っているッ！ どこで知りやがった！」

「早くしろオオオー……!! 間に合わないぞ……ッ！」

あらゆる出来事が積み重なって切迫していた。

赤信号の十字路を突っ切る。ホット・パンツの手がハンドルを右へ左へと小刻みに動かして、車をかわしていく。その天才的なドライビングテクニクに、感想を言う暇すらない。かろうじて突破するが危機は去っていなかった。あと少しで僕らはミンチだ。「ええいクソ！ おいガキ！ 早くオレの「鉄球」を返せッ！ そんなもんはいらねえから早く寄越しやがれ!!」

大混乱の中だというのに、シュガーは澄ました顔で首を傾げた。それが更にジャイロの焦る気持ちに拍車をかけた。

「ひよつとして、この薄汚れた鉄球ですか？」

シュガーが取り出したのはジャイロの鉄球だった。

「それだッ！ 早く寄越しやがれ！」

奪おうとしたジャイロの顔に、ホット・パンツの肘鉄がめり込んだ。後部座席へ飛ばされたジャイロの歪んだ鼻から血が出る。

「ブッ！」

「だめだ！ まだ終わってない！ 終わるまで待つんだッ！」

「てめー！ さつきから早くしろとか待てとか、矛盾してるぞっ！ なにがしてえんだ  
!!」

「ジャイロ見えたぞッ！ 真正面に建物だ！ ダメだ！ このままだと突っ込むぞオオ  
！」

暴走車の前にビルが見えた。警備員が止まれと合図を出していた。だが変わらず突っ込んでくる車にたまたま警備員は二人とも逃げ出した。下りたシャッターがどんどん近づいている。もはやこれまでかと、ジョニーは体を丸めた。

「正直なあなたには、3つとも差し上げましょう」

「許可が出たぞッ！ 早く鉄球で防御するんだアアアア」

パシイイ

訳もわからないまま、鉄球をブン取ったジャイロはそれを回転させた。ビルはもう目の前まで、来ていた。

グワッシャアアアアン

暴走車がとてつもない破壊音と共にシャッターに突っ込んだ。車の前半分がつぶれてエアバックが作動したが、100キロ以上で激突した衝撃の前では焼け石に水だった。

ギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャル

ぐしやぐしやに押しつぶされた車内で、鉄球が回転していた。ホット・パンツとシュガー・マウンテンの身体は歪んでいた。潰れた前座席の形にぴったりと合わさるように変形していた。

「これは……硬化させるのではなく、柔らかく……なるほど、柔らかいということはダイヤモンドよりも壊れない、といったところか」

鉄球の回転は、彼女たちの体を柔らかい物質へと変化させていた。ドアのあった場所からぐねぐねと体を振らせて外に出た。同時に鉄球は役目を終えたと言わんばかりに彼女の体から離れた。

口元から血が出ているが、それは口の中を切った程度のことだった。事故の惨状を見た彼女は、よく生きていたと改めて鉄球の技術を痛感した。

反対側に回り、シュガーマウンテンの方のドアを取り払った。小柄だったお陰か、

シュガーのダメージはホット・パンツより少なかった。

ホット・パンツの手を取って外に出ると、ホット・パンツとシュガーは、後部座席の方を見た。前席より被害はマシだが、中にいた人間がどうなっているのかは、想像に難くない。

「ジャイロ・ツエペリとジョニー・ジョースター……私たちを優先するとは……」

「いいえ、ホット・パンツ……彼らは生きているわ、見て……」

覗き込んだホット・パンツは仰天した。

なんて凄まじい生命力だ。

「ゴキブリ並みの生命力ね……」

口の中を切ったジャイロが血混じりの唾を吐き捨てた。

ジャイロ・ツエペリとジョニー・ジョースターは生きていた。しかも、二人ともそれ

ほどダメージを負っていない。

「誰がゴキブリだって？ おいコラ……命の恩人に対して失礼じゃねーのか！」

「ジャイロ……早くそこをどいてくれ……君の杖が、腹に突き刺さりそうだ……」

怒る余裕があるほどダメージが無かった理由は、回転の力だった。

ぶつかかることを覚悟したジャイロが、最も死亡率が高い前の二人を鉄球の完全な回転で防御した。では自分たちはどうしたのか。

答えはジャイロの手の中に入った。

「まさかご先祖様も、ダイヤやその原石を回転させたことは無いだろうな……後にも先にも、オレだけだろうぜ」

「ああ……二度と味わいたく無いけどな」

スクラップになった車から這い出たジョニーが吐き捨てた。不完全な回転とはいえ柔らかくされたことで、大怪我は免れたものの体の節々が痛んでいた。まさかと思つてジョニーはホット・パンツに話しかけた。

「なあ、これが君たちが言つてた条件つてやつなのか？」

彼女は申し訳なさそうに首を振つた。その時彼らの耳に人だかりの声が聞こえて来た。暴走車から逃げ出していた人たちが戻ってくる音だった。

詳しいことは中で話す。それだけ言つて、ホット・パンツはシュガーの手を握つて、焦つた様子で凹んで出来た隙間からビルの中に入っていった。

礼の一つも言わねえのか。二人が入つていった隙間を見てジョニーは眉間にシワを寄せた。

ジャイロに背負われて中に入るとそこは、ガラスの破片が散らばっていないければ普通の会社のロビーに見えた。インテリアの感想を言う暇などなく、すぐ後ろの事故現場から警察のサイレンや人の声が聞こえて来た。

「大丈夫だ、君たちが捕まる心配はない」

ホット・パンツの言葉にほっとする反面、なんでまだ上から目線なんだと思った。治療するのがこいつじゃなければ、手のなくなつた腕でぶん殴つてやる。本気でそう思うほどに、ホット・パンツの態度は気に食わなかつた。

気に食わない女の案内でビルの奥へ奥へと進んでいたジョニイは、ある違和感を感じていた。ここへ来るまでに誰一人として自分たち以外の人間と会っていない。臨時休業にしても不自然だつた。

その違和感を小声でジャイロに伝えると、彼も同じ違和感を感じていた。まさか自分たちは騙されているのではという考えが出て来たところで、前の二人の足が止まつた。廊下の突き当たりだつた。左右に伸びる通路に進むことなく立ち止まつている様子に訝しんでいると、ホット・パンツは手袋を取つて壁に手のひらをあわせた。

まさか……。予想を言葉にする前に、今度は壁の一部が消えて黒いレンズが現れた。それはホット・パンツの網膜をスキャンして、データと照合する。

「オイオイオイオイ……」

照合が完了したことを知らせる電子音が鳴り、壁だつた場所に扉が現れる。開いたそこにホット・パンツとシユガーが乗り込んで、啞然とするジョニイたちに振り向く。

「なにしてるんだ？ 早く乗らないと置いてかれるぞ」

「ま、待て……ちよつと待て……状況に頭がついていかねえ……ちよつと整理させてくれ」  
閉まってきた扉の中に飛び込んで、頭をウンウン言わせる。事故にあつた衝撃も冷めないうちに、こんな基地への入り口みたいところに誘導されて二人の頭はパンク寸前だった。

降りて行くエレベーターの中で、ホット・パンツはようやくこの場所について説明した。

会社の名前はステイブン財団。ステイブン・ステイルという男が数々のサポートアイテムを生み出した利益で設立された財団である。主にサポートアイテムや新薬の開発を行っているI・アイランドでは珍しくない企業だ。

「でも、それは表向きの話。本当はこの子みたいな個性の持ち主を保護して研究するのが目的なの」

「保護して研究ね……」

「少なくともお前が思つてるようなことはないから、安心しろ」

エレベーターは静かな駆動音を響かせながら施設の地下へ降りていった。

\*  
\*  
\*

シユガーがこの個性に気がついたのは、10歳の頃だった。きっかけはほんの些細な事で、授業中にクラスメイトが落とした鉛筆を拾った。

「あなたが落としたものは、この万年筆ですか？ それともこちらの筆ですか？」

自覚はあった。自分が喋っているということも理解できた。それなのに発している声は自分のものとは思えないほど大人びていた。

「な、なんだよお前!? ぼくの鉛筆はどこだよ！」

いつも楽しく遊んでいる男の子が、不気味なものを見る目をしていった。実際に私は不気味だった。今ならあの時の私の異常性がわかる。

「鉛筆ですか？ あなたは正直ですね、正直者なあなたには三つとも差し上げましょう」その光景を見ていた先生は驚いていた。小学生が明らかに最高級品のものを渡していたら、いくらなんでも引き止める。その日の放課後、私は先生に呼ばれた。

あの万年筆や筆はなんなのか。放課後に教師が問いつめると、私はこれまで自覚していなかった自分の個性について事細かに説明した。自分の個性の詳細が頭に浮かんでいた。

一つ、誰かが落としたものを私が拾うと発動する

一つ、落としたものが紛れもない最高級の品物に変質されて出現してくる。

一つ、正直に答えれば二つとも手に入るが、嘘をつけば舌を抜かれて死んでしまう

それを知った先生は疑わしそうに私に紙切れを大量に拾わせた。それは大量の一万円札に変質して、先生の手に渡った。それに味をしめた先生は校庭から石ころを大量に拾ってきて、全てを私に拾わせた。

「やったあ——!! 億万長者だアアア!」

金銀財宝を抱え切れないほどその手にした先生は狂喜乱舞していた。普段の温厚な優しい人ではなくなっていた。

「せ、先生……あの——」

「おっと、これは内緒だからな。先生とお前との秘密だ」

必ず言わなくてはならないことを言う前に、先生は私の口を閉ざさせた。なんとか伝えようとしても、もう先生の耳にはなにも聞こえていなかった。必死に伝えようとしても無意味だった。それが、その先生を見た最後だった。

翌朝、学校から電話があつて休校と伝えられた。幼かった私は学校へ行かなくていいと嬉しかった。でも、その気持ちは一日もしないうちに崩れた。昼時を少し回ったころ、家に警察がやってきた。

先生とクラスメイトの男の子が消えたのだ。

原因は私だった。

男の子は家族といえる時に消えた。先生は指導室から出ることなく消えていたらしい。私は警察に全てを話した。最初はふざけているのかと馬鹿にしていた警察も、私が個性を使うと目の色を変えた。

翌日、家に来た警察が居なくなった。

私は全てを伝えていた。

今度はスーツ姿の人が家にやってきた。彼らは私の個性について知っていた。彼らと両親がしばらく話すと、私は彼らに連れて行かれた。最後に見た両親の顔は泣いていた。

それから私はこの地下施設で過ごすようになった。最初は寂しかったけど、もつと前からいたホット・パンツのお陰で私は孤独ではなかった。

エレベーターが止まって扉が開いた。その先には、地下とは思えないほど美しい庭園が広がっていた。天井を見上げれば、リアルタイムで外の天気が再現されていた。その中央にぼつんとある丸太小屋が、シュガーの家だった。

なんだか寂しそうな場所だ。そこを見たジョニーはただそう思った。そこへスキップして行くシュガーを見て、本当に彼女は幸せなのだろうかと疑問を抱いた。

「おい、やめとけよジョニー」

「……何が？」

「……お前が今から言おうとしている事だ。それを言ったところで、お前にできる事はない」

ジャイロは、目からぼくの中身を見通しているようだった。でも、その言葉にはなんの感情も込もっていないように感じた。空っぽの言葉はぼくの心に届く前に霧散した。

「ジャイロ・ツエペリ……ジョニー・ジョースター……これからお前たち二人を試す」

ホット・パンツの唐突な言葉にジョニーたちは驚いて振り返った。

「いきなりかっ!? ってか、ぼくらは何も説明されてない。まずその試練がなんなのか教えてくれないか」

「それについてなら、彼女から聞けばいい。だが急げよ、時間は日没までだ」

言い終えた彼女はエレベーターに駆け込んだ。ジャイロも急いで走ったが、遅かった。エレベーターの階数表記がどんどん変わっていく。

「クソ……わけわかんねーこと言い残しやがって」

苛立ちを壁に叩きつけてジャイロは階数表記を睨んだ。

「苛つく気持ちもわかるが、いまはシュガーつて子のところへ行く。彼女の言葉が本当なら、時間は限られてるはずだ」

「わかつてるさ……さっさと追いかけるぞ！」

ジョニイを背負ったジャイロは、踵を返して丸太小屋へ駆けた。扉に鍵はかかっておらず、数回ノックした後で踏み入れた。

小屋の隅でシュガーが座り込んでいた。何かにブツブツ言っている。回り込んでよく見ると、その手には人形が握られていた。他にも足元に小さなテーブルと椅子のセットに座らされた人形がいた。

「髪をいじりながらゴハンを食べてはいけませんよ。女の子は彼氏よりはいつも少なめに食べて、キャラグッズやロリファッションはもう卒業！ポテトチップは食事じゃありません。爪を噛むのとクスクス笑いは下品ですよ……ニンニク料理とケンカの言いわけは控えめにね」

おままごことをしていた。彼女が母親役で、人形たちが子供だった。その姿は本当に子供らしさに溢れていた。

「嘘泣きするのもやめなさい。好きでもないのに男の子をアッシーに使うのをやめなさい」

ジャイロは出来るだけ驚かせないようにそつと話しかけた。

「もしもしー、あのさくく……さつきホット・パンツが言つてた試練つてやつを受けたいんだが——」

「ああくくくくくくくくくく!!」

いきなりシュガーがこちらを向いて大声を上げた。

「そこは夫婦の寝室ですツ！ 足ツ！ 失礼な人!! ちゃんと玄関からお入り願いますツ!!」

足？ ジャイロが下を向くと、広げられたマットの上に間取りのような線が描かれていた。その中の「しんしつ」に、ジャイロは踏み込んでいたのだ。

「あ……オホン……悪い」

「おいジャイロ、君の行動で失格なのはやめてくれよ」

「わかってるよ、ちゃんと玄関から入りやいんだろ」

改めて、間取りの中の「げんかん」からシュガーに歩み寄ると、彼女は指について深々を頭を下げた。

「いらつしやいませ、わたくし「シュガー・マウンテン」と申します。この人形は「キャンデイ」。初めまして……ひとつよろしくお願い申し上げます」

「あ、ああ……オレはジャイロ・ツエペリ。背中のやつはジョニー・ジョースターだ」

「ツエペリ様とジョースター様ですね……お待ちしております。では、早速ですが試

練の方を——」

「あゝちよつと待つてくれ」

「……………なんでしょうか」

「その前に、あなたの個性をもう一度見せてくれてないか？」

シユガー・マウンテンは、黙ってジャイロを見つめる。

「急げよジャイロ！ あのホット・パンツは日没までって言ってた、つまり時間制限付きだ！ 早くしないといけないのは君だってわかってるだろう!？」

「うるせーなあゝちヨットだけだよ。さっきの鉱石やダイヤモンドだけじゃ、死にかけたつてのに割りに合わなすぎだ。おい、シユガー・マウンテンって言ったな……………さつき車の中で、もしオレがダイヤとか鉱石だって嘘をついてたらどうなった」

「嘘を…ですか？」

シユガー・マウンテンの足元から一本のつるが伸びてくる。それは次第に形状を変えていって、先端が、尖って「返し」がついた槍のようになった。

「これが舌を貫いて、体の奥から内臓ごと引き摺り出して殺していました」

シユガー・マウンテン

個性『泉』

彼女が拾ったものは最高級品に変質して、落とし主にどちらを落としかと質問する。正直者は最高級品を手に入れて、嘘つきは舌を引っこ抜かれて死ぬ。

ゆらゆら揺れる蔓を凝視してごくりと唾を飲み込んだ。だがそれはあくまで、嘘をついた時だ。正直に答えさえすれば問題はない。

「よし！ じゃあ早速やるぜ。おいジョニイ、おまえも鞆の中身をひっくり返せ！ 中にあるいらねーものをひたすらこの嬢ちゃんに『拾わせる』ぜ」

背中からジョニイを下ろして、自分も鞆を文字通りひっくり返した。中から旅行用の歯磨きや着替えが出てきて床に散乱する。その中のひとつ、ジャイロの下着が書かれた「間取り」の中の「しんしつ」に落ちた。

「そこはあたしのベッドルームう!! 足ッ！ 信じられないッ！」

よほどこたえたのか、シュガーがジャイロの体をポカポカと叩く。そんなことお構いなしに、ジャイロは荷物を漁っていた。

「くそっ、ロクなもんがねえな……ジョニイ、そっちはどうだ？」

「いやジャイロ……流石にそれはどうかと思うぞ。こんな子を使って大金を稼ごうなんて……」

「いいこぶりがあって。後でくれって言ってもやんねーぞ……つと、これなんかどうだ

！」

ジャイロは荷物を漁つてティツシユを取り出すと、ついでに自分の手首につけた腕時計をとった。ずいぶん昔の型で、もう買い換えたいと思つていたものだ。それをシュガーの足元へ投げ捨てた。

「よつしや頼むぜー！」

「ジャイロ……………」

後ろにいるジョニイの視線が痛いが構わなかった。シュガーの手が床の腕時計とティツシユに伸びていくのを、スローモーシヨンのように見ていた。拾う寸前、一瞬シュガーの目がこちらを品定めするような目になったのに気がつかなかった。

「あなたが落としたのは……………こつちの紙束？ それとも左の紙、腕時計も超ブランド物のヤツ？ それともこの古い方？」

差し出されたのは札束と高級腕時計だった。

「ニヨホホホホホホ！ オレが落としたのは……………いいか？ オレが落としたのは配られてた安物のティツシユとぼろつちい腕時計だ」

「正直者の貴方には、両方差し上げましょう」

シュガーから腕時計と札束を受け取ったジャイロは、顔に張り付くほどにやけて札束を自分の鞆に入れた。

「ジョニー、ほれ」

腕時計をジョニーに放った。受け取ったジョニーは少し考えたあと、それを腕につけた。

「この調子でどんどんいくぜ！ おまえの鞆もひっくり返せ！」

「あつ、なにすんだよ！」

急には動けないジョニーから鞆を掠め取ると、その中身も床にぶちまけた。中から出てきたのは僅かな旅行用品と、ものものしい大小の二つのケースだった。ごろん、と転がったそれを見てジャイロの顔に張り付いていたニヤケが消えた。

銀色のロックがかけられたケース。その中身は彼らの手足だ。無くなった足や指先が痛むような気がした。幻肢痛で我に返ったジャイロは、一言すまないと言った。

気まずい空気が流れていた。その空気を破ったのは二人ではなくシュガーだった。ジャイロが落とした小さなケースを拾い上げた。落ちた拍子に鍵が外れたのか、ケースが開いて中身が転がり出た。

それを、シュガーが拾った。

「あなたが落としたのは、このいまにも腐りそうな手ですか？ それとも……」

息を飲んだ。シュガーの右手にあるのは間違いなくジョニーの両手だ、それは間違いでない。では、左手に持っているのはなんだ。誰の手なんだ!?

「この、『人間の手』ですか？」

## 約束の地 シュガー・マウンテン その②

「そ、その手はッ！」

シュガーが拾った自分の両手を見て、もう一度個性で現れた『両手』を見た。

チラリと見えたところに、乗馬でついた傷のあとがあった。切り落とされた手と同じところだった。

バツ！

取り上げるために身を乗り出そうとしたが、その前にジャイロの手に遮られた。悪魔の尻尾のような蔓が、狙いを定めてゆらゆらと揺れていた。

「間違った方を選ぶだけじゃなく、無理やり奪うのもアウトらしいな」

当たり前なんだろうけどな。独り言のように呟かれたそれは、僕への警告のように聞こえた。

しつかりしろ。なんのためにここに来たんだ。目の前にある両手から、自分の欠けた両腕へ視線を落とした。自然とその下にある両脚も見た。クラスメイトと比較しても細すぎる脚だ。

すーっと、頭に上つていた血が引いていった。

「ジヨニイ答えろ……ただし、わかってるよな？ どう答えればいいかは」

僕を遮っていた手は、松葉杖を握っていた。

「ああ………僕らが落としたのは……」

腐りかけの両手だ

ギャン

身構える間もなく、個性で生み出された両手がシュガアの元から飛び出した。

「うおおおおおおー！！ と、閉じた傷穴からッ！」

「両方……さしあげます」

手術で閉じられた傷口をこじ開けるように、僕の腕の中へ入っていった。不思議と痛みや不快感はなかった。腕の中に何かが入ったという僅かな異物感も、手首から先が元通りになると無くなった。

「よし、異常がないなら早く済ませるぜ」

信じられない。僕の手だ。個性は使えるのか。爪は回せるのか、よし回せた。

直った腕は、以前と同じように問題なく動いた。屋内なので試せないが個性も使えるという実感があつた。

「うおおおー！ オレの傷穴からッ！」

ジャイロが自分の手足を拾わたんだらう。『はた』から見るとこんな気持ち悪いなんてと思いつつ、ジャイロのリアクション対して。

「……わざとやってる？」

真顔で聞くジョニーに、ジャイロもまた真顔になる。少しの沈黙の後、耐えきれないとばかりにジャイロが「ニヨホツ」と笑い、つられて僕も笑った。

二人が手足を取り戻すより前、その原因である男は死柄木達がアジトとして使っているバーにいた。身長に不釣り合いな長い足を投げ出すようにソファにもたれかかつて、見下すようにパソコンの画面を見ていた。

「動画を見てるだけで、ここまで違和感があるやつは初めて見たな」

「インディアンがノートパソコンを使いながら、コーラを飲んでいる。なかなかお目にかかれる機会は無いですね」

カウンターで黒霧と死柄木がボソボソと話していた。

それはもちろん聞こえていたが、そんなことを気にするよりも俺は目の前の動画を見続けた。

『誰かが……血に染まらなければッ……』

『来い……来てみる……』

『オレを殺していいのはッ！ オールマイトだけだア！』

動画が止まった。ステインの演説が始まった辺りから死柄木がイラついていたが、その理由は分からない。

オレにわかることは、このステインのセリフに全く感動しなかったことだけだ。濁流のようなコメントの内容は、贋物はいなくなれたの、所詮はヴィランだの。中には自分の考えを延々と書いてるやつもいる。

だが、オレには関係ないことだ。

「黒霧……」

ビシユッ

「何でしようかサウンドマン。話ついでにこんなものを投げないでいただきたいのです  
が」

音に乗せたノートパソコンを黒霧は何事もなく『もや』で包み込み、ソファの上にワー  
プさせた。衝撃で間の抜けたようにパソコンは開き、黒霧も変わらずグラスを磨き続  
け、もやもやに揺らいだ様子は無かった。少しは鬱憤が晴れると思っただがな。

「手が滑った。そんなことよりカネの話だ」

「ケツ、久々に口をきいたと思えば金かよ。この守銭奴が」

「ガキは黙っている「はあ？」それで、どうなんだ黒霧」

「どう……とは？」

睨みつけてくる死柄木を無視して、オレは今度はまっすぐに黒霧の方を向いた。  
フン……どうやら忘れていたわけじゃなさそうだな。

ジョニー・ジョースターとジャイロ・ツエペリとの戦いの後、こいつは「もう少し待っ  
ていただきたい」と言ってきた。

ムカついたが、オレ自身も負傷していた為に「治るまでの間ならいいか」と思ってい  
た。

だが、すでに十分すぎるほど待った。だのにその間、こいつらは保須とやらに行つて  
脳無を暴れさせてきたという。

随分と楽しそうじゃないか。

サウンドマンが、とぼける気か？という目を向けると、黒霧は磨き終えたグラスをカウンターに置いてぼつぼつと喋り出した。

『I・アイランドにあるサポートアイテムを、好きに奪ってくれて構わない』と、先生からの伝言です」

置いたグラスに、酒が注がれていく。

「……………バカじゃないのか？」

カウンターに座ったサウンドマンが、グラスを持って問いかける。その目は本気で、本心からの言葉だった。

「いいか、オレは報酬の話をしたと言ったんだ。報酬……現金……わかるな？ それをなんでわざわざ厳重な守りのあるところへ……しかも、現金に変える手間のかかるサポートアイテムを取りにいくんだ」

『I・アイランド』の科学技術の中には、決してヴィランに渡つてはいけないとされる物もある。あそこの物とわかれば、取引額に上限は無いでしょう」

椅子からサウンドマンが立ち上がった。すぐそばにいる死柄木からすれば、ただでさえ暑苦しい半裸の男が近くにいるのに、喧しくされてはイラついてしょうがない。

しかしそんなことおかまいなしに、サウンドマンは捲し立てる。



手筈について話し始めた黒霧とサウンドマンを横目に、死柄木はただそう思った。  
(サウンドマンの能力……音を物質化して、それに触れたものや音のついたものに触ると、音を現象として引き起こす)

死柄木はサウンドマンの言葉の意味がよくわからなかった。これだけの強個性で、しかも弱点らしいものも無い。対策を考えていたが、これといったものも浮かばなかった。それに……。

(触れただけであれとか……最高に良い個性じゃねーかクソツタレ)

さっきのパソコンが落ちたソファは、綺麗な切り口で何等分にも切り刻まれていた。そのソファと同じようにオールマイトや他のヒーローがバラバラになる様を想像して、死柄木は笑った。

## 再起への条件 友情への条件

ブツブツ……

口元を手で隠して、少し離れた僕に聞こえないくらいの声でジャイロは電話をしていく。

ジョニイは手首に巻かれた高級腕時計を見た。洗練されたデザインの長針が1分を刻むごとに、焦りもどんどん増していく。

「任せろと言ったが……日没までもう時間がないぞ！」

ここまでジョニイが焦っているのはいまから少し前、シユガー・マウンテンの個性で手足を取り戻した時に遡る。

この島に来るまでは両手と個性を失ったシヨックで絶望の淵にいた。

病院でイ・アイランドこのことを聞いたあとだつて思ったんだ。

『どこかでしくじってしまうのでは』……『本当はそんなものないのでは』

だから両手が元に戻ったとき、個性も戻つてると確認したとき、僕は喜ばずにはいら

れなかった。ほんとうに心の底からよかったと思っただ。

「いいですか？」

だが、試練はそこからだった。

シユガーは、彼女は自分の個性に存在するという『ルール』を語ってくれた。

ひとつ、泉で手に入れたものは全てその日の日没までに使い切らなくてはいけない。

ひとつ、おごったり金を捨てる行為は『ルール違反』となる。

もしルールを破ったり日没までに使いきれなかったら、体が樹木のようになって連れ去られてしまう。

「日没までに使い切る……札幌だけでいくらあると思ってるんだ。更にダイヤモンドとその原石まで……それを半日もしないうちに使い切るだど？」

なるほど、保護されるわけだ。もし外で生活していたら故意でなかろうとも、多数の犠牲者が出ていたに違いない。

個性なんて枠組みを逸脱している。いや、自動車の一件を思い出すと彼女も制御できてない。つまり常に暴走状態にあるようなものか。

「あのさ……これって別の日に『再試み』さいトライってできない？」

「だめです」

「そこをなんとかさア…… ホラ！ 時計見ろよ。日没まであと2〜3時間しかないんだぜ」

「だめです」

淡々とNOを提示し続けるシュガーに、説得は無意味と諦めかけたジョニイだがある妙案を閃いた。

「そうだ、これは君の能力なんだろう？ 暴走してても君の能力だ。だから例えば……仮にだが」

ジョニイは腕に巻いた高級時計を取ってみせた。

「この時計と交換で、『時間を買う』ってのはどうだ？」

奢ったり、捨てたりする行為じゃない。制限時間との交換だ。これならいけるだろうと、ニヤリと笑った。

シュガーの手が上がってきて腕時計へ伸びていく。

スカッ

しかしその手は腕時計を取らず、窓の外を指さした。そこには一本の枯れ木が立っていた。いいやこの場合、このシユガー・マウンテンという女の場合は普通の枯れ木なんて事はありえない。

「以前、今の貴方と全く同じように時間を買おうとした者のなれのはてです。時間は買えないもの。その無理を通そうとすれば、貴方にも相応のリスクが伴うでしょう」

「……」もつともし

反論の余地がなかった。

そのあと何かアイデアが浮かぶこともなく僕はジャイロと地上に戻ったんだ。

ジャイロが電話で話してる間も僕は考えた。

馬のバカ高い蹄鉄でも買うか？ 現代科学の<sup>すい</sup>粋を集めて車椅子を作らせるか？ まともなアイデアが出てこない。こんなとき大金持ちの知り合いがいたら、金の使い方とかすぐにわかるだろうに。

クソツ！ 大金持ちの友達なんて、そんなのコミックの世界だけだ！ 現実を見るんだ  
ジョニー・ジョースター、まだ何か方法があるはずなんだ！

ピッ

「どうしたんだよジョニー、そんな眉間に皺寄せて」

「やっと終わったか！ 誰にかけてたんだ、いやこの際どうでもいい。きつと金を使うツテなんだろう？ 僕らは手足を戻してもらったが、まだ『再起不能』なんだ！ 早くそいつのところまで行かないと……！」

ジョニーは車椅子で近寄って、焦るところかうろたえる素振りもみせないジャイロにまくし立てた。

「もうほとんど使ったぜ」

「……………は？」

「日没までに使い切るなんてチョロいぜ。マア今回ばかりは運が良かったつてところも少しあるかも」

「使った……いま、使ったつて？」

「土地を買ったんだよ。それもただの土地じゃあねえ……マッ

詳しくはゆっく

りと話すぜ」

何が何だかわからず呆然とする僕を置いてけぼりに、ジャイロは車椅子を押しながらゆつたりと歩き始めた。

最初に訪れたのは、〇〇銀行のI・アイランド支店だった。

『口座の開設から換金まで、なんでも承ります』

という売り文句が書かれた掲示板の前を通つて中に入った僕らは、そのまま換金窓口へと直行した。

運良く客が手続きを終えたところだったので、ジャイロは入れ替わるように窓口に立ったのだが。

「あのオ〜〜すみませんが……お客様」

当然のように整理券をとつてないジャイロに、店員が苦笑いして注意を促そうとする。

ゴロツ

「えっ?」

店員は思った。

人生で一位レベルのショックを受けた時、人間は本当に何も考えられなくなるもんだな。

「このダイヤモンドと原石……いくら価値があるか鑑定してくれ」  
ついでにこの腕時計も

「ありがとうございましたアあぁー！」

銀行員たち総出での見送りへ映画スターがするように手を振るジャイロと対照的に、鑑定金額のゼロの数に目眩を起こして、未だに目頭を抑えるジョニイ。

ガヤガヤ　　ガヤツ

「誰アレ……ヒーロー？」「有名人なのかな……」  
「頼んだらうちの広告塔に……」  
「やめとけ！」  
「やめとけ！」  
「有名なヒーローじゃないと広告にならないし」  
「でも結構イケメンじゃ

ない?」「うわつ、齒に彫り物…」

ただでさえジャイロは西部劇のような服で目立っている。もし『I・エキスポ』が開催されている時だったら、今のように少しぎわつく程度じゃすまなかつたかもしれない。

「ニヨホツオホホホ、ニヨホホハホホホ〜とんでもない値段になったけどよ、わかつただろ? もう使い切つたも同然つてことがア〜」

「わかつた! もう充分わかつたから耳元で言わないでくれ、もうほんとブツたまげてるんだよ。頭に銃弾食らつた時以上にな」

「そりや言い過ぎじゃねーのオ? ニヨホホ」

「君さ、僕がまだ学生つてことたまに忘れてない?」

「学生らしく目上の相手に敬意を持つて接するなら俺もちゃんとしてやるけどな、『ジョースター君』」

偉そうに言うので、僕はいつもの声より低くしておかえししてやった。それこそオールマイトぐらい低くして。

「……オホン! えー、ツエペリ教諭殿。きょうむ私めのお耳元でお話しないでいただけますかな? 非常に驚いているのです。この頭に銃弾をぶち込んでいただいた時よりも」

「悪かつた! 悪かつたからやめてくれ! 鳥肌が立つちまつたよ」

ヒイイイ!と身悶えながらジャイロが言った。

軽く咳払いして思い切り酷使した喉の調子を戻したジョニイは、そこでハツとした。

「……これで試練が無事に終わったとして、そのあと金銭感覚がおかしくなった君がとんでもない無駄遣いする……なんてオチじゃないよな」

「そりややるとしたらお前だろうが。まあ少なくとも今回の買い物は無駄じゃないな」

ジャイロがポケットからスマホを取り出して僕に渡した。移動する間に振り込みの手続きをしろってことだ。

ジャイロの言っただけの土地とは、僕らが職場体験で訪れた街がある土地のことだった。あそここのドワーフ（みたいな）村長は言っただ。ここは映画の撮影に使うのにぴったりなところで、色んなところから撮影協力の依頼がくると。

つまりそれだけの『価値』がある土地なのだ。さっきの電話で村長とその交渉をしてきた、ということらしい。

「ほら終わったよ。ほんとーに目眩がする金額だ」

「ありがとな。ウシツ これに残りはイチ、ジユウ、ヒヤク……あと3千万くらいだな」  
「便利だよなあ土地の権利すらもスマホで買えるなんて……それで? たった3千万だ

けどどう失くすんだ？」

嫌味つたらしく言ったジョニーだったが、ジャイロは全く気にしていなかった。

「おいおいジョニーーここがなんの島か……まさか、忘れたのか？　ここには世界中の研究者の英知が集まっている。その『成果』は、たった3千万じゃ足りないくらいのものだからだ」

言い終えて、ジャイロは立ち止まった。

「セントラルタワー！　やっぱ買うなら一番いいとこのやつだよな」

ちよつと待つてるとジョニーに言つて意気揚々と警備員の元まで行つたジャイロ。そこで雄英の関係者とかリカバリーガールの紹介でちゃんとサインがあるとか説明しました。

ただ待つててもヒマだったからセントラルタワーを見上げてみた。のけぞるくらい見上げてもつぺんは見えない。たしかにこれだけでかい施設なら、3千万なんてはした金程度だろうな。

(でも……それならなんでわざわざ土地を買つたんだ？　サポートアイテムとかを買うより面倒な事は多いだろうに……)

「おいジョニー！ 許可とれたから、リラックスしてセレブのショッピング…といき  
てーが時間がねえからな。カタログでソッコロ買おうぞ」

「ああ（気にしてもしょうがねえか…）」

時間が無いというジャイロの言葉で、一応急がなくてはいけない状況だと思いつ  
た。

夕日の端が隠れ始めていた。

代表のデヴィット・シールドは最近徹夜つづきだったため仮眠（という名の気絶）を  
とってるらしい。代わりに2人を出迎えたのは、ぽっちゃりとした体型の温和な男だっ  
た。

「はじめまして！ 私はデイクの助手のサミュエル・エイブラハムです。本来ならデ  
イク・デヴィットがご対応するべきところを、申し訳ありません」

腰が低くて丁寧すぎるくらいだが、温和な雰囲気のお陰で丁寧すぎて嫌になるなんて  
ことはなかった。

「いえいえアポ無しで突然押しかけてきたのはこちらですからお構いなく…それで早速  
なんですが」

「ああ ハイ！ どうぞこちらです…お茶やお菓子はありますか？ ジョニー・ジョー

スター君：ですよね？　クッションはどうです？　真ん中に穴が開いてるやつとないやつがありますか」

カタログをジャイロに渡すと僕の方に来て、片手にもう一つのカタログ、片手にクッションを出してきた。どこにしまったのかは置いて、本当に用意がいい人だ。

「すまねえが急いでるんだ。このカタログの中で3千万で買えるものは何だ？　すぐ欲しいんだ」

「すぐ… それは少し厳しかと。値段が値段ですので、早くとも2日後の受け渡しと」  
「手数料はいくらだ？」「な…：…は？」

申し訳なきそうに語るサミュエルサムエルにずっと近寄って、ジャイロが小声で言った。

「俺たちにはマジで時間がねえんだ。だから面倒なやり取りだとかは無しでストレートに言わせてもらおう」

周囲にはもう警備員はいないが、声を潜めたまま会話を続ける。

「あんた、カネがほしいんだろ」

「何を」「根拠はねえ…が、なんとなくわかんだよ。少しでも俺たちのご機嫌ゴキゲンをとってぼつたくろうってな。じゃなくても似たような事を考えてた、違うか？」

サムが言葉に詰まった、つまり凶屋ということだ。

「沈黙はYESととるぜ。じゃあさっきの注文を変えさせてもらう、『手数料込みで、3

「千万で今すぐ買えるものはなんだ？」

シュガー・マウンテンは壁にかけられた時計を、じつと祈るように見ていた。

「そろそろ日没か……今回は2つ、どんな風に生えるか楽しみだ」

対照的に、扉のそばの壁に寄りかかりながら窓の外を見るホット・パンツに表情はなかった。

「いいえ……彼らはやってくれるわ」

「ツ!? 貴女がそんなこと言うなんて……初めてじゃない?」

内心は驚きつつ平静に言うホット・パンツ。

シュガーはどこか確信に近い声色で返した。

「私の個性……いいえ 『呪い』を解けるとしたら、彼らのような人だと思っているの」

「呪い、か……。いい? シュガー……前例がないんだ、百歩譲って使い切ったとしても その……」

「ええ、きつとそうなんでしょうね……わかってる……わかってるわ」

そう、わかっている。これは呪いなどではない。一人歩きしているとはいえ、個性と

人は繋がっている。

それでも、そんな理屈とは別に、数々の人を見てきたからこそ、自分の中で確信していることもある。

『全てを敢えて差し出した者が、最後には真の「全て」を得る』

ゴウン　　ゴウン……

貨物用の無骨で巨大なエレベーターに乗って地下の倉庫区域に向かうジョニーとジャイロ。2人の間に流れる空気は、非常に緩和したものになっていた。

それもその筈。苦い顔をしたサムとの手続きは終了し、あとはモノを受け取るだけ。更に日没まで一時間ほどある。身体を元に戻すための試練という一時も気を抜けないものであっても、こうなるのは必然だった。

「なあジョニー…「オペラ」ってよオーー見たことあつか？おたく」

ゆっくり変わっていく階数表示を見ながら、ぼんやりと呟いた。ジョニーも同じよう

に表示を見ながら答える。

「オペラ？ 音楽の？ セリフを言えば済むのになぜかイキナリ歌い出して状況を説明するあの演劇のことか？ ……実際にはないけど、なんでそんなことを？」

「素朴な疑問…：セレブどもが使ってるちっこい双眼鏡みたいなあれ、オペラを見るから「オペラグラス」っていうんだよな？ でもあれよー舞台で歌ってるヤツらさあ体重120kgとか150kg超とかゆー巨体じゃん」

「ああ…だからいい声が出るんだろーね」

「なんでオペラグラス使ってるやつら見るわけ？ いらないじゃん」  
でかいんだから

想像したジョニーが破顔する。

「ハデーな舞台衣装のボタンアップにして、『はじけ飛びそーだなあー』とか見るわけ？」  
「確かに…：いわれりやあそーだね。でもてゆーか！ みな同じ体型だからアップで見ないとキャラ見分けがつかないとかアー？」

「ニヨホハホハハッ！ ジョニー！ オマーゆーじゃん！」

このセントラルタワーは、ほぼ無休で研究の日々だ。その規模に多少の差はあつて

も、実験などで起こる音は騒音なんて言葉が可愛く思えるほど。

ズ　　ズズ……

ズズズズ　　ゾアアアア

そのため、施設の要所要所は防音加工が施されている。

「ハハハハ　………そろそろだな」

「………遅かったな」

地下倉庫はもちろんのこと、搬送用エレベーターも防音仕様になっている。

「警備システムは止まってるな……」

「先行させた者がやっていますが、長くなると怪しまれますので」

「わかつてる。そこから先は耳にタコだ（だが選り好みはさせてもらう……少なくとも億はもらわないとな）」

チーン

「……………早速か。不幸なやつもいたものだな」

「迅速に頼みますサウンドマン。時間はかけていただけません」

黒霧はワープゲートを開いていつでも脱出できるよう準備し、サウンドマンは『ザクツザグツ』の音の塊をすでに作っていた。

ゴゴゴゴゴゴ　ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

重厚な扉が少しずつ開いていく。

真ん中の光の亀裂が少しずつ広がっていき、人影が見えた。

（ひとり……………いや、2人か？　先にでかい方を仕留める！）



不意をつかれ、更に再起不能となったはずの男の登場に、黒霧は『二手』遅れた。

「ボール・ブレイカーッ!? 不味い不味すぎる!」

ギヤリイイイイイイ

「動くな…撃つぞ」

いつ回り込んだのか。黒霧の後ろへついたジョニーが、爪弾をいつでも発射できるようにもやの中の本体へ超至近距離で向けていた。

「(一)、この小僧まで……)」

「バクゴーが言いそうな台詞だが『妙な動きをしたと僕が判断したら、即座に撃つからな』」

「おいジョニー! そいつからは聞きてえ事が山ほどあるんだ、殺すんじゃないぞ」

「殺しはしないよ、たぶん。そう言う君の方が、先にやつてるじゃないか」

ジョニーはピタリと照準を黒霧に合わせたまま、サウンドマンの吹っ飛ばされた方を顎でさす。

「全く、やれやれだぜ……この程度でくたばるタマかよ。なあ?」

ジャイロの言葉に応えるように、瓦礫がかき分けられサウンドマンが立ち上がった。顔を鉄球で負傷してはいたが、瓦礫に押しつぶされたりなどの傷は皆無だった。

綺麗な切り口で小さく切り分けられた瓦礫を見て、ジャイロは舌打ちした。

「咄嗟に音でガードしやがったな」

「どうやったかは知らないが…元に戻ったようだな『ボール・ブレイカー』。いや、ジャイロ・ツエペリ…」

「ああ、鉄球の威力も元通りよ。もつともテメエが味わうのは初めてだろうがな」

ギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルギヤルギヤル

ジャイロの持つ鉄球の回転が強くなる。

「たしかにそうだな…だが、オレとお前の実力差も元通り変わらない。無意味な『リベ  
ンジマツチ』だ、ジャイロ・ツエペリ」

ゆらりと、サウンドマンがナイフを片手に構えた。

日没まで 残りわずか

## リベンジマツチ

先手をとったのはサウンドマンだ。瓦礫に埋まっていた足先を思い切り蹴り上げた。シヨットガンも比にならないほどの瓦礫が猛烈なスピードでジャイロに迫る。

ザバアツ

ジャイロは避けるどころか足元に散らばっていた少しの瓦礫を思いつき蹴り上げた。た。

ジャイロが蹴り上げた小さめの瓦礫が数個と、サウンドマンが蹴り飛ばした瓦礫の散弾。勝負にもならなかった。

「なにっ!?!」

サウンドマンが驚いた。一瞬見間違いかと思うほど奇妙な光景だった。

ギヤリギヤリギヤリギヤリ

ジャイロが蹴り上げた瓦礫が空中を跳ね回っていた。

正確には、回転する瓦礫がサウンドマンの瓦礫を叩き落としてその反動でまた跳ねているのだが、動きの速さに目は追いつかずあたかも瓦礫が能動的にジャイロを守っているようだった。

「回転の力……まさかそんなこともできるとはな」

「驚くにはまだ早いぜ」

「なに……？ まさか！」

眉をひそめたサウンドマンは、自分の『ミス』に気がつくや即座にその場から飛び退いた。

ドシューウウウウ

「がっ、ぶああアアアアッ!!」

最初に投げた鉄球が、サウンドマンの背中に命中した。

戻ってくる鉄球に気づかないように、わざと大きな音を立てて手元で回転させていたかいたがあった。

後ろに大きいのけぞって吹っ飛んでいった姿に、ジョニーが叫んだ。

「やった!!」

「いいや浅い！野郎、味な事をしやがって……命中する瞬間にのけ反って、衝撃を逃しや

「がったッ！」

あれだと回転の力もともに伝わっていないだろう。すぐに体勢を立て直される。巨大な柵ラッシュに囲まれてこうも暗い状況で、サウンドマンを見失うのは致命的だった。

守りに徹すれば、またあの日の焼き直しになることは明白だ。ならばやることは決まっている。

「おいジョニイ、そいつから目を離すなよ！ おれはこのままガンガン戦うッ！」

サウンドマンの消えた暗闇に駆け出していったジャイロに向かって、ジョニイは力強く頷いた。

「クソッ……何をするか全く予測がつかんな、回転の技術とは」

思い切りのけ反ったことにより間一髪のところまで直撃は避けたものの、回転の力によつて背中の皮膚が若干突つ張つたようになってしまった。

足音どころか物音ひとつ立てることなく羽のような身軽さでラックの上段へと身を潜めたサウンドマンは、爆音を鳴らす心臓すらもすぐに落ち着かせて回復を待っていた。

しかし回復を待つ間も決して油断はしない。ジャイロ・ツエペリという強敵を警戒し続けなければならないからだ。

コツーン

コツーン

照明が落ちているため、暗く無機質な空間が延々と続いているように見える。

ジャイロの姿が捉えにくくなっているが、それは相手も同じ条件だろう。

いいや違う。ここへ身を潜めている上に高さというアドバンテージがあるこちらが有利だ。

それでも、サウンドマンは油断をしない。

これは狩りではない。人間同士の戦いだからだ。

ジャイロ・ツエペリの操る鉄球とその回転が未知数な点は脅威だ。しかしここで最も警戒すべきは『個性』だった。

『スキヤン』……物体に眼を搭載して、衝突したものを透過して見る能力だったが……」

コツーン

コツーン

それだけとは考えなかった。

回転の力が完全に未知数なことを考えれば、例えば『潜水艦のソナー』のように自分

の居場所を特定されることだつてあり得る。

だからサウンドマンは油断をしない。

視覚だけじゃなく聴覚も研ぎ澄ませる。こちらへ近づくと足音以外に、何か別の音が混ざつてないかを警戒する。

コッーン

コッーン

コッーン

足音が遠ざかつたり近づいたりしている。

自分のことを探しているのだろう。

「……………攻め時、だな」

突つ張つていた背中はずでに回復している。

このまま隠れていても、先に見つかつて先手を打たれては今度こそ鉄球の一撃をまともに食らうかもしれない。

サウンドマンはぬらりと動きだした。蛇のように物と物の間をすり抜けて、本来は発生する音を全身に受け流す。

『音を奏でる者』という由来とは真逆に一切の物音を立てずに標的へと近づく。

この技術と必殺の個性で、彼は数々の殺しを成功させてきた。

コッーン……

足音が止まった。

ピタリと身体の動きを止めて周囲と同化する。鉄球が回転する音は聞こえない。  
スン スン

使うことはないだろうが、毒などにも警戒する。しかし立ち込めるのはラックの鉄臭さのみだった。

足音の止まった地点はわかっている。

ゆつくりと、今度は視覚的にも悟られないように忍び寄った。

見つけた。鉄球を握った手と、わずかにはみ出た足を捉えた。

シルシルシルシル……

「……鉄球が回転している。まさかここまで音を抑えられるとはな」

まさしく間一髪だった。鉄球を使われる直前に見つけられた。

先手をとったのは、このサウンドマンだったな。

音の攻撃は、使う前に音が発生するので気づかれる。

愛用のナイフを構えて、ジャイロのほぼ真上まで接近したサウンドマンは音を立てることなく、その場から飛び掛かった。

ガツシャアアアアン

勢いよく着地と同時に刺し貫いたナイフは、しかし空ぶった。

「これはツ！ ジャイロ・ツエペリ まさか！」

そこにあつたのは、血を滲ませて、衣服の切れ端で柵に固定されたジャイロの腕と足だった。

「これで、クソ！ 使い切つてやつたぜ。テメーの油断を買うには高すぎる気もするけどなあ……」

ギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャル

脂汗を滴らせて片腕と片足のみになったジャイロが、凄まじい勢いで回転する鉄球を構えていた。

「ウオリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ドシューウウー！！

ブン  
ブン

おそらく最大威力で放たれた鉄球は、無情にも音の壁に阻まれた。

「このサウンドマンは、決して油断をしない……。囀の可能性も常に考えていたさ、だからこの程度の不意打ちも効かない」

「てんめえ…… クソ野郎……」

投擲の反動に耐えきれず床に崩れ落ちるジャイロを、音の壁の隙間からサウンドマンが冷たく見下ろす。

音の壁に衝突して回転を続ける鉄球を見る。貫通してくることはまずないだろう。

「やはり、無意味なりベンジマツチだったな。そしてスデに俺の攻撃は終わっている…… さつき飛び掛かったとき、『切り裂く音』のモンスターを作っておいた」

ジャイロの腕と足が固定されていた場所から、十数匹の小さな生き物がわらわらと出てくる。

その体には『ザクツ ザクツ』の文字や『ズバツズバツ』の文字が浮かんでいた。一体でも脅威のものが、群れとなって襲い掛かってきている。

「なにがあつて復活したのかわからんが、今度は確実に仕留めてやろう……」

「お前の次のセリフは……」

『原型など残さずバラバラにしてやる』……だ」

「……ハッ!?!」

床に横たわりながらニョホツと笑みを浮かべたジャイロは、先読みをされて驚き戸惑

うサウンドマンに対して言葉が続ける。

「俺だつてこれで『等価交換』なんて思つちやいないさ…… てめーを誘うだけなら他にもやりようはあつた」

「この程度でてめーを油断させることができないのはハナから分かりきつていた。だけどよオ…… 獲物を仕留める時には誰だつて油断するからな…… そこを狙わせてもらつたぜ」

「しまッ!!」

気が付いたサウンドマンが『後ろ』へ音の壁を作ろうと振りかぶつた。

グツシヤアアアアアアアツツ

早かったのは鉄球の方だった。

固定されていたジャイロの腕から飛んできた鉄球は、寸分の狂いもなくサウンドマンの顔面に直撃した。

吹っ飛ばはずのサウンドマンの体は、自分で生み出した音の壁にぶつかり衝撃が意識を刈り取るうとする。

シユウウウウウウウ……

本体がやられたことで、迫っていた音のモンスターも消滅する。

ギャルギャルギャルギャルギャルギャルギャル

それは同時に音の壁も消えることを意味しており、阻まれていた『本命』の鉄球がサウンドマンに直撃する。

「ブツグオオおおお!!」

絶叫が響き、吹っ飛んで床に倒れたサウンドマンの体には鉄球が深々とめり込んでいた。

ピクリとも動かなくなったサウンドマンを、上体を起こして確認したジャイロは気が抜けたようにどしやりと横たわった。

「クソツ回転で誤魔化しても痛いものは痛いな…… だけどよおくく」

仰向けのまま、ゆっくりと大きく息を吸って吐き出したジャイロは、気持ちよさそうに笑みを浮かべた。

『借り』は返した…… そしてこれで全部使い切ってやった…… 試練は突破したぜ!」

ジャイロ・ツエペリ リベンジ成功

回転で出血と痛みを抑えるも重体

サウンドマン（サンドマン） 敗北

鉄球により意識を奪われ、回転の力で皮膚を硬質化させられ完全に拘束されるものの、目立った外傷はなし

## リベンジマッチ 決着

ジャイロがサウンドマンを追うために離れてからもジョニイは一切の油断をしていなかった。車椅子に座って、爪弾が回転している人差し指を拳銃のように突き付けていた。

まさしく一センチほどしかない超至近距離で突き付けられているため何度か黒霧の実体部分を掠めて、その度に苦悶の声が漏れていた。

「……もう少し離していただいてもいいのでは？ さつきから貴方の爪が私の身体を削っている……」

「身体が無くなる前に決着がつくの黙って祈ってろ」

黒霧が若干辛そうに言うものの、能面のように表情を変えず切り捨てられる。しかしその瞳に宿った『漆黒の意思』の炎はより一層のことメラメラと燃え上がっている。あの眼だ。黒霧は数日前に出会ったある殺人鬼のことを思い出していた。

『ヒーロー殺し ステイン』あの男が隠れ家にやってきて、自分たちのことを肅正すべき者と見限ったときに一度とはいえ向けられた人殺しの目だ。ただの高校生のガキ

がしていい目じゃない。おそらく、いいや絶対にこのジョニー・ジョースターという男は撃つだろう。この高校生の皮を被った異常者は、私を殺してもなんの罪悪感も無い。自分の目的の為なら『しようがない』と割り切ってそこで終わる。毎晩悪夢にうなされたりもしないだろう。

しかし、このまま捕まるわけにもいかないことは事実だ。

黒霧は静かに、決着がつくまでに脱出する方法を模索し始めていた。

静かになつたな。

さっきまで爪弾が掠るたびに何かしらの声を出していた黒霧が大人しくなつた。諦めた：わけはない。きつとこの場を切り抜ける策を考えているんだろう。

相手は自分のような学生よりも経験が豊富な敵だ。サイランその策をいくら読もうとしても、それを超えてくるか予想の斜め上をついてくるかのどちらかしかないだろうな。

このときジョニーは、ミスを犯した。

ヒーローを目指す者としてだけではなく、戦いの中に身を置く者として重大なミスに気が付けなかった。



その一瞬を、ずっと気を張り続けていた黒霧はその一瞬のチャンスを逃さなかった。ずっと背後からえぐぐら狙いをつけられていたられていた位置を大きく横にスライドさせながら、身体を瞬時に霧化させた。

すぐにジョニーが爪弾を撃つも、『一手』遅れた弾道は黒いもやの中を通り抜けてしま  
う。

「ぬうウウウーツ!!」

普段は絶対にしらないような急な動きで脱出した黒霧は、前もって考えておいた反撃へと転じる。

ずっと頭の中でイメージしていたものと、チラリと見たジョニーの正確な位置の情報が合わさった瞬間、ジョニーの手元と背後に手のひらサイズの小さなワープゲートが作成された。

「……少しヒヤツとしましたが、形勢逆転です。おっと！ 撃たない方がいいですよ。

わかるとは思いますが、君の指はその背にピツタリとくつついている。もし回転させれば、背中がきれいな円形にえぐられることでしょう」

悠々とした態度でちようどさつきとは逆に自分が後ろを取った。意趣返しも兼ねて拘束されたジョニーの顔は自分の油断と、同じように拘束されたことへの屈辱がありありと浮かんでいた。何も言い返してこないのは強がっているからだろうが、逆に黒霧の

気持ちスカツとさせていた。

危機を脱して仕返しも済んだ黒霧は、ふうと一息ついて先程の音がした方へと振り向く。いまの衝撃音からして二人が激突したのは間違いない。問題はどつちが勝っているのかだが――

これからのことを思案する黒霧は気が付かなかつた。

ジョニイの瞳が、また燃え始めていた。

ここに来る少し前。

ジャイロが買ったつていう土地の決済を僕が代わりにしていた時のことだ。

(これでだいぶ金は減つたが、まだ3千万円もある。あの場所で交換したものは全て使い切らなくてはならないつてのに、いったいどうやって全部使い切るんだ?)

すべてを――――

すべ、て……？

『あなたが落としたのは……こっちの紙束？ それとも左の紙、腕時計も超ブランド物のヤツ？ それともこの古い方？』

『オレが落としたのは配られてた安物のヤクモンティッシュとぼろっちい腕時計だ』

そうだ……あの場所で手に入れたのは“宝石”や“金”だけじゃない……

『おまえの鞆もひっくり返せ！』

『あつ、なにすんだよ！』

あのとき！ シュガー・マウンテンが拾って交換したのはッ！

『この、「人間の手」ですか？』

それに気が付いてしまった彼の目は、震えてスマホを落とした自分の両手に注がれていた。

使つかい切きれだって・・・？

あれだけ騒がしかった周囲の音が遠ざかり、自分の心音が早まっていく音が大きくなっていく。

ジャイロ！ 振り向いて見上げた顔は、一切笑っておらず厳しきすら感じるものだった。それが自分の悪い予感を肯定するものだとかわかれると、顔が一気に青ざめるのを実感した。

その厳しい顔のまま今にも絶望しそうな青年に顔を近づけて、この島に二人が来た時空港でホット・パンツが言っていたことを思い出せと諭した。

『私の「個性」は「肉スプレー」であって、それ以上でも以下でもない。』

あくまで君たちの手足を「治す」のは私の個性による副産物だ。それを誤解するな』  
そうだ、直すのはあくまで『ホット・パンツ』だった。

そして、これはその治療を受けるにふさわしいかの試練だ。

「……しかしいったいどうやって!？」

「ジャイロツ!! いったいどうすれば!!」

「ああ わかっているぜ、この性根の悪い試練のことはな。だがそれを外で、しかも大声で叫ぶんじゃないぞ。見張られてんだからよ」

ジャイロの言う通り、僕らが余計な事を口走らないように今もどこからか監視されているだろうことは予想できた。しかしそれにしても、ジャイロは落ち着きすぎていた。その理由を聞いたら。

「……オレの元の仕事表では医療のことを思い出してみろ。痛みを和らげたり、出血を抑えることなんざ造作もねえ。ただし適切な処置は必要だからな……『やる』のは最後だ」

「造作もって……でもただ切り捨てるだけじゃ駄目じゃないの?」

「それは……まあなんか思いつくさ」

「あのなああああ〜!」

結局そのあと、どうやって『使い切る』のかいいアイデアは出なかった。

「なるほどな……」

ジョニーがぼつりと言ったことに、黒霧が怪訝な目を向けた。状況は変わっていないが、ジョニーの表情から悔しさが消えて黒霧をにらんでいた。

正直に言うとう雄英高校に通い始めた数日は聞いていて「ああ、自分は雄英にいるんだな」という満足感があつた。やる気が出たし、本当にいい言葉だと今でも思っている。しかし慣れてくると、他にレパトリーはないのか？ って気持ちも出てきてありがたみも薄れてくる気がした。

「この状況ならーいいいや、こんな状況だからこそありがたく思える。

わからないか？ 僕にとつてお前は『受難』なんだ。テストや成績なんかメじやないくらい乗り越え甲斐のある壁だ」

言い終わるとほぼ同時に牙が回転タスクを始めた。車椅子の背もたれがあつという間に削り取られ、服越しに皮膚へ達した。

漆黒の意思黒い炎は、これまで以上の強さで燃えていた。

「Plus Ultraッ!!」

ドンッ

背後から自分の爪弾を食らつたジョニイの胸に風穴があき、衝撃でジョニイの身体が

わずかに跳ねて血が黒霧の服に散った。

さつきまでの抵抗が嘘のようにあっさりと自分の命を絶つ行動に、それまで静かに揺らいでいた黒い霧がブレた。

あつけなさすぎる。諦めが早すぎる。ただの高校生のガキがこうも簡単に自分の命を差し出すなんて。うろたえた黒霧の脳裏に過つたのは、いつも不機嫌で不安定な男の姿。

しかしそれをすぐに否定する。違う。彼は、死柄木弔とこのガキは違う。ヴィランとヒーロー志望、その根本が違うのだ。

ではこの異常性はなんだ？ いまも貫かれた穴からどくどくと血が流れているこの様を。流れる血が車椅子を伝っていく様子を見ようとした黒霧の目には、汚れていない倉庫の床が映った。

「は……？」

呆けた声を出した黒霧の視界の外で、爪弾の作った『穴』は静かに移動していた。

それが近づくにつれてジョニイの顔色も悪くなつてく。しかしその眼に込められた『覚悟』の色は力強く鮮やかさを増していった。

「まさかッ！」黒霧が気づいたがもう遅い。『穴』は、拘束されたジョニイの手首で止まった。



ドグシャアアアアアアアア

しかし、まるで堰を切ったように事態は悪化していく。それも自分たちヴィラン側にとつて。

「くそっ……!! よくもやりやがったなジャイロ・ツエペリ!」

「サウンドマン!? まさかあなたが!」

吹っ飛んできたのはサウンドマンだった。ボロボロで、そこかしこが血濡れの状態だ。更にその胸で回り続けている鉄球が、誰にやられたかを雄弁に語っていた。

「ゲートだ黒霧ッ! 撤退だ、急げ!!」

撤退!? こんな屈辱を味あわされて撤退するだ!? 即座に否定しようとした黒霧は、しかしその脳裏にかつての雄英襲撃事件の光景が過った。

計画がうまくいかず、ヒーローたちに煮え湯を飲まされた死柄木弔が、こちらの撤退の意思をすぐに酌まずに駄々を捏ねていた時の光景だ。

「……!! この借りは、必ず返させていただきますよ!」

いまだ床の上に這いつくばっているジョニイを睨みつけながら苦々しく言った黒霧は来た時よりも荒々しくゲートを開き、それが閉じるまでジョニイから目を離さなかつた。

まさしく嵐が去ったあとの静けさが漂っていた。

今は、もう日没後なのか？ さっきのはジャイロの鉄球だ、無事だったんだな。

全て使い切れという試練は、間違いなく達成したはずだ。

しかし、自分の手を元に戻す代わりに僕が得たのは二度目の敗北だった。まるであの時の焼き直し。

マイナスが、マイナスになっただけ。全く変わらない。

疲労に押しつぶされるように体が重くなる。悔しさに泣き叫ぶのも億劫になった。

まるで他人事のように血がどくどくと流れ出る手首を見やり、気怠さに沈むように静かに目を閉じた。

ジョニー・ジョースター

両手首欠損に加え出血多量、意識不明の重体。

二度の大敗による精神力の低下。  
再起不能

ジャイロ・ツエペリ  
リベンジマッチに勝利するも右腕部と左脚部欠損。  
再起可能

黒霧  
目立った外傷なし。

体内に異物をとりこみ不安定な精神状態になるも、除去は可能。  
再起可能

サウンドマン  
リベンジマッチで敗北するも、僅かに安堵の色を浮かべる。  
再起可能